

教師力を高める教師の協同

犬山市授業研究会2009年度の成果

犬山市授業研究会 著

杉江修治 監修
水谷 茂

一粒書房

はじめに

本書は2009年度犬山市授業研究会の研究的実践の成果をまとめたものである。

教育を進めるにあたっては、どのような子どもを育てるのか、目指す学力から出発しなくてはいけない。そういうしっかりとした基盤が要る。しかし、ともすると、教師は日々の実践に追われ、授業の技法の習得に関心が向かいがちである。その技法がどのような成果を導き出すために考案されたものかまで理解しなくては、せつかくの実践も生きない。浮薄なものになる。成果が上がらないと技法のせいにするか、子どものせいにするかしてしまうことも稀ではない。

単なる技法にとどまるものは、その適用範囲が狭いことを承知しておかなくてはいけない。むしろ探求すべきは、納得のいく教育理論であり、適切な技法は、教師自身が子どもや教材に応じて開発すべきなのである。教師には、理論を実践に役立つ形で応用するという、教育工学者としての役割がある。

犬山市の教育実践は、その多くが「協同学習」理論に依拠してきている。2000年からはじまった授業改善の試みの基盤はそこにある。共に学ぶ仲間全員の成長を、仲間全員がめざすとするという学習場面が引き起こす意欲づけを出発点とし、教科の習得にとどまらない、豊かな同時学習を図ってきた。

この間の約10年、各校で、そしてこの授業研究会で、教師たちが開発した実践的工夫は数多い。そしてそれらは、豊かな学力形成を念頭に置いたものであった。それゆえに適用範囲は広い。

すでに、犬山では、子どもが自律的に学ぶことが可能な仕掛けとして、次のような技法は当然と認識されている。

- ①単元の学習内容とスケジュールの見通しを与え、学びの見取り図を与える
- ②毎時の学習課題を明示し、その時間の到達のイメージをしっかりと子どもに理解させる
- ③学習過程では個人思考、グループ思考の機会を十分に取り、子ども主導の授業過程の機会を多く設定する
- ④毎時の学習内容と学習過程の振り返りをし、学びの手ごたえを通して学習意欲を高める

この授業研究会は、若い教師の参加が多いこともあり、上のような視点と技法を継承していく場として機能するが、一方では、それらを踏まえて、さらに次元の高い課題を見つけていく機会ともなっている。今回の7つのレポートには、それぞれ新しいチャレンジがあることは読んでいただければ理解いただけると思う。

このような実践的研究を重ね、その過程で教育的認識を一人ひとりの教師が深め、共有する実践を踏まえて、それぞれの個人的教育理論・学習指導理論を作っていくことは、教育を本質から改善していく上での本道であるように思う。

2010年度もこの研究会は継続している。地域単位で、積み重ねのある研究的実践が継続することの意味は大きいと考えるのである。

杉江 修治

目 次

はじめに	1
犬山市授業研究会で教師力を高める 一 研究的実践を通して共に育つ犬山の教師	3
主体的に課題解決を目指す子の育成 一 授業のしかけ作りを通して	7
児童の考える力・書く力を育てる授業づくり 一 教科指導を通して	45
自分の考えを深め、身に付けた力を活用していくことのできる児童の育成 一 伝え合う活動を通して	79
豊かな文章表現力を育成するために 一 看図作文を利用した取り組みを通して	111
一つの題材に全員が関わりあえる授業を目指して	127
学級・学年のモチベーションを高める 一 クラス目標を明確にし、生徒主体の取り組みを通して	155
資料 授業研究会だより	177

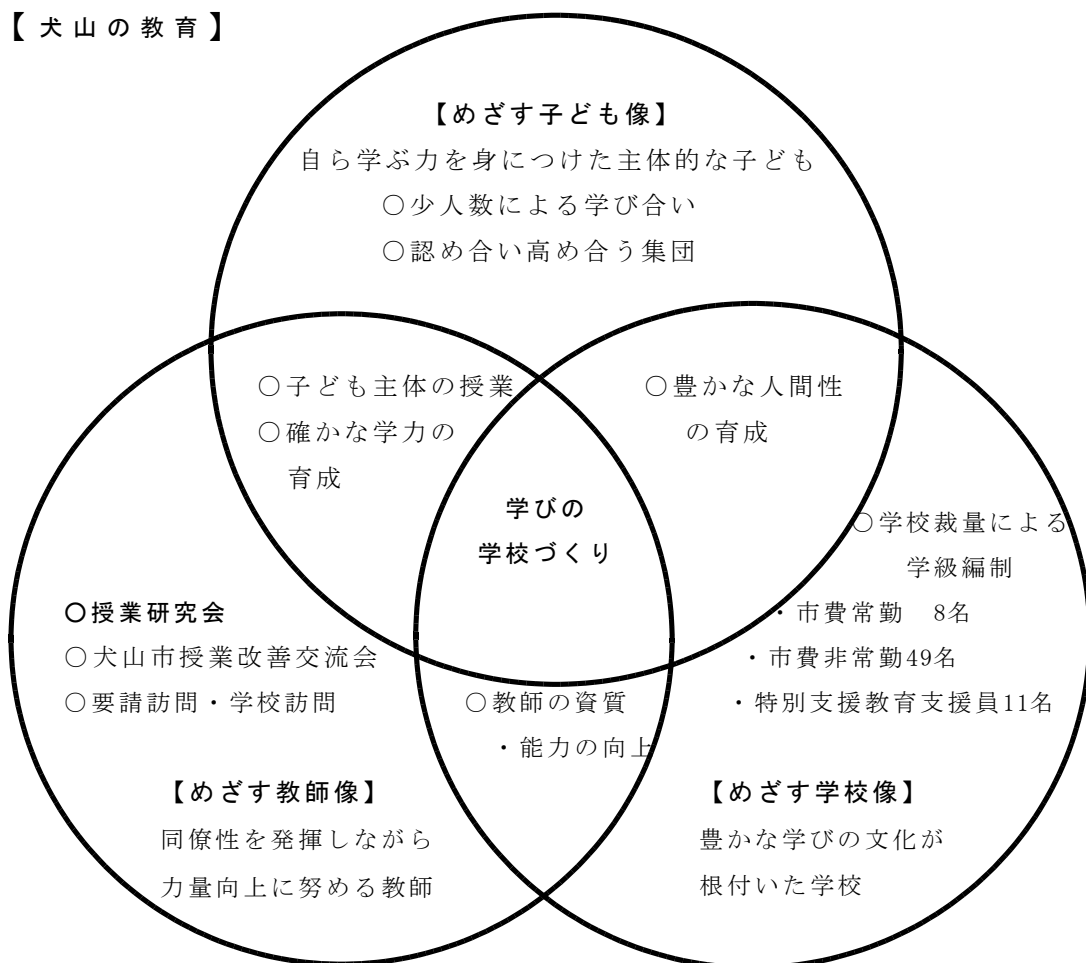
犬山市授業研究会で教師力を高める

研究的実践を通して共に育つ犬山の教師

1 犬山市授業研究会がめざす研修

「自ら学ぶ力を身につけた主体的な子どもの育成をめざす私たち教師は、自ら学ぶ教師でなくてはならない。日常の授業を振り返り、継続的に授業改善を積み重ねることにより、専門性や資質・能力の向上に努める主体的な教師であり続けたい。犬山市校長会では、このような前向きな教師を育成するために犬山市教育研究会の中に研修部において授業研究会を設けている。授業研究会は、熱意ある各学校の教師が研究的実践を持ち寄り、交流しながら共に育つことを目標にしている。さらに授業研究会で得られた成果を各学校の校内研修に還元し、新たな視点や手法を紹介することで学校全体を活性化させるねらいも合わせもっている。

【犬山の教育】



2 基本方針

○児童生徒が、確かな学力を形成し、「自ら学ぶ力」を育むための指導方法の工夫改善を目指した実践的研究に取り組む。研究的実践とは、仮説を立てて実践し、実践結果を分析的に評価し、指導方法・内容の改善につなぐ一連の取組をさす。



小グループでの感想交流

○子ども同士、子どもと教師の温かな人間関係づくりを大切にしたい、認め合い高め合う集団づくりを同時に追究する。

○会員は、小グループに分かれて1年間研究に取り組む。会員は、協同の考え方を具現化した実践を持ち寄り、グループで紹介し合いながら内容を吟味し、成果を共有することで教師力の向上につなぐ。

○年度末に、小グループで取り組んだ内容をまとめ、実践資料集として1冊の本に著し、成果を外部に発信する。

○協同学習を追究した授業実践をビデオで公開する公開授業研究会を開催する。会員以外にも市内・市外を問わず広く参加を呼びかける。授業者がどのようなねらいで授業づくりをしたかを直接解説したうえで、参加者は小グループに分かれて2回の感想交流をする。さらに、杉江修治先生の指導・講評を受け、研修を深める。

3 21年度授業研究会のスケジュール

月	日	曜	時間帯	内容
6	3	水	16:00～18:00	研究テーマ設定
7	1	水	16:00～18:00	仮説と研究の方法を立てる
7	29	水	13:00～17:00	公開授業研究会
9	9	水	16:00～18:00	グループによる話し合い
10	7	水	16:00～18:00	グループによる話し合い
11	4	水	16:00～18:00	グループによる話し合い
12	2	水	16:00～18:00	中間発表会
12	25	金	13:00～17:00	公開授業研究会
1	27	水	16:00～18:00	グループによる話し合い
2	24	水	16:00～18:00	研究のまとめ

4 21年度授業研究会参加者の声

犬山市立城東小学校 A（20代女性教諭）

学んだこと

私たちのグループは、「主体的に取り組める子の育成」を目指して実践をすることになりました。子どもたちが授業に主体的に取り組めるように、具体的な手立てとして4つの手立てをとることに決まり、実践を進めました。実践を終えて、単元の見通しを立てたり、課題解決には具体的な活動を取り入れたりすると、意欲が高まるということを改めて知ることができました。授業を振り返ってみると、発問や指示の方に意識がいきってしまい、単元の見通しや活動の設定に力を入れて取り組むことができていませんでした。見通しを立てたり、課題解決のための具体的な活動の設定を工夫したりすることで、授業を改善することができました。これからも、単元の見通しの提示の仕方や、課題解決のための具体的な活動を意識して授業を進めたいと思いました。

毎回の話し合いの中では、それぞれの授業実践について話し合い、その中で授業のヒントを教えていただくことができました。中心発問をどのように設定したのか等、次の授業に取り入れられるアイデアを話し合うことができ、授業に生かすことができたと思います。

反省

自身の実践を振り返っての成果は、単元の見通しを分かりやすく提示できるようになったことと、課題解決のための具体的な手立てや活動を意識できるようになったことです。課題解決には、発問の工夫に加えて、見通しを立てることと具体的な活動を設定することが鍵になってくるのだと分かりました。

課題は、子どもを動かすための指示が曖昧であったことと、なぜその活動をするのかという意識づけの言葉が足りなかったことです。指示や発問、あるいは、なぜその活動が必要なのかを明確に伝えることができるようになりたいと思います。言葉を吟味して取り組まなければならないと思いました。単元の見通しを立てることと、明確な指示を出すことの双方を意識して、授業を構成しなければと感じています。

このような授業研究の場があるので、少しでも自分の授業を深めることができるのだと感じました。グループで実践を進めるからこそ、互いにアイデアを出し合ったり、より効果的な手立てを話し合ったりすることができました。また、授業をより良くしようという意識がもてたり、改善の具体的なヒントを得ることができたりすることができました。

1年を振り返って、一番感じたことは、授業によっては、手立てを使い分けることが必要だということです。そのためには、授業の手立ての引き出しを増やし、使い分ける力をつけなければならないと感じました。これからも、常に学ぶ姿勢を忘れず、修養に努めたいと思います。

犬山市立池野小学校 B（20代女性教諭）

今年度、初めて授業研究会に参加して、周りの先生方からたくさんの刺激を受け、自分の授業を見直すことができました。授業をするときの悩みを共有することができたり、実践して意見を出し合ったりすることで、私自身では気づくことができなかつたことや授業の方法なども教えていただくことができました。

Bグループに所属して「児童の考える力・書く力を育てる授業づくり」について研究しました。継続的な研究の中で、目標や課題を明確にして、児童一人一人が各活動に集中して取り組めるようにしていきたいと感じました。研究仮説で立てた各学年の目標に迫るためには、今回の私の実践では手だてや期間が不十分でした。今回の手だてを継続的に授業の中で取り入れたり指導方法を工夫したりすることで、児童も活動に取り組みやすくなり、さらに書く力や考える力を身に付けたのではないかと思います。今回の研究で学んだことをこれからの授業にも生かし、教科や単元に限定することなく、様々な活動の場で取り入れていきたいと思います。

様々な学年、教科を担当する先生方からの意見は、とても貴重で、今回研究した内容以外にも、たくさん参考になる意見や実践を学ぶことができました。子どもが自主的に学べるように、また、子どもが学ぶ意欲を高められるように、子どもにどのような力を付けたいか明確にした授業づくりに取り組んでいきたいと思います。

1年間、ありがとうございました。

犬山市立東小学校 C（20代男性教諭）

授業研究会では、今まで行ったことがない研究に触れることができました。D班では、文章を書く力を養うためにどうするか考え、実践を通して研究データをまとめ、全体でレポートを作りました。今回の研究でレポートの作り方や研究の進め方についてとても勉強になりました。

他の学校の先生の考えにも触れることができ、良い機会になりました。ありがとうございました。

水谷 茂

主体的に課題解決をめざす子の育成 授業のしかけ作りを通して

千田 初子（犬山市立楽田小学校）
丹羽 寛子（犬山市立羽黒小学校）
水野 綾（犬山市立城東小学校）
井塚 裕士（犬山市立城東小学校）
小川 英明（犬山市立犬山西小学校）
土屋 美妃（犬山市立犬山南小学校）
平山 睦（犬山市立犬山南小学校）

1 主題設定の理由

年度当初、学級での現状を踏まえて、めざす子ども像を話し合う中で、教師の方を向いて発表したり、教師の指示を待つのではなく、自分の意見を学習集団に伝えたり、自ら考えて行動したりする力を伸ばしたい、そして、子どもが主体となった関わり合いによって、一人一人の違いやよさを互いに認め合える子を育てたいという願いが出てきた。

めざす子ども像に迫るために、子どもが学ぶことが楽しいと感じる手だてと、自ら学ぼうとする動機づけを授業の中に取り入れることにした。教師主導型の授業ではなく、子どもが主体的に課題を解決していくことができる授業を展開したい、そして、一人一人が主体的に授業に参加し、互いに考えを伝え合うことで、課題解決をめざす子を育てたいと考え、本研究テーマを設定した。

2 研究の仮説

研究の仮説を次のように設定した。

仮説：授業のあらゆる場面において、学習の見通しを持てるしかけを取り入れれば、子どもが主体的に課題解決をめざすことができるであろう。

3 研究の手だて

研究の仮説に迫るために、次のような手だてを授業の中に取り入れることにした。

- ①単元の見通しを明確にして伝える。
- ②本時1時間の課題を具体的にする。
- ③本時の授業の流れを提示する。

④課題を解決するための手だてを示す。

4 研究の実際

(1) 実践1 1年「ようすをおもいうかべながらよう」—おとうとねずみチロ

1) 子どもの実態

本学級は男子16人、女子12人、計28人の学級である。本学級は元気で明るい子が多く、国語の音読で「大きな声で読もうね」と声を掛けると、驚くほど大きな声で読むことができる。また、音楽の授業では、曲に合わせて踊ったり、歌詞の意味を動きで表しながら歌ったりするなど、豊かに表現することができる子が多い。しかし、授業中にみんなの前で自分の考えを発表することが恥ずかしく、なかなか手を挙げることのできない子や、友達の発表を最後まで聞くことのできない子も多いのが実態である。また、友達の気持ちをくみ取ることができず、自分の意見を押しつけてしまう子もおり、心を育てる必要性を感じている。

本実践でめざす子どもの姿を「子どもたち同士で話し合い、学習を展開できる子」とした。その実現のため、聞く力・話す力を高めることにも力を入れている。これまでの学習の中でも、ペアやグループ内での発表など、子ども同士で話し合う活動をできるかぎり多く取り入れてきた。特に、聞く力を高める活動の一環として、アニメーションや、平仮名の書き始めの位置を聞いてどの平仮名か当てる聞き取りひらがなゲームなど、子どもが楽しみながら聞く力を育てる工夫を行ってきた。その結果、4月より聞く力・話す力も身に付き、子ども同士の話し合いも少しずつできるようになってきている。1年生も後半になり、長い文章にも慣れてきたことから、読み取る力の育成にも取り組んでいる。「おおきなかぶ」では、登場人物の気持ちを読み取って、声の大きさと読む速さに着目して音読できるようにしてきた。また「サラダでげんき」では、「おおきなかぶ」で学習した声の大きさと読む速さに加えて、声の調子にも着目した学習を行った。

2) 本単元でめざす子ども像

子どもはこれまでに「てがみ」や「おおきなかぶ」「サラダでげんき」といった物語の学習で、文章の読み取りに親しんできた。しかしながら、これまでの読み取りは、教師が段落の中からあらかじめ読み取る文章を指定し、子どもはそこから気持ちを読み取る活動であった。現在、子どもは以前よりも文章を読み取る力が付いてきている。また「おとうとねずみチロ」では、主人公の気持ちや考えが明確に描かれていることから、今回は子どもが課題に迫る主人公の気持ちに関する文章を自ら見つけ、考えを深める一人読みに取り組ませたいと考えた。一人読みを通して、これまでの学習を踏まえ、文章に即して、チロの気持ちや考えを読み取り、想像し、理解することで、子どもの心も育っていくことを願う。

て取り組んだ。

単元の学習課題（8時間完了：第2時～第8時が読み取りの活動）

	学 習 課 題
第1時	ものがたりのかんそうをともだちとつたえあおう。
第2時	てがみをもらったチロのきもちをかんがえて、ともだちとつたえあおう。
第3時	にいさんねずみとねえさんねずみにいいかえしたチロのきもちをかんがえて、ともだちとつたえあおう。
第4時	「いいこと」をかんがえつたチロのきもちをかんがえて、ともだちとつたえあおう。
第5時	おばあちゃんのうちによびかけたチロのきもちをかんがえて、ともだちとつたえあおう。
第6時	「あ、り、が、と、う」といったチロのきもちをかんがえて、ともだちとつたえあおう。
第7時	じぶんがいちばんすきなばめんのチロへてがみをかこう。
第8時	チロにかいたてがみをともだちとしょうかいしあおう。

3) 教材について

年度末が近づき、子どもは学校生活にも慣れ、楽しむようになってきている。学校では、教師や上級生の支援のもとで生活しているが、自分でできることは自分でしようとする気持ちが強くなっている。本教材は、そのような子どもの心をとらえる物語である。

文章のあらすじは、以下の通りである。三匹のねずみの兄弟のところへ、おばあちゃんから手紙が届く。それには新しい毛糸でチョッキを編んでいると書いてあった。三匹は喜ぶが、兄さんと姉さんは末っ子のチロのチョッキはないと言う。チロは心配になって、木の上から呼びかける。何日か経って、おばあちゃんから小包が届く。チロのチョッキもちょうんと入っていた。大好きな縞々のチョッキだ。チロはまた丘のてっぺんまでのぼり、おばあちゃんにお礼を言うという内容である。

弟ねずみチロは、おばあちゃんが自分のチョッキを編んでくれないかもしれないという心配事を、誰の助けも借りずに乗り越えた。チロは木の上に立って、大声で「チョッキあんでね」とおばあちゃんに呼びかけた。ここに見られるチロの強さ（自立心の芽生え）がこの作品の主題である。また、兄弟ねずみの好みの色を考えてチョッキを編むおばあちゃんの優しさと、そのようなおばあちゃんへの感謝の思いに心の通い合いを見ることが出来る。ここに副主題を見出すこともできる。兄弟の中で最も幼いチロが、誰の助けも借りずに心配事を乗り越え、おばあちゃんと心を通わせていく物語は、子どもの共感を呼びやすい教材であろう

4) 具体的な支援の手だて

ア 単元の見通しを明確にして伝える

単元を通した振り返りカード用意し、見通しを明確にした(図1)。

イ 本時1時間の課題を具体的に示す

単元の課題は2)で既に示した。ここでは課題に迫る具体的な流れを指導案として示す。2時間目～6時間目の読み取りの授業は、毎回同じ流れにした。例として第6時間目の指導案を示す。

⑥	⑤	④	③	②	①	なないよう
「あ、り、が、と、う。」と いったチロのきもちをか んがえて、ともだちにはな そ。すばらしい。	「おばあちゃんのうち のむかちをかながけた チロのきもちをか んがえて、ともだち にはなそ。かんば しい。」	「いいこと」をか んがえて、ともだ ちにはなそ。ま んま、すばらしい。	「いさんとねえさん にいいチロのきもち をかんがえて、とも だちにはなそ。ま んま、すばらしい。」	「あといつ、ちを あげよう。」	「あといつ、かん ぱん。」	ながいよう
						ながいよう
						ながいよう
						ながいよう
						ながいよう
						ながいよう
						ながいよう
						ながいよう
						ながいよう

とうじようじんぶつのきもちをかながえて、ともだちにはなそ。

図1 単元を通した振り返りカード

学習過程

学習活動	形態	支援・留意点 (評価)
1 学習範囲の音読をする。	班	○グループで向き合い、相手に声を届ける気持ちで音読するように促す。
2 読解トレーニングをする。	班	○問題が分からない子どもは、班の他の児童からヒントをもらうように声をかける。
①班内で一人ずつ順番に問題を解く。	全体	○班で正解した数を聞き、班全体で読解トレーニングに取り組む雰囲気を作る。
②答え合わせをする。	全体	○課題は絶対に全員がこの時間内に解決するものであることを確認する。
3 本時の課題をつかむ。	全体	○課題を解決するための手だてを確認する。
「あ、り、が、と、う」といったチロのきもちをかながえて、ともだちとつたえあおう		
4 一人読みをする。	個人	○課題に迫る文章への書き込みには丸をつけ、児童に自信をもたせるようにする。 ○たくさん書き込みができている児童を褒め、書き

5 意見交流をする。		込みへの意欲を高める。 (課題に迫る書き込みができたか)
①班での意見交流	班	○話形の確認をする。 ○意見交流の後に、友達から聞いた意見を書き込むことを確認する。
②ジグソー・グループでの意見交流	ジグソー	○ジグソー・グループで交流しあうことで、自信をもって全体の場で発表できるようにする。
6 友達の意見を書き込む。	個人	○友達の意見をたくさん書き込んでいる児童を褒め、書き込みへの意欲を高める。 (友達の意見を書き込むことができたか)
7 全体で交流する。	全体	○課題に迫る読み取りを深めるため、書き込んだ文章ごとに挙手し、相互指名の形式で発表を促す。 (課題に迫る読み取りができたか)
8 まとめの音読をする。	個人	○読み取った気持ちを考えて音読するように促す。
9 振り返りをする。	個人	○振り返りカードに記入を促す。
<div data-bbox="157 850 356 879" style="border: 1px solid black; padding: 2px;">振り返りの観点</div> <ul style="list-style-type: none"> ・進んで手を挙げたか ・進んで話し合ったか ・よく聞いたか ・学び合いができたか ・課題が達成できたか 		

ウ 本時の授業の流れを提示する

本時の流れを黒板に掲示した(図2)。授業で活動をする度に黒板に掲示したものを使って一つずつ確認した。

エ 課題を解決するための手だてを示す

課題を解決するための手だて(第2時~第6時まで共通)は、毎時間、課題を提示する度に説明した。

チロの気持ちを考えるために、プリントへの書き込みを行った。第2時に、課題に迫る書き込み例を一度示し、それ以降は子どもに任せた。ただし、書き込みをしている時に、プリントを見て回り、課題に迫る書き込みには丸を付けていった(図3)。

友達と伝え合うために提示した話形(図4)に沿

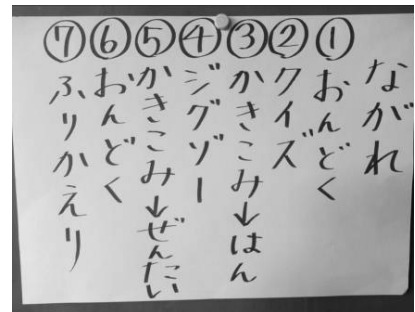


図2 授業の流れ

って、班・ジグソーで意見交換した。意見交換の後にもう一度個人でプリントへの書き込みを行い、読み取りを深めた。また、友達の見解をたくさん書き込んでいる子どもを褒めるようにした。

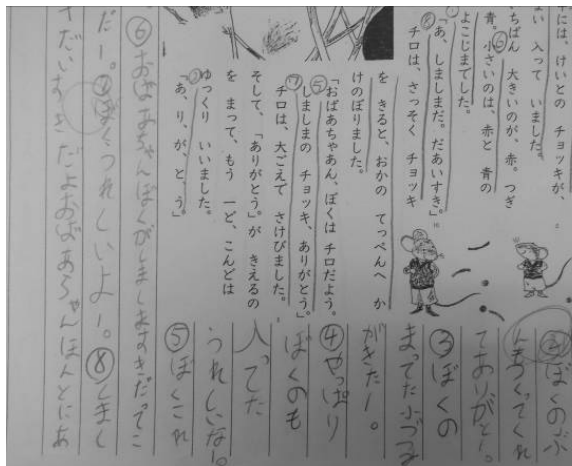


図 3 プリントへの書き込み

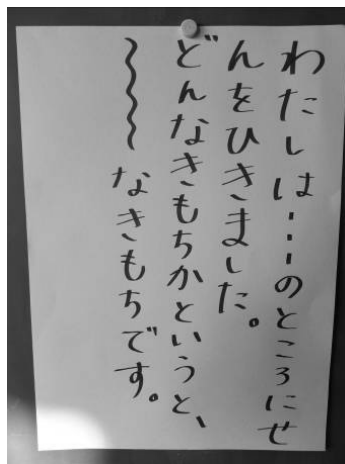


図 4 提示した話形

5) 授業の実際

ア 単元の見通しを明確にして伝える

単元を通した振り返りカードを最初の時間に渡したため、子どもは予め単元の全ての課題を知ることができた。音読の宿題を出すと、次の日の朝には「次の部分の書き込みで何を書くか考えてきたよ」と報告してくる子どももいた。予め単元の見通しを示したことで、子どもは次の授業への準備ができたと思われる。

イ 本時1時間の課題を具体的にする

本単元の第1時から、課題はその授業で全員が解決できなければならないことだと学級の課題を伝え、授業の最後には教師が児童を一人指名し、課題に迫る文章とその時の気持ちを聞くようにした。その結果、初めは課題に迫る文章への書き込みができない児童が多かったが（ただし第2時は例を提示したため多い）、授業の回数を重ねるごとに、課題に迫る文章への書き込みができる児童が増えていった（図5）。

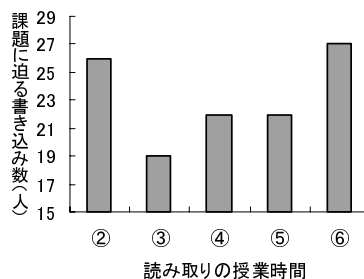


図 5 課題にせまる書き込み数

ウ 本時の授業の流れを提示する

授業で活動する度に、黒板に掲示した授業の流れを確認していたため、子どもは授業の

回数を重ねるごとに、自分で次に何をするのかを黒板を見て確認するようになり、「先生、次は何するの」と聞く児童はいなくなった。

エ 課題を解決するための手だてを示す

授業の回数を重ねるごとに、プリントへの書き込み数が増えていったことから、児童が自主的に読み取りを進めることができるようになったと考えられる（図6）。

また、班やジグソーでの意見交流の後に、再びプリントへの書き込みを行ったため、子どもが友達から聞いた意見を書き込もうと、意見交流の場面で友達の意見を真剣に聞くようになった。また、毎時間同じパターンの手だてであったため、児童は安心して授業に臨むことができ、自信をもって発表できていた。

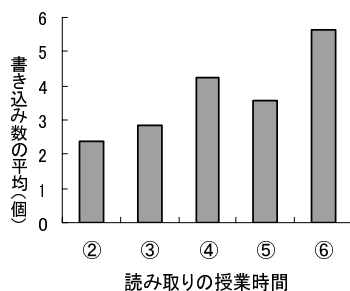


図6 書き込み数の平均

(2) 実践2 1年 いろいろなじゃんけんについて話し合おうーじゃんけん

1) 子どもの実態

4月の頃は、発表したり、話を聞いたりすることが苦手な子がほとんどであった。自分の意見を友達に聞こえるように大きな声で発表するだけでも、時間がかかった。しかし、学校生活に慣れるにつれて、進んで発言したり、話す人を見て意見を聞いたりすることができるようになってきた。聞き手を意識して、相手に自分の意見を伝えようという気持ちをもって発表することができるようになってきている。ペア活動やグループ活動においても、進んで自分の意見を友達に伝えることができるようになり、自分の考えを分かってもらえるうれしさを感じているようである。

本単元では、主体的に授業に参加して、自分の考えを分かりやすく相手に伝えることができることと、友達の説明をもとに、友達の考えたじゃんけん遊ぶことができるようにしたいと考えた。

2) めざす子ども像

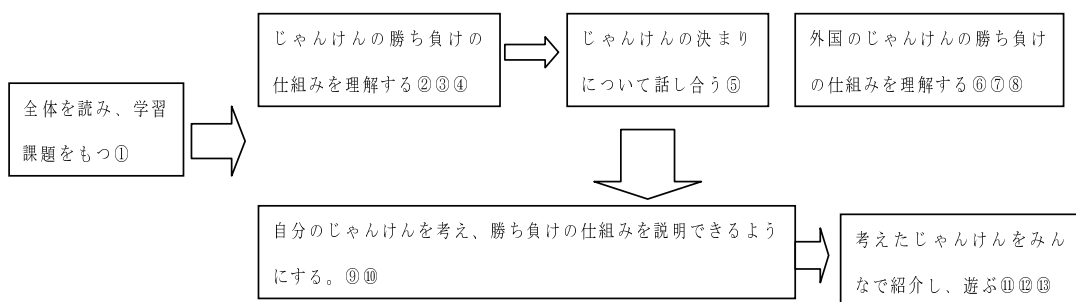
- ① 仲間の方を向いて、仲間に聞こえることを意識して話そうとする態度。
- ② 発表をする人の方を見て最後まで話を聞く態度。
- ③ 見たことや感じたことを読み手に分かるように文に表す力。

3) 教材について

日常生活の中では、ほとんどの子どもが、じゃんけんでも何度も遊んでいて、なじみの深いものである。しかし、これまでに、じゃんけんについてその法則性や種類などを論理的

に考えたことはない。本単元では、じゃんけんのきまりを説明したり、自分でじゃんけんの仕組みを作ったりすることで、じゃんけんのおもしろさに気づき、興味を持って書いたり、説明したりすることができるのではないかと考えた。そこで、日本や外国のじゃんけんのきまりをまとめ、自分が考えたじゃんけんを紹介し、それを使って友達と遊ぶ活動を取り入れた。この活動を通して、相手に分かり易い文の組み立てや順序を考えたり、自分の考えを正確に伝えたりできる力を付けさせたい。学習の目的を明確に示すことで、最後まで意欲的に取り組むことができるのではないかと考えた。

単元計画



4) 具体的な支援と手立て

ア 単元の見通しを明確にして伝える

できる限り短い言葉で単元の見通しをたて、学習内容が掴みやすくなるようにした(図7)。色分けをしたり、言葉に囲みをつけたりして、見やすいレイアウトで流れが分かるようにした。学習している箇所に、マークをつけると、どこを学んでいるのか分かり、次の学習に意欲をもつことができた。

イ 本時1時間の課題を具体的に作る

本時の課題を、「自分のじゃんけんを友達に紹介して、一緒にやろう」と設定した。3人グループをつくり、1人が自分のじゃんけんを説明し、説明を聞いた2人が、じゃんけんをやってみるという活動を取り入れた。自分で考えたじゃんけんが友達にうまく伝われば、最後に友達がじゃんけんで遊ぶことができるとしたことで、自分なりにじゃんけんのアイデアを挙げたり、説明の練習に一生懸命取り組んだりすることができた。

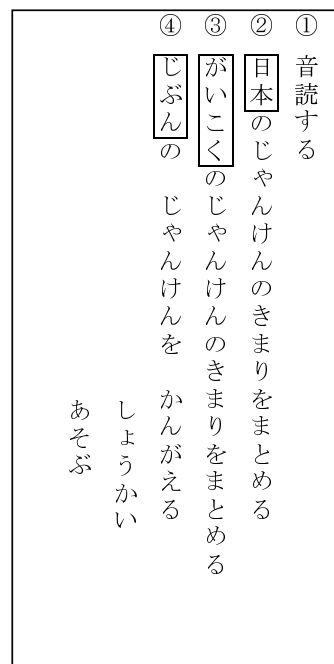


図7 単元の見通しを立てる

学習過程

…本時の目標

学習形態： 個別

グループ

一斉

段階	学 習 活 動	教師の活動と支援	評 価 (評価方法)
つ か む	1 本時の学習内容をつかみ活動の流れを確認する。 <input type="checkbox"/>	○学習のめあてを提示し、活動の流れについて説明する。	
じぶんのじゃんけんをともだちにしょうかいして、いっしょにやろう			
	2 話し合いで気をつけることを理解する。 <input type="checkbox"/> → <input type="checkbox"/> 3 自分のじゃんけんの説明を練習する。 <input type="checkbox"/> → <input type="checkbox"/> 4 自分のじゃんけんを説明し、じゃんけんで遊ぶ。 <input type="checkbox"/> → <input type="checkbox"/> 5 友達のじゃんけんの良い所を見つけ、発表する。 <input type="checkbox"/> → <input type="checkbox"/>	○各自音読した後、全体で読みを確認する。 ○話し合いの例を示し、進め方を説明する。 ○自分のじゃんけんを友達に説明できるように練習する。 ○早く終わった児童から、ペアで練習をするよう助言する。 ○3人グループをつくるよう指示する。 ○めあてをもって話したり聞いたりすることができるよう、話し方・聞き方のレベルを提示する。 ○説明の後で、じゃんけんをやってみるよう指示する。 ○じゃんけんで遊び、面白かった所や、納得した所を書くよう指示する。 ○じゃんけんで遊び、おもしろかった所や、納得した所を書くように指示する。	○意欲的に読むことができたか。 (音読の様子) ○話す・聞くことに気をつけて話し合いをすることができたか。 (話し合い) ○友達の発表を聞き、作ったじゃんけんの仕組みが分かり、じゃんけんをすることができたか。(じゃんけんの様子) ○友達のじゃんけんのおもしろさを発表することができたか。(発表)
ま と め る	6 本時の振り返りをする。 <input type="checkbox"/>	○友達のがよかったところや、自分のがんばったことを発表するよう指示する。 ○次回の予告をする。	○自分の学びを振り返ることができたか。 (発表)

評価

- ・自分で考えたじゃんけんを分かり易く説明することができたか。
- ・友達のじゃんけんの勝ち負けのしくみを理解することができたか。

ウ 本時の流れを提示する

授業の流れの大枠をパターン化し提示することで、次の活動へ抵抗なく取り組めるようにした(図8)。単元全体の流れを、「ひとり」「となり」「3人」「みんな」の順になるようにし、次の活動を意識して取り組めるようにした。授業のはじめには、すらすら読めるように、音読練習を十分に行った。

- | | |
|----------------|-----------|
| ①音どく | ひとり |
| ②せつめい れんしゅう | |
| ③せつめい 本ばん | 3人 |
| ④じゃんけんで あそぶ | |
| ⑤ともだちのよいところをかく | |
| | ひとり → みんな |
| ⑥ふりかえり | |

図8 本時の流れの提示

エ 課題を解決するための具体的な手だてを示す

分かりやすい説明になるように、自分のじゃんけんのプラカードを作った(図9)。プラカードを友達に見せながら、話している事を視覚的にも分かるようにした。プラカードを見せることで、自分の説明や手順が分かり、話しやすかったようだ。

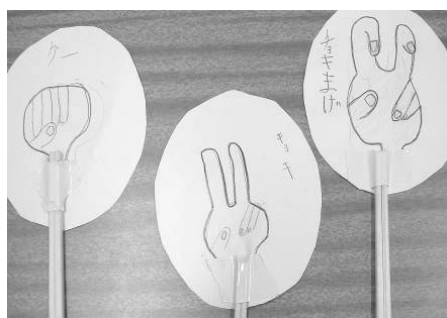


図9 分かりやすく伝えるためのプラカード

5) 授業の実際

ア 単元の見通しを明確にして伝える

できる限りみじかい言葉で分かり易く提示した。また、色で囲んだり矢印をつかって見やすいものになるようにした。見やすいものにする事で、見通しをはっきりさせることができた。学習している所にマークをつけたことで、次の学習に意欲をもつことができた。

イ 本時1時間の課題を具体的に作る

自分でじゃんけんを作る場面では、自分だけのじゃんけんになるように考える時間を十分に確保した。悩みながらもほとんどの児童が、じゃんけんを考えることができた(図10)。早くできた児童には取り掛かりが遅い児童にヒントをだしてもいいことを伝え、一緒

になって考え、全員がじゃんけんを作ることができた。相談したことでじゃんけんの出し方を工夫し、一人では考えられなかった児童もじゃんけんを作ることができた（図 11）。

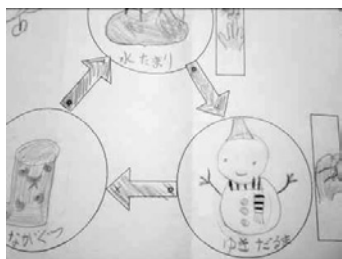


図 10 じゃんけんの出し方を工夫した児童

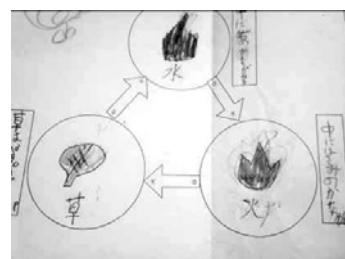


図 11 友達のアドバイスでできた児童

ウ 本時の授業の流れを提示する

授業の流れの大枠をパターン化して提示することで、次の活動に抵抗なく取り組めた。初めに、「ひとり」「ペア」で説明の練習をし、「3人」で説明の本番としたことで、一人とペアの活動に意欲的に取り組むことができた。

エ 課題を解決するための手立てを示す

自分のじゃんけんを説明する場面では、どうしたら説明が分かり易くなるのかを全員で考えた。その結果、プリントに書いた絵を、プラカードのように作って見せながら、話した方がよいということになった（写真 1）。2年生が、生活科の「町探検」の発表でペーパーサートを見せてくれたことがヒントになったようだ。プラカードを作ったことで、自分のじゃんけんを分かりやすく伝えたいという気持ちが強くなっていったようだった。また、楽しみながら、最後まで意欲的に取り組むことができた。



写真 1 プラカードを使って伝え合う

（3）実践3 2年「国語」—ペンギンの子そだて

1) 子どもの実態

本学級は、男子 14 名、女子 16 名の 30 名で構成されている。とても元気が良く活発な学級である。また、自然に興味を持ち、日常生活の中で身近な自然を話題にしたり、休み時間に運動場に出掛けて見付けた草花を教室に持ち帰って来たりする姿も見られる。授業では、自分の思いを発表して友達に伝えることの得意な子どももいれば、良いことを考えていたり、プリントに書いていたりしていても、手を挙げて発表することに抵抗を感じてい

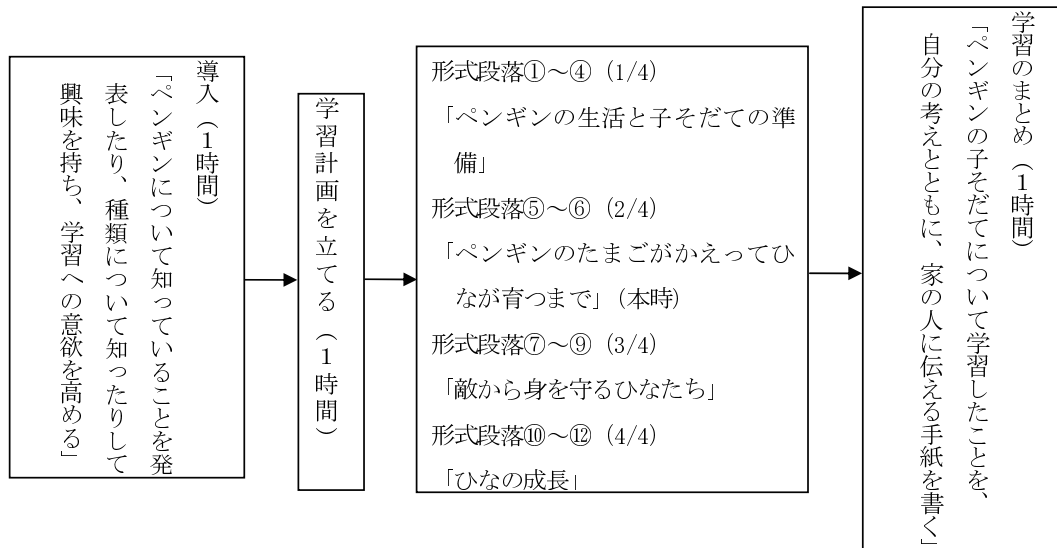
る子どももいる。そのため、学級の全体的な元気の良さを、授業中でもよりよい方向に、そして、子ども一人一人が持っている力を少しでも発揮できるようにしたいと思い、今回の実践を行った。

2) 本単元でめざす子ども像

「ペンギンの子そだて」は、アデリーペンギンの子育ての様子が順序立てて説明してある文章である。単元を通してめざす子ども像を以下の3点とした。

- ①自分の役割を理解し、グループの動作化に積極的に参加することができる子。
- ②グループの動作化や、全体の交流の中で、友だちの意見をしっかり聞き、自分の考えを深めることができる子。
- ③ペンギンの子育ての様子を読み取って動作化したり、話し合ったりして、より分かりやすく説明しようとする子。

本単元の流れを以下のように設定し、実践を行った。



3) 教材について

本単元の目標は、書かれている事柄の順序に注意して、文章を正確に読み取ることである。教科書の「ビーバーの大工事」を学習した後に、親しみのある動物の一つとして犬山市の国語副教本の中から「ペンギンの子そだて」を紹介することにした。子どもは、1年生の遠足で動物園に出掛け、実物のペンギンを見ており、ペンギンは多くの子どもから人気を集めている。しかし、その子育てとなると「子育てってなにをするの?」「子育てって大変なんだなあ」という子どもの素直な思いが生まれてくる。このような思いは、文章を読み進めていくための課題につながり、子どもの興味・関心を引きつけるので、取り組みやすい文章であると考えられる。

書かれている事柄の順序に気を付けて本教材を読むことで、ペンギンの子育ての方法に

ついて知ることの楽しさを味わってほしい。そして、他の動物についても知りたい、調べてみたいという意欲を持たせるようにしたい。

4) 具体的な支援の手だて

ア 単元の見通しを明確にして伝える

単元の最初に黒板に学習計画を板書して伝えるとともに、次時からは教室に学習計画を常時掲示した(図12)。

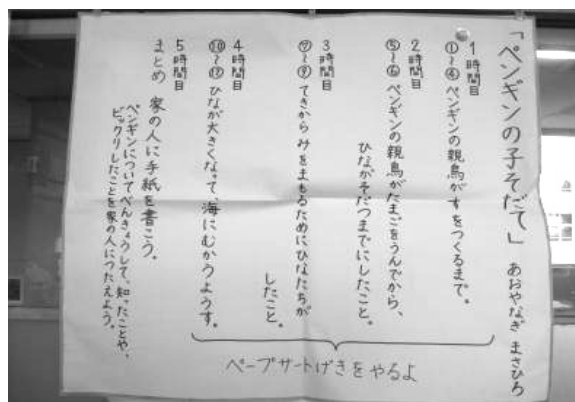


図12 単元の流れを書いた教室掲示物

イ 本時の課題を具体的にする

本時の課題を、下記のように具体的にして児童が分かりやすいものに設定した。

ペンギンの親鳥が、たまごをうんでからひながかえるまでにしたことを、ぜんいんがせつ明できるようになるう。

読み取りの部分は4時間とも同じ流れにして、児童が見通しをもてるようにした。例として読み取りの第2時における授業の流れを以下に示す。

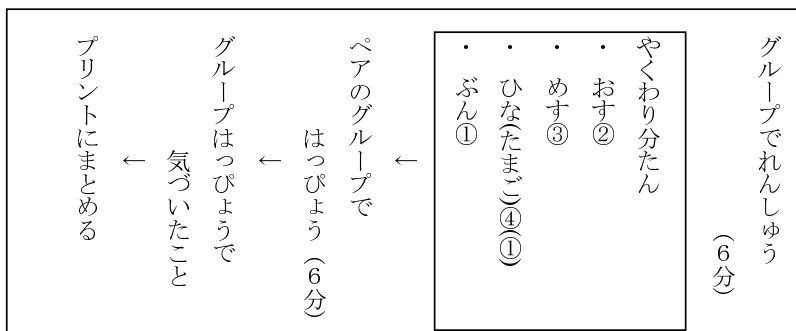
学習過程

主な学習活動と予想される子どもの反応	形態	指導・支援(学び合う姿の評価)
1 形式段落⑤⑥を読み、本時の見通しを持つ。	一斉 4分	<ul style="list-style-type: none"> ペンギンが卵を産んで、子育てをする様子を思い浮かべながら読むことを確認する。
<p>ペンギンの親鳥が、たまごをうんでからひながそだつまでにしたことを、ぜんいんがせつ明できるようになるう。</p>		
2 ペンギンの子育ての様子について話し合う。 ○一人読みをする。 ○グループで子育ての順序について話し合う。 ・グループごとに並べ替えた短冊を、ホワイトボードにはる。 ○全体で子そだての順序を確認し、おすのしたこととめすのしたことを押さえる。	個別 2分 グループ 交流 3分 全体 交流	<ul style="list-style-type: none"> おすのしたこととめすのしたことを見つけながら読むように促す。 グループの司会者を中心にペンギンの子育てが書かれた短冊を並べ替えるように助言する。 (グループで話し合っって短冊を並べ替え、ペンギンの子育ての順序を確認することができたか。)

<p>○動作化をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループごとに役割分担をし、ペーパーサートを使って練習をする。 ・ペアのグループで交互に発表する。 ・相手のグループの良かったところを発表する。 <p>○全体で話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・僕たちは一回しか交代しなかったけど○班はおすとめすが何度も交代して卵を温めていたよ。 ・卵を温める格好が○班と違ったよ。どっちが正しいのかな。 <p>3 ペンギンの子そだての順序と自分の思ったことをワークシートにまとめる。</p>	<p>5分 グループ 12分</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「おす」「めす」「ひな」などに役割分担をして協力して取り組めるように支援する。 ・グループで交流することでペンギンの子育ての様子を確かめる。 ・自分たちのグループとペアグループの違うところに注目するように促す。 (ペアグループに対して良いところを伝えることができたか。)
<p>4 学習内容を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ペンギンの親鳥が十日以上もなにも食べないで卵を温め続けていて、すごいと思ったよ。お母さんにも教えてあげたいと思ったよ。 	<p>全体 5分 個別 10分</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ間交流で気付いたことやペアのグループの良かったところを発表することができるようにする。 ・ペンギンの子育ての様子についてまとめ、感じたことや思ったことを自分の言葉で書くように促す。 ・ペンギンの子育てについて家族に伝えたいと思ったことを発表し合い、本時の学習の振り返りを行う。

ウ 本時の授業の流れを提示する

本時の学習の流れと学習時間を黒板に板書した。



エ 課題を解決するための手だてを示す

ペープサート 読み取りの授業 4 時間においてペープサートを使った動作化を取り入れた (図 13)。

グループで協力して動作化を行い、自分たちで親鳥やひなを動かすことによって教材をより深く読み取り、一人一人が確実に理解できるようにした。

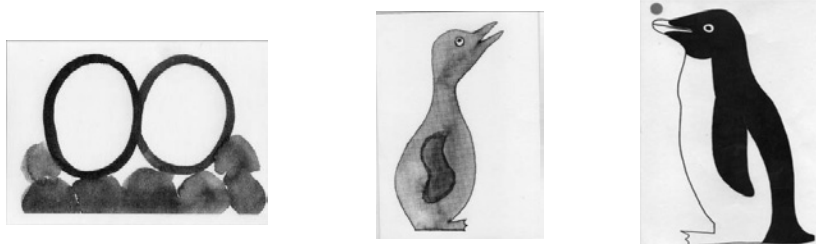


図 13 動作化で使用したペープサート

ワークシート 各授業のまとめでは、振り返りのワークシートを使用した (図 14)。1 時間の授業で読み取ったことを穴埋め形式で振り返り、授業の感想や家の人に伝えたいことなどをまとめることで、1 時間の振り返りはもちろん、学習のまとめで行う「家の人への手紙」の手がかりとなるようにした。



図 14 読み取りの授業のまとめで使用したワークシート例

司会者中心での話し合い グループに一人司会者を決め、司会者を中心として意見交換を行い、グループの意見をまとめていくようにした。

グループ交流 グループで練習したペープサートを使った動作化をペアグループで発表し合った。それぞれの動作化を見合い、お互いの同じところや違うところを見つけることによって、より理解を深められるようにした。

5) 授業の実際

ア 単元の見通しを明確にして伝える

単元の見通しを授業の最初に板書するだけではなく、教室に掲示することによって常に見ることができ、授業が始まる前に「今日は〇〇をするんだよね。」といった会話が聞かれた。

イ 本時1時間の課題を具体的にする

授業の課題を具体的にすることで、授業の振り返りでも、課題に沿った発言をしたりそれぞれの課題に対する達成度を自分で評価したりすることができた。

ウ 本時の授業の流れを提示する

本時の流れと、その活動に充てる時間も含めて板書することで、時計やタイマーを見ながら計画的にペープサート練習やワークシートの記入を行うことができた。また、次に行う活動に向けて意欲的に練習に取り組むことができるようになった。

エ 課題を解決するための手だてを示す

ペープサート ペープサートを使うことで楽しく授業に取り組むことができた。また、視覚的に文章を表現することができるため、文章を読むだけでは理解しきれなかった、親鳥が卵を温める姿など、細かい部分まで理解することができた。そして、グループで協力して行うことが不可欠なため、お互いに声を掛け合って練習をしたり、うまくできない子に対して手を貸したり、アドバイスをしたりする姿が見られた。その他にも、口頭で説明したり、発表したりすることの苦手な子どもも、積極的に動作化に参加し、授業への参加意欲を高めることができた。

ワークシート ワークシートを使用することで、1時間の振り返りを確実に行うことができた。ペープサートを行うだけでは、理解する事が自分の役割に限定されてしまう心配もあるが、それをワークシートでカバーすることができた。また、本時1時間の授業の振り返りや家の人に伝えたいことを書くことによって、学習のまとめで家の人に手紙を書く場面においても授業のワークシートが手がかりとなり、いろいろな視点から手紙を書くことができていた。

司会者中心での話し合い 司会者を立てて話し合いを行うことで、司会者の必要性や役

割を理解する事ができた。本時は、司会者を事前に指定して授業を行ったが、別の単元のグループで話し合う場面においては、自然と司会者のような子どもが現れ、グループの意見をまとめる姿が見られた。

グループ交流 ペアグループで発表し合うことで、お互いの動作化の良さや、違いを見つけることができた。また、感想を発表する場面もあるため、相手に褒められたグループは「次回もがんばろう」という意欲を持ち、間違いを指摘されたグループでも「今回はもっとがんばってペープサートをやって、相手のグループに褒めてもらいたい」という感想をもつことができた。

(4) 実践4 3年 中心となる人物の気持ちを考えよう—サーカスのライオン

1) 子どもの実態

本学級の子どもは、元気がよく、学習への興味関心が高い。新しいことを発見したときなどは目を輝かせながら嬉しそうに話す。

どの子も国語科の音読が大好きである。体全体を使って大きな声で気持ちを込めて音読する姿は生き生きしている。また、自分の考えを一生懸命に伝えたり、話す人の考えをしっかりと聞いたりすることもできるようになってきた。国語が好きという子が多く、学び合う意欲が育ってきている教室である。

学級の目標「ともに 助け合い はげまし合い 成長する 3年1組」を目指し、子どもが自分の考えや気持ちを安心して話し合うことができるような学級づくり、授業づくりを心がけている。

2) 本単元でめざす子ども像

- ①自分の思いを話したり書いたりして、友達に伝えることができる子。
- ②グループや全体で交流する学習活動を通して、仲間から学びながら自分の考えを深めていくことができる子。
- ③一人一人が伸び伸びと音読で表現できる子。

3) 教材について

サーカスでの変化のない毎日に疲れ、惰性で過ごしていた老ライオン「じんざ」の心の動きが描かれている物語である。元気のない「じんざ」を心配する少年との触れ合いが「じんざ」をよみがえらせていく。男の子を助けるために火の中に飛び込む「じんざ」の姿や「じんざ」のいないサーカスの様子が描かれる最後の場面まで、子どもたちを引きつけ、様々な思いを抱かせる教材である。

4) 具体的な支援の手だて

ア 単元の見通しを明確にして伝える

この単元では、どのように学習を進め、何ができるようになるのかを伝えるために、第1時に全15時間分の学習計画を提示した。それを大きく拡大し、教室に掲示しておく。この計画表をもとに1時間ごとの学習内容を確認しながら、本時の学習活動が全体の中でどのような役割を示すかを確認していくことができると考えた。

単元の課題

- ① じんざと男の子との触れ合いを、文章や言葉に注目しながら読み取る。
- ② 音読発表会を開く。

単元計画（15時間完了）

時間	学習活動	学習課題（子どもたちが考えた課題）
1	感動したところを話し合う。	
2	意味段落に分けて課題を考える。	
3 4	第1場面を読んで、毎日同じことばかりやっている「じんざ」の気持ちを読み取る。	・ どうして「じんざ」は、おじさんがよそ見をしているのにとびつづけたのだろう。 ・ なぜ「じんざ」は、いつもアフリカのゆめばかり見ていたのだろう。
5 6	第2場面を読んで、男の子と出会ったときの「じんざ」の気持ちを読み取る。	・ なぜ「じんざ」は、うきうきして外へ出たのだろう。 ・ なぜ「じんざ」は、ぐぐっと胸のあたりがあつくなったのだろう。
7	第3場面を読んで、男の子が毎日訪ねてくるようになったときの「じんざ」の気持ちを読み取る。	・ なぜ「じんざ」は、チョコレートが嫌いなのに目を細くして受け取ったのだろう。 ・ どうして「じんざ」の体に力がこもったのだろう。
8 本時	第4場面を読んで、火事が起きたときの「じんざ」の気持ちを読み取る	・ どうして「じんざ」の体は、ぐうんと大きくなったのだろう。 ・ なぜ「じんざ」は、力のかぎりウォーッとほえたのだろう。
9	第5場面を読んで、ライオン使いのおじさんやお客さんの気持ちを読み取る。	・ なぜ「じんざ」がいないのに、お客はいっしょうけんめい手をたたいたのだろう。

10	音読発表会の計画を立てる。	
11	音読の工夫をし、練習する。	
12		
13	音読発表会を開き、感想を伝え合う	
14	心の触れ合いを考えた物語を読む。	
15		

○物語の全体を捉え、学習のイメージを持つために、物語の全文を印刷したもの（B4とB5を貼り付けた大きさの用紙）を準備した。登場人物、場所、できごと等を調べ、意味段落に分けたり、物語全体のクライマックスはどこかを捉え「じんざ」の心情曲線を簡単に記録したりしながら、これからの学習活動のイメージを持つことができるようにした。全文を見渡すことによって、物語の全体の構成が鮮明になり、主体的に学ぶ意欲が出てくるのではないかと考えた。

○第1場面から第5場面の学習課題を子どもで作る活動を取り入れた。

○「みんなで話し合いたいこと、友達に聞いてみたいこと」を短冊（A4半分の大きさの用紙）に書き、それを黒板に貼り付けて場面ごとに整理し、学習課題を子どもと話し合って決めた。低学年では1時間の学習課題は教師が与えていたが、中学年からは自分たちで作っていくと、より興味を持って学習できるようになると考えた。文章を何回も読み返しながら課題を見つける活動は、自主的に学ぶ意欲へつながると思われる。

以上の3点を1,2時間目の授業で実践することによって、物語を自分の力で読み進め、男の子と「じんざ」の心の変化とその絆を読み取っていこうとする意欲が高まるのではないかと考えた。

他の仮説については、8/15時間目の指導案を提示し、その授業の実践に沿って具体的に述べることにする。

本時の目標

- ①第4場面を読み、グループや全体の場で考えを伝え合いながら、火事が起きたときのじんざの気持ちを読み取ることができる。
- ②自信を持って全体の場で考えを発表したり、友達の考えを聞き、自分の考えを深めたりすることができる。

準備物 書き込みシート、掲示物、ワークシート、学習の流れ

学習過程

	主な学習活動	形態	留意事項・支援（評価）
1	第3場面を振り返る。	一斉	・男の子が毎日訪ねてくるようになった

2 本時（第4場面）の課題と学習の流れを知る。	3分	ときのじんごの気持ちを振り返る。 ・学習計画表を見ながら本時の課題を提示し、学習の流れを確認する。
じんごの気持ちを話し合おう。 ・どうしてじんごの体は、ぐうんと大きくなったのでしょうか。 ・なぜじんごは、力のかぎりウォーッとさけんだのでしょうか。		
3 じんごの気持ちについて話し合う。 (1) 音読する。 (2) 一人読みをする。 「ひかる言葉」 はね起きた ひとかたまりの風 ぱっと火の中へとびこんだ 思わずみぶるいした 力のかぎりほえた (3) グループで話し合う。 話形 「私は、〇〇の文からじんごの△ △という気持ちが分かります。 どうですか」 「同じです」「つけたします」 「ほかにありませんか」 (4) 全体で話し合う。 ・だれか、早く気付いてくれ！ ・わしはどうなってもいい。男の子を絶対に助けるぞ！ ・男の子は大切な友達なんだ。助けたい！	個人 8分 グループ 5分 全体 10分	・友達と向き合って音読することで、相手に声が届くようにする。読み終わったら友達の音読を静かに聞くように声をかける。 ・じんごの気持ちが分かる言葉「ひかる言葉」に着目して、家庭学習で書いてきた書き込みシートに付け加えながら読んでいくように指示する。 ・司会者が中心になって全員が発表できるようにしていく。付け足しの意見もどんどん出していき、友達の考え方から学んでいくように声をかける。 ・発表の苦手な子は、話形の掲示を見ながら話すようにし、自信を持って話し合いに参加できるように支援する。 (司会者を中心に話し合い、グループ全員が発表することができたか) ・友達の考えと自分の考えとを比べながら聞いたり発表したりすることが大切な学習であることを伝える。 ・クライマックス場面までのじんごの気持ちの変化が分かるように、板書でまとめる。じんごを奮い立たせたものは何かが板書から伝わるようにする。 (グループや全体の場で話し合い、考えを深め合うことができたか。)

<p>4 ワークシートにまとめる。</p> <p>(1) 友達の考え方から学んだことを書く。</p> <p>(2) 発表する。</p>	<p>個人 7分</p> <p>全体 3分</p>	<p>・自分の書き込んだことが、全体の話し合いでどのように変わったのか、深まったのかを具体的に書くように指示する。</p> <p>・早く書けた子の文章を紹介し、他の子の参考になるようにする。</p>
<p>5 気持ちを込めて音読する。</p> <p>・役割を分担して音読する。</p>	<p>グルー プ 4分</p>	<p>・グループで役割分担をして、読み取ったことをもとに気持ちを込めて音読で表現させる。</p>
<p>6 学習内容を振り返る。</p> <p>・振り返りカードに記入する。</p>	<p>個人 5分</p>	<p>・炎へ飛び込んだじんぎの気持ちを考えて今日のじんぎへ手紙を書くように指示する。</p>

評価 じんぎの行動を手がかりに、火の中に飛び込んでいったじんぎの気持ちを発表したり、話し合いから学んだことをまとめたりすることができたか。

イ 本時1時間の課題を具体的にする

これまででは教師が課題を考え、「ウォーッとほえたじんぎはどんな気持ちだったのだろう」と提示してきた。低学年から、中学年になったら自分たちで話し合いたいことを考えてみんなで決めていくことが学習意欲を高め、主体的に学習に取り組む姿が生まれてくるきっかけになると思う。

そこで学習計画の2時間目に、「みんなで考えたいこと、話し合いたいことを書いてみよう」と提示し、短冊（A4の半分の用紙）に何枚でも書いた。子どもにとっては初めての体験なので、例として「なぜじんぎは、いつもアフリカの夢ばかり見ているのだろうか」を示してから書かせた。その短冊を場面ごとに分けて黒板に貼り、同じような課題は一緒にしたりしながらみんなで整理した。そして最終的には教師の考えていた課題と関連させながら、場面ごとに2つの学習課題を決めた（単元計画の学習課題参照）。

「なぜじんぎは力のかぎりウォーッとほえたのだろうか、私が考えたんだよ」と友達と話しながら、張り切って学習に取り組む子の姿を見ることができた。

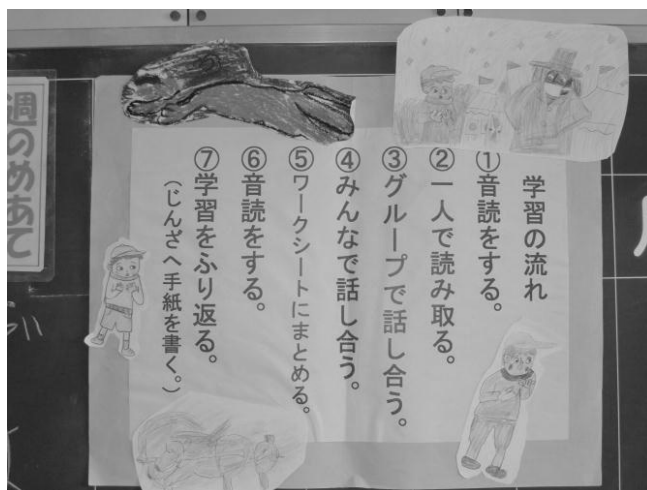


図 15 1時間の学習の流れ

ウ 本時の授業の流れを提示する

学習の流れをパターン化することによって、教師の指示を待たなくても、個人で、ペアで、グループで、そして全体で学習していくとき、主体的に取り組むことができるようになると思った（図 15）。登場人物の気持ちを読み取る第 1 場面の授業から同じパターンで進めることにした。

エ 課題を解決するための手だてを示す

指導案のそれぞれの学習活動で、次のような手だてを考えた。

- 「学習活動 3(2)、一人読みをする」では「じんぎ」の気持ちが表現されている文章や言葉に注目した読みができるようになれば、登場人物の心情を読み進めていく力を育てることができるのではないかと考えた。「じんぎ」の気持ちを読み取っていくとき、その根拠になる文章や言葉を「ひかる言葉」とし、「登場人物の気持ちを表す文章や言葉を見つけよう」と投げかけた。

「ひかる言葉」は物語を読み取るキーワードとなるので、その文章や言葉に注目させることは国語の力を育てることになる。

- 「学習活動 3(3)、グループで話し合う」ときに話形を示すことは、発表するのに戸惑っている子が話形を見ながら話すことによって進んで発表ができるようになると思った（図 16）。司会者を中心に、書き込んだことを順番にみんなに伝える。グループ全員の考えを聞いて「なるほど、私は気が付かなかった」と思ったことは書き込みワークシートに付け足していく。話形は、話し合いを進めたり深めたりするとき大切な役割を果たした。

- 「学習活動 3(4)、全体で話し合う」活動は、読み取ったことを深めていくための学び合う場であると考えている。付け足したり、違う考えについての意見を話し合ったりすることが子どもの力できるように、相互指名で話し合いを進めることにしている。教師は話し合いが混乱したときに方向性を示すだけにして、できるだけ子どもに任せるようにした。また教師は「ひかる言葉」を意識して話し合うことによって「じんぎ」の気持ちの高まりに集中した話し合いへと進むことができるように、子どもたちの発言を板書した。

- 教師が板書で学習のまとめをすることによって、物語の構成や重要文章・言葉、クライマックスを捉え、子どもの発言を整理することができると思った（図 17）。子どもの話し合いの様子を聞きながら、「ひかる言葉」とそこから読み取れる登場人物の気持ちを書いていく。そして最後に「じんぎ」の心の変化を心情曲線で表していく。

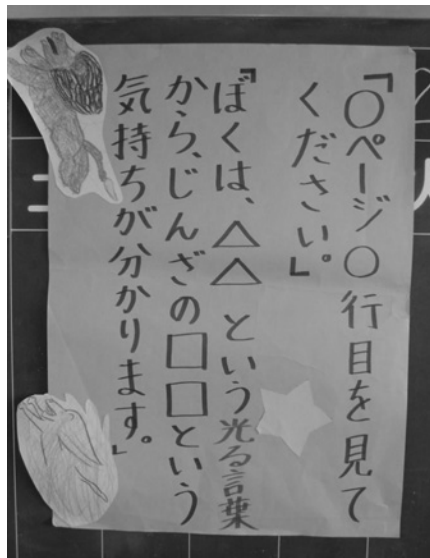


図 16 発表するときの話形

この授業では、ひかる言葉の位置は心情曲線を考えながら貼った。「ウォーッ」には、「先生、☆マークは3つぐらい付けよう」の声があがったので3つ付けている。板書は、教師のねらいと子どもの読みで完成させていく。

第1場面から第5場面までの板書事項を順番に教室に掲示したので、みんなで見つけた重要語句やじんごの心の変化が一目瞭然であると同時に、一単元のまとめにもなった。



図 17 1時間の授業のまとめをした板書

- 「学習活動 4 ワークシートにまとめる」では、自分の読みの深まりに注目し、まとめていくことができるようなワークシートを作ることによって、子どもの学び合う力が高まるのではないかと考えた（図 18）。

これまで物語文を扱うときのまとめのワークシートは、登場人物の気持ちを吹き出しに書く活動を取り入れてきたが、全体で話し合ったことがまとめの中に生かされていないことが気になり、よい考えが出て話し合いも深まったのだから、それが生かされる方法はないかと考えた。そこで、この1時間で自分の読みがどのように深まってきたのか、友達の発言から何を学んだのかを考えて書くワークシートを使えば、学び合いながら読む力を伸ばしていくことができると考えた。友達の考えを聞いて自分の考え方とどう違うのか、そこから何を学ぶのかを具体的に示していくのに時間がかかったが、子どもは学び方に気付いてきた。ワークシートの例にもあるように「『ウォーッ』というひかる言葉から、最初は『男の子を助けてくれ』と考えただけだったけど、みんなで話し合って『大切な友達だから、わしはいいから男の子を！』という考えもふえました」と書くことができるようになった。「みんなで話し合って分かったことです。ぼくは『ウォーッ』というひかる言葉から、はじめは助けたいという気持ちしかなかったけど、話し合って、大切な友達なんだーという気持ちもふかまりました」という表現ができる子も増えてきた。

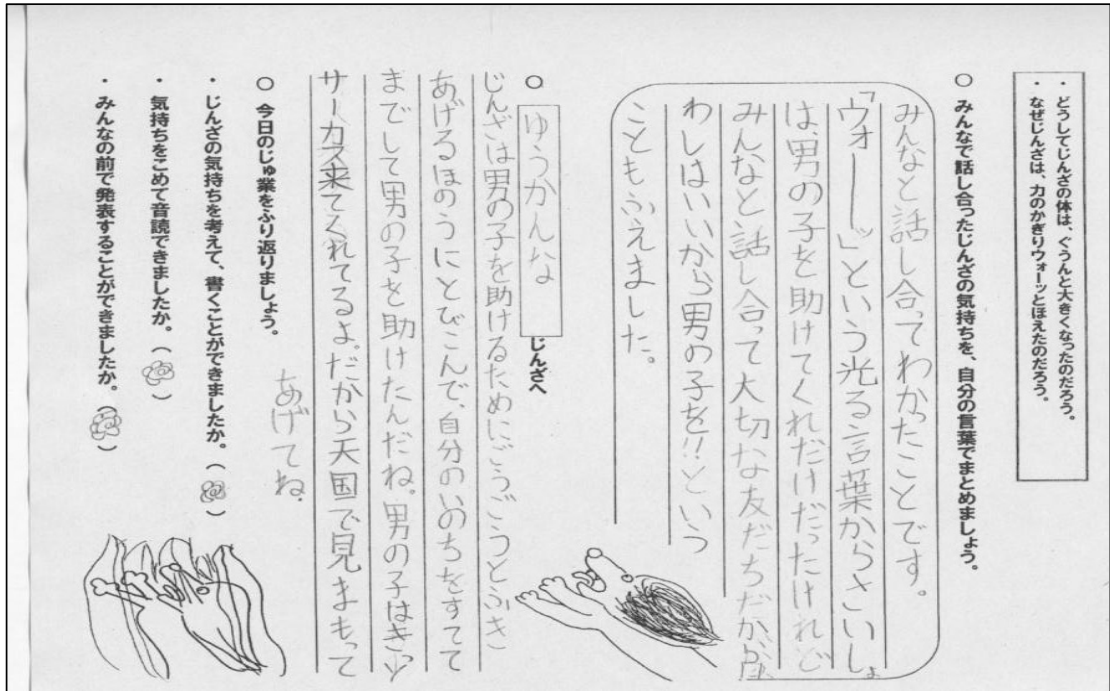


図 18 まとめワークシート

(5) 実践5 3年「表現運動」—動きをまねてみよう

1) 子どもの実態

本学級では、物語の登場人物の気持ちを音読や発言などで表現したり、お話作りを通して絵から想像されることを書いて表現したり、印象に残った場面を絵に描いて表現したりする活動を授業の中で行ってきた。また11月には学芸会もあり、台詞だけでなく動作も取り入れることによって、場面の様子や登場人物の気持ちを表現する練習をした。しかし、ただ立ったまま台詞を言うだけの子や、動作をしても恥ずかしいという気持ちが拭いきれずに、体が萎縮して肘が曲がったり、腕が肩より高く上がらなかつたりする子どもが見られた。

自分の感じたことや想いを、言葉や文字、絵を通して表現する以外に、全身を使って表現することの楽しさに触れ、子どもが生き生きと自分の感じたことを表現できるようにしていきたいと考え、本単元に取り組むことにした。

2) 本単元でめざす子ども像

単元を通してめざす子ども像を以下の3点とした。

- ①自分が考えた動きを生き生きと表現することができる子。
- ②自分の考えた動きを互いに見合うことで、新しい動作に気付き、表現の幅を広げるこ

とができる子。

③より大きな動きを目指して、全身を使って表現することができる子。

3) 教材について

表現運動は、気持ちを解放し、想像の世界に没頭して対象になりきったり、互いのよさを生かし合って仲間と関わり合ったりしながら、踊る楽しさを味わうことができる運動である。そこで、本単元の流れを以下のように設定し、実践を行った。

単元計画（5時間完了）

時間	学習活動
1・2	目の前にある物の動きをまねて表現する。
3	1日の生活で使用する物を表現する。
4	1日の生活で気に入った場面を簡単なお話にして表現する。
5	グループで作ったお話の発表会を行う。

本単元では、子どもにとって身近な1日の生活を、体全体を使って生活用品やその物の動きを表現していく。同じ課題を表現していく中で、友達の動きを観察しながら、自分もその動きをまねてみたり、互いに声を掛け合って動作したりすることによって、今までは、動きが考えられずに立ったままだった子も、少しずつ体を動かすことができるだろう。

また、本単元は体で表現することが基本となるため、自分の内面を外に出すことという気持ちの面での課題が大きく、他の単元より、できる、できないというような技能の個人差は見られにくい。普段、体育を苦手と感じている子どもにとっても、楽しい、できると感じることでできる大切な機会だと考えている。

4) 具体的な支援の手だて

ア 単元の見通しを明確にして伝える

単元の見通しがもてるように、第1時間で単元の流れを説明するとともに、教室や体育館に流れを書いた掲示物を用意した(図19)。

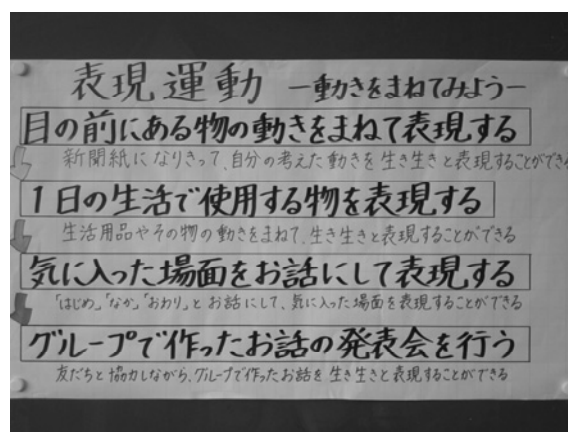


図19 単元の流れを示した掲示物

イ 本時1時間の課題を具体的にする

単元の流れに基づいて、授業でどこまで達成できているとよいかを子どもに伝え、その

課題を達成するためには何に気を付けて表現運動を行えばよいのか子どもに考えさせた。毎時間の課題は、子どもの考えた言葉を加えて設定した。

子どもから出された考えから、第2時での課題は「どんな動きをしているのか伝わるように体全体を使って表現しよう」となった。授業の流れは、以下の通りである。

学習過程

主な学習活動と予想される子どもの反応	形態	指導・支援（学び合う姿の評価）
1 準備運動を行う。 2 前時の表現運動の映像を見ることで、本時の課題をつかみ、1時間の学習の見通しを持つ。 ・しゃがんだり、つま先で立ったりした方が動きが大きく見えるね。 ・恥ずかしそうに動くとなんかしているのか分かりにくいね。	一斉 5分 一斉 5分	・男女が関わりながら、体をほぐせるように並び方に配慮する。 ・体全体を使って表現している子どもとそうでない子どものビデオ映像を見せ、比較して考えられるようにする。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> どんな動きをしているのか伝わるように 体全体を使って表現しよう </div>		
3 新聞紙になりきって、様々な動きを表現する。 ・丸めるよ。クシャクシャ。 ・飛ばすよ。ピュー。 ・ねじって回すよ。グューグルグル。 ・折ってやぶるよ。ピシッビリビリ。 ・広げて踏むよ。ワシャワシャムギユ。	ペア 6分	・様々な動きを考えられるように新聞紙の動かす方法の例を掲示する。 ・「肘は伸びているかな」「背中丸くなっているかな」などと声を掛け、課題への意識を高める。 ・ペアの役割を途中で交代させ、どちらも新聞紙になりきる機会を得られるようにする。 （新聞紙の動きを全身を用いて表現することができたか）
4 ペアの動きを隣のペアに見せ、体全体を使って動いているところを伝え合う。 ・膝を伸ばしていたから、引っ張られる様子が伝わってきたよ。 ・小さくなるときに、背中をしっかり丸め	ペア間 6分	・積極的に伝え合うことを促し、感想を共有できるように配慮する。 ・動きの中で達成できているところを認め、体全体を使うことが

<p>ているところが良かったよ。</p> <p>5 ペアやペア間交流で見つけたそれぞれのお気に入りの表現の仕方をつないで、グループ全員で新聞紙になりきる。</p> <p><u>グループ表現の手順</u></p> <p>①自分のお気に入りの動きを書く ②全員のお気に入りの動きを見せる ③全員のお気に入りの動きをつなぐ ④動きの順番に気を付けて全員で表現する</p>	<p>グループ</p> <p>18分</p>	<p>課題であることを押さえる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・少人数の特性を生かし、グループで1枚の新聞紙を表現してもよいことを伝える。 ・リーダーの合図に合わせて、順に動きを変化させるように指示する。 ・工夫して表現しているグループを紹介し、全体に広める。 (互いの動きを見合うことで新しい動作に気付き、表現の幅を広げることができたか)
<p>6 全員が体全体を使って新聞紙になりきり表現することができたか、学習内容を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・足先や指先まで気を付けて大きく表現すると、どんな動きをしているか分かりやすかったよ。 ・〇〇さんが、体全体を使って動けるようになったよ。 	<p>個別</p> <p>2分</p> <p>全体</p> <p>3分</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・お互いの動きの高まりやがんばりを発表することで、学習内容を価値付ける。

ウ 本時の授業の流れを提示する

本学級の子ども29名に、1時間の授業の流れが予め分かっていると安心するか尋ねたところ、26名が「安心する」、3名が「変わらない」と答えた。そこで、いつ誰が見ても授業の流れが分かるように、予め活動内容を板書した。また、活動内容の板書では活動形態が明確ではないため、本時の課題を確認したあとに、1時間の授業の流れを説明しながら、ペア交流、グループ交流などの学習形態とその活動時間を示した(図20)。

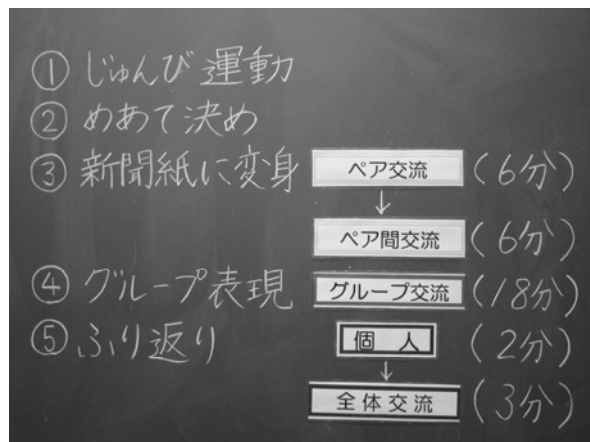


図20 授業の流れの提示

エ 課題を解決するための手だてを示す

具体物の使用 新聞紙を使うことで動きを視覚的に捉え、自ら動きを考えることが苦手な子どもでも、真似をすることから自信を持って表現できるようにする。

動きに合わせた声を出す 気持ちを解放し、より大きな動きができるように、新聞紙の動かし方に合わせて「グルグル」「クシャクシャ」「ビリッビリビリッ」などと声を出すように指示する。

掲示物の工夫 新聞紙の操作の仕方がイメージしやすいように、様々に変形させた新聞紙や、新聞の動かし方とそのときに出るオノマトペの例を掲示する（図 21、図 22）。



図 21 変形させた新聞紙

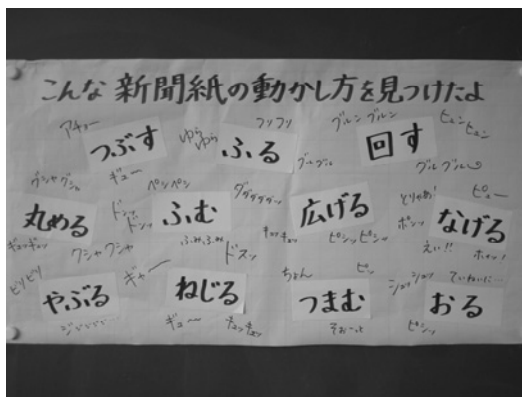


図 22 新聞紙の動かし方の例

関わりを大切にしたいグループ活動 個で考えた動きを相手の人に伝えたり、よりよい動きをまねたりする場を設定することによって、新しい動きを発見する機会を得られるようにする。

ビデオ映像の活用 ペアやグループで表現運動をしているときの様子をデジタルカメラで撮影し、テレビ画面に映すことによって、客観的に動きを確認できるようにする。

5) 授業の実際

ア 単元の見通しを明確にして伝える

第1時で単元の流れを説明するだけでなく、教室や体育館に流れを書いた掲示物を用意することによって、「今日は、テレビや目覚まし時計を表現したから、次は、お話を作るんだね。どんなお話にしようかな」と、次時に向けて想像を広げる子どもや、「発表会があるから練習しようよ」と、声を掛け合い、休み時間に練習をするグループが見られた。

イ 本時 1 時間の課題を具体的にする

本時の課題を設定するとき、どんな動きをしているのか分かるように表現している子どもとそうでない子どものビデオ映像を見せ、比較して考えさせたことによって、子どもは、膝や背中の中曲げ伸ばしが大きい動きの方がどんな動きをしているのか分かりやすいく気がした。そこで、ただ表現するだけでなく「どんな動きをしているのか分かるように体全体を使って表現しよう」と課題を決めた。体全体を使ってという言葉が入ったことにより、「もっと背伸びしようよ」「ここは、もっと丸く小さくならう」「指先まで伸びていたから大きく見えたよ」といった会話が聞かれ、グループ活動でも、より大きな動きをめざす子どもの姿が見られた。また、ペア間交流では、「新聞紙が本当に踏まれているように動けていました」「新聞紙が、クルクルと丸められていく様子が分かったよ」といった会話が聞かれ、どんな動きをしているのか伝わり、喜ぶ子どもの姿が見られた。

授業の振り返りでは、学習課題を意識しながらできるようになったことや自分や友達のがんばりを話す子どもが増えた。

ウ 本時の授業の流れを提示する

授業の流れを提示することによって、「この後、グループ発表があるから、新しい動きを探そうよ」と、互いに声を掛け合いながら動きの練習をしたり、ホイッスルの合図で次の活動へ移ったりすることができた。また、活動時間も示したことにより、時計を見ながらグループ交流を行うことができた。

エ 課題を解決するための手だてを示す

具体物の使用 新聞紙の動かし方は多様であり、子どもが互いに声を掛け合いながら新しい動かし方を見つけていった。新聞紙をやぶる動きに合わせて手足を限界まで開いたり、踏まれる動きに合わせて体を弾ませたりと、新聞紙の動きをよく見ながら体を柔軟に動かすことができた。視覚的に捉えられる具体物があることで、子どもの視線はそこに集中し、生き生きと表現することができた。

動きに合わせた声を出す 言葉で「丸めるよ」と言うだけでなく、新聞紙の動かし方に合わせて声を出すことによって、同じ丸めるという動かし方でも、「グチャグチャ」「クルクル」「クシャ」など様々な動かし方があることに気付くことができた。また、声が自然と出てくるようになると、気持ちが解放され動きがより大きくなった。

掲示物の工夫 子どもの自由な発想を大切にしたいと考え、掲示物について特に注目させるような言葉掛けは行わなかったが、新しい新聞紙の動かし方を探す子どもや動かし方が分からず行き詰まった子どもが、様々に変形させた新聞紙や新聞紙の動かし方とそのときに出るオノマトペの例の掲示物を見て参考にしていった。掲示物があったため、様々な新聞紙の動かし方を見つけ、ペア交流の時間をいっぱいに使って表現していた。

関わりを大切にされたグループ活動 本時の授業の流れを説明するとき、ペアやペア間

交流を通して見つけたそれぞれのお気に入りの表現の仕方をつないでグループ表現を行うことを伝えたため、個で考えた動きがどんな動きをしているのか分かるように相手に伝えようとしたり、よりよい動きをまねたりすることができた。また、ペア間交流やグループ交流を通して、新しい動きを発見することができたという振り返りもあった。

ビデオ映像の活用 第1時ではビデオ映像を活用せず、子どもを集めて代表のペアの動きを見せたが、第2時からはペアやグループで表現運動をしているときの様子をデジタルカメラで撮影したことにより、自分がどんな動きをしているのか確認することができた。

「思っていたより、大きく動けていなかった」「グループで動きが揃っていることが分かった」など、実際に自身が動いているのは気付けないことにも気付くことができた。また、実践後に次の単元もデジタルカメラで撮影すべきか尋ねたところ、全員が撮影してほしいと答えた。その理由として、自分の動きが映像として残り、どんな動きをしているか分ることや他のペアやグループの動きを知ることができる喜びが挙げられた。

(6) 実践6 4年「国語」ごんぎつね—人物の気持ちのうつり変わりを考えよう

1) 子どもの実態

本学級は男子14名、女子14名で編成されている。明るく活発な子どもが多く、大きなトラブルもなく日々仲良く生活している。授業では発表が好きで、意欲的に発言できる子どもが多いが、人の意見に対して自分の意見を言うのは苦手な子どもが多く、あまり活発な話し合いにならないのも実態である。

2) 本単元でめざす子ども像

本単元でめざす子ども像を、場面と場面の関係に注意して、気持ちの変化を想像して書いたり、話したりすることができる子とした。

3) 教材について

本単元は、場面の移り変わりや人物の気持ちの変化について読み取り、強く心に残ったことを表現することをねらいとしている。また、新美南吉の他の作品を読み広げることで、この作家の優れた描写や、表現の工夫に触れ、物語を味わう感性を伸ばす活動にもつないでいきたい。

4) 具体的な支援の手だて

ア 単元の見通しを明確にして伝える

第1時に単元全体の学習計画表を示し、学習の見通しを持たせた。その後は教室に掲示し、毎時間確認できるようにした。

単元計画（16時間完了）

	学 習 活 動
第 1 時	・ 学習計画を示し、学習の見通しを持つ ・ 全文を通読し、初発の感想を書く。
第 2 時～ 第 3 時	・ 分からない語句の意味調べをする。 ・ 音読練習をする。
第 4 時～ 第 10 時	・ 場面ごとに内容を読み取り、ごんの気持ちの変容をとらえる。
第 11 時～ 第 14 時	・ まとめの作文を書く。 ・ 作文を紹介する。
第 15 時	・ ごんぎつねの本の帯を作る。
第 16 時	・ 新美南吉の他の作品を読む。

イ 本時 1 時間の課題を具体的にする

本時の課題 第 3 場面のごんはどんなきつねか考えよう。

学習過程

主な学習活動	形態	留意事項・支援
1 前時を振り返り、本時の課題をつかむ。 第 3 場面のごんはどんなきつねか考えよう ・ 一人で読む	一斉 2分 ペア 2分 個人 2分	・ 本時では第 3 場面のごんについて考えることを確認する。 ・ ごんがどんなきつねになっていくかを考えながら音読するように指示する。
2 ごんはどんなきつねかを考える。 (1) ～きつね、～ぎつねという形でノートに書く。 ・ 人を想うきつね ・ 兵十を助けるきつね ・ どろぼうぎつね ・ 兵十をかわいそうに思うきつね ・ 反省をしたきつね ・ 後悔をしたきつね ・ 心変わりしたきつね ・ うなぎのつぐないをするきつね (2) おかしいものがないか検討する。	7分 個人 全体	・ 短く箇条書きで書かせることで、文章を書くのが苦手な子どもも取り組みやすいようにする。 ・ 3つ書けたらノートを持ってくるように指示する。どんな意見も認め、○をつける。 ・ ノートを見せた子どもから意見を黒板に書かせていく。 ・ 読みやすい板書になるように、書き出だしの・を書いておく。 ・ おかしいもの、変えたほうがいいもの

<p>3 ごんのつぐないについて考える。</p> <p>(1) 一日ごとにごんが兵十にしたことについてまとめる。</p> <p>1日目 いわしを投げ込む。</p> <p>2日目 くりをどっさり置いて帰る。</p> <p>3日目 くりを拾って持ってきてやる</p> <p>4日目 くりを拾って持ってきてやる</p> <p>5日目 くりと松たけ 2、3本を持っていく。</p> <p>(2) 全体で検討する。</p> <p>(3) 第6場面での「ごんのつぐない」について考える。</p> <p>6日目 くりを固めて置いている。</p> <p>(4) どうして固めておいたのか理由を考えノートに書く。</p> <p>(5) 発表をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・くりが置いてあるのがわかりやすいように。 ・見つからないようにそっと。 ・ていねいに扱ったから。 ・兵十に対する気持ちがやさしくなっているから。 <p>4 「第3場面のごんはどんなきつねか」という最終的な自分の考えをまとめる。</p>	<p>5分</p> <p>個人</p> <p>6分</p> <p>全体</p> <p>5分</p> <p>個人</p> <p>3分</p> <p>個人</p> <p>3分</p> <p>全体</p> <p>5分</p> <p>個人</p> <p>5分</p>	<p>に対して意見を言わせることで、正しい読み取りができるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ごんのつぐないの様子を読み取ることで、ごんの心情に迫れるようにする。 ・1日分ずつ箇条書きで書かせる。 ・5日目まで書けたら持って来させ、正しく書けていたら○をつける。 ・早くできた子どもに黒板に書かせる。 <p>・教科書の中に書かれている根拠と合わせて意見を発表させることで、正しい読み取りができるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ごんが、くりを固めておいた理由を考えさせることで、ごんの気持ちの変化について考えられるようにする。 <ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習を振り返らせ、最終的な自分の考えをまとめさせる。 ・単元後半のまとめの作文を書くときの材料にさせる。
---	---	---

ウ 本時の授業の流れを提示する

学習計画表を示し、本時の流れを説明した。また1時間の学習パターンを次のようにした。

- ①本時の課題を確認する。
- ②学習範囲の音読をする。
- ③ごんはどんなきつねかを考えて書く。

- ④書けた子どもに黒板に書かせる。
- ⑤書かれた内容を検討する。
- ⑥学習範囲のごんについての最終的な考えをまとめる。

エ 課題を解決するための手だてを示す

- ①「～きつね」「～ぎつね」と文末を指定し、短く箇条書きで書かせる。
- ②なかなか書くことができない子どもには、書けた子どもの板書を参考にさせることで自分の意見を書けるようにする。
- ③つぐないの様子について読み取ることで、ごんの心情を考えることができるようにする。

5) 授業の実際

ア 単元の見通しを明確にして伝える

第1時で単元全体の学習計画表を示したことで、子どもが学習の見通しを持って授業を進めることができた。子どもから事後にとったアンケートにも「学習計画表が教室に貼ってあると、次に何をするのか分かっていい」「前にやったことも思い出せる」という意見があった。

イ 本時1時間の課題を具体的にする

子どもはこの時間に何をするのがはっきりすることで、目的意識が明確になり、積極的に授業に参加しようとする子どもが増えた。

ウ 本時の授業の流れを提示する

同じパターンで授業を行うことで、子どもは見通しを持つことができ、ひとつの作業を終えたと、自主的に次の作業を行うことができた。また教師が細かい指示を出さなくても、取り組めるようになった。

エ 解決するための手だてを示す

- ・「きつね」「～ぎつね」と文末を指定し、箇条書きで書かせることでほとんどの子どもが自分の考えをいくつもノートに書くことができていた。「～きつね」「～ぎつね」と書くことが、その時のごんの心情に迫っていくひとつの良いきっかけになった。
- ・なかなか自分の考えが書けない子どもも、他の子どもが板書したものを参考にして、ノートに書くことができた。
- ・ごんのつぐないの様子を読み取り、毎日くり等を持っていっていることを確認することで、ごんの心情に迫っていくことができた。まとめでは、ごんの気持ちを詳しく書くことができた。

(7) 実践7 特別支援学級 第3学年 国語科「つな引きのお祭り」

1) 子どもの実態

本学級は情緒障害児童を対象とする学級で、この授業実践を行った10月中旬から12月初旬の期間は5年1名、3年5名、2年2名の計8名を教師2名で学級経営をしていた(12月で3年1名が転校)。

抽出児童は、3学男子Aである。ADHD傾向の障害がみられる児童である(医師による診断名はついていない)。基本的な生活習慣について、身の処方を一人でできる能力はあるが、日常生活の中では、整理整頓が苦手な忘れ物も多く、時間に遅れることが目立つ。学習面では、読み書きは不得手で、字を書くことに時間がかかる。しかし、教師の支援があれば視写することはできる。ひらがなの一部の書きとかけ算の九九の一部でつまづきがあった。図画工作や理科への関心が高く、虫や動物への興味につきない。絵画も図鑑等を参考にして丁寧に描くことができる。

コミュニケーション面は、自分の興味のある事柄を教師に熱心に話してくる。しかし、自分の意見・感想等を文章で書く学習は嫌がる。全体的に学習意欲が低く、劣等感が強い。教師の度重なる注意で行動を修正することが多い。

2) 本単元でめざす子ども像

後期から書く力を付けることを主な課題とし、ノート指導を重点的に行った。字を書くことに強い抵抗感を持っているので、書く指導に重点を置き、ノート指導へと発展させることを通して、字を書くことに対する抵抗感を少しでも和らげるとともに、学習理解をより深めることを意図した。本児なりに、主体的に課題解決に向けた取り組みができるように願っている。

3) 具体的な支援の手だて

課題プリントを使った学習を行う際は、授業の初めに、この1時間にどれだけの学習をするかを明確にしてから取り組んだ。課題を早く終わることができれば、読書時間や絵描きの時間としてよいとした。時間内に課題ができなければ、休み時間になっても課題を終えるまで取り組ませるようにした。ADHD傾向の児童にとっては、健常児以上に明確なめあてを示す必要がある。気を付けなければならないことは、事前に与える課題の分量や難易度をしっかりと吟味して、対象児童が成就感を得られるようにすることである。また、課題が早くできたからといって、途中で増やしたり課題を変えたりすることは、子どもの混乱を招き学習意欲を低下させるので厳に慎んだ。

教科書の単元の学習では、授業の終わりに黒板のまとめをノートに書き写して提出する等の授業のパターンを徹底した。配慮として、「(活動時間が)あと〇分」「(授業が)あと〇分でおしまい」「この課題を終えたら、(授業が)おしまい」等の声掛けをよく行った。

また、残り時間が視覚的にとらえやすくするために、タイマーを教室の前面に置いた。教室前面にあるアナログの掛け時計近くには、大きなデジタル時計を置き、時刻も理解しやすいようにした。

4) 児童は意欲的に課題に取り組むための手だて

- ①漢字を部分ごとに捉えるために部首の学習を行う。同じ部首の漢字探しや部首の意味をゲーム等を取り入れて学ぶ。
- ②部首ごとに漢字の書字練習を行う。漢字の共通部分や異なる部分ごとに認識できるようにする。
- ③プリント類は拡大して課題を読みやすくするとともに、マスが大きくして書きこみをしやすくする。
- ④プリント一枚一枚、学習の一つ一つに意味があることを説明することで、学習意欲を引き出す。
- ⑤ノートを書くときに、書く箇所を括弧や四角で囲んだり、文頭に、数字や丸をつけたりして、記入しやすくする。

5) 授業の実際

ア 指導の経過

- 後期より、国語の授業で書く力を付けることを目標として力を入れることにした。単元「漢字の組み立てと意味を考えよう」では、部首の学習をした後、部首に興味・関心をもたせた。
- 既習漢字を部首ごとにまとめた課題プリントに取り組みさせた。漢字を部分ごとに捉えられるような認識をすれば理解しやすく学習できると考えた。
- 課題プリントを拡大して提示した。読む文字や書き込むスペースを大きくすることで、読み書きしやすくなると思った。また、課題が容易に見えることを意図した。漢字学習では、漢字の認識が正しくできる手助けになると考えた。
- 副教本の「ニホンザルのなかまたち」や国語科教科書「ゆうすげ村の小さな旅館」、「木かげにごろり」「もうどう犬の訓練」「つな引きのおまつり」の単元学習でのノート指導では、教師が一行置きに本文を書き児童はそれを見ながら写すなどの基本的な支援をしたり、括弧や四角の中を記入するように指示を出したり、番号や丸を文の書き始めに記入したりするなどの支援を行った。授業の導入で、前時までに学習した内容をノートで確認した。(図 23)。



図 23 A児のノート

6) 成果と課題

徐々にではあるがA児は書くことに対する抵抗感が和らいできている。年度当初の4月から7月にかけては、教師に注意された時や取り組みたくない課題を与えた時に感情を取り乱して床に寝転がるのがよく見られ、情緒も不安定であった。書くことを中心とした一連の取組を経て、A児は年度末の2月の時点では、感情を取り乱すことは少なくなり落ち着いて過ごすことができるようになっている。

7) 教材出典

下村昇 下村式となえて書く漢字ドリル 偕成社 2006

野口芳宏 楽しく力がつく作文ワーク 明治図書 1994

野口芳宏 書く力をつける一文マスターカード 明治図書 2007

深谷圭助 勉強ひみつ道具プリ具③漢字部首カード+漢字プリント 小学館 2009

犬山市国語科副教本 みんなの国語三・四年 ひびけことば 2006

東京書籍 教科書「ゆうすげ村の小さな旅館」「木かげにごろり」「もうどう犬の訓練」「つな引きのおまつり」

5 考 察

本グループでは、2 で示したように「授業のあらゆる場面において、学習の見通しをもてるしかけを取り入れれば、子どもが主体的に課題解決をめざすことができるであろう」という仮説のもと、3 に示した四つの手だてを用いて研究実践を行った。以下に、本グループの仮説がどの程度実証されたのか、四つの手だてと各実践をクロスさせながら考察を加えていきたい。

教師主導の授業とは、子どもの主体的な学びを引き出すしかけに欠け、児童から「先生、次の時間は何の学習をするのですか」といった質問が出るケースさえ見られる。子どもがその単元の見通しをもたず、学ぶ価値を見いだせない状態と言えるであろう。

手だて①「単元の見通しを明確にして伝える」では、児童の主体的な課題解決を促すため、まず実践者が特に配慮した点である。実践1では、単元を通した振り返りカードを用意して単元の学習を進めている。詳細は割愛するが、「次の部分の書き込みで何を書くか考えてきたよ」と報告する子どもの姿も見られ、主体的な学習を促す効果が得られている。また実践3では、単元の見通しを子どもと確認した後、教室に掲示した。授業が始まる前に「今日は〇〇をするんだよね」といった会話が子どもから聞かれたように、子どもが単元を通して見通しを持ち、低学年なりに学ぶ楽しさを身に付けながら学習に取り組む姿が見られている。実践4でも同様に単元の見通しを常時掲示する手法を用いており、15時間という長い単元を見通して学習が進められた。特に、本時の学習活動が全体の中でどのような役割を示すかを明確にして、事後の振り返りにも見られるよう、単元を通して学習成果を積み上げていく成就感を子どもと共有することができている。

手だて②「本時1時間の課題を具体的にする」についても、子どもの主体的な学びと学ぶ価値を知るといふ点で有効であったと言える。課題と1時間後の自らの姿を照らし合わせて成就感と次時への意欲を持つことは学ぶ意欲そのものにもつながるからである。本研究実践において、例えば実践2では、自分のじゃんけんの仕組みを友達に紹介して、一緒に遊ぼうという低学年の子どもにとっても理解しやすい課題が示されている。自ら考えたじゃんけんの仕組みを1時間の中で「友達に紹介し」「一緒に楽しむ」という、2つの学習活動が示されている複雑な展開ではあるが、授業での子どもの姿からは、意欲的に活動する姿がみられた。

実践7では、個に合わせた支援が行われた。1時間で取り組める適切な課題プリントの提示を行うことで成就感を得られる工夫がされた。また、残り時間が視覚的に分かりやすいタイムタイマーを教室の前面に置き、教室前面にあるアナログの掛け時計近くには大きなデジタル時計を置いて、時刻も理解しやすいようにするというハード面での配慮も効果的であった。

手だて③「本時の授業の流れを提示する」においては、まさに45分という限られた時間の中で子どもが見通しを持って自主的に活動できるための手法である。実践5では、1時

間の流れを確認した後、ペア交流やグループ交流といった学習形態を示している。教師主導型授業では、教師の都合であるかのようにペアやグループによる活動が指示され、子どもはなぜそのタイミングでその学習形態が必要であり、見通しがどうなのかを知ることができない。実践5のように全体交流があるから練り上げていく必要があると示されていれば、子どもは学習形態の意味を理解しながら学習を進めることができる。「この後、グループ発表があるから、新しい動きを探そうよ」と、互いに声を掛け合いながら練習する子どもの姿は手だての有効性を証明するものに他ならない。

実践1、2、3、4、6、7では、学習計画表を示しながら1時間の学習をパターン化して実践を進めている。同じパターンで学びを展開することで、子どもが見通しをもって活動することができた。1時間の見通しを持つことで、ひとつの学習を終えると、教師の指示がなくても自主的に次の学習を行うことができるようになったという実践報告は仮説に迫るものであろう。

最後に手だて④「課題を解決するための手だてを示す」について述べたい。実践2では、じゃんけんプラカードを用いることで説明する手順を示すための支援が行われている。手だて2でも述べたが、この授業は2つの活動が示されていたが、このように課題解決のための手だてを示したことで、学習を楽しみながら最後まで意欲的に取り組む姿が見られた。実践3でも同様に、ペンギンのペープサートを用いた手だてでは有効に働き、グループで協力して動作化を行う姿とともに、教材に対する深い読み取りができたと述べている。実践4では、一人読み、グループ、全体という課題解決に向けての学習形態の在り方を子どもに示している。課題解決のための手だてというと教具やワークシートを想定しがちであるが、協同的に学び合い高め合うことも課題解決の手だての一つであることも忘れてはならない。実践5では、具体物の使用に加えて、擬声語を多く示すことで子どもの自由な発想を引き出すための支援が行われている。動きに合わせた声を出すという手だてを示したことで、教材観に示された、自分の内面を外に表すという課題をクリアしたことに大きな価値が認められる。

以上、四つの手だてと各実践をクロスさせながら考察を加えた。結論として、各研究的実践の結果から、四つの手だては有効であったと言える。ただし、本研究実践においては手だてが複合的に用いられていた。それぞれの手だてが単独で有効であったかはデータやアンケート調査に基づいて精査が必要であるということも最後に述べておきたい。

児童の考える力・書く力を育てる授業づくり

教科指導を通して

西岡 眞樹（犬山市立城東小学校）
森田千絵美（犬山市立犬山南小学校）
加藤 順子（犬山市立犬山北小学校）
大澤 綾子（犬山市立犬山西小学校）
西 沙織（犬山市立城東小学校）
大藪 正恭（犬山市立犬山南小学校）
山田 早織（犬山市立池野小学校）

1 主題設定の理由

近年、犬山市だけではなく様々な地域で学び合いが取り上げられるようになってきている。児童・生徒がお互いの考えをぶつけ合うことで、それぞれの考えをあるときは高め、あるときは広げ、そしてあるときは確かなものにしていく。こうした活動が本質的な学びにつながっていくからである。翻って、受け持つ児童の姿からは、学び合い以前の力を育てる必要性を強く感じる。たとえば話を聞く姿勢はできているが、そこから自分の考えをもち、挙手による発言ができない姿や、話は聞いているが、視点を定かにしながら質問できない姿、自信をもって友達と交流できない姿などがそれである。

このような児童の姿とは別に、本研究グループでは学びに必要な力を四つと考えた。一つ目は考える力であり、二つ目は書く力、三つ目は話す力、四つ目は聞く力である。考える力とは何をどのようにということの頭の中で構築していく力であり、すべての学習活動の始まりである。書く力とは頭の中で構築された考えを文字として書き表していく力であり、言葉として再構築していく力である。話す力と聞く力は、自らの考えを他者に発信していく力とこれを受け止める力であり、どちらも学び合いにとって不可欠な力となるが、他者との関わりの中で生きてくる力と言える。

こうしたことから、本研究では学び合いの礎となる考える力・書く力の育成を試みた。本グループは小学校低学年を受け持つメンバーで構成されており、豊かな学び合いが成立するためには、まずは児童が自らの考えをもつことが大切であり、その上で、他との交流を進め、その考えを深めていくことが不可欠と考えたからである。

2 研究仮説

この研究主題から、学習の根本ともいべき考える力を育てるために以下のように仮説

を設定した。

仮説 学年の発達段階に応じた具体的な目標を設定すれば、自ら考えをもち、表現できるようになるだろう。

各学年の目標

1年生 詳しく表現することができる。

2年生 順序立てたり、理由をつけたりして、表現することができる。

3年生 観点を区別したり、根拠を明確にしたりして、表現することができる。

3 研究の手立て

- ①何について書き進めればよいのか明確にし、より詳しい文を書くことができるようにするために、書く観点を示す。
- ②読み手に伝わりやすい文章を書くことができるようにするために、書く順序を示す。
- ③自分の思いや考えを詳しく表現することができるようになるために、言葉を意識し、語彙を増やす活動に取り組む。

4 実践例

(1) 1年 国語科 わたしのはっけん

1) 単元について

本単元では、書く力や話す・聞く力を高めるために、児童の身近にいる生き物を対象にし、発見したことを文章に表す。生き物の様子を詳しく書くためには、対象をよく見なければならぬ。自分が興味をもった生き物をよく見ることで、文章に書く材料も多く集めることができ、学習意欲も高まってくる。この単元を通して、自分の発見したことや驚いたこと、思ったことを文章に表したり、伝えたりすることの楽しさを味わわせたいという願いを込めて授業に取り組んだ。

2) 単元の展開 (12時間完了)

次	主 な 学 習 活 動
一	①②教科書を読んで学習の見通しを立て、身近な生き物について話し合い、自分が興味のある生き物を書く対象として選ぶ
	③「はっけんカード」に書く内容や書き方を学習する (第3時)
	④二つのモデル文を読み比べ、よりよい表現の仕方を知る (第4時)

二	⑤ 「はっけんカード」を書く ⑥⑦ 「はっけんカード」をもとに文章を書く ⑧ 文章の組み立ての順序を知り、自分が書いた文を書き換える ⑨ 推敲の方法を知り、自分が書いた文を読み返して、修正する ⑩ 清書をし、その中から友達に伝えることを考える
三	⑪⑫ 書いた文章を読み合って、友達と観察した生き物について話し合う

3) 手立て

- ① 様子を詳しく伝えるために、体全体を使って観察することや、生き物の観察の観点（色や模様、形や大きさ、動きや周りの様子、声や音、においや手触りなど）を示す。
- ② どのような表現が詳しく伝えることができるかを知るために、工夫された表現と、そうでない表現を比較する。
- ③ 読み手にとって分かりやすい文章を書くために、二つのモデル文を比較し、「はじめ・なか・おわり」を意識した文章構成ができるようにする。

4) 指導経過

ア 第3時

目標 どこに注目して観察するとよいかを知り、はっけんカードに書く内容や書き方を理解する。

学習過程

主な学習活動	形態	指導・支援
1 前時までの学習を振り返り、本時の課題を知る。		
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: fit-content;"> いきもののがよくつたわるような はっけんカードをかくために くわしくつたえる ひみつを みつけよう </div>		
2 はっけんカードには、日、ところ、生き物の様子を書くことを知る。	一斉	
3 様子の欄には、どのようなことを書くとよいか話し合い、短冊に書く。	グループ	・色や模様、形や大きさ、動きや周りの様子、声や音、においや手触りに着目できるようにする。
4 くわしく伝えるためには、身体のいろいろな部分を使って調べるとよいことを知らせ、短冊を分類分けする。 目：どんな形、どんな色、どれくらいの大きさ 耳：どんな音、どんな声	グループ	・体のどの部分（目、耳、鼻、手、足、心）を使って観察できるものかに着目して分類するよう声をかける

手：さわったかんじ 鼻：どんなにおい 体：どんなことをしたの、してみたかんじ 心：どんな気持ち、考えたこと、思ったこと 5 振り返り	一斉	・それぞれの身体の部分の絵を使い、視覚的に捉えられるようにする。 ・本時の学習を振り返り、次時につなげられるようにする。
--	----	---

イ 第4時

目標 工夫された表現と、そうでない表現を比較することを通して、どうすると詳しく表現できるか理解することができる。

学習過程

主な学習活動	形態	指導・支援												
1 前時の学習の振り返りを行う。														
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">いきもののことがよくつたわるような はっけんカードを かこう</div>														
2 うさぎの写真と、それに関する2種類の発見カードを提示し、どちらの書き方がよく分かるか話し合う。	一斉	・二つのカードを比べることで、表現の工夫に気付きやすくする。 物とつなげたりしながら書くように声をかける。												
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th></th> <th>A</th> <th>B</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>形</td> <td>たまごのような形で、細長い耳が二本ある</td> <td>まるい</td> </tr> <tr> <td>大きさ</td> <td>ドッジボールくらい</td> <td>少し小さい</td> </tr> <tr> <td>色</td> <td>頭の方は雪みたいに白くて、おしりの方は灰色</td> <td>白と灰色</td> </tr> </tbody> </table>		A	B	形	たまごのような形で、細長い耳が二本ある	まるい	大きさ	ドッジボールくらい	少し小さい	色	頭の方は雪みたいに白くて、おしりの方は灰色	白と灰色		
	A	B												
形	たまごのような形で、細長い耳が二本ある	まるい												
大きさ	ドッジボールくらい	少し小さい												
色	頭の方は雪みたいに白くて、おしりの方は灰色	白と灰色												
3 はっけんカードを書く。	個人	・「～ような」「～くらいの」「～よりも」という表現を使って書くようにする。												
4 ペアで書いたことを読み合い、聞き役が感想を言う。	ペア	・表現の工夫に気を付けながら読んだり聞いたりするよう声をかける。												
5 自分の作品を読み直したり、付け加えたりする。	個人	・自分の作品と比べ、よりよい表現を共有できるようにする。												

5) 成果と課題

ア 成果

観察の観点を示したことで、多くの児童が目や耳、鼻、そして手などを使って、より細部まで観察することができるようになった(図24)。ワークシートにも目や耳のマークを加えることで、観察の観点を意識しながら書くことができた。「○○のような形」「○○くらいの大きさ」「○○みたい」などと書ける児童が増え、形や大きさ、色を表すときに、どう表現すると読み手が分かりやすいか考えて文章を書くことができた(図25)。詳しく伝えるための手立てを教室のよく目につくところに掲示したことで、児童は意識して詳しく話をするようになった。



図24 観察の観点

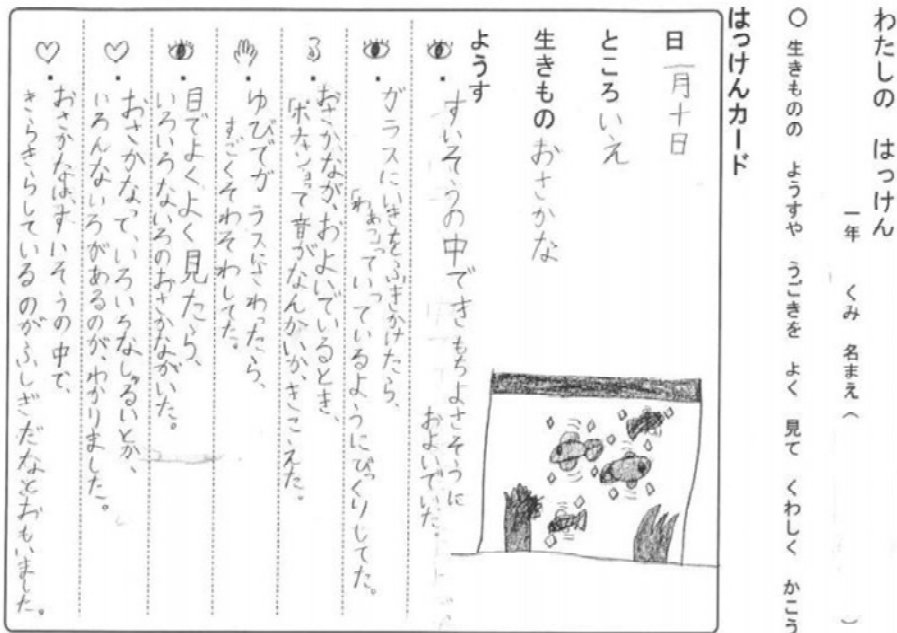


図25 観察の観点を示したワークシート

第4時の授業を行った後、児童の作文が大きく変化した。おばあちゃんの家で飼っている犬について観察した児童は、指導前は「①だれかがきたらほえた ②えさをやったら少しほえた ③動くとき、すごく速かった」と書いていたが、指導後は「①人が来ると、人を驚かせるように、いきなりほえた ②えさをやるときに、いきなりこちらに向かって走ってきてとびついてきた ③えさのクリームパンを見ると、家の中にとびこんでくる ④

えさをあげるときに、舌でなめられた感じがした」と書けるようになった。どのようにどうしたのか、その場面を見ていない人にも伝わるような文を書くことができるようになった。

また、この実践は授業以外にも効果が現れた。これまでは、朝の会のスピーチに関して、どのくらいの大きさかということが話題になっても、「このくらい」と言って手を広げる児童や、どのようにということが話題になっても、言葉に詰まって答えることができない児童が多くいたが、今回の学習を通して、朝のスピーチの際にもより詳しく伝えるためにはどう言ったらよいかを考えながら話すことができるようになってきた。児童の間でも「それってどういうこと?」「もうすこしくわしく言って」などという言葉が自然と出るようになり、多くの児童が意識して「～よりも」「～くらい」などの言葉が使えるようになってきた。

イ 課題

大きさや形などは詳しく伝えることができるようになったきたが、まだ気持ちを詳しく伝えることはできていないため、「嬉しかった」「楽しい」という言葉が飛び交っている。嬉しい気持ち、楽しい気持ちを伝える際にも、いろいろな言い方ができるように今後指導していきたい。

(2) 図画工作 2年生

1) 手立て

- ①詳しい文や理由をつけた文が書けるようになるために、様々な文例に触れる機会を増やす。
- ②どんな観点で作品を見たらよいか分かるようにするために、鑑賞の観点を示す。
- ③もっと書きたいという気持ちをもち、楽しく活動に参加できるようにするために、ワークシートを工夫する。

2) 授業の実際

ア 鑑賞発表会

これまでの鑑賞は自分一人で書いてその後の交流がなかったので、いつものように鑑賞プリントに記入した後、発表を行った。

始めは数人しか手を挙げる児童がいなかったが、「〇〇さんのように△△△と書けるといいね」「そんなところも見つけられたの?」「いいところに気がついたね!」等と声を掛けていったら、次第に挙手する人数が増えていった。発表を聞きながら、「いいな」と思った言い方は真似して書いてもよいことを伝えたら、懸命に鉛筆を走らせている児童が何人か見られた。発表を終えた児童、作品を褒められた児童の表情を見ると、照れ笑いを

していたり満足そうな顔をしたりしていたので、自信につながったのではないかと感じている。

イ ビンゴ式の鑑賞プリント

児童のプリントの記述の中には、「上手だね」「きれいだね」「工夫しているね」といったような抽象的な表現だけで終わっている児童が見受けられた。もっと多くの見方、感じ方があるということを知り、それらの作品を見つける体験をしてほしいと思い、ビンゴ式のプリントを用意した(図26)。このプリントは8種類の観点を書き込み、その観点到合う友達の作品を見つけ出して、そう感じた部分について記入していくものである。

まず始めに、鑑賞する作品に関係なく様々な観点を出す活動を行った。「○○な感じがするね」「○○が(で)いいね」の○○に当たる言葉を見つけてみようと言をかけると、すぐにいくつかの観点がでてきた。

ある程度出した後、グループで話し合い、全体で確認を行うと、こちらが予想していたよりも多くの観点がでてきた。その後、鑑賞する作品に該当する観点を8つ選び、それをプリントの好きなマスに書かせ、鑑賞を行った。児童はビンゴを目指していつもより真剣になって鑑賞を行い、中には「先生、一列ビンゴしたよ」と嬉しそうに報告に来てくれる児童もいた。「たくさんビンゴしたい」という気持ちから、普段よりも積極的に活動に参加することができたようである。

ウ 友達へ贈る鑑賞プリント

これまでの鑑賞プリントでは、鑑賞した後に全体で発表会などをしなければ、自分の作品が友達にどのように思われているのかが分からないものであった。また、発表を行っても、1時間の授業の中だけでは全員の作品について発表することができなかった。そこで、互いにどのようなことを書いているのかが分かるように、書いたものを友達のところへ置いていけるような小さなサイズの鑑賞プリントを用意した。但しこの実践では、特定の児童にプリントが偏ってしまい、自分のもとへプリントが一枚も来てなかったということが起こる可能性がある。まずはペアの作品について書くようにしたり、席を離れてプリントを記入するときには教師がプリントの数を把握し、児童に声をかけて数を調整したりするなどの配慮をした。

初めは戸惑った様子であったが、友達に手紙を書くような感覚で行うので、児童にとっ

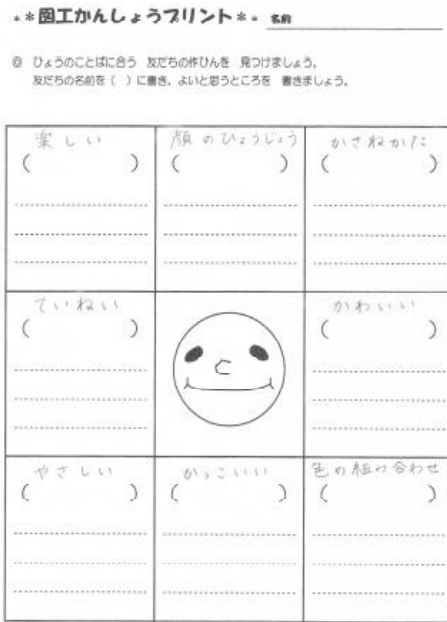



図26 ビンゴ式の鑑賞プリント

て取り組みやすく、たくさん書きたいという気持ちをもったようである。一人三枚ずつ渡しておいたが、何度も新しいプリントを取りに来るような児童も見られた。鑑賞の時間が終わると、「〇〇さんからだ！」と自分のもとに集まった鑑賞プリントを嬉しそうに見ている姿が印象的だった。

2年1組 ・ 図画工作科学び合いプラン

日時・場所・授業者	1月29日(金) 4限	2年1組	加藤 順子
題材	絵のよさを見つけよう 5/5		
本時のめあて	友だちの作ひんのよいところを見つけ合おう		
授業の流れ	形態	学習活動	
	全	① 本時までに作った作品について振り返る。	
	全	② めあてを確認する。	
	個	③ 工夫したところをワークシートに記入する。	
	全	④ 席を離れて他のグループの友達の作品のよいところをプリントに記入する。	
	グ	⑤ 感想を伝え合う。	
	全	⑥ 本時の振り返りをする。	
○子ども主体のコーディネート	・友達に渡す手紙形式のプリントを使うことで楽しく活動ができるようにする。		
○高め合い深め合いのコーディネート	・グループや全体で感想を伝え合うことで、いろいろな考えに触れることができるようにする。		

3) 成果と課題

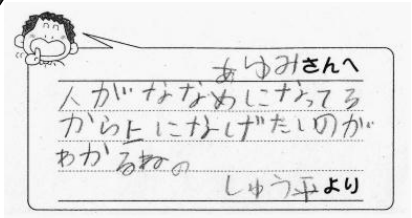
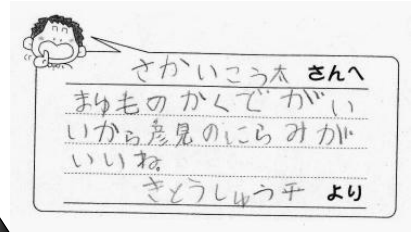
ア 成果

鑑賞プリントの書き方の指導をしたり観点をいくつか示したりすることによって、児童の書く分量、書く友達の人数が増えていった。以前は1文で終わっていた児童が、2文に増えたり、「上手だね」と短い文で終わっていたが「〇〇になっているから△△になっているのが伝わるね」と詳しい文章になったりと、作品を見てどのように感じたのかが読み手に伝わりやすくなった。

児童Aは、以前は「〇〇ができていね」という書き方が多かったが、繰り返し鑑賞を行うことで「〇〇が△△だからいいね」というように、理由をつけて書くことができるようになった(図27)。書く人数においても4人前後であったのが、今では6人前後にまで増えた。また、クラス28名に対しアンケートを実施した。結果は次頁の通りである。

**** 図工かんしょうプリント**** 名前 きとうしゅう平

友だちの名前	いいと思ったところ・アドバイス
おがほり ゆまは	ほしがこまかくぬれてるね
ばいし かい	土をこくぬったほうがいいよ
こうけ さおり	ちまうがうまくぬれてるね
たいぎん	土をこくぬったほうがいいよ



以前の鑑賞プリント 題材「見て見てお話」

手紙式の鑑賞プリント 題材「雪合戦の絵」

図25 児童Aの鑑賞プリント

以前と比べて、鑑賞がたくさん書けるようになりましたか		以前と比べて、鑑賞が好きになりましたか	
たくさん書けるようになった	19人	すきになった	17人
かわらない	9人	かわらない	9人
書けなくなった	0人	きらいになった	2人

イ 課題

鑑賞を重ねるごとに文が詳しくなり、内容や鑑賞を書く友達の人数が増えているが、一部の児童が未だ「上手だよ」「〇〇がいいね」だけで終わってしまっている。また、以前と比べて鑑賞が嫌いになってしまったという児童が2名もいることが、アンケートの結果より分かった。ビンゴ式のカードでは、マスを増やす・減らすなど、鑑賞するものや時間によって変えたり、文を書く箇所については穴埋め式にしたりするなどの工夫をすることも可能だと思われる。手紙式のカードについては、特定の児童にプリントが偏り、自分のもとへ来たプリントが少なかったということが起こってしまうので、さらに対策を考えていく必要がある。児童が“書けた”“楽しい”と感じられるように、工夫を重ねていきたい。

(3) 国語科 2年生 じゅんじょを考えて

1) 単元について

「自分の考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること」は、第1学年及び第2学年の国語科の「書くこと」の指導事項である。本単元は、児童の夏休みの思い出を題材に取り上げ、論理的に書くことの基本である、順序をおさえて書く力を育てることを願い、学習を展開していく。

事柄の順序を考えながら文章を書く力を育てることで、より詳しく相手に伝わる文章を書けるようになることが期待できる。この学習を通して、書くことの意味や楽しさを児童に実感させることで、表現への関心や意欲を高めていきたい。

2) 単元計画(4時間完了)

- ①学習のめあてを確認し、教科書の文章をもとに順序をおさえた書き方について知る。
- ②教科書の文例から、大切なところを見つけ、簡単なメモを書く練習をする。
- ③自分の夏休みの思い出の中から、文章に書きたいことを決め、したことを思い出し、文章の骨組みとなるメモをつくる。
- ④自分の書いたメモをもとにして、したことの順序をおさえながら、文章を書く。

3) 手立て

- ①教科書に載っている、例文からメモを作ることによって、メモの作り方の練習をする。
- ②実際に作文を書く前に、骨組みとなるメモを書くことによって、事柄の順序に沿って、大事なことを落とさないで作文を書けるようにする。

4) 指導の実際

ア 2/4時の実践

目標

順序を考えた作文を書くための、メモの書き方を理解することができる。

学習過程

これまで、メモを書いて作文を書く学習は行っていなかったため、メモとはどのようなものなのかを児童が理解できるよう教科書の例文から大切な文章を探して、メモを作る学習活動を行った。メモを書くために使ったワークシートは、児童が楽しんで書けるよう、魚の形をしたシートにした(図28、29)。「おさかなメモ」は、頭からしっぽに向かって事柄を書く順序になっている。始めはメモを作ることに戸惑う児童も多かったが、一つ例を出して書き方を教えると、要領をつかみ、すらすらと書けるようになっていった。多くの児童が、作文の順序や重要な事柄をつかみ、おさかなメモを完成させることができた。

イ 3/4時の実践

目標

自分の書きたい事柄を順序良く書くためのメモを書くことができる。

学習過程

第3時では、自分の書きたい事柄を順序良く書くためにメモを書いた。メモを書くためのワークシートは、前時と同じく「おさかなメモ」を使用した。メモを書くときの留意点として、あくまでもメモであるため、書きたい事柄を簡単に書くよう指示した。

前時で、メモの書き方を学習したため、メモの書き方に戸惑う児童は少なかった。時間までに全児童が「おさかなメモ」を完成させることができた(図30、31)。

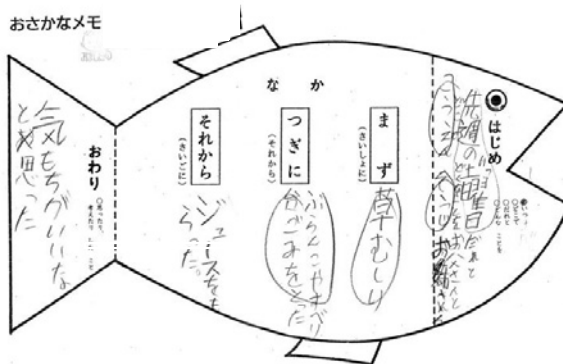


図28 児童Aのおさかなメモの練習

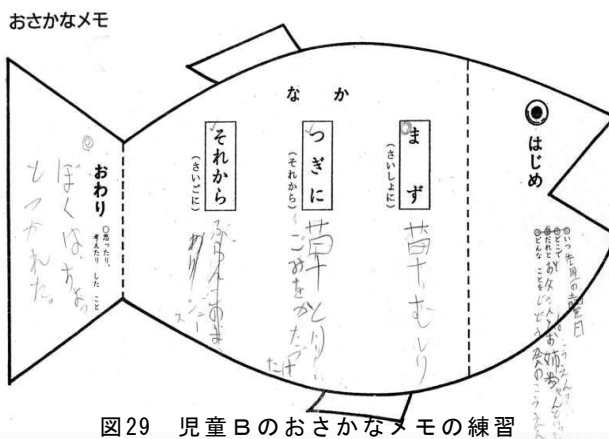


図29 児童Bのおさかなメモの練習

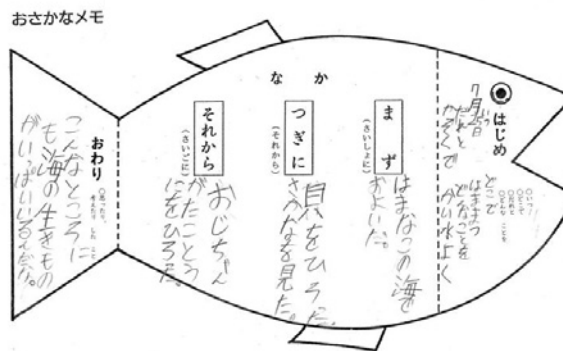


図30 児童Aのおさかなメモ

ウ 4/4時の実践

目標

メモをもとにして、作文を書くことができる。

学習過程

第4時では、前時に書いた「おさかなメモ」をもとにして、それに沿って文章を書く学習を行った。作文を書くときは、お話ししたことや思ったことなどを書き入れ、メモから詳しく書くように指示した。

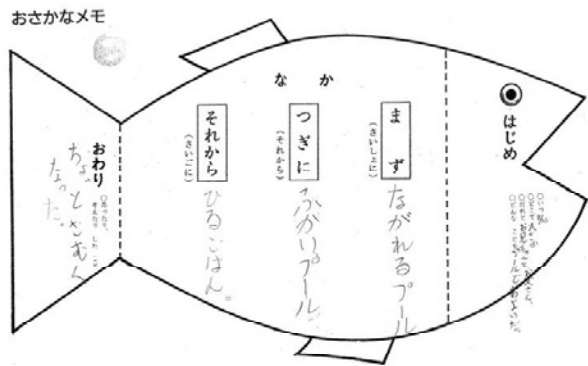


図31 児童Bのおさかなメモ

メモを見ながらの作業だったため、何を書けばよいか分かっており、書くことがなくて困る児童はいなかった。メモをもとにさらに詳しい内容を書いたため、メモを書かずに書いた作文よりも、深い内容の作文を書くことができた。また、事柄をさかのぼって書いたり、重複して書いたりする児童が少なくなった。

エ 指導前に書いた作文

題) ひばりがおかこうえん

2年生のみんなと、春のえんそくで、ひばりがおかこうえんに行きました。さいしょ、すべりだいであそびました。すごくながかったです。おべんとうもおいしかったし、おやつもおいしかったです。すべりだいもいっぱいやりました。みんなといっしょにすべりました。ほかのゆうぐでもたくさんあそびました。デザートもおいしかったし、おやつもおいしかったし、おべんとうもおいしかったです。また行きたいです。

児童Aの作文

題) えんそく

わたしは、えんそくがたのしかったです。どこがたのしかったかというと、ながいすべりだいが一番たのしかったです。ながいすべりだいのはじめにのぼるかいだんが、つらかったけど、たのしかったです。わたしは、ひばりがおかこうえんは、たのしいこうえんなんだとおもいました。また行きたいと思いました。ほかにもたのしいみちがありました。森みたいなどろでたけのこをみつけました。

児童Bの作文

オ 本指導で書いた作文

題) 海でおよいだよ

ぼくは、7月25日にかぞくではまなこの海にあそびに行きました。さいしょに、はまなこのうみでおよぎました。さいしょは水がしょっぱくておよげなかったけれど、がんばってれんしゅうしたらできるようになりました。そのあとビーチボールであそびました。それから、ちょこっと貝をひろったらおひるごはんを食べました。そのあとまたいっぱい貝をひろって、さかなを見ました。すごくきれいでした。さいごに、おじちゃんがぼくたちがおよいでいたら、いきなり、「いいものを見つけたよ。」と言って、タコとウニを見つけてくれました。すごいと思いました。こんなに海にさかなや海の生きものがあるのが分かって、すごくうれしいです。ぼくも、また行ったときには、さかなや海の生きものをとってみたいです。また行きたいです。

指導後の児童Aの作文

題) プール

わたしは、8月10日にプールに行きました。大きかに行ってプールに行きました。お父さんとおばあちゃんとお兄ちゃんに行きました。プールに行ってからプールでおよぎました。

まず、ながれるプールに行きました。ながれるのでおよぎにくかったです。でもたのしかったです。

つぎに、ふかいプールに行きました。足がちゃんとつかなかったです。でも、つま先立ちは、できました。ついでに小さい子があそぶような、あさいプールに行きました。

それから、ひるごはんを食べました。たこやきや、やきおにぎりを食べました。すごくおいしかったです。

帰るときに思ったことは、少しさむかったなあと思いました。だけど、たのしかったです。また行きたいなあと思いました。

指導後の児童Bの作文

5) 成果と課題

ア 成果

作文の骨組みとなるメモを書いてから作文を書くことによって、読み手に伝わりやすい文章を書くことができるようになった。

メモを書くことにより、書きたい内容や順序が整理され、物事を行った順序通りに文章を書いたり、同じ事柄を重複して書かなくなったりした。また、「さいしょに」や「まず」「そのあと」「それから」「さいごに」といった言葉を使って文章を書くことにより、さらに読み手に事柄の順序が伝わりやすい構成の作文を書くことができた。メモを書かずに書いた作文よりも、メモを書いてから書いた作文の方が、ほとんどの児童で文章の量が増した。

イ 課題

1回の学習では定着しないため、継続的にメモを書き、順序を考えて作文を書くが必要である。

今回の学習では、「まず」や「それから」などの順序を表す言葉を使って作文を書くことができた。しかし、その後の作文や他の文章を書くときには、ほとんどの児童で順序を表す言葉を使えていない。普段馴染みが少ない言葉であるため、継続的に指導をし、児童にとって馴染みのある言葉にならないと文章で使われにくいと考えられる。今後も継続的に指導をし、他の文章を書くときにも使われるよう工夫したい。

(4) 国語科 3年生 なりきり作文の実施

1) 概要

楽しく文章を書くことで、自分の考えが表現できる喜びを味わわせたいと考え「なりきり作文」を実践した。国語の授業において、冒頭の10分間を使って行った。この作文は、テーマとするものに自分がなりきって、その目線に立って感じていることや思いを想像して書いていくものである。児童にとって身近なテーマを掲げ、想像したまま自由に書かせた。

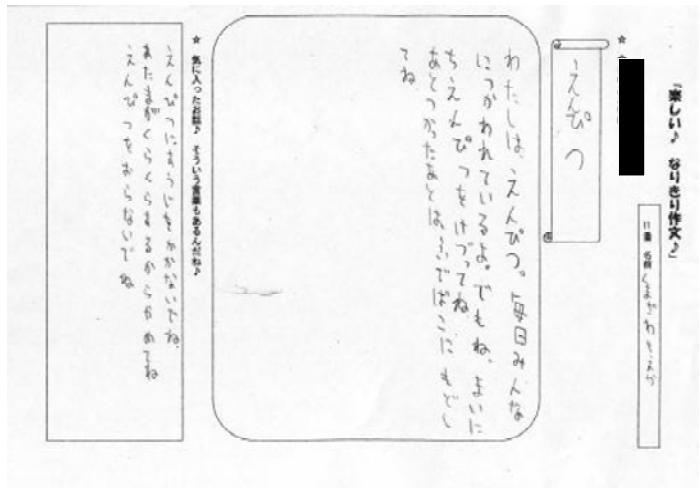


図32 児童A「えんぴつ」

図32は、第1回目の「えんぴつ」をテーマにして書いた作文である。児童が、毎日使う「えんぴつ」になりきって書いた。中でも、文章を書くことが特に苦手である児童Aの作文である。

最初の作文では、話形となるものは何も提示せずに行った。感じたままを書いたのである。図32から分かるように、文章の量としては乏しいが、児童の発想力には驚かされるものがある。この発想力をより豊かに表現させたいと強く実感した。

図33の「サンタさん」では、真似をしたい友達の表現の仕方をを用いて、作文を書いた。毎回、発表する際には、友達の表現の良いと思うところを書かせている。回数を重ねていくことで、他の意見に耳を傾け、さらに取り入れることができるようになってきた。図32と比較すると、明らかに文章の量が増えていることが分かる。

このように想像することをもとに、自分の考えや、感じたことを表現していく話形を提示したことで、より自分の考えを文章で表現できたのではないかと考える。

2) 様子をくわしく表す言葉の掲示

「どんな」「どのように」の様子をくわしく表す言葉を前面の黒板の上部に掲示し、文章を書きときや、自分の考えをまとめるときに、活用しながら取り組めるようにした(図34、35)。

児童から出た言葉も随時掲示していくことで、様子を表す言葉を、積極的に使おうとする姿勢が見られた。

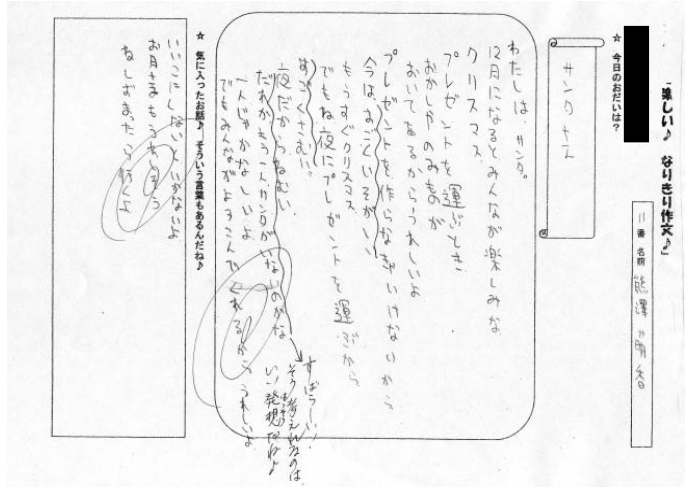


図33 児童A「サンタさん」

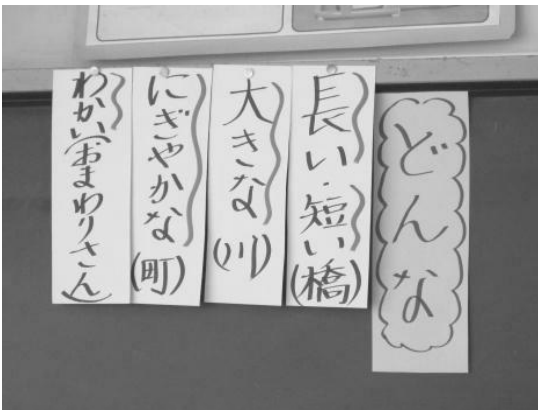


図34 様子を表す言葉

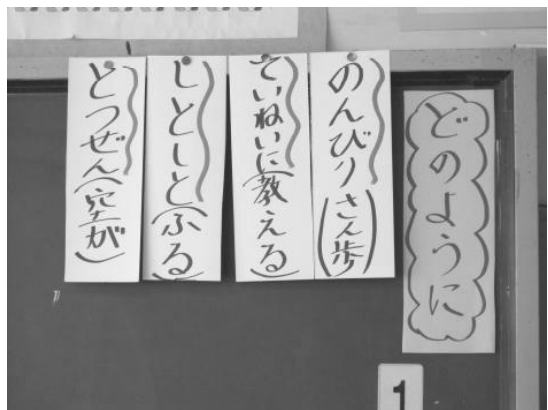


図35 様子を表す言葉

3) 単元 もしもの国に行こう(8時間完了)

ア 単元について

「もしも…だったら」といろいろ想像したことを自由に文章に書くことは、児童にとっても楽しく興味のもてることである。本単元は、それぞれの個性が発揮される活動でもあり、様々な設定や条件を自ら考えて書くことは、「書くこと」への関心をより持たせることができるのではないかと考えた。この単元を通して、自分の考えを自分の言葉で文章に表す喜びを感じ、伝え合う楽しさを味わわせたいと考えている。

イ 単元計画

①教材文を読み、自分が行ってみたい「もしもの国」のお話を作ることを知る。

- ②自分の「もしもの国」を想像し、登場人物を考える。
- ③自分の「もしもの国」を想像し、お話の骨組みを作る。
- ④⑤想像した「もしもの国」を文章に書く。
- ⑥発表会の準備をする。
- ⑦⑧発表会を開いて文集を読み合い、感想を伝え合う。

ウ 手立て

- ①「なりきり作文」の実践を生かして、想像して楽しく書くように支援する。
- ②「始め・中・終わり」の三つに分けて、文章の骨組みを考えさせ、話の見通しをしつかりともたせる。
- ③文章をくわしくする修飾語を常時掲示し、観点を示して書かせることで、自分が書きたいことをより具体的に表現することができるようにする。

エ 授業の実際

「なりきり作文」で、自分の考えを表現すること少しずつ学習してきたせいか、文章を書くことを苦手とする児童も、第1時から意欲的に取り組むことができた。本単元は、それらを生かし、お話を自分で考え、順序立てて書くことができるめあてをもって行った。

目標

「もしもの国」を想像し、お話の骨組みを作る。

学習過程 (3/8時間)

学習形態：ペア グループ 一斉

段階分	学 習 活 動	教 師 の 活 動 と 支 援	評 価 (評 価 方 法)
つかむ 5	1 本時の学習課題をつかむ。 <input checked="" type="checkbox"/>	○本時の学習課題を示す。 ○学び時計を使って学習の流れを示し、能動的な学びを促す。	○学習課題をつかむことができたか。(活動
	お話を「始め・中・終わり」に分けて書こう		
とり く む	2 お話を振り返る。 (1) 自分のお話の登場人物や話の流れを読み返す。 <input checked="" type="checkbox"/> ・お話の最後を決め	○自分で想像した登場人物がどんな役割をして、お話の最後がどうなるのかを考えながら読み返すように指示する。 ○机間指導をし、戸惑っている児童	○お話の最後を決め、見通しをもつことができたか。(プリント)

35	<p>る。</p> <p>(2) ワークシートの「中」に一つ事件を作って書く。 <input type="checkbox"/></p> <p>3 友達に伝える。</p> <p>(1) ミニグループになり、作ったお話の「中・終わり」を伝える。 <input type="checkbox"/></p> <p>(2) よい表現や文章を取り入れる。 <input type="checkbox"/></p> <p>4 「始め・中・終わり」にお話を分けて書く。 <input type="checkbox"/></p>	<p>の支援をする。</p> <p>○友達のよいところは真似をしてもよいことを促す。</p> <p>○より分かりやすい内容になるよう、お互いにアドバイスをし合うことを指示する。</p> <p>○伝え合ったことをもとに、三つに分けて書くように指示する。</p>	<p>○友達に自分の考えを伝えることができたか。</p> <p>(活動の様子)</p>
まとめ 5	<p>6 振り返りカードを使って、本時の学習を振り返る。 <input type="checkbox"/></p>	<p>○「始め・中・終わり」を自分で考え達成度を自己評価できるようにする。</p>	<p>○三つに分けてお話を書くことができたか。</p>

4) 成果と課題

ア 成果

児童が、自分の考えをもち、それを表現していく手立ての一つとして、「何かになりきって考える」ことがよいのではないかと考えて実践した。また、修飾語を含む文の形を普段から定着させていることで、それらを用いて文章を書き進むことができたことは、成果の一つとして考えられる。文章を書くことを苦手とする児童も、たくさんの文章を自分で考えて書くことができるようになった。書く量が増えたことは、その児童の達成感につながったのではないかと考える。

3/8時の授業では、個で考える時間を多く設けた。鉛筆が止まっている児童はほとんど見られなかった。自分が何を書いたらよいのかが明確に分かっているので「書きたい」という意欲が強く感じられた。途中でグループを取り入れ、お互いの創作話の骨組みを確認し合った。お互いにより考えを聞き合うことで、もっとこうしようと、自分の考えを再考することができたのではないかと考える。

イ 課題

今後は、この意欲をどう発展させていくかが課題である。何を相手に伝えたいのかを明

確にし、要点を書くことができるようになったり、真似の中からも、他と比較して、再考し、それを表現したりしていく力も養っていきたい。

また、考える力を低迷させる「間違っているかもしれない」という劣等感を除去するために、聞く側の認め合う指導も合わせて行っていききたいと考える。

(5) 社会科 3年生 単元 くらしをまもる

1) 単元目標

- ①防火や防犯、防災について関心をもち、地域社会の一員としての自覚をもつことができる。
- ②安全を守る仕事に従事する人々の努力や工夫について考えをもつことができる。
- ③地域の消防署や警察署、地域の安全施設を見学・調査したり、資料を活用したりして調べ、まとめることができる。
- ④地域社会における災害や事故から、人々の安全を守るための仕事の仕組みを理解することができる。

2) 単元計画 (19時間完了)

時	テ ー マ	内 容
1	安全なくらしとはどんなくらしか考えよう。	○安全なくらしの定義を考え、それをつくり出したり、維持するために努力したりしている人たちについて考える。
2～6	どうして消防車や救急車は、通報してから5分で現場に到着できるのだろう。	○防火衣着用体験や消防署見学を通して、消防署の部屋の配置や、レスポンスタイムを短縮するための工夫や努力を考える。
7～11	どうして交番におまわりさんがいなくても大丈夫なのだろう。町で働くおまわりさんを見つけよう。	○警察署における様々な仕事の区分や、身近な場面で見つけた警察の仕事、警察官から聞いた話をもとに、事故や事件に対応し、その防止に努める警察官の努力や工夫を考える。
12～14	消防や警察があるのに、どうして地域の取り組みが行われているのだろう。	○消防団や防犯パトロールの取り組みがなぜ行われているのか話し合う。
15～18	地震への備えから地域としての災害への備えを考えよう。	○家庭における防災準備品と地域の備えとしての防災倉庫から、地域を守ろうとする人々の思いや願いについて考える。
19	安全なまち犬山になるためにはどうすればよいか考えよう。	○これまでの単元の結び付を考え、学習内容を振り返り、自分の考えをまとめる。

4) 評価規準

時	評価規準	評価方法
1	○身の回りにおける危険なことについて考えをもち、社会の安全を作り出している人々の仕事に興味をもつことができる。	・ワークシート ・発言 ・振り返り
2～6	○消防に関する学習を通して、見学してきたことと併せて消防隊員や救急隊員の努力や工夫について自分の考えをもつことができる。	・ワークシート ・発言 ・振り返り
7～11	○警察に関する学習を通して、聞き取り調査したことと併せて警察官の安全を守るための努力や工夫について自分の考えをもつことができる。	・ワークシート ・発言 ・振り返り
12～14	○地域での取り組みについて、その活動と存在意義について自分なりの考えをもつことができる。	・ワークシート ・発言 ・振り返り
15～18	○家庭における取り組みと地域における取り組みを合わせて考えることで、地域の人々の願いや思いについて自分なりの考えをもつことができる。	・ワークシート ・発言 ・振り返り
19	○単元全体を振り返り、安全なくらしを守る様々な取り組みをまとめ、社会の一員としての自覚をもつことができる。	・ワークシート ・振り返り

5) 授業の経過

第1時 安全なくらしとはどんなくらしか考えよう

第1時では、単元全体の導入として、まず「安全」という言葉の意味を考えるとところから授業を始めた。児童から意見を拾い上げると、表1のように集約され、「安全」という言葉は交通安全と強く結び付いていることが分かった。このことと併せ、児童の身近にある『小学国語辞典』（小学館）による「危険の無いこと」という言葉を拠り所として、意見交換を行った。また、こうした安全なくらしを守っている仕事についても表2のように簡単に触れておいた。消防や警察、はたまた自衛隊など様々な意見が出されたが、地域での取り組みである消防団や防犯パトロールは児童からは出されなかった。

表1 「安全」とはどんなことか

回 答	人
事故にあわないこと	12
自分自身をまもること	8
死なないこと	3
横断歩道をわたること	2
交通ルールを守ること	2
無回答	2

(3年3組の意見 総数29人)

そこでこうした「危険なこと」からくらしを守る仕事を学習していくことを伝え、大きく四つの柱で学習を進めていくことを児童に提示した。教室内に単元計画図を掲示し、常に児童の目に触れるようにしておいた。大まかな柱立ては、第1に「火事がおきたら」と

して消防について、第2に「じこやじけんがおきたら」として警察について、第3に「安心してくらせるまちに」として地域に取り組みについて、第4に「さいがいがおきたら」として、各家庭から地域への取り組みの広がりについてである。

表2 「くらしをまもる仕事」

消防	弁護士
警察	ボディガード
募金	市役所
病院	発電所
救急隊員	銀行
自衛隊	保険 など

(3年3組の意見)

第2～6時 火事がおきたら

第2～6時では「消防署で働く人たち」に焦点を当て、学習を進めた。

まず第2時では小単元の導入として前時に児童からあがってきた「危険なこと」の中から「火事」を取り上げ、犬山市で実際に起きている火災件数やその原因を把握することで、火事を身近な問題として捉えることとした。本校は地方主要道に面していることもあり、かなり頻繁に救急車や消防車のサイレンを耳にする。こうしたことと併せて、まずは犬山市の現状を認識することに努めた。

第3時では消防署での様々な取り組みを学習する端緒として防火衣着用体験を行った。できるだけ早く着ることをめあてとし、実際に使われた防火衣を着用してみることで、その大変さを体験し、消防士の日頃の努力がこうした時間短縮という部分に割かれていることを実感できると考えた。着用は防火衣の上着とベルト、ヘルメットの3点であったが、早い児童で1分、遅い児童では5分以上の時間がかかっていた。全ての体験が終わった後で、本物の消防士は1分以内で全ての着替えが完了することを伝えると、児童は一様に驚きの声を上げ、自分たちとの比較から、着用時間、ひいてはレスポンスタイムの短縮にどんな工夫がなされているのかという大きな疑問をもつことができた。

第4・5時は、前時までの学習の疑問や考えを確認する場面として、消防署の見学を行った(写真2)。まず、犬山市の消防活動に関する概論を聞き、質疑応答を行った。続いて、様々な消防自動車を見学し、その用途や特徴などについて説明を受けた。特に救助工作車に積み込まれている数多くの装備品や、その装備品が効率よく、しかもしっかりと収納されている様子は児童の印象に強く残ったようである。



写真2 消防署見学の様子

その後、通信司令室を始めとし、署内の各部屋を見学した。特に通信司令室では、試験的に通報を受け、そのやりとりを見学したのだが、試験通報が終了した直後、本物の事故通報が入り、実際に救急車が出動するという場面に出会った。緊迫したやりとりの一部始終を目の当たりにしたことは児童にとっては非常に衝撃的であったようで、事後の振り返りでは「怖かった」という率直な感想が多く聞かれた。

第6時では、消防署見学を終えて小単元のまとめとして、レスポンスタイムの短縮に課題を絞って学習を総括した。実際に消防署で見つけた工夫や努力を発表し、意見交流を行う中で、風呂場の造りや一見脱ぎ捨ててあるように見える防火衣について下記のように着目する児童が出てきた。こうしたところを切り口に目に見える一つ一つの事実をレスポンスタイムの短縮に結び付けることができた。

しょうぼうしょの人は、ふくが取りやすく自分の体のほうに服がかけてあって、ズボンと長ぐつがくっついていたので、すぐにはけるので、2分で出発できると思った。・・・(中略)・・・しょうぼうしょはろうかがほとんどなかったから、すぐにつけられるんだなと思った。・・・(中略)・・・こんな工夫があるから5分でどうちゃくできるんだなと思った。・・・

小単元の振り返り

第7～11時 じこやじけんがおきたら

第7時では、警官不在の交番の写真から、二つの視点で学習課題が得られた。一つは交番にいないとき、おまわりさんはどこに行き、何をしているのだろうかというもので、もう一つは交番におまわりさんがいなくても大丈夫なのだろうかというものである。まず一点目の課題については、日常生活において目にしたことのある警察官の姿から、警察官の仕事にはどんな仕事があるのかを確かめていくことにした。

また、第8時では、併せて交番の役割や犬山市にある三つの駐在所の役割についても確かめることができた。ただし、都市部の交番とは違い地域密着型の交番であるがために、交番がもっている重要な役割の中のいくつかを考えが及ばなかった。

こうした疑問点を解消するために、第9・10時では、犬山警察署から警察官を招いて、警察の仕事についての概論と質疑応答を行うこととした。まず、警察署内の各部署の役割についての話を聞き、児童にとって最も身近な問題である交通安全に関する話を聞いた。ここでは、後半部分の交通安全に児童の目が向きすぎてしまい、あまり有効な質疑応答を行うことができなかった。最後にパトロールカーの見学を行い、



写真3 パトロールカー見学の様子

実際に警ら勤務中の警察官の話を聞くことができた(写真3)。ここでは警ら中の警察官の実装備やパトロールカーの積載物を実際に見ることができ、拳銃や手錠、事故処理時に使用する標識など、装備品についてのくわしい話を聞きながら、実りある質疑応答を行うことができた。

第11時では、小単元のまとめとして、事前に考えていた実際に見たことがある警察の仕事と、インタビューすることで分かったこれまで知ることがなかった警察の仕事についてのまとめを行った。身近なところでは交番における道案内や、単元全体に関わる部分で災

害時の警察の果たす役割など以降の学習へとつながる面もまとめとして引き出すことができた。

けいさつの仕事は、つかまえるだけでなく、よびかけることも仕事だということが分かりました。

けいさつは、はん人をつかまえるだけでなく、安全を守ることも仕事であることが分かりました。

小単元の振り返り

第12～14時 安心してらせるために

第12時では、校区内にある消防団車庫の写真を提示した（写真4）。近所に住む児童から見たことがあるという意見が出ると、「消防署とよく似ている」という声や「でも小さすぎる」という声が上がった。これまでの学習の中で、消防署について学習したときに「消防団」という言葉を記憶していた児童からその言葉が出ると、ようやく意見がまとまった。そこで消防団で働く人々についてどんな人が働いているのかを予想してみると、再び意見が分かれた。それでも近所の〇〇さんのお父さんが消防団員をしているという意見が出されると、学級の考えは収束することになった。ただし、どうして消防署があるにもかかわらず消防団の取り組みが行われているのかという点については「大きな火事の際に必要」であるとか「お手伝い」といった消極的な理由にしかたどり着くことができなかった。



写真4 消防団の倉庫

第13時では、犬山市内で行われている防犯パトロールを取り上げた。これもやはり安全な暮らしを守る仕事として児童からは上がってこなかった取り組みである。青パトの写真を提示すると、一斉に「見たことがある」という声が上がったが、この車にはどんな人が乗っていて、何をしているのかという点については意見が分かれた。警察官になったばかりの人が練習のために乗ってパトロールをしている車であるとか、地域をパトロールするための特別な警察の車であるなどパトロールという点では一致したが、乗っている人という点に関しては様々な意見が出された。これも地域の取り組みとして、警察官ではない一般の人々が行っていることを知ると、児童は一緒に驚きの声を上げていた。また、なぜこのような取り組みが行われているのかという点については、やはり消防団と同様、警察の人手が足りない、警察のお手伝いなど消極的な理由に終始した。

第14時では、小単元のまとめとして再び消防団や防犯パトロールの取り組みが、なぜ行われているのかを話し合った。ここでは手がかりとして、これ以外に地域で行われている安全な暮らしを守る取り組みについて考えた。消防団と防犯パトロールが出てきているこ

とで、子ども110番の家や校下で一般的にはスクールガードと呼ばれている、子ども見守り隊などが意見として出された。

こうした地域が主体となって積極的に取り組んでいるという事実を見守り隊は確認し、「自分たちの暮らしを守るために取り組み

は行われている」という積極的な思考へと徐々に転換を図ることができた。

消防団も防犯パトロールも仕事かと思っていたけど、ボランティアでみんなのために働いていてすごいと思った、

仕事の人とボランティアの人があるということが分かった。朝、見守りたいの人がついてきてくださっていることが、ありがたい。

小単元の振り返り

第15～18時 さいがいがおきたら

第15時ではまず、人間の意志ではどうにもならない災害を考えることから授業の導入を行った。単元の導入として「危険なこと」の中でも地震や台風、火山噴火など、間違いなく止めることができない災害をあげることができた。この中で犬山市が直接関係しそうな災害という観点から、取り扱う災害を地震と台風や大雨に絞り、学習を進めることとした。また、こうした災害を身近な問題として捉えることができるように、犬山市が作成している2種類の災害予想マップを提示し、これを読み解くための付随資料を用意した。こうした資料をもとに、児童一人一人の家が地震のときにはどんなゆれ方になりそうなのかと、大雨による洪水や土砂災害の危険はあるのかを確認していった。また、同時に地震の場合と、台風・大雨の場合の避難する場所も確認しておき、これ以降の学習につなぐこととした。特に東海地震における予想震度については、校区内に震度7が想定される地区があり、どの児童も切実感をもって次時での学習に取り組むことができた。

第16時では学習課題を「家族にせつめいできるように、選んだ理由をはっきりさせて『用意しておくといよいものリスト』をつくろう」とし、単にリストを作るだけではなく、家庭での取り組みを考える一助として学習を位置付けた。かなり具体的な課題であったことから、どの児童も積極的に用意しておくといよいものを考え、学習班から全体へと意見交流を重ねる中で自分の考えを明確にすることができていた（写真5）。学習の後、各家庭で家族に説明をして言葉を返してもらったのであるが、学習活動を肯定的に捉えてもらえたことに加えて、非常持ち出し袋が用意されている家庭が28軒中5軒という家庭における防災意識の低さを垣間見ることもなった。ここでも、児童の「震度〇ぐらいのゆれになり、これぐらいの被害になるから、□□や△△を用意しておくといよいと思います」という提示は意義のあるものであったと思う。



写真5 話し合い活動の様子

指導過程（第16時）

主な学習活動と予想される児童の反応	形態	指導・支援・【評価】
<p>1 非常持ち出し袋を見て、いつ、何のために使われるのかを発表し、学習課題を確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地しんのときにもってにげるものかな。 ・中身は食べ物と水が入っています。 ・お金や通帳も入っているんじゃない。 ・火事や台風のときにも役に立つと思う。 	<p>一斉 3分</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・非常持ち出し袋を実際に提示し、その使い道と中身を想像できるようにする。 ・何となくでもよいので思ったことを発表してよいことを伝える。
<p>家族にせつめいできるように、えらんだ理由をはっきりさせて「用意しておくときよいものリスト」をつくろう</p>		
<p>2 災害に備えて、用意しておくときよいものを理由と併せて考え、付箋に書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水。人が生きていくのにぜったい必要だから。 ・食べ物。おなかですくから。 ・お金。とにかく買えばいい。 ・ラジオ。何が起きているか知りたいから。 ・懐中電灯。暗いと動けないから。 ・パンツ。着替えがないと絶対に困るから。 ・毛布。ねるときにさむいと困るから。 ・ラップ。何かの役に立つと聞いたことがあります。 	<p>個別 10分</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・理由を考えながら用意しておくものを考えるように伝える。 ・どうしてもうまく理由を考えられない児童には、簡単な書き方でよいので書き出しておくように助言する。 (自己存在感) <p>【根拠を明確にし、考えをもつことができたか。】</p>
<p>3 それぞれに考えたことを学習班で持ち寄り、意見をホワイトボードにまとめて発表する。</p>	<p>グループ 10分</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・個々の考えをもとに、学習班で理由も含めて、その妥当性を検討しながら意見を集約するよう指示する。 ・発表にあたっては、用意しておくときよいものだけを発表し、理由については交流の中で明らかにしていくこ

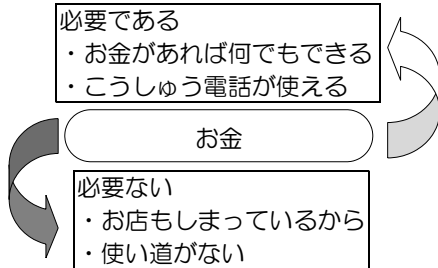
・水 ・ひじょう食
・下着 ・着るもの
・ばんそうこう
・トイレ ・ラップ

・水 ・食べ物
・ラジオ ・お金
・かいちゅう電とう
・ばんそうこう

- ・水 ・食べ物
- ・お金 ・通帳
- ・印かん ・ラジコ
- ・ほうたい ・くすり

- ・水 ・食べ物
- ・ラジコ ・くつ
- ・かんぎり 紙皿
- ・ふえ ・ゲーム

4 発表された考えの中でよく分からないもの、気になるものについて話し合う。



くつがどうしても必要なか分かりません。 → ガラスがわれてあぶないので、家からにげ出す時に必要です。

5 一人一人が、家族に説明できるように、理由をはっきりとさせて「用意しておくといよいものリスト」をつくる。

- ・水 ・ひじょう食
- ・着るもの ・ラジコ
- ・ばんそうこう
- ・トイレ ・ラップ
- ・かいちゅう電とう

- ・水 ・ひじょう食
- ・下着 ・ラジコ
- ・お金 ・くすり
- ・ばんそうこう
- ・トイレ ・ラップ

6 家族に説明する「用意しておくといよいものリスト」を作ることができたかを振り返る。
 ・私の家は非常持ち出し袋は用意してあったけれど、いくつか用意してなかったものがあったので、すぐにそろえたいと思います。
 ・わたしの家では非常持ち出し袋がしっかりと準備できていなかったのですが、このべ

全体
10分

とを伝える。

- ・発表を聞いていて、分からなかったことや、反対意見を中心に、述べたいことを交流していくように伝える。
- ・質問や意見を受けた班は、論点や理由を明確にしながら受け答えができるように助言する。

(学び合い)

【友達の見意見を尊重し、課題について考えを深めることができたか。】

個別
7分

- ・どうして必要なのかをしっかりと説明できるかどうかを考えながら、リストを作成するように指示する。
 - ・自信がもないものには印を付けて、後から補完すればよいことを伝える。
- (自己決定)

【根拠を明確にして、用意するものリストを作成することができたか。】

個別
3分
全体
2分

- ・学習内容の振り返りを行い、学習の価値付け、自己評価を行う。(振り返り)
- 【学習内容を振り返ることができたか。】

ん強をしたので、しっかり準備できるように家で話し合いたいと思います。

第17時では、こうした家庭での取り組みとは別に、地域としての取り組みである広域避難場所である防災倉庫について考えることとした。まず、校区に係る3カ所の広域避難場所にある防災倉庫の写真を提示し、どこにあり、何が入っているのかを予想することを学習の導入とした。学習のまとめとして、その設置理由を考えるとという点においては、消極的な意見が大勢を占めた。「非常持ち出し袋を用意していない人のため」や「持ち出し袋を忘れてきてしまったときのため」など、どれも間違いではないが、前小単元で学んできた「地域のくらしは地域で守る」という視点がなかなか出てこなかった。

第18時では、防災の専門家の談話を学習のきっかけとした。阪神・淡路大震災や中越地震の教訓から最低限これだけは用意しておくべきものとして「靴」を児童に提示し、そこに込められた防災や減災に携わる人々の思いや願いに迫ろうと考えた。第16時で、ある児童が実際に「靴」を用意しておくべきものとしてあげていたことや、その理由がかなりはっきりしていたこともあり、課題提示の直後は学級全体の雰囲気は「本当の理由が分からない」というものであったのだが、交流を進めていく中で、専門家の真意である他力本願ではない「とにかく家からにげ出し、避難場所までたどり着けばなんとかなる」という思いにまでたどり着くことができた。

第19時では、単元全体のまとめとして「安全なまち犬山になるためにはどうすればよいでしょうか」を考えることとした。学習の導入としてこれまでの学習内容の写真資料を中心に振り返り、「自分たちと身近なもの」という視点で関連性を整理した。学習の意図としては様々な活動が自分を中心に同心円状に並ぶことを期待していたのだが、どの児童も直線的に写真を並べるのみで、様々な活動の類似性に着目し、並列に並べることは難しかった。この学習活動の後、まとめとしての振り返りを行った。以下が児童のまとめである。

ぼうさいそこには、わすれた人やしょくりょうがなくなった人のため、いろいろ入っている。思ったこと（は）、自分のことは自分で守ろうと思った。

小単元の振り返り

家庭にとって一番みぢかなのは青パト、消防団、防災倉庫ということが分かった。それは地域の仕事であり、警察署や消防署の人たちは、犬山市の仕事だから。これだけいろんな人たちがぼくたちのためにはたらいてくれているから、ぼくも非常もち出しぶぐるなどできることがあるならやりたいと思いました。消防団や防犯パトロールの人は、ふだんは他の仕事をしているのに、消防署や警察署の人のお手伝いをするのはすごいと思いました。

児童Aの振り返り

これまで、もしじしんがおきたら、もし火事がおきたらとか、なんにもかんがえていなかったけど、くつがひつようだったり、もし火事やじしんがおきたときのためによういしておいたり、きをつけたいと思いました。わたしたちのためにはたらいている人もいれば、犬山市みんなのために仕事としてはたらいている人もいた。もし、火事やじしんがおきたときのために、しょうぼうしの人や、けいさつの人たちがいろいろなくふうをしていて、ちょっとしかねれなかったり、やすめなかったりするけど、みんなのためにじこや火事を少しでもへらすためにがんばっていた。ボランティア（仕事じゃない）として、はたらいている人もいた。

児童Bの振り返り

学級のおよそ3分の1の児童が児童Aのように様々な取り組みに携わる人々を「いろんな人たち」と大きく捉え、こうした人々が「ぼくたちのために働いてくれている」という認識を得ることができ、その上で自分自身を考えて「できることがあるならやりたい」という認識にまでつながることができた。そのほかの児童の多くも、それぞれの事実認識を羅列する形ではあるが、児童Bのように、学習してきた様々な人たちの働きを分類し、「私たちのため、みんなのため」という表現を用い、さらに自分自身にできることという視点をもつことができた。

6) 成果と課題

ア 成果

観点を明示し、書き方の指導を行ったことで、事実の認識を積み重ね、自分の考えをもつことができた。

授業ごとの振り返りや、小単元のまとめを繰り返す中で、課題をできうる限り具体的に示すことにより、その課題についての思考や記述がより具体的に得られるようになった。また単元計画を単元の導入で児童に示すことにより、児童も学習がどのように進んでいき、最終的に何を学び、どこにたどり着けばよいのかを常に意識しながら学習を進めることができた。

イ 課題

小学校3年生にとって、学習内容を互いに結び付けることはとても難しいことであるということが明らかになった。

第19時の単元全体のまとめにおいて、学習の振り返りとして写真資料を並べるという活動を行ったのだが、このとき、どの児童も写真を直線的に並べるのみで、同心円状に並べることはおろか、並列に置くこともできなかった。一つ一つの事象から相互の関係を見つけ、新たな認識を生み出すまでには至らず、振り返りBに見られるように事象の羅列に終始してしまう児童が少なくなかった。思考を構造化していく手立てを工夫したい。

(6) 音楽科 3年生 世界のうためぐり (鑑賞)

1) 題材について

この題材では、日本と世界の国々の歌や遊びに親しむことをねらいとしている。どの国にも楽しい子どもの歌や遊び歌があり、それらの歌は国によって異なる特徴をもっている。それぞれの歌の良さ、楽しさ、美しさの違いなどを感じ取って聴くためには、「曲想」「要素・構成」「表現媒体」の観点に着目して活動をする必要がある。聴く観点を示すことで、焦点を絞って自分の聴き取ったことや感じたことを書き、自分の言葉で楽曲の良さを伝えられるような文章を書くことができるようになることを考えた。この活動を通し

て、遊び歌の楽しさを感じ取り、曲を鑑賞する中で感じたことを表現する楽しさを味わい、文章で書く力を伸ばせるようにしたい。

2) 学習計画 (3時間完了)

- ①「世界の子どもの歌」を聴きながら、一緒に口ずさんだり遊んだりする。それぞれの曲について、曲想と曲を聴いて気付いたこと・感想を書く。…2時間
- ②今までに聴いた「世界の子どもの歌」の中から、好きな曲を一曲選び、友達への紹介文を書く。友達にその曲のよいところを紹介する。…1時間 (本時)

3) 手立て

ア 聴く内容を明確にするために、聴く観点を示す。

児童が曲想や音楽を特徴付けている要素(速さ、リズム、ふし、音色、音の重なり、曲の構成)に着目して聴くことができるように、聴き取る内容を示し、黒板に掲示した(図36)。また、ワークシート1には、曲想と音楽を特徴付けている要素を分けて記入できるようにした(図37)

音楽を聴くとき、「どんなところが好きかな?」

- ♪ はやし(おぞい? はやし?)
- ♪ 強弱
- ♪ (つよい感じかな? よわい感じかな?)
- ♪ リズム(どんなリズムかな?)
- ♪ ふし(どんなメロディーかな?)
- ♪ 音色
- ♪ (どんな音色かな? どんな声かな?)
- ♪ (どんな楽器の音がするかな?)
- ♪ 音が重なりしているところはありますか?
- ♪ 曲の中で
- ♪ 変わっているところはありますか?
- ♪ (たとえば…せいしはゆっくりにだけ、とどちゅうからはやくなる。など)

図36 聴く観点

図36の図36		
名前 _____		
曲名	曲名	曲名
☆国の名前()	☆国の名前()	☆国の名前()
曲の感じ ()感じ なぜそう感じたのかな?	曲の感じ ()感じ なぜそう感じたのかな?	曲の感じ ()感じ なぜそう感じたのかな?
感想(この曲の好きなところ、楽器の音、うた、リズムなど)	感想(この曲の好きなところ、楽器の音、うた、リズムなど)	感想(この曲の好きなところ、楽器の音、うた、リズムなど)

図37 ワークシート 1

イ 読み手に伝わりやすい文章を書けるようにするために、文の展開・組み立てを示す

自分の感じたことが相手に伝わる文章で表せるように、文の組み立てを示したワークシート2を用いた(図38)。

ワークシート1をもとにして、自分の好きな曲を1曲選び、紹介文を書いた。最初にその曲を選んだ理由を述べ、曲の中で聞いてほしいところを曲想や音楽を特徴付けている要素と関連付けて書くように指導した。

ウ 表現を豊かにするために、曲想を表す言葉を出し合い、掲示する

曲想を表す言葉を本題材の曲を扱う前に様々な曲想の曲を聴き、「○な感じ」という形で意見を出し合った。そして、曲想を表現する言葉を葉っぱの形をした紙に書いて、「曲想の木」として掲示した(図39)。また、本題材の曲を聴いた後も、同様に、児童が曲想についての意見を発表した後に新しく出てきた表現を貼り、言葉のバリエーションを増やして自分の言葉で表現できるようにした。

5) 指導の実際(3/3時間目)

ア 準備

ワークシート1(1・2時間目に書いたもの)、ワークシート2、曲想の木。

世界のうためぐり

名前.....

★ 今までに聞いたら音の中で、一番好きな曲を友だちにしようかいしょう!

① 好きな理由は何なんですか?

② この歌を聴いて、どんな感情をもたせましたか?

(この歌の好きなところ、楽器の音、うた、リズムのどくちよう、

「ここに書いてほしい!」、オススメしたいところ...など)

わたしの一番好きな曲は、()です。
理由は、()だからです。
この曲の中で聞いてほしいところは、()にあります。
1つめは、
2つめは、

♪ 今日のあやめい!



1. 曲の感じも、リズムや声、音などにも注意して書くことができた。
2. 相手のことを考えて、わかりやすいように文を書くことができた。



図38 ワークシート2

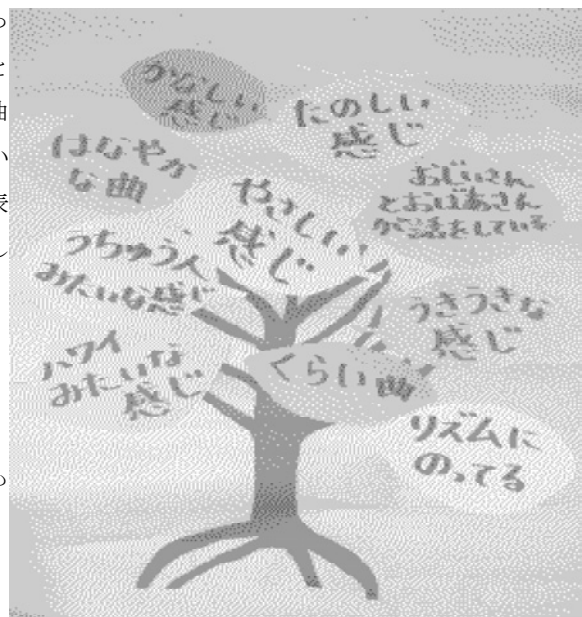


図39 曲想の木

イ 学習過程

段階	児童の学習活動	形態	教師の支援・留意事項
つかむ (3)	1 前時までの学習を振り返り、本時の学習のめあてをつかむ。	一斉	<p>○本時の学習課題を伝え、学習の流れを示す。</p> <p>○ワークシート1を見ながら、「世界の子ども歌」を聴いて感じたことを思い出し、活動への意欲をもてるようにする。</p>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">自分の好きな曲をわかりやすく友だちにしようかいしよう</div>			
とりくむ (37)	<p>2 「世界の子ども歌」の中から好きな曲を選び、その曲の良さを友達に紹介する文を書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界の子ども歌を聴き、好きな曲を選ぶ。 ・選んだ理由と曲の中で聴いてほしいところを、曲想や音楽を特徴付けている要素と関連づけて書く。 <p>3 好きな曲を友達に紹介する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループで順番を決めて、好きな曲のよいところ・聴いて欲しいところを発表する。 ・質疑応答する。 	<p>個別</p> <p>グループ</p>	<p>○曲を流し、前時までのワークシート1を見るよう伝えながら、自分の紹介したい曲を選べるようにする。</p> <p>○ワークシート2を見せて話形を示しながら、どのように書けば相手に伝わる文章が書けるか考えられるようにする。</p> <p>○曲想の木を掲示し、友達のよい表現を見つけて自分の意見に生かせるようにする。</p> <p>○聴く観点を掲示することで、「リズムが速くなったり遅くなったりするところがおもしろい」など、観点に基づいて曲の良さを書くことができるようにする。</p> <p>○紹介文を書くことができない児童には、ワークシート1で書いた曲の感じや感想を参考にして書けばよいことを伝え、個別に支援する。</p> <p>○紙を見て読むだけでなく、相手の顔を見て話すように伝える。</p> <p>○話す相手に体を向けて話を聞くなど、</p>

			聴くときの姿勢を正すように伝える。
まとめ (5)	4 本時の学習を振り返る。 ・ 友達の紹介を聴いて思ったこと、感想を発表する。 ・ 本時のめあての達成度を振り返りカードに記入する。	一斉 個人	○本時の取り組みを振り返り、めあてを達成できたか確認する。

ウ 1/3、2/3時の実践

本題材の第1時・第2時では、計5曲の鑑賞を行った。これまでも鑑賞の授業を行ってきたが、一人が感想を発表すると「わたしも賛成です」「〇〇さんと同じで・・・」など同じような意見ばかりになってしまう傾向があった。そのため、導入の部分で何曲か異なる曲想の曲を聴き、一つの曲に対して「〇〇な感じ」「〇〇な曲」というように曲の感じを言葉で表現して、曲想の木に貼っていった。最初は、1つの曲に対して1、2個程度しか意見が出てこなかったが、繰り返していく内に1つの曲に対して、「元気な感じ」「明るい感じ」「子どもたちが楽しく行進しているような感じ」など比喩も入れたりしながら様々な表現ができるようになった。

聴く観点を示すことは、曲の構成や要素について細かく聞き分ける力につながっていた。今までは、曲の感想を書こうとすると、曲想を表す言葉と「よかった」「おもしろかった」などをつないで書くだけで、考えに深まりが見られなかった。本題材の1曲目は、特に聴く観点を提示せず、児童に曲想と感想を書くよう促したが、以下のような意見が多かった。

<p>児童A 1曲目</p> <p>曲想（やさしい）感じ</p> <p>→理由：きれいだったから</p> <p>感想：曲の感じがやさしかった。</p>	<p>児童B 1曲目</p> <p>曲想（はねてるような）感じ</p> <p>→理由：もっきんのポンポンポンってところ</p> <p>感想：楽しそうな・元気な歌。</p> <p>うさぎをおいかけているような感じ。</p>
--	---

ほとんどの児童は、児童Aのように、音楽を特徴付ける要素に基づいて書くことができなかった。児童Bのように音色などの要素に触れて書くことのできた児童もいたが、ほとんどの児童が曲想について書くだけで、何に焦点を絞って聴けばよいか理解できていなかった。意見を出し合い、聴く観点を示すことで相手に伝わる文章が書けることを伝え、聴く観点を示した紙を掲示して2曲目以降を鑑賞した。以下は、第2時の児童の感想である。

1曲目の感想と比べて、曲想と音楽を特徴付ける要素を結び付けて意見を書くことができた児童が増えていた。また、二つ以上の観点に着目して意見を書けるようになった児童が多く、それに伴って全体の書く量も増えた。

児童A 4曲目

曲想（楽しい）感じ

→理由：リズムが速いところと遅いところがあった。

感想：好きなところは、元気なところとおもしろいところです。

曲の感じがやさしかった。

児童B 4曲目

曲想（いろんなことをお話している・ドラマみたいな）感じ

→理由：とちゅうで音楽がきれて、歌じゃないいろんな声がきこえるから。

エ 3/3時の実践

第1時、第2時の活動を踏まえて、本時では「自分の好きな曲を分かりやすく友達に紹介しよう」ということを課題として授業を行った。ここでの「分かりやすく」とは、好きな理由や聴いてほしいところを、曲想や音楽を特徴付ける要素などの音楽の言葉を使うことであり、そのように紹介するように伝えた。あらかじめ文の形はワークシートに記しておき、紹介文を書くための材料を第1時・第2時の授業の中で作ってあったため、自分の意見・感想を参考にしながら書くことができた。括弧内が児童の書いた文である。

児童A ワークシート2

わたしの一番すきな曲は、（アビニョンの橋の上）です。理由は、（元気に歌っている所とおもしろく歌っている所がある）からです。

この曲の中できいてほしいところは、（二）つあります。一つ目は、（元気に歌ってる所です。歌っている人の声が元気だったからです。）二つ目は、（おもしろく歌っている所です。リズムが速くておもしろく聞こえるからです。）

（楽しい歌なので、ぜひ聞いてみて下さい。）

最初は、「何を書けばいいか分からない」とっていた児童も自分の書いた意見を参考にしながら書けばよいことを伝えると、ワークシートの文に当てはめながら書くことができていた。ほとんどの児童が聴いてほしいところを二つ以上書くことができていたが、前時の段階であまり自分の意見を書くことができなかった児童は、紹介文もうまく文章にすることができず、箇条書き程度しか書くことができなかった。また、児童Bのように多く意見を書くことができていても、前時の感想を当てはめただけで、文章として成り立っていない児童や、その曲を好きな理由と聴いて欲しいところをそのまま同じように書いてい

る児童もいた。紹介文の例を示すなど、相手に伝わりやすい文章にして書くことができるようにする指導の工夫をするとよかった。

児童B ワークシート2

わたしの一番好きな曲は、(アビニョンの橋の上)です。理由は、(音楽がきれて、いろんな声聞こえる。ドラマみたいな感じ。いろんなことをお話ししてるみたい)だからです。

この曲の中できいてほしいところは、(二)つあります。一つ目は、(音楽がきれて、いろんな声聞こえるから。)二つ目は、(音楽がついているときの歌と声が、おもしろくて、ロンドン橋みたいだから。)

(この曲にあわせておどったらおもしろいと思うよ！)

6) 成果と課題

ア 成果

この実践では、聴く観点を示すことで何に着目して書けばよいか分かり、自分の考えをもつと共に、曲の音楽的要素に即して自分の考えを深めることができた。また、曲想や音楽的要素を感じ取って聴く段階(第1時・第2時)と、感じ取った音楽的要素を関連付けて表現する段階(第3時)に分けて活動を行ったことで、見通しをもって学習することができ、進んで学習に参加することができた。

また、曲想の木を用いて、繰り返して意見を出し合う活動を進める中で、友達表現から自分なりの表現や新たな表現の仕方を見つけることができ、言葉のパリエーションを増やすことができた。異なる曲想の曲でも、その曲に合わせた表現を見つけて自分の言葉で表現することができるようになった。

イ 課題

曲想については、語彙を増やして表現の仕方を工夫することができるようになったが、リズムや音色などの表現の仕方が難しいと感じる児童が多かった。実際に学習をしているときには、「雰囲気は分かるけど、どんな言葉で表現したらよいか分からない」という児童や「リズムがランランしている曲」「リズム感がすごくいい」といった意見を書く児童がいた。曖昧な表現で相手に伝わりにくい表現も多かったため、観点に即して表現できるように表現方法を身に付けていく手立てを工夫していきたい。

また、第1時、第2時の段階であまり書くことができなかった児童は、表現する言葉が思いつかなかったことが理由であると考えられる。今回の実践で、表現するための語彙を増やすには継続的な指導が必要ではないかと感じた。そのため、「曲想を表現する言葉」「リズムを表現する言葉」というように、要素ごとに分けて表現できるようにする活動を、一つの題材だけでなく、継続的に行って積み重ねていくようにしたい。

5 全体の考察

本研究グループでは、児童の考える力・書く力を育てる授業づくりを研究主題として、それぞれの学年や教科で実践を行ってきた。グループ全体の成果と課題を以下にまとめた。

(1) 成果

本研究で得られた成果は三つ挙げられる。一つ目は、書く順序を示すことで、読み手に伝わりやすい文章を書くことができるようになったことである。何をどのように書けばよいのかを発達段階に応じて具体的に示すことにより、まず考えるという学習活動が円滑になり、考えたことから何かを書き表すという力を伸ばすことができた。どの実践においてもこうした具体的な提示をその後の学習に生かすことができた。

二つ目は、ワークシートを工夫し、段階を踏んで授業を行うことで、内容や順序を整理して学習課題に取り組むことができたということである。授業づくりに取り組む段階で、授業の流れを吟味し、それに合ったワークシートを作成し用いることで、児童の学習活動を円滑なものにし、考えること・書くことに集中して取り組むことができようになり、考える力・書く力を伸ばすことができた。

三つ目は、自分の思いや考えを詳しく表現できるようになったことである。考えることや書くことを具体化し、順序立てることで、曖昧だった思考や記述がより詳しく具体的なものになっていった。

(2) 課題

本研究での一番の課題は、習得した学習内容の継続的な指導にある。一度身に付いた力を確かなものにしていくために、例えば45分の授業の中で5分間を継続的な取り組みに充てたり、授業時間以外の様々な場面で、考える力・書く力を伸ばすための活動に取り組んだりする必要があるということである。前者については、短い作文や語彙を増やすための活動などがあり、後者については朝の会・帰りの会におけるスピーチや振り返りなどである。一つの単元に限定されることなく、複数の単元にまたがりながら学習に取り組んでいくことが必要であり、あるいは学校生活1年間を見通して計画を立て、実践していく必要がある。こうした継続的な取り組みがなされてこそ、児童が身に付けた力をより確かなものにすることができ、さらに伸ばしていくことができると考えられる。

このように、明らかとなった課題を踏まえ、学び合いの礎となる考える力・書く力の育成と、児童が自らの考えをもつことができるようになるための仕掛け・支援をこれからも研究し、実践していきたい。

自分の考えを深め、身に付けた力を活用していくことのできる児童の育成 伝え合う活動を通して

藤本真由美（犬山市立犬山南小学校）

石居 明浩（犬山市立栗栖小学校）

山下 七海（犬山市立東小学校）

坪内 茂雅（犬山市立犬山南小学校）

杉本 暁美（犬山市立城東小学校）

後藤眞之介（犬山市立城東小学校）

奥村有希代（犬山市立犬山北小学校）

1 主題設定の理由

本グループでは、研究実践を行うにあたり、各校の状況を考慮しながら育成したい児童像について検討を行った。話し合いでは、基礎基本の大切さや思考力や読解力の育成の難しさについての課題が出された。児童の実態として、進んで発言はできても自分の意見の発表のみに留まる姿、友達の意見に耳を傾け、意見を聞いて自分の考えの参考にしようという姿はあまり見られず、また、話し合い活動を通して考えを練り上げようとしないう姿が見られた。これは、自分の考えにこだわり、あまり考えることなく発言をしているからではないかと推測した。そこで、児童が関わり合い、自分の考えを伝え合う活動を取り入れることにより、自分の考えを広げたり深めたりすることができ、身に付けた知識や技能を活用できるようになると考えた。研究主題「自分の考えを深め、身に付けた力を活用していくことのできる児童の育成－伝え合う活動を通して」を設定し、共通の手だてのもとで研究実践を行うこととした。

2 研究の構想

（1）研究の目的

自分の考えを広げたり深めたりするには、児童同士の伝え合う活動が必要不可欠である。そこで本研究では、伝え合う活動を効果的に進めることができる有効な手だての在り方について検証することを目的とする。

（2）研究の仮説

この研究では次のように仮説を設定した。

仮説：児童が関わり合い、自分の考えを伝え合う活動を取り入れることにより、自分

の考えを広げたり深めたりすることができ、身に付けた知識・技能を活用できるようになるであろう。

(3) 研究の手だて

研究の主題である「自分の考えを深め、身につけた力を活用していくことのできる児童の育成」に向けて、次のような手だてを設定した。

①内発的動機づけに基づく学習

内発的動機づけに支えられた学習は、児童にとって学びの切実感と学習の楽しさを伴う。基礎基本の習得に基づく活用という観点ではなく、伝えたい、意見を交流したいという内発的な動機づけによって活用と習得がリンクし、児童が主体となって学習活動が展開できるような単元設定や題材選びを行う。

②自らの成長をふりかえるワークシートの工夫

学習展開が見通せるワークシートを活用し、単元もしくは1時間の授業の中で、学習の導入段階から終末にかけての考えの変容と自己の成長を児童自らが客観的にとらえられるようにする。

3 研究の実際

(1) 実践1 主題を読み取る力を育てる物語文の授業(4年 国語)

1) これまでの児童の姿

本学級には読書好きな児童が多い。朝の読書タイムなどで本に向き合う時間が日常的に設定されていることにより、読書量は多い。しかしながら、その内容に目を向けてみると、物語を読んでいる児童は少ない。クイズや学習マンガといったものが大半を占める。これらは、知識や叙情性といった内面世界を豊かなものにしていくためには充分とは言い難い。

2) 本単元でめざす児童像

児童が知識や叙情性といった内面世界を豊かなものにしていくためには、さらに読書の範囲を広めていく必要がある。そのきっかけとなり得るのは、図書分類の中では、児童がなじみやすく読みやすいという視点から、文学作品が妥当である。優れた物語作品との出会いは、その後の人生に大きな影響を与える可能性をもつ。一生に数冊、自分の心の名作を持つことができたらどんなに幸せだろう。

以上のような考えのもと、目指す児童像を「読書に親しみ、長編の物語作品を心から楽しむ児童」とした。そして、一つの物語を読み終えた後に、新しい作品を次々と読み広げていく主体的な読書態度も合わせて目指したい。

児童が物語作品を心から楽しむようになるためには、物語の主題が分かり、作者が作品を通して訴えようとする主題を、自分の中で受け止める体験をすることが必要である。主題が分かれば、児童は主題の内容を納得した価値として受け止め、その読書体験は心に残るものとなる。そして、新しい本との出会いを求め、さらにその主題も読み取ろうとするのであれば、それは習得した知識を使った探求である。このような主体的な読書活動は、内発的動機付けに支えられた読書場面での活用力ととらえ、その育成に力を入れてきた。

また、国語の教科的な目標として、児童が長編の物語作品を読み進める中で、叙述に即して思いをふくらませる経験によって、文学の世界を味わい、内面世界を豊かにすることをねらいとした。

4) 具体的な支援の手だて

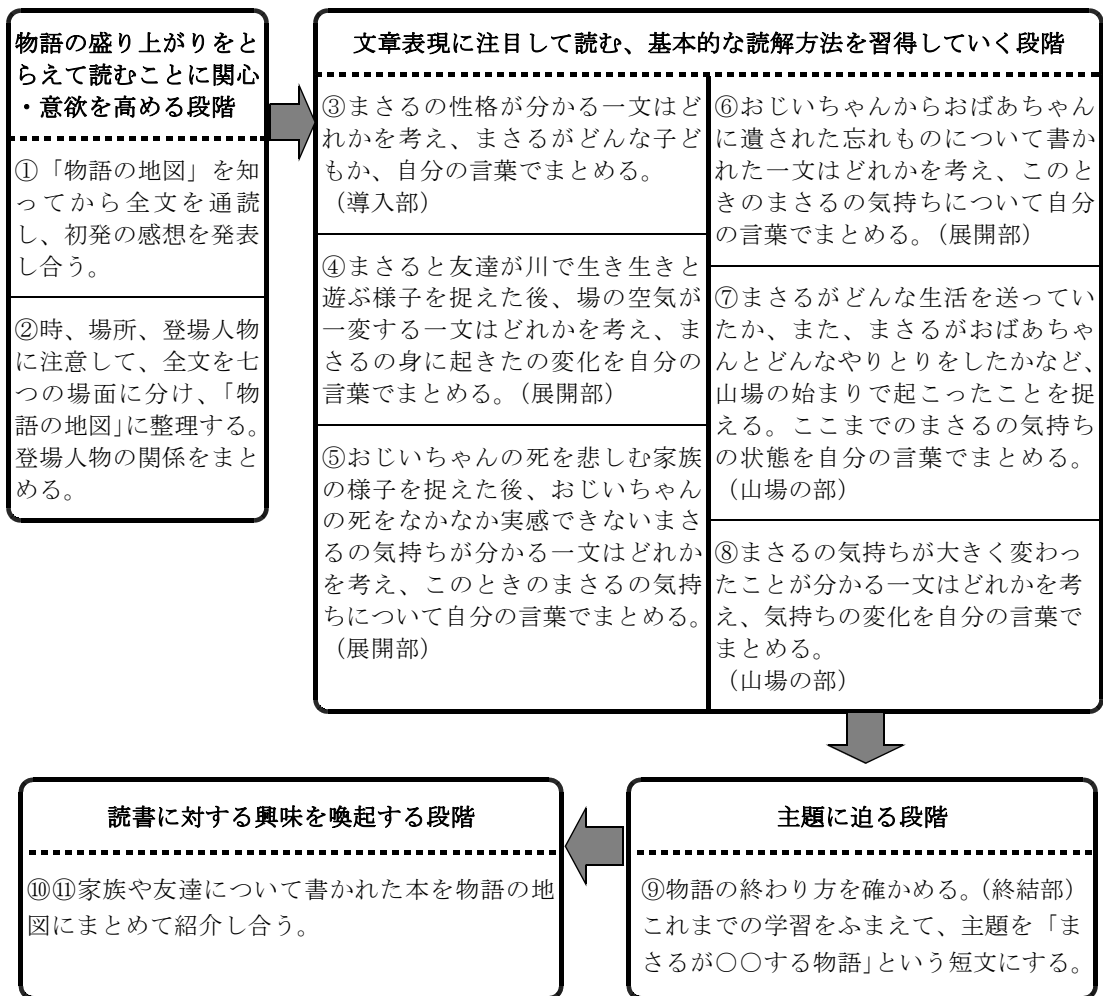


図40 単元指導計画 (11時間完了)

①内発的動機付けに基づく学習 単元指導計画を図式化すると前頁の図40のようになる。本単元は学習を「物語の盛り上がりをとらえて読むことに関心・意欲を高める段階」「文章表現に注目して読む、基本的な読解方法を習得していく段階」「主題に迫る段階」「読書に対する興味を喚起する段階」の四段階で構成した。二つ目三つ目の段階で、主題を探求しつつ基本的な読解方法を物語の地図によって習得する。さらに、単元終末では、自分で選んだ作品を物語の地図に書き表して友達に紹介し、同時に自分が興味を持てる作品を見つける読書活動を展開し、探求と習得をリンクできるようにする。

②自らの成長をふりかえるワークシートの工夫

「物語の地図」の活用 物語を構造的にとらえられるように、物語文を導入部、展開部、山場の部、終結部の四つの部と、冒頭、発端、山場の始まり、クライマックス、結末、終わりの六つの点に分け、主人公の気持ちの変容を読み取る活動を取り入れることにした。そして、これを視覚的に捉えやすくするために、紙面に起こした物を「物語の地図」と呼ぶことにした(図41)。

本単元では、物語の地図を見ることで物語の展開や盛り上がり部分をつかむなど、作品全体の構成を視覚的につかめるようにする。なお、この物語の地図は、教科書教材の「夏のわすれもの」用と、自分が選んだ作品用との計二枚を作成することにした。

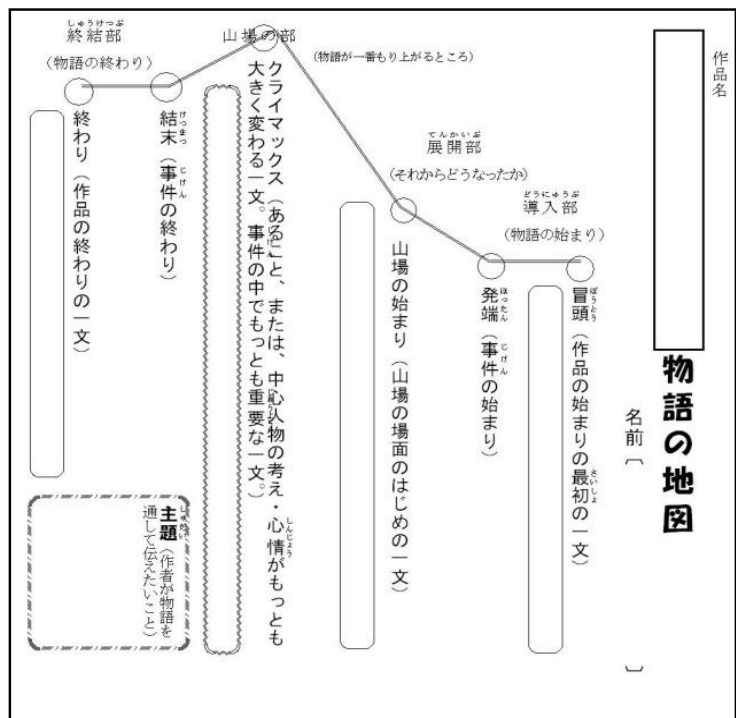


図41 物語の地図

4) 指導案

ア 単元名 夏のわすれもの

イ 単元について

本単元は、家族や友達について書かれた物語を読み、物語の盛り上がりをとらえながら作品を読むという基本的な読解方法を習得し、さらに家族や友達について書かれた他の本を読み広げることで、読書に対する興味を喚起することをねらいとしている。

教材文「夏のわすれもの」は、主人公まさるが夏休みにおじいちゃんの手伝いを後回しにして家を飛び出し、友達と川で生き生きと遊ぶ姿を描いた前半と、突然のおじいちゃんの死を通してまさるがおじいちゃんの言葉を思い出し、ひまわりになると決意する後半との、大きく二つに分かれている。

「夏のわすれもの」とは、夏に亡くなったおじいちゃんが遺したもののことである。おばあちゃんには、右手で左手をさするくせが、まさるには麦わらぼうしが遺された。そして、まさるはひまわり畑を見て、まさるにひまわりようになってほしいと願っていたおじいちゃんのことを思い出す。おじいちゃんの死をなかなか実感することのできなかつたまさるが、おじいちゃんの思いや願いに気付いて成長していくことが描かれた物語である。

ウ 本時の展開 (8/11時間)

目標 まさるの気持ちが大きく変わったことが分かる一文はどれかを考え、気持ちの変化を自分の言葉でまとめることができる。

学習過程

主な学習活動と予想される児童の反応	形態	指導・援助【学び合う姿の評価】
<p>1 前時の学習内容を振り返ることによって、これまでの場面でまさるの気持ちがどんな状態なのかを確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まさるは、これまでまだ泣いていないけど、麦わらぼうしをもらって何か感じ始めているかもしれないよ。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>まさるの気持ちが大きく変わった一文を見つけ、どんな気持ちになったのかみんなで話し合っ、まさるの気持ちの変化を自分の言葉でまとめよう</p> </div>	<p>一斉 5分</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の復習から本時の学習への意欲を喚起できるようにする。
<p>2 課題を意識しながら一人読みをし、まさるの気持ちが大きく変わったことが分かる一文を選び、物語の地図に書き込む。</p> <p>3 どの文章を選んだのかお互いに伝え合う。</p> <p>4 文章から分かるまさるの気持ちの変化について、話し合う</p>	<p>個別 7分</p> <p>一斉 3分</p> <p>全体</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・常に課題を意識することをおさえる。 ・それぞれどの文章を選んだのか黒板にネームプレートをはって、自分の立場を明らかにできるようにする。 (自己決定) 【まさるの気持ちが大きく変わった一文を選ぶことができたか】 ・まさるの気持ちの変化を述べて付け足しがあれば発言するように指示する。 ・仲間の発言と自分の考えを比較して話すような話形を意識できるように促す。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>まさるの気持ちが大きく変わったことが分る一文はこれ！</p> </div>		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>こんなに気持ちになつてると思うよ！</p> </div>

A	麦わらぼうしをかぶろうとしたぼくの目に、とつぜん黄金の光が飛び込んできた。	ひまわり畑がふだんとは違う色に見えるような特別な気持ちになっている。
B	庭にひまわりを植えながら「まさる、ひまわりはなあ小さな太陽だ。太陽と同じ明るさをくれる花だよ…。まさるもひまわりのようになればいいなあ……。」そう言っていた、おじいちゃんのことを思い出した。	なんとなく毎日を過ごしていたまさるが、おじいちゃんの言葉を思い出して、おじいちゃんのことにならななきゃと思っている。
C	ほんとうにいなくなったんだ。	おじいちゃんの死をよく実感している。
D	目のおくが熱くなった。	おじいちゃんにもう会えない悲しさで、泣きそうな気持ちになっている。
E	泣き始めたら止まらなくなって、なみだがぼろぼろ流れ落ちた。	おじいちゃんがなくなってから泣いてなかったまさるが初めて泣いて、涙が止まらなくてどうしようもなくなっている。
F	ふり返ると、ひまわり畑は悲しいほど明るくにぎやかに見えた。	ひまわり畑が悲しい色に見えるのは、まさるも悲しいから。明るくにぎやかなのは、まさるに希望の心がわいてきているから。
G	じいちゃん、ぼく、ひまわりになるからね。	心の中でおじいちゃんと約束をかわし、これからはむけて強く決意している。



おじいちゃんの死を実感→決意を持つ

- 5 まさるの気持ちの変化を自分のことばでまとめる。
 まさるの気持ちは（ ）
 だったけど、最後の場面で（ ）
 というふうに変化した

個別
5分

- ・全体交流で出た意見を参考にして、まとめを自分の言葉で書くように促す。

【友達の意見を参考にしながら

- ・自分の考えとの違いに気付いて、取り入れられる意見はないか考えながら聞くように聞く視点を示す。
- ・A、Fは、これまでと変わったまさるの心境を捉えている点を評価する。
- ・B、Gは、おじいちゃんの言葉を自分の中で受け止めて、決意を新たにしていることを確認する。
- ・Cでは、ぼんやりとしか死を受け止められなかったまさるが、死を実感するように変化したことに気付いた点を評価する。
- ・D、Eでは、まさるの感情の高ぶりを感じ取った点を評価する。
- ・なぜ涙が出たのか、おじいちゃんとまさるのつながりを想像しにくい場合、麦わら帽子にちなんだエピソードを原作から紹介したり、さし絵を見せたりする。
- ・おじいちゃんの死を実感し、「ひまわりのようになる」という決意を持つ感情の流れをたどり、それが変化であることをとらえられるようにする。

<p>6 まさるの気持ちの変化を発表する。</p> <p>まさるの気持ちは、「おじいちゃんの死を実感することができなかった」だったけど、最後の場面で「おじいちゃんとの思い出がつまった麦わら帽子をかぶり、ひまわり畑を見たことで、<u>おじいちゃんの死を実感して悲しくなったけど、おじいちゃんの言葉通り、自分もひまわりのようになる</u>」というふうに変化した。</p>	<p>全体 7分</p>	<p>ら主人公の気持ちの変化について自分の考えをまとめることができたか。】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなで話し合ったことをもとに、まさるの気持ちの変化を自分の言葉で書くように促す。この学習を次時の主題を短文にまとめる活動へつなぐ。 ・「ひまわりようになる」とはどんな意味かを押さえる。
<p>7 学習内容を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなと話し合っ、まさるの気持ちがどんなふうに変わったのかが分かってよかった。 	<p>全体 3分</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いをもとに考えを深めた児童や、真剣に考え抜いた児童を価値付けるようにする。(振り返り)

エ 評価

一文や話し合いをふまえて、気持ちの変化を自分の言葉でまとめることができたか。

オ 板書計画

夏のわすれもの

福田岩緒

まさるの気持ちの変化

まさるの気持ちは、()
だったけど、
最後の場面で ()
というふうに変化した。

()
と

・ おじいちゃん、ぼく、ひまわりのようになるからね。

.....

・ 麦わらぼうしをかぶろうと：

まさるの気持ちが大きくかわった一文を見つけ、どんな気持ちになったのかみんなで話し合っ、まさるの気持ちの変化を自分の言葉でまとめよう

5) 授業の実際

授業では、自分が選んだ一文をネームプレートで仲間を示して、自分の立場を明確にした。仲間に自分の考えを伝えたいという意欲を持って、全体交流における伝え合う活動へとつなぐことができた。

課題に対しての児童の思考は、前時までの読み取りが本時に生かされ、まさるの今までの気持ちについては十分にまとめることができていた。しかし、ひまわりのようなということの意味を掘り下げ、まさるが今後どのように過ごして行こうとしているのかを考える部分については、思考の深まりがやや不十分で、教師の働きかけが不足していると思われた。

また、これまでの授業で取り組んできたことの積み重ねや、出典からエピソードを紹介したことから、児童たちがより物語の世界へ入り込んでいた。そして振り返りでは、自分が祖父を亡くしたときの経験とまさるの体験を比べている児童や、今生きている自分の家族を大切にしようという気持ちを振り返りに書いている児童がいた。これは主人公の気持ちに寄り添えた結果である。

物語の地図は、白石範孝氏の自分力で読むための「10の観点」や二瓶弘行氏の25の「自力読みのための観点」を参考とした。これらは、作品を客観的に読むための読み方の「方」を重視した実践である。作品の世界に浸る体験は本好きの子どもを育てることにつながる。先行実践を参考にすることは、目の前の子どもの実態を考えてから取り入れるようにした。

参考文献

全国国語授業研究会 いま、求められる文学の授業力 東洋館出版社、2009年
白石範孝 八戸発 PISA 型「読解力」を育てる授業提案 東洋館出版社、2008年
白石範孝 白石範孝の国語授業のつくり方 東洋館出版社、2009年

(2) 実践2 文学作品を読み取り、活用力を育てる(5・6年生 国語)

1) 研究実践を設定するにあたって

本学級は、5年2名、6年5名の複式学級である。小規模校であることや複式学級から生ずる様々な課題に対して、普段から意識的に児童の関わり合いを取り入れるなどの取り組みを行っている。こうした学習活動の中で、関わり合う児童を観察してみると、話し合い活動において、意見をまとめたり、練り上げたりすることについて、まだ効果的な話し合いができていないと感じている。また、積極的に話し合いに参加する児童と参加しない児童が見られ、一部の児童だけでの話し合いがたびたび見られる。話し合い活動を進めていく上で、自分の考えを分かりやすく伝えたり、相手の考えと自分の考えとを比べて聞いたりすることができれば、より深まりのある話し合い活動ができるのではないかと考えている。今後は、これらの課題に向けた取り組みを行っていききたい。

また、本学級のもう一つの実態として、日頃、テストや授業の中で行っている自由記述の問題に対して、自分の考えを書けない児童が多いという状況がある。中でも、問題に取り組もうとしない児童の存在が気になった。そこで、その児童の分析を行い、取り組もうとしない理由を次の二点であると考えた。一つは、単純に書くのが嫌だということ。もう

一つは、慣れない文章を見て、何が書いてあるのか問題の意図を理解することができず、しっかり読むことを途中であきらめてしまったため、自分の考えを書けないことである。

このような分析結果や普段の児童の実態から、本学級では、「読解力の向上」が課題であると考えた。この課題解決に向け、国語の授業を通して、下記の点に留意して読解力の向上を目指した授業の展開に取り組んだ。

①じっくり文章に向き合い、注意を払って大切な言葉を捉えること。

②文章に即して、自分の感想や考えを持って文章にまとめること。

③人の考えを聞いて自分の考えを深めたり、修正をしたりすること。

これらのことを繰り返し指導することが、読解力を高まりにつながると考えている。

2) 本单元について

本单元、6年国語科「強く語りかけてきたことを考えながら読もう」では、作品の内容を深く読み取るとともに、一人一人が感じ取ったことを意識させながら進めたい。そして、作品が強く語りかけてきたことを受けとめて、自分の言葉で表し、友達と伝え合うことにより、様々な考え方や感じ方に触れさせ、児童個々の考えがさらに深まるようにしたい。これらのことを達成するためには、理由付けて自分の思いを表現する力をしっかりと身に付けさせる必要がある。

本教材の「ヒロシマのうた」は、原爆の悲惨さが一瞬の死だけでなく、戦争という状況の中で登場人物が様々な場面で悩み、苦しみ、迷いながら、自分はどうするべきか、どうしていくかを見つけていく物語であり、人間の生き方を考えるのに適した教材である。文章構成は、時間の流れに従って「原爆投下後のヒロシマでの出会い」「七年後のヒロ子との再会」「十五年後の再会」と大きく三つに分けることができる。それぞれの出来事の中で登場人物の心情が「①どのように変わったのか、②なぜ変わったか、③変わったことをどう思うか」ということを意識させながら読み取りを進めた。そのために教科書の文章にサイドラインを引かせるなどして、考える根拠となる言葉を捉えたり、自分が選んだ文章に対して、自分なりの考えを持つことを意識させたりしながら取り組んだ。また、自分の考えを表現したり、友達の考えを聞いたりする活動を通して、自分の読みの深さや浅さを実感させ、自分の読みの幅を広げていけるのではないかと考える。

3) 具体的な手だて

①内発的動機づけに基づく学習

事前学習での取り組み 個での読み取りを授業外で行うようにした。授業内での読み取りは時間が限られるため、最後まで読み取ることができない児童もいるので、本单元では、全員が個の読み取りを最後まで行えるように、朝の自主学習の時間を利用して個の読み取りを行うことにした。

グループ編成の工夫 本学級は少人数であることから、普段から限られた人間関係の中

での学習が進んでいる。このような状況から、話し合い活動がマンネリ化したり、役割が固定化したりするため、毎時間グループのメンバーを変えて授業を行うことにした。

②自らの成長をふりかえるワークシートの工夫

本単元は登場人物の心情に迫りながら文章の読み取りを進めていくため、登場人物の心情など、自分の考えたことがすぐに分かるようにサイドラインを引いたり、書き込みをしたりすることができるワークシートを活用することにした（図42）。また、最も強く語りかけてきたことに関しては、授業前の自分の考えと、授業後の自分の考えを書かせ、自分の考えがどのように変わったのか客観的に捉えられるようにした（図43）。

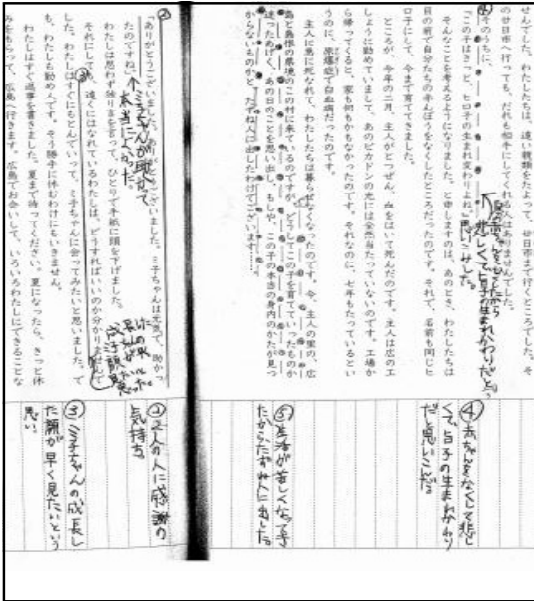


図42 書き込み式のワークシート



図43 変容が分かるワークシート

4) 授業の実際

ア 単元指導計画（12時間完了）

時間	学 習 内 容
1	○題名を読んで、初めの感想を書き、感想を出し合う。
2	○原爆投下後の悲惨な様子を読み取る。
3	○母親の様子や母親と出会った時の「わたし」の行動や心情を読み取る。
4	○赤ん坊を預ける「わたし」の心情と「戦争ということがこんな悲しいもの」と思った理由を読み取る。
5	○手紙に込められた母親の心情と「わたし」の心情を読み取る。
6	○母親の揺れ動く心情と自分の子として育てると決意した経緯を読み取る。
7	○ヒロ子と母親の状況の変化を知った「わたし」の心情を読み取る。
8	○ヒロ子におかあさんの話をする前と話した後の「わたし」の心情と、本当のお母さんの話を聞いたヒロ子の心情を読み取る。

9	○原子雲のかさのししゅうに込めたヒロ子の思いやワイシャツを受け取った「わたし」の心情を読み取る。
10	○全文から最も強く語りかけてきたことを選び、その理由をまとめる。 ○「ヒロシマのうた」の題名の持つ意味について自分の考えをまとめる。
11	○人の生き方をテーマとした作品を読み、自分の考えをまとめる。
12	○自分のまとめたことを発表する。

イ 学習過程

段階	児童の活動	教師の支援 ※評価
つかむ	1 第○場面の内容について「登場人物」「時」「出来事」の三点について発表する。 2 本時の課題と学習の流れを知る。	・第○場面について、「登場人物」「時」「出来事」について指名しながら確認する。
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 登場人物の心情を読み取り、最も強く語りかけてきたことを説明しよう。 </div>	
ひろげる (20)	3 音読する。【個】 ・サイドラインを引いた文章を意識して読む。 4 グループで意見交流する。【グループ】 ・登場人物の心情について ・最も強く語りかけてきたことについて	・登場人物の心情が表れているところを意識して音読するように伝える。 ・サイドラインを引いた文章に、その人物のどんな気持ちが表れているのか話し合うことを確認する。 ・友達の考えに対して、自分の考えはどうなのか確認しながら話し合いを進めていく。
活用する (15)	5 第○場面を読んで最も強く語りかけてきたことをまとめる【個】 ・強く心に残った文章をカードに書く。 6 全体の場で発表する。【全体】	・グループでの話し合いを経て、最も強く心に感じた文章はどこなのか自分の考えをまとめる。 ・自分の考えを理由も付けて発表する
まとめる (5)	7 本時の学習を振り返り、自分の考えを書く。	・振り返りカードに自分の考えを記入するよう指示する。 ・次時の課題を伝える。

5) 成果

①事前に個での読み取りをしっかりと行うことによって、授業に対する姿勢に変化があった。また、一人一人が何を伝えるのか明確になっていたことや話し合い活動のパターン化ができていたことにより、すぐに意見を交流することができた。本実践から、話し合い活動は、一人一人がしっかりと自分の考えを持っていないと効果的に進めることができないと考える。自分の考えをしっかりとつことにより伝えたい、交流したいという思いが生まれものだと感じた。今後も児童が自分の考えをしっかりと持てるように個で考える時間を確保していきたい。

②最も強く語りかけてきたことに関して、授業前と比べて、授業後で選んだ文章や、その理由に変化があった。その理由として、友達のことを聞くことにより、登場人物の心情をさらに深く読むことができた結果だと考えている。

6) 課題

①話し合いの活動を生かすためには、グループ活動が機能するような目的を、児童達に提示する必要があると感じた。例えば、グループの意見はどれにするか、理由は何にするかなど、グループで話し合っただけではどうするかを決めておくともっと積極的に交流ができると感じた。

②話し合いでの意見交流も一つの手だてであると感じた。全体に返す活動を取り入れるなど交流した後の活動をどうするか考えていく必要があると感じている。

③グループでの話し合いになかなか参加できない児童に対してはどのように支援するのか、手立てを工夫する必要がある。

(3) 実践3 伝え合い活動で既習事項をもとに活用ができる児童を育てる(6年 算数)

1) これまでの児童の姿

本学級の児童は、普段の学校生活や修学旅行、運動会などの日常的な場面では、集団で行動し、互いに話し合うことができている。しかし、学習場面では、誰かが発言してくれるだろうという受け身の姿勢が感じられ、発言が一部の児童に限られてくることが多い。それは、学習内容に対して自信がないことが一番の原因ではないかと思われる。また、今までは一斉場面でグループごとの発表をしたり聞いたりすると、グループでの意見を自分で理解しないままに発表してしまったり、発表された意見の必要な情報を聞き流してしまったりする場合が多かった。

2) 本単元でめざす児童像

本単元「文字を使って表そう」では、 a や x などの文字を使って式に表すことの良さを味わう素地を養うことが大切である。第4学年で学習した、 \square や \triangle を使った式の理解に

基づき、a、x などの文字を用いるようにした。その際、具体的に数を当てはめて x や y の値を考えることで、文字を使うことが難しいと感じさせないように、かつ児童が主体的に活動できるよう問題づくりやペア交流に取り組むことにした。リラックスした雰囲気の中で、自分が考えた意見をたくさんの友だちに言葉や図で説明したり、相手の意見を積極的に聞いたりすることができ、多くの情報の中から自分の考えとの共通点や相違点を探そうとする意欲を伸ばしながら、自分の考えを深め、さらにそれを活用していくことのできる児童を育てていきたいと考えている。

本時（単元計画表第5時）では、数量を求めるためにいろいろな考え方ができることや、式から考え方を読み取ることがねらいである。はじめは具体物を用いて、求める個数を視覚的に確認できるようにした上で自由に立式させ、それを基に教科書に記載された式を読み取らせるようにした。少し難しい問題ではあるが、まずは自力で考え立式するように指示する。自力でがんばって解いた考え方だからこそ、相手に伝える価値があるものになるだろうと考えた。

グループでの伝え合い活動ではなくペア交流をすることにしたのは、自分の考えを直接目の前の相手に伝え合うことで、様々な意見に触れることができるからであり、自他の考えを比較することで、新しい気付きを発見し、自分の考えを深めたり、いろいろな課題に活用したりする力を児童が身に付けてほしいと考えたからである。算数科の活用する力については、単元計画表の後に記した。

単元計画表

小単元	時	目標	学習課題
1 文字を使った式	1	・□や△のかわりに x や y などの文字を使って、数量の関係を式に表すことができる。	・ x や y を使って式を表し、x に数をあてはめて数量を求めてみよう。
	2	・ x や y などの文字を使って数量関係（ $x \times 6 + 70 = y$ など）を式に表し、x の値に対応する y の値を求めることができる。	・ x や y などの文字を使って式に表し、x の値に対応する y の値を求めてみよう。
2 x の値を求める問題	3	・数量の関係を表した式をもとに、その等式から x の値を求めることができる。	・ x や y を使った式を理解し x の値を求めてみよう。
	4	・ x を使って数量の関係を式に表し、その等式から x の値を求めることができる。	・ x や y を使った式を理解し問題を作って、友だち同士で x の値を求めてみよう。
3 式のおよみ方	5	・個数の求め方をいろいろに考	・個数の求め方をいろいろと考

		えて式に表すことができる。	え、それを友だち同士で説明し合おう。
	6	・式を見てどんな考えをしたのかを読み取ることができる。	・式を見てどんな考え方をしたのかを読み取り、友だち同士で説明し合おう。
たしかめ道場	7	・学習内容のふり返りをしよう。	

活用する力について 活用する力については、算数という教科の特性を生かすよう新学習指導要領に基づいて考えた。算数科の目標は、「日常の事象について見通しを持ち、筋道を立てて考え、表現する技能を育てるとともに、算数的活動の楽しさや数理的な処理のよさに気付き、進んで生活や学習に活用しようとする態度を育てる」と示されている。今までと変わったこととして「表現する能力」という文言が付け加えられている。また、「生活に生かそうとする態度」から、「生活や学習に活用する態度」への変更がある。毎日の算数の学習の中から活用する力を育てていくことが重要であるということが分かる。このことから、算数の授業における活用は、既習事項を使いこなしながら課題解決をすることで、新しい見方や考え方を獲得していくことであると考えた。

算数科の学習では、問題を解決したり、判断したり、推論したりする場面を多く設定することができる。自分の考えを友だちに説明したり、文章にまとめたりしているうちに、良いところや悪いところがはっきりしたり、考えが整理できたりすることから、思考力、表現力、判断力のどれもが相互に関わり合い、活用する力を身につけるには欠かせないものであると思われる。児童は、以前学習した内容と新しい学習内容を別のものとして考える傾向がある。新しい問題に直面すると、すぐに「分からない」「やったことない」という言葉を口にする。そこで、ペア交流を取り入れ、思考、表現、判断して深めた自他の考えが、次の課題にも使うことができることに気付き、新たな課題の場面でも活用できる児童になってほしいと考えた。

3) 具体的な支援の手だて

①内発的動機づけに基づく学習

本時は、研究課題である伝え合う活動を、単に発表するだけの活動にしないように留意した。授業を行った学級は、少人数指導を行っているが、それでも意見を発表することや、発表を聞いて自分の考えとの共通点や相違点を探そうとすることが苦手な児童が多かったため、人数が少ないということを生かしてペアで自由に交流する伝え合い活動を行った。そうすることで、発表することが苦手な児童も、まずは話しやすい友だち同士で自分の意見を積極的に伝え合うことができるのではないかと考えた。1対1なので、自分の意見を伝える相手が明確であるため、より自分の言葉でしっかりと発言し、相手に聞いてもらおうとする態度が育つと考えた。またペア交流をしていくうちに、数人で集まったり移動し

たりする児童同士の主体的な学習活動が展開できるようにした。

②自らの成長をふりかえるワークシートの工夫

一辺に6個の●が並んだ正方形の図を4つ示し、全体の個数の考え方を自由に考えることができるワークシートを使用した(図44)。

最低二つは自分の考えを式に表すように指示し、その中から自分が一番数えやすいと思う合理的な考え方を選ぶように指示した。

その合理的な考え方を、ペアで自由に伝え合いをした。伝え合いのルールは、できるだけ多くの人と意見を伝え合うこと、友だちの考えで自分が納得したものは、自分のワークシートに赤ペンで記入することを指示し、後から見たときに自分の意見と友だちの意見を比べられるようにした。

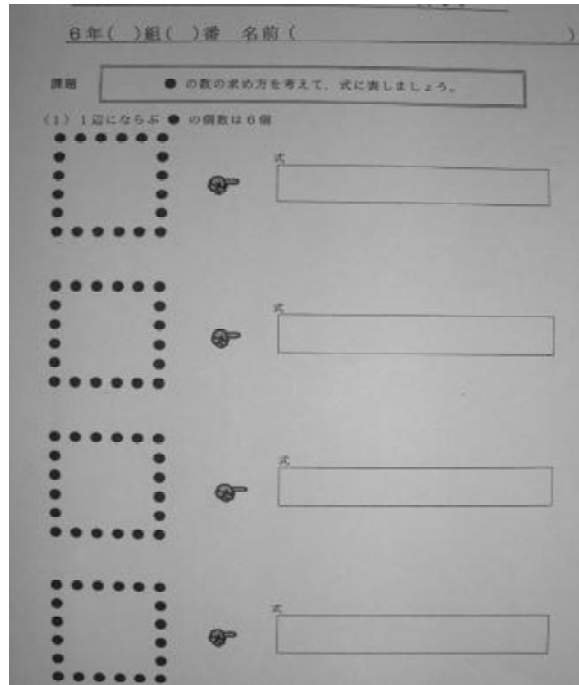


図44 自らの成長を振り返るワークシート

4) 学習過程

目標

- ①個数の求め方を考えて、式に表すことができる。
- ②自分の考えをおたがいに伝え合うことができる。

準備

教師・・・ドット磁石、ワークシート

児童・・・振り返りカード

学習過程

児童の活動	学習形態	留意点 ○ 支援、個を生かす手だて (評) 評価
1 本時の学習課題を知る。	一斉	
●の数の求め方を考えて、式に表し、自分のおすすめを伝え合おう。		
2 課題について考える。 ・具体物を操作して考える。 ・図にかいて考える。	個	○つまずいている児童には、実際に具体物を操作して考えるように助言する。 (評) 個数の求め方を考えて、式に表すことができ

<p>3 課題の解き方をペアで紹介し合う。</p>	<p>ペア</p>	<p>たか。(ワークシート) ③ 自分の考えを友達に伝えられたか。また、相手の意見をよく聞くことができたか。 (観察)(手だて①)</p>
<p>4 課題の解き方を全体交流で互いに紹介し合う。 ・考え方にはいろいろあることを知る。 ・式の表している意味を理解する。</p>	<p>全体 一斉</p>	<p>③ 自分の考えを友達に伝えられたか。(観察) ○ 友達の考えに耳を傾け、自分の考え方との違いに気をつけて聞き、自分の考えをより良いものに修正していくようにする。(手だて①) ③ 式を見て、どんな考え方をしたのかをよみとることができたか。(観察・ワークシート)</p>
<p>5 練習問題を解く。 ・ワークシート2(2)～(5)を考える。</p>	<p>個</p>	<p>③ 個数の求め方を考えて、式に表すことができたか。(観察・ワークシート)</p>
<p>6 振り返りをし、次時の学習内容を知る。 ・振り返りカードに記入する。</p>	<p>個</p>	<p>③ 本時の学習に意欲を持って取り組めたか。 (振り返りカード)(手だて②) ・次時の学習(文字を使って一般式を考える)への意欲を高める。</p>

評価

- ・操作活動を入れながら立式することができたか。
- ・自分の考えを筋道をたてて伝えることができたか。
- ・自分と違う考えに触れ、考えることで意見を深めることができたか。

5) 授業の実際

本時では、手だて①により、学習過程3において意見を発表することや、発表を聞いて自分の考えとの共通点や相違点を探そうとすることが苦手な児童が、積極的に自分の意見を伝えたり、相手の意見を聞いてメモしたりするという姿が見られた(写真6)。



写真6 伝え合い活動の様子

普段、自信をもてず発表できない児童も、自由に誰とでも伝え合っても良いということから楽しく主体的に活動できたように感じた。また、お互いにいろいろな意見を発表し合うことで、自分と同じ意見にも触れ自信をもつことができた、たくさんの友達と伝え合うので、表現活動の練習にもなり、説明することで自分の考えを再確認でき、より自信を持って発表することができていた。

ペア交流で伝え合い、最終的に学習過程4の一斉授業で考えをまとめるときに、思考の変化が言葉や様子からはっきりとみられた。普段はなかなか発表できない児童が、みんなに分かりやすく伝えることができ、「なるほど」「こういう意見はいいな」という言葉も多くつぶやかれていたためである。

ふり返りカードには、「他の人と同じ意見があって、自分の答えに自信が持てた」「こういう考え方もできるんだなという新しい発見ができた」「自分の考えよりも、友だちの考えの方が数えやすくて納得した」などの意見が多く記入されていた。

(4) 実践4 思考力を磨く算数—分数×分数の学習(6年生 算数)

1) これまでの児童の姿と思考力について

算数は考える科目か暗記する科目かと児童に聞いてみたところ、本学級在籍の31名中13名が暗記科目であると回答した。その理由は「教科書で習った解き方を覚え、宿題としてドリルで同じように解いているから」というものであった。授業者としてはっとさせられた瞬間であった。数学的思考力という言葉を用いて評価を行っていながらも、試験問題は、教科書の解法を再現することを求めている問題ばかりである。児童はテストでよい点を取るため、正解に至る過程を理由も考えず丸暗記を行い、論理的に思考しようとするをほとんど行ってこなかったと言える。児童が、算数は暗記科目であるという考えに至った理由はそこにある。

学校教育は人格の完成をねらいとしており、本校のキャリア教育は社会で生きる力を育てることをねらいとしている。幼少期から自分の頭で考えることを経験しないとあれば、社会に出てからも日常生活やビジネス上での課題に対してマニュアルでしか対応できず、思考が停止してしまうことが容易に想像できる。大学受験が終わり次第、消えていく学力ばかりを育ててきた世間の現状はそれを物語るのではないか。自らの頭で考え、自らの力で対応できる児童を育てるため、算数の授業を思考力と活用力を育てる機会としていきたい。

また、算数の得意な児童に対して、思考力がよいとかひらめきがよいという言葉を使用しがちであるが、本実践においては、思考力という言葉を下のように定義づける。

思考力とは、課題に対してこれまで蓄積した知識と経験を活用して理解しようとする能力である。

また、思考力は天性の才能によってすでに身に付けているものではなく、解き方や考え方が分からない課題に対して内発的動機付けによって主体的に学習され、試行錯誤を繰り返すことによって磨かれる力であるとする。その際には、従来いわれているような基礎の習得の上に活用があるという考えをするのではなく、内発的に学ぶ意欲を大切にする

ことで活用から習得という流れもあり得るという姿勢で授業を構成していくことも付け加えておきたい。

2) 具体的な支援の手だて

①内発的動機づけに基づく学習

めあてを明確にした授業展開 単元全体と1時間のねらいを明確にし、学ぶことで何を身に付けることができるのか、学ぶ価値がどこにあるのかを常に明確にして授業を展開する。

グループ学習による学び合い 少人数グループの学習によって授業への参加度を高める。3人グループで説明し合う中で、練り上げ合いながら解答をまとめる。ホワイトボードや発表用紙等を活用した学び合いでは、解答を他の児童や教師に提示する機能だけでなく、書いたものを訂正・消去せずに残し、自分たちの思考の見直しを容易にさせるという観点から、ペン書きさせることが有効である（ノートも同様）。

個を大切にしたいグループ学習 個人追究の時間を設定し、個人思考→グループ交流→グループ間交流という形態で学び合うことで、一人一人が自分の考えもちながら、学習を深める。

②自らの成長をふりかえるワークシートの工夫

ふりかえりカードの活用 学習展開が見通せるふりかえりカードを活用し、単元の中で、自己の成長を客観的にとらえられるようにする。

3) 授業の実際

実際の授業展開の例として、6年生の「分数×分数」の学習展開を紹介したい。

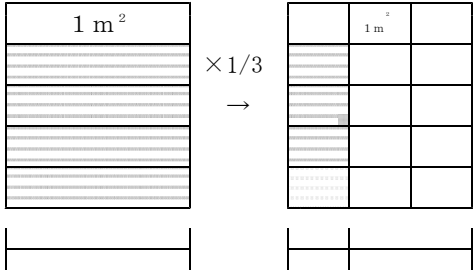
本単元のねらいは「分数や整数に分数をかける乗法の意味について理解し、その計算方法を考え、正しく計算することができる。また、分数や整数を分数でわる除法の意味について理解し、その計算方法を考え、正しく計算することができる」である。本単元では、より確かに思考を進めていけるように、思考の過程を数学的な表現を用いて学習を進めた。具体的には、立式では線分図を利用する。また、下線のように乗法や除法の意味を考えていく過程の根拠を明確にしていくように、線分図や面積図・説明文と図を結ぶ等の方法を用いて説明させていきたい。

本時の目標は、真分数に単位分数をかける乗法の計算の仕方を習得することである。児童にとって計算方法を習得すること自体はそれほど難しいことではないが、前述のように算数を暗記科目とせず、思考力を育てていく学習として教材を捉え直していくには、よい単元である。以下は本単元の1/4時の指導案である。

本時の展開

目標 真分数に単位分数をかける乗法の計算の仕方を考える活動を通して、分数×単位分数の計算の仕方を説明することができる。

学習過程

主な学習活動と予想される児童の反応	形態	指導・支援【学び合う姿の評価】
<p>1 本時の学習の見通しを持つ。</p> <p>[問題] 1dℓで$4/5\text{m}^2$ぬれるペンキがあります。 このペンキ$1/3\text{dℓ}$では何m^2ぬれますか。</p>	<p>一斉 6分</p>	<p>・本時の活動のめあてと見通しを知らせる。</p>
<p>分数×分数の計算の意味を全員が説明できるようになるう。</p>		
<p>2 $4/5 \times 1/3$の計算の仕方を図を用いて説明しあう。</p> <p>・線分図は$1/3$まで線を引こう。</p> <p>・$1/5 \times \textcircled{3}\text{m}^2$の4個分だね。</p> 	<p>個別 8分 グループ 10分 グループ間 6分</p>	<p>・問題を個人で解く時間を確保してから、グループで話し合うようにする。</p> <p>・整数の場合と同じように、乗数が分数でもかけ算が適用できることを数直線をもとに理解するよう支援する</p> <p>・分数の大きさを面積図を塗りつぶし確かめるようにする。</p> <p>・グループ全員が計算方法を説明できる時間を設定し、相互に聞き合うよう呼びかける。(学び合い)</p> <p>【根拠を示しながら自分の考えを説明することができたか。】</p>
<p>3 分数×分数のかけ算の計算の意味を説明しながら適用題を解く。</p> <p>[問題] 1dℓで$4/5\text{m}^2$ぬれるペンキがあります。 このペンキ$1/5\text{dℓ}$では何m^2ぬれますか。</p>	<p>個別 グループ</p>	<p>・問題を個人で解く時間を確保してから、グループ内で説明を行うよう指示する</p>
<p>4 本時のねらいが達成されたかを意識して本時の活動を振り返る。</p>	<p>個別 一斉 5分</p>	<p>・学習内容の習得に留まらず学習に取り組めたこと自体に価値を認めていく。(振り返り)</p>

本単元を通して特に配慮したことは「全員が説明できるようになる」というめあての統一である。明確なねらいを設定し、参加度を高めた学習と信頼できる仲間との内発的な学習により、これまで蓄積した知識と経験を活用した思考力の育成が期待できる。

グループ学習を行う際には算数グループワークシートを使用した（図45）。A3サイズ用の紙に枠をつけただけのものであり、ペン書きで書き方の体裁はグループの判断に任せた。単元の最初には思考の流れがわかりにくいワークシートが散見されたが、実践の積み上げによって、線分図と面積図を活用した思考の過程が分かるワークシートを作成できるようになっていった（写真7）。また、グループワークシートはグループ間交流の際にも使用した（写真8）。グループでの思考の過程を他のグループに説明するという活動をとおして思考する機会を多く設定するためである。

最後に成就という観点から本実践を振り返りたい。学習者自身が自らの成長を実感でき、思考力を高めることができたかという点である。本単元の全ての時間において振り返りの時間を設定して、本時のねらいに即して振り返りを記入していく。グループの取りまとめをしている児童は「今日の目標になっていたように、グループ全員が計算の意味を説明できるようになってよかった。

計算方法は知っていたけど、その意味まで考えたことがなかったのでよい学習となった」と振り返った。他にも思考することの大切さに気がついた記述が多く見られた。また、内発的に学んでよかったという実感と自信は、次時以降の学習意欲により影響を及ぼすであろう。

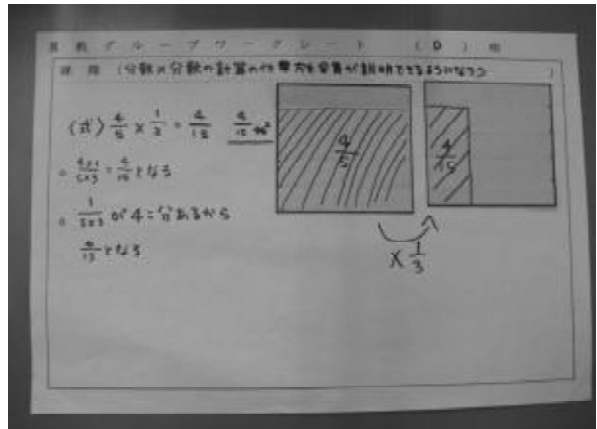


図45 算数グループワークシート



写真7 グループ交流の様子



写真8 グループ間交流の様子

(5) 実践5 伝え合う活動により、共に学び合い高め合う家庭科授業を目指して(6年生 家庭科)

1) これまでの児童の姿

本学級の児童は大変元気がよく、諸活動に意欲的である。6年生になると、往々にして女子の発言が少なくなったり一部の児童の発言に偏ったりしがちであるが、どの教科も進んで挙手し発言する姿が見られた。しかし、進んで発言はできても、自分の意見の発言のみに終わり、友達の意見に耳を傾けなかったり友達の意見をそのまま自分の意見の参考にしたりして、学習集団を高め合おうという雰囲気はあまり見られなかった。また、小集団においても、話し合い活動を通して考えを練り上げていくという様子や姿勢はあまり見られず、一部の意見を小集団の意見にしてしまう場面がよく見られた。これは、自分の意見に自信がなかったり、あまり考えることなく発言をしているからではないかと推測した。

2) 本題材でめざす児童像

ア 題材 まかせてね! きょうのごはん(6年生 家庭科)

イ 題材への思い

— <児童たちに身に付けてほしい力や態度、姿勢> —

- 班や学級で話し合い活動を行うことにより、自分の意見だけでなく、友達の意見にも耳を傾け、自分の意見の参考にする姿勢、そして個人の意見を班の意見としてまとめたり、練り上げたりする力。
- 班や学級で話し合った内容をもとに自分や家族の食生活を振り返り、健やかに成長していくためには食事のとり方や組み合わせが大切ということを理解し、実践していこうとする態度。
- 家族に喜ばれるおかずをつくることを通し、家族と触れ合い、家族を思いやる態度。
- 自分ができる技能を生かし、安全・衛生に気を付け、手順よく調理する力。
- 話し合い活動や栄養の授業において学んだことを生かし、食品を組み合わせ、おいしい料理をつくらうとする食生活への実践意欲や実践態度。

— <本題材の教科的目標> —

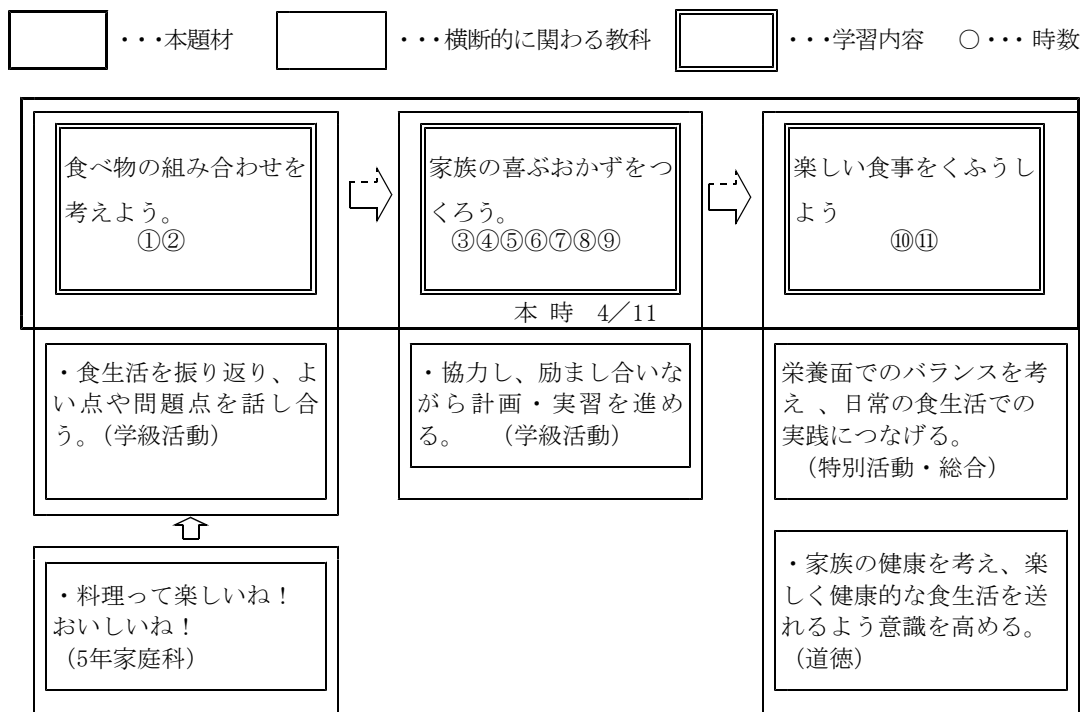
- 自分の食生活を振り返り、家族に喜ばれるおかずをつくらうとすることができる。
- 食品を組み合わせ献立を立て、家族が喜ぶおかずを工夫してつくることことができる。
- これまでの学習を生かして、調理実習計画を立て、安全で衛生的な取り扱いに気を付けて適切に調理することができる。
- 食品の選び方や、いろいろな調理の仕方を理解する。

3) 具体的な支援の手だて

- ①主体的に話し合い活動に取り組むことができるように、グループで役割分担を決めたり、話し合いがスムーズに進められるようにカードやボードを準備し、活動しやすいよう配慮する。
- ②一部の児童に意見に流されないように、どの意見についても良いところを認められるよう、学習プリントに記入欄を設ける。
- ③友達の意見をしっかりと聞き、今後の食生活の参考にするために良い意見をまとめるためのプリントや計画表を工夫する。
- ④家庭で家族のために料理をつくることを学習の最終目標に設定することにより、課題意識や学習意欲を引き出す。
- ⑤食品学習カードや食品群別表を使用することにより、視覚的に食品の栄養を捉え、組み合わせを考えることができるようにする。
- ⑥学習状況やつまずきを的確に捉えるために、献立を考える中で、教師の助言をしっかりと聞くことやグループ内で助言をし合うように指示する。
- ⑦実習時の活動を家庭での実践の際に生かせるように学習カードを工夫する。

4) 学習過程

題材の構想 (11 時間完了)



学習過程

学習形態： 個別 グループ 斉

段階 分	学 習 活 動	教 師 の 活 動 と 支 援	評価 (評価方法)
つ か む 10	<p>1 教師の考えた献立を見て、よい点・悪い点を考え、献立を立てるときのポイントを確認する。 <input type="checkbox"/></p> <p>2 本時の学習内容と学習の流れを知る。 <input type="checkbox"/> → <input type="checkbox"/> ・家族のために各自が考えてつくった献立を班内で発表し、よりよくなるよう改善する。 ・班で発表した後、学級全体で交流する。</p>	<p>○栄養のバランスを考えるポイントを確認し、自分の献立を見直す視点を言う。</p> <p>○家族の好み、家庭の様子、栄養バランスなどを考えながら献立を立てることを確認する。</p> <p>○家庭に常備・準備してある食材を積極的に使用することを確認する。</p> <p>○友達のよい点を認め、互いに改善できるよう協力して発表するように指示する。</p> <p>○最終的には、調理実習で実践することを伝える。</p>	<p>○食品の組み合わせを工夫して、家族のために1食分の献立を意欲的に考えることができたか。(発言・学習プリント)</p>
<p>家族の健康・好みを考えた1食分の献立を考え、発表しよう。</p>			
と り く む 30	<p>3 自分が考えてきた献立を、班で発表し合い、栄養やバランスなどを助言し合う。 <input type="checkbox"/> ・健康 ・好み ・6つの食品群のバランス ・色どり ・旬の食材など</p> <p>4 班の中で「よく考えてある献立」を1つ選び、学級全体で発表し合う。 <input type="checkbox"/> → <input type="checkbox"/></p> <p>5 他の班の友達の献立のよい点を参考にし、自分の献立にメモを加え、発表のまとめをする。 <input type="checkbox"/></p>	<p>○よい点は進んで認め、改善する点は理由をつけて発表し合うように指示する。</p> <p>○家族の健康や好みを考えながら家庭にある食材や旬の食材を積極的に入れると良いことを押さえる。</p> <p>○友達の良い献立をしっかりと聞き、自分の献立の参考にするとよいことを助言する。</p> <p>○他の班の友達の良い点を見つけ、メモしながら聞くよう、声かけをする。</p> <p>○自分の献立を、もう一度見直し、まとめをするよう言葉かけをする。</p>	<p>○家族の好みと自分の家庭の実情を関連させながら食品の組み合わせを考え、工夫することができたか。(プリント・発言)</p> <p>○栄養的なバランスを考え、家族が喜ぶ1食分の食事計画が立てられたか。(プリント・発言)</p> <p>○班の中で献立を発表し合い、互いに助言し合うことができたか。(発表・プリント)</p> <p>○友達の献立を、意欲的に聞くことができたか。(プリント・態度)</p> <p>○自分の献立を進んで見直すことができたか。(プリント)</p>
ま と め る 5	<p>6 学習を振り返る。 ・振り返りカードへ反省を記入する。</p> <p>7 次時は家族のために調理計画を立てることを確認する。</p>	<p>○本時の自分の取り組みと献立を振り返り、次時に生かそうとする気持ちを持つよう励ます。</p> <p>○次時は自分の献立をもとに、実際の調理計画を立てることを伝える。</p>	<p>○意欲的に自分を振り返ることができたか。(プリント)</p>

5) 授業の実際

児童は「家族のための献立作り」ということで、大変意欲的に取り組んだ。今回は家族のために考えてきた献立を絵に描いて、視覚的に全員に伝わるようにしたことと、①誰のために、②健康状態や今の様子を考慮して、③どんなことを注意・工夫したか、という点を意識しながら献立を立てるように指示をした。

自分以外の献立を見るとき、児童は興味津々の様子で、感心したり意欲的にアドバイスをしたりする姿が見られた。そこで、ただ気がついたことをアドバイスするのではなく、あらかじめ示した①②③の3点を頭に入れ、それに沿った献立となるようにテーマを意識してアドバイスをしたり話し合いをしたりするように促した。今回は自分の献立は画用紙に絵を描き、話し合いは学習プリントで進めた。その際、友達からのアドバイスを書く欄や、友達のアドバイスを聞いて参考になった点を書く欄を設け、自分の気持ちを書かせた。

実際、食生活に関しては家庭生活の影響が大きく、栄養面での知識が豊富な児童と与えられた物を無意識に食している児童がいるので、話し合いへの参加度やアドバイスの内容に差があったものの、多くの児童は真剣に、また熱心に友達の献立にアドバイスし、自分へのアドバイスをしっかりと聞いていた。

残念なことは、授業内の話し合いタイムには時間の制約があり、児童の話し合いに多くの時間をかけられず、少し急がせてしまったことや、全員の意見を全体で発表する時間がなく、班で一つの献立の発表にしてあったので、全員の献立を全体で確認し合うことはできなかった。せつかく献立を立てさせたので、やはり全員の献立をしっかりと確認する必要があったと反省している。

授業形式の面について、どの授業に関しても、話し合い活動を進める際には「学び合いボックス」というマジックやカード、マグネットなどの入った箱とボードを活用している。本実践においてもそれをうまく活用しながら自分たちの意見をまとめ、発表することができた。

(6) 実践6 思いやりの心をもって発言したり行動したりする力を育む(5年生 道徳)

1) これまでの児童の姿

本学級は、男子14人・女子16人、合計30人の学級である。これまでの学校生活の中で、自然教室や運動会、なわとび集会、授業でのグループ活動、3年生と協力して行うペア学級での活動など、数々の活動を学級の仲間とともにやってきた。そこでは、みんなで協力し、みんなで一つの目標に向かっていくという姿勢が見られた。

学級全体で人と人との絆が増え、より丈夫なものになっていると感じてはいるが、まだ突発的に起こる喧嘩があり、児童の会話の中には、「きもい」「なんだこのやろう」「うざい」「ばか」といった言葉も聞かれる。双方からの聞き取りや観察の様子から、互いに悪気はなかったり、勘違いだったり、遊びからエスカレートしてもめごとになるという、人

間関係の未熟さを感じる場面が多い。

2) 本主題でめざす児童像

上記のように喧嘩をしたり児童の会話の中に汚い言葉が含まれていたり、また児童から友達との関係が気まづくなっている、何が原因でどうすればよいのか分からないという相談を受けたりすることがある。そこで今回の道德の授業では、自分が言われたりされたりすると嫌な気持ちになることを考え、それを友達と伝え合う活動を取り入れる。友達がどのようなことを言われたりされたりしたら嫌な気持ちになるかに気付き、軽率な発言と行動が友達を傷つけることを知り、思いやりの心をもって友達と接することができる児童の育成をねらいとした。

3) 具体的な手だて

①内発的動機付けに基づく学習

児童にとって身近なCMを教材とすることで、どんなCMなんだろう、どんなことをするんだろうと授業に興味をもたせた。また、児童はみな、友達から言われて不快に思ったことや、何かをされて嫌だなと思った経験がある。そういった自分の経験をもとにして考えたことを材料に友達と交流することで、児童が主体となって活動学習が展開できるようにした。

②自らの成長をふりかえるワークシートの工夫

自分の考えを書き込むところ、またグループや学級の友達の考えを互いに取材し合ったことを書き込めるワークシートを使用し、最後には、自分の考えと友達に取材して得た友達の考えを改めて確認して、自分の考えを書き込めるようにした。

4) 研究の実際

ア 主題名 第5学年 道德 「相手の気持ちになって」 <思いやり>

イ 資料 世界のCM

ウ 主題への思い

児童に身につけてほしい力や態度（児童のすがたをとらえて）	
	○友達の考えを聞き、尊重しようとする態度。
	○自分の言葉で友達とうまくコミュニケーションを図ろうとする態度。
	○仲間とのコミュニケーションを大切に、互いに高め合おうとする態度。
	○相手の気持ちになって考え、思いやりをもって友達と接しようとする態度。
目 標	○自分の経験や考えをもとに、友達と意見交換をすることによって様々な考えにふれる。 ○人の言動のもつ強さや重みについて考える。

手 だ て	<p>①自分自身の経験や思いなどを取り上げるにより、児童が主体的に取り組めるようにする。</p> <p>②ワークシートを活用し、1時間の授業の中で、学習の導入段階から終末にかけての考えの変容や広がりを見学自らが客観的にとらえられるようにする。</p>
-------------	---

エ 本時の学習

目標

- ①相手の気持ちになって考える大切さを知り、日々の生活に活かそうという気持ちをもつことができる。
- ②人の言動のもつ強さや重みについて考えることができる。

準備

教師・・・ワークシート、人権標語、パソコン（世界のCM）、プロジェクター
 児童・・・筆記用具

学習過程 本時の目標 学習形態： 個別 グループ 一斉
 学級全体

段階	学習活動	教師の活動と支援	評価（評価方法）
つ か む 5	1 人権について学んだことを思い出す。 <input checked="" type="checkbox"/>	○学級で決めた人権標語を確認する。	○本時の課題をつかみ、学習意欲をもつことができたか。（表情）
	2 本時の学習課題をつかむ。 <input checked="" type="checkbox"/>	○めあてを提示する。	
相手の気持ちになって考える大切さを知ろう！			
と り く む 30	3 自分の経験をもとに、相手から言われたり、されたりしたら嫌な気持ちになることをワークシートに記入する。 <input checked="" type="checkbox"/>	○思い出したくない児童や書けない児童への配慮として、無理して思い出さなくてもいいことや、経験ではなく想像をして書いても良いということを伝える。	○自分の考えをワークシートに書いているか。（ワークシート）
	4 グループ内でワークシートに書いた内容を出し合う。 <input checked="" type="checkbox"/>	○自分が気付かなかったことはないか注意して聞くように伝える。 ○友達が言ったことを茶化したり、言いたくない友達には無理して聞きださないように伝える。 ○後に学級全体で交流するが、そのとき特定の友達としか話せず、自分の考えが言いにくい児童も小さいグループで活動することで、言いやすい	○自分の考えを発表し、友達の考えをしっかりと聞いているか。（話し合いの様子） ○ワークシートに友達の意見を書いているか。（ワークシート）

	<p>5 学級内の友達とワークシートに書いた内容を出し合う。 <input checked="" type="checkbox"/></p> <p>6 世界のCMを見る。 <input checked="" type="checkbox"/></p>	<p>環境をつくる。</p> <p>○グループだけでなく、学級全体で交流することで、より多くの考えにふれるようにする。</p> <p>○言葉の強さを描いたCMをみて、言葉には暴力と同じくらい身体的にも精神的にも影響力があるということを読み取れるようにする。</p> <p>○世界でも、言葉の暴力などが重要視されていることを伝える。</p>	<p>○言葉の重みを感じながら見る事ができているか。 (表情)</p>
<p>まとめ 10</p>	<p>7 自分の考えと、友達の考えを思い出し、これからどういうことに気をつけていきたいかをワークシートに記入する。 <input checked="" type="checkbox"/></p>	<p>○個に応じて、これからどのようなことに気をつけていきたいか、例えば言葉一つにしても言い方を変えたり、表情を変えたり、アクセントが違うだけでも言葉が相手に与える印象は違うと言ったことを伝える。</p>	<p>○自分の考えを書けているか。 (ワークシート)</p>

評価

- ・自分の考えを友達に伝え、また友達の考えを聞くことができたか。
- ・自分の考えと、取材した内容を見直し、これから自分がどのように友達と接していくべきか考えることができたか。

本時では、導入で本時のめあてと学級で以前に考えた人権標語の確認を行った。今回の授業を通して、人権標語の意味をもう一度真剣に考えて欲しいと思ったためである。

取り組みの始めに、ワークシートに自分の経験をもとに、自分が言われて嫌なことやされていやなことを書くように促した。すると、児童は、自分の経験をもとに考え、集中してワークシートに自分の考えを書き込んでいた。ワークシートには、悪口や好きな人のことだからかわれる、落書き、物を乱暴に扱われる、勝手に物を見られる、といったこと書いていた。その後、グループ内でワークシートに書いたことを互いに出し合い、言いやすい環境をつくった後、学級全体で自由に友達とお互いの思いを出し合うように伝え、友達の考えをワークシートに書くように伝えた。伝え合いの活動前には、友達はどうなことを言われたりされたりしたら嫌だと思えるのか、自分とは違ったことで不快に思ったりするのだろうかといったことに興味がわき、早く取材がしたいという気持ちに教室中が包まれたように感じた。また、自分の考えをワークシートに書く段階では、「言われて嫌なことは一つしかない。他は言われても何とも思わないし、別にいい」と言っていた児童がいたが、友達と活動をしていく過程で、「こんなこと言われたらいや、これはいいけどこんなことされたら嫌だった」といった言葉が聞かれた。自分が考える過程で思いつかなかっ

たことを、友達の考えを聞くことで気づかされたようだ。

次に、世界のCMを学級全体で鑑賞した。内容は、一人の男の子が、学校の教室や廊下などで「何見てんだよ」「消えろ」「クソヤロウ」などといったことを言われる。そういった発言を受けるたびに、殴られる効果音とともに、ロッカーに叩きつけられたりして痣が増えていくというものである。実際に殴られているわけではなく、言葉には暴力と同じくらいの強さがあるのだということ、だから言葉のもつ強さについて考えようというCMである。このCMを視た上で、世界でも言葉のもつ強さは考えられているということ、また直接手をあげているわけではないけれども、CMに出てくる男子のように言われると人は殴られているのと同じ感覚であり、言葉はとても相手を傷つけることがあることを改めて伝えた。

そして最後に、自分の考えや、友達の考えを聞き感じたことや思ったこと、またこれからのようなことに気をつけていきたいかをワークシートに書くように伝えた。以下のような意見が児童から出た。

- ・自分が言われてもいいことかもしれないけど、相手はいやかもしれないからよく考えて発言するようにしたい。
- ・ぼくも、もしかしたら自分は言っていないつもりでも悪口と感じている人がいるかもしれないから今後は気をつけたい。
- ・私は、自分の考えや、友達の考えを聞いて、やっぱり人それぞれやられていやなことはたくさんあるんだと思いました。これからは人を気づかうようになりたい。
- ・相手がされていやなことを考え、気をつけながら行動したい。
- ・言われたり、されたりしたら、いやなことがすごくたくさんあった。これから、自分がやられていやなことはしないようにしたい。
- ・悪口は自分が言われていやだったのに、自分も言ってしまったのでこれから気をつけたい。
- ・言葉の暴力は人を本当に傷つけてしまうものなのでやめたい。

人の言葉や行動のもつ強さ、あるいは自分が言われたりされたりしても何とも思わないことでも嫌な思いをする友達がいるといったように、人それぞれに感じ方が違うということなどを頭に入れて友達と接していきたいという意見が得られた。

(7) 実践7 様々な場面を判断できる資質や能力を育てる道徳授業(4年 道徳)

1) これまでの児童の姿

本学級は素直で友達思いの児童が多い。ペアやグループでの活動では、自分の考えをなかなか口にできない友達の言葉を待ったり、やさしい言葉がけをしたりする児童も多くい

る。しかし、叱られないように逃げるためのうそをついたり、言い訳をしたり、自分一人だけではないと責任から逃げようとする児童もいる。自分を守る考えが優先してしまい、自分の良心に従った意見を言ったり行動したりできないことの表れだと感じる。

2) 本資料でめざす児童像

これまでの道徳の授業から、本学級の児童の道徳的思考は男女に偏りがあることが分かった。コールバーグの提唱する道徳性の発達段階により区別すると、男子は正しいということは親や教師から叱られないかどうかで判断する（前慣習的水準）児童が多く、女子は正しいことは仲間みんなが認めてくれることかどうかで判断する（慣習的水準）児童が多かった。資料は、児童が考えやすい身近に起こりうる場面とした。相手の立場に立って考え、友達と理由を伝え合うことを中心とした授業を行うことで、学級集団としての道徳性を高め、児童の日常に生きる力を身に付けさせたり、様々な意見に触れることで、自分の考えを見直し、考えに広がりもたせたりしたいと考えた。ここでの生きる力とは、社会生活の中で人間として判断できる資質や問題解決能力とする。

3) 具体的な支援の手だて

①内発的動機づけに基づく学習

資料の厳選 道徳的な葛藤や矛盾の場面に立たせ、自分の考えを理由付けの中で明らかにしていくことができるジレンマ資料を中心に授業計画を立てた。資料の結末を提示しないことで多様な考えを引き出せるようにした。

カラーカードの活用 予想される考えを3つの色で区別し、各自が色の

カードで自分の考えを友達に示しながら理由を伝え合う活動を中心に授業を展開していく。「カラーが同じ友達との意見交流→カラーが違う友達との意見交流→全体交流」という授業の流れをパターン化した。

机の配置の工夫 机の配置を丸型にすることにより、互いの顔を見合いながらの発言を可能にし、友達の考え（カラーカード）を確認しながら伝え合える環境づくりにも配慮した（写真9）。

自らの成長をふりかえるワークシートの工夫 1時間の授業の中で自分の考えが誰のどのような理由付けによって変容したのか、振り返ることができるようにした（図46）。



写真9 互いに向き合って活動する児童

4) 授業の実際

以下にジレンマ資料を使用した道德の授業展開の例を記載する。


自分の身の周りにも起こりうる資料を取り上げたことと、資料の結末を授業の導入でえて明かさなないことで、児童は様々な行動を予測できた。自分だったらどうするか考えその理由付けを行い、ワークシートに書き込むことで自分の考えを見直

☆伝え合いをしたあとの自分の考え

黄 青 赤

☆一番さん考になつた考えは？

だれの どのな考え



☆あなたならどうする？


黄 青 赤

そのりゆう

まちがえた服 番 ()

めあて 「自分がよし夫くんの父の立場だったら、どうするか考え、友達と考えを伝え合おう」

図46 考えの変容が分かるワークシート

道德学び合いプラン		
資料	まちがえた服 1-(4) 正直・誠実、明朗、反省	
本時のめあて	自分がよし夫くんの父の立場だったら どうするかを考え、話し合おう	
授業の流れ	学習活動	
	形態	① 教師の範読を聞く。
	全	② めあてを確認する。
	全	③ 自分がよし夫くんの父の立場だったらどうするか考え、ワークシートに書き込む。
	個	④ 自分の考えを3つの意見に当てはめ、同じカラーカードの子を見つけ、自分の考えを理由を含めて伝える。
	ペア	⑤ 違うカラーカードの子を見つけ、自分の考えを理由を含めて伝える。
	ペア	⑥ 相互指名で自分の考えを発表する。
	全	⑦ 友達との意見交流後の自分の考えをワークシートに書き込む。
	個	⑧ 資料の続きを読み、よし夫くんの父がどんな気持ちになったかを考える。
	全	⑨ 授業の中での友達のよかったところを発表する。
○子ども主体のコーディネート ○高め合い深め合いのコーディネート	・自分の考えが誰の意見によって変容したかがわかるようにワークシートを工夫する。 ・自分の考えを友達に表示するカラーカードを活用し、同じ考え違う考えを持つ友達とそれぞれの根拠となる理由を伝え合い、幅広い視点で資料に向き合えるようにする。	

す機会にもなった。ワークシートからは、間違えて持って帰ってしまった服をどうするかという課題に対して次のような考えの変容が見られた。

	伝え合い活動前（学習活動③）	伝え合い活動後（学習活動⑦）
児童A	こっそり返す 理由：ばれてお母さんに怒られたくないから。	正直に返す 理由：直接会って返す。そしたら心がすっきりするから。
児童B	正直に返す 理由：正直に言えば許してもらえるかもしれない。	正直に返す 理由：こそこそしたくない。返さないとつらい気持ちになるから。

ワークシートより一部抜粋

児童A児童Bの記述からも分かるように、伝え合い活動によって自分の考えの理由付けがそれ以前よりも道徳的な見方となった児童が多かった。さらに、似たような経験をした時の行動を振り返り「次に同じようなことが起こったら正直に返したい」という自分の生活と結びつけて考える児童の姿も見られた。

4 グループ全体の考察

本研究では、児童が関わり合い自分の考えを伝え合う活動を取り入れることにより、自分の考えを広げたり深めたりし、身に付けた知識や技能を活用できないかということに焦点を置いて研究実践を行った。仮説である「児童が関わり合い、自分の考えを伝え合う活動を取り入れることにより、自分の考えを広げたり深めたりすることができ、身に付けた知識・技能を活用できるようになるであろう」に対して、手だてが有効であったかを考察する。

手だて① 内発的動機づけに基づく学習

実践1では物語の地図を作成しながら教科書教材の読み取りをしていったことで、基本的な読解法を習得し、「自分にも書ける」「今度は自分の力で書くのが楽しみ」と意欲を高めていった。活用段階での自分が選んだ物語の地図を書く活動では、主題を読み解き文章に書き表すことについて、いくらかの成果をあげることができた。実践を行った学級は30名の児童で構成される。その中で、主題を自分の言葉でまとめられる児童は22名を数えた。

実践4では、単元全体と1時間の見通し及び学ぶ価値を明確にしたことに加え、協同学習の手法を取り入れて参加度を高めた実践により、児童は内発的な意欲を持って学習を進めることができた。算数は暗記科目であるという児童の認識の出発点から、小集団で全員が説明するという学習内容を取り入れており、単元の学習終了後には、自分のみならず集団

としての思考力の高まりを述べる振り返りも見られた。手だてが有効に働いた実践例と言える。

実践5では、家族のための献立作りという学習の最終目標を設定したことで課題が明確になり、学習意欲を高めることができた。また、自分が考えた献立の絵を示しながら、①誰のために、②健康状態や今の様子を考えて、③どんなことを工夫したか、を伝え合う事項とした活動では、自分の生活を振り返ったり給食を参考にしたりしながら熱心に考え、意見を高め合おうと努力する姿が見られた。その後の振り返りから、この学習が家庭での食生活に生かされたという実態を確認することができた。

実践6と実践7では、児童が取り組みやすいCM資料やジレンマを感じる資料を取り扱うことで、自分の生活と結びつけ、伝えたい、意見を交流したいという児童の姿が見られた。実践7の振り返りの場面では、「意見が違う友達と理由を伝え合うのは楽しかった」「いろいろな考え方があると思った。いつでも自分に正直でいられるような人になりたい」という感想が聞かれた。実践7では、授業実践後の「生活に役に立ったか」というアンケートに29名中22名の児童が「役に立った」と回答している。しかし、実践6と実践7においては、道徳という領域の特性上、活用する場面は生活そのものとなり、仮説に迫ることができたかどうかは、今後も同様の実践を継続し、児童の変容を見守っていく必要がある。

手だて② 自らの成長をふりかえるワークシートの工夫

実践2では、登場人物の心情など自分の考えたことがすぐに分かるように、教科書本文にサイドラインを引いたり、書き込みをしたりすることができるワークシートを用いることにより、伝え合いを行う前と伝え合いを行った後の自分の考えがどのように変容したかを客観的にとらえることができた。

実践3では、視覚的に数えることができる問題から、視覚的には数えることができない問題をワークシートとして用意し、本時での既習事項を使って問題が解けるか、本時での既習事項を活用して問題が解けるかを検証したところ伝え合い活動後の正答率が76%であった(図47)。

これらの児童の姿より、「児童が関わり合い、自分の考えを伝え合う活動を取り入れることにより自分の考えを広げたり深めたりすることができ、身に付けた知識・技能を活用できるようになるであろう」という仮説に迫る二つの手だては有効だったと言える。

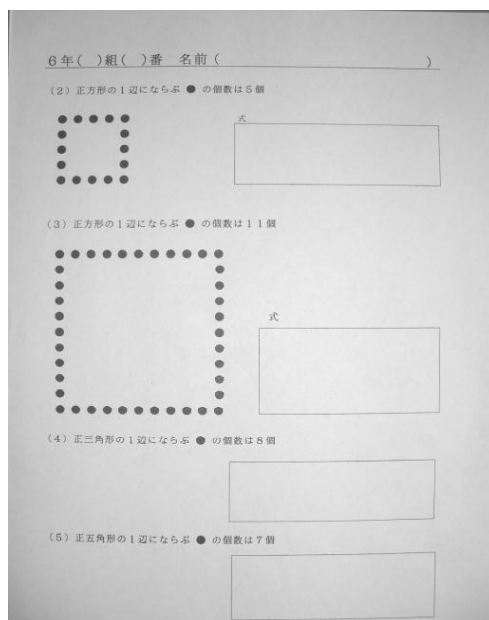


図47 実践3で検証したワークシート

豊かな文章表現力を育成するために 看図作文を利用した取り組みを通して

山田 敦貴（犬山市立犬山北小学校）
浅輪 郁代（犬山市立犬山北小学校）
松本 哲廣（犬山市立城東小学校）
坂元 隆（犬山市立東小学校）
瀧 敏秀（犬山市立池野小学校）
袴田 知世（犬山市立羽黒小学校）
亀山 治夫（犬山市立羽黒小学校）

はじめに

私たちのグループのメンバーは日頃から、子どもたちの表現力の乏しさに悩みを抱いていた。感想文などを書かせても、「すごかった」「楽しかった」や「またやってみよう」などのありふれた表現方法でしか、自分の思っていることを表現できない。また、作文自体、書くことが苦手であったり、嫌いであったりする児童がたいへん多いという悩みを抱えていた。

そのため、今回の研究では「作文で表現力を身に付けさせるにはどうしたらいいのか」というテーマを設定した。ここでいう「表現力」は「想像して書く力」と定義した。この研究実践を通して、子どもたちが自分の思ったことを生き生きと書けるようになり、表現する活動を好きになってほしいという願いを持って、研究を始めることにした。

1 研究の仮説

子どもたちに「想像して書く力」を身に付けさせるためにはどんな方法があるかをメンバーで話し合った。そこで、2009年8月、羽黒小学校の現職教育で研修が行われた「看図作文」からヒントを得て、4コマ漫画を見てストーリーを想像し、物語を文章で書く活動を行うことにした。「看図作文」というのは「絵図の内容を読み取らせ、それをもとに作文を書かせる」中国独特の作文指導法である（鹿内信善、2003）。看図作文は、「絵図の内容をわれわれの生活経験と関連づけて考える」とこと、「想像の根拠を絵図の中に求める」とことの2つの方法で合理性のある想像を展開することができると鹿内は説明している。

以上のことから、

看図作文に取り組むことで、「想像して書く力」が身につくだろう

という仮説を立てた。

また、このような絵図を見て描く活動は、小学校学習指導要領国語科の第3学年及び第4学年の「A 話すこと 聞くこと」の(2)のウの、「図表や絵、写真などから読み取ったことを基に話したり聞いたりすること」に当てはまる。今回は、読み取ったことを伝え合う活動ではなく、文章にして表現する活動として扱うが、PISA型読解力を育てる学習でも非連続テキストの読解として取り上げられている。東京書籍の国語の教科書では第3学年と第5学年で場面絵を基に想像してお話を作る活動が取り入れられていて、児童の好きな活動になっている。楽しく取り組めることも期待して仮説を検証することにした。

2 研究の方法

今回のメンバーは5つの小学校に分かれているが、全員が5年生と6年生の担任であることから、同じ実践をし、検証をすることにした。そのために、次の13項目を統一して、研究を進めた。

- ①書くことが好きかどうかの事前アンケートをとっておく。
- ②全ての教師が同じ教材で実践する。(順番も同じにする)
- ③漫画の中の台詞は空白にしておく。
- ④教師があらすじを説明しない。
- ⑤4コマを同時に見せ、全てを見てから文を書くようにする。
- ⑥作文を書く前に漫画をよく見て、気がついたことを全体で確認する。

気がついたことの例

- ・日中である。
 - ・眼鏡の人は怒っている。
 - ・目がない。
 - ・しっぽを掴まれて汗をかいている。
 - ・最後の吹き出しは叫びである。
 - ・しっぽに矢印が付いている。
- ⑦ストーリーの「落ち」は自由とし、正解を求めない活動にする。
 - ⑧1時間で完了する活動にする。
 - ⑨次の実践までに作文の評価を子どもに返し、自分の改善点に気づけるようにする。
 - ⑩4回の実践を通して、書けなかった児童の変容を追跡・分析する。
 - ⑪事後のアンケートをとる。
 - ⑫書けなかった児童が書けるようになった要因を探る。
 - ⑬作文を完成させた後に、「友達の作文を読みたいか」「友達に自分の作文を読んでもらいたいか」についての振り返りも行い、その変容も探る。

3 実践

(1) 第1回実践「親子」

最初の課題は、メンバーで教材になりうる漫画を収集し、その中から選出した。選出の基準は、「台詞を抜いて読んだとき、物語を自由に想像する余地が適度に残されているか」ということである。

本時で取り上げた漫画は、登場する二者が町で偶然出会い、両者ともしっぽに目があることから互いが親子であることに気づくというストーリーである(図48)。

子どもたちは、漫画が教材であることも手伝って楽しく取り組んでいた。作文を書かせる前に、漫画から気がついたことを聞くと、二人のしっぽに同じ印があることに

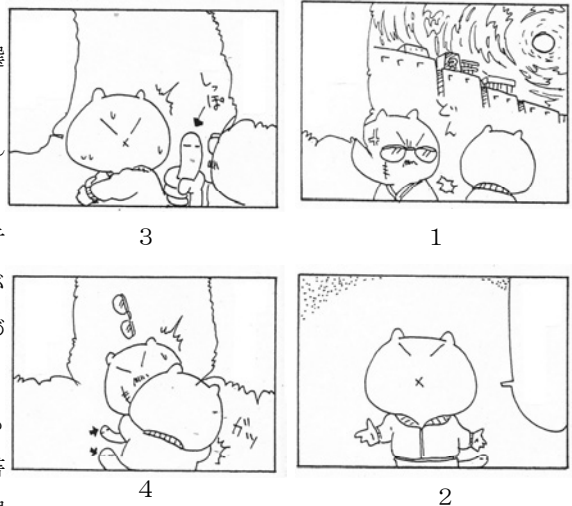


図48 親子

気がつく児童が数名いた。「二人はたぶん親子だ」と言う児童もいたが、敢えて何も言わず、どんな設定でも構わないことを強調して書かせた。

始めはなかなか筆が進まない様子だったが、2枚目の原稿用紙を取りに来る児童が出てくる頃には、全員が集中して黙々と書いていた。数人が原版通り、しっぽの目に気付き、親子の再会を喜んでいるというストーリーにまとめていた。

しかし、登場人物の人相が悪いことや、最後の絵の様子から「殺した」とか「殴った」という過激な言葉が多かった。しっぽの目を印と解釈したものも多かったが、ストーリー展開に矛盾がなければ評価には影響は与えないことを確認した。

(2) 第2回実践「亀と拳銃」

第1回と同じく漫画から教材を探したが、基準を満たす漫画を見つけるのは難航した。漫画の大半は、誰が読んでも同じ解釈をするような分かりやすいものか、台詞がなければまったく理解できないものばかりで、物語の流れがある程度分かりつつも、自由な発想で解釈できるような漫画は見つけられなかった。また、評価の規準も統一しきれていないという課題も見つかった。そこで、以下のことを新たな共通事項として付加した。

- ・4コマ漫画ではなく、看图作文の取り組みで実際に用いられる漫画を活用する。
- ・漫画から気がついたことを確認する段階で、あらかじめ教師が設定したポイントを明示し、そのポイントに触れるように作文を書くことを指示する。
- ・作文の評価は、物語として完結しているか、ポイントに触れて書いているかを規準と

して行う。(下表)

【評価規準】

- A・・・物語として完結していて、ポイントに十分触れている。
- B・・・物語として完結しているが、ポイントの触れ方が弱い。
物語として完結していないが、ポイントに十分触れている。
- C・・・ポイントにまったく触れていない。
- D・・・物語がまったく書けていない。

本時は、昔話を連想させる1コマ目から、意外性の強い展開の2コマ目、3コマ目と続いていく(図49)。児童に1コマずつ見せていったところ、2コマ目、3コマ目と歓声が大きくなっていった。児童にとって書いてみたくなるような教材であることがよく伝わってきた。作文を書いている時も集中しており、30分ほどの時間もほとんど声を出さずに取り組んでいた。

ポイントを明示して書かせたため、そのポイントに沿って書いてある作文が多かった。しかし、プロローグやエピローグを想像することに思考が傾き、漫画そのものへの触れ方が弱くなる傾向が見られ、作文としては文章が少なく単純な展開になりがちだった。

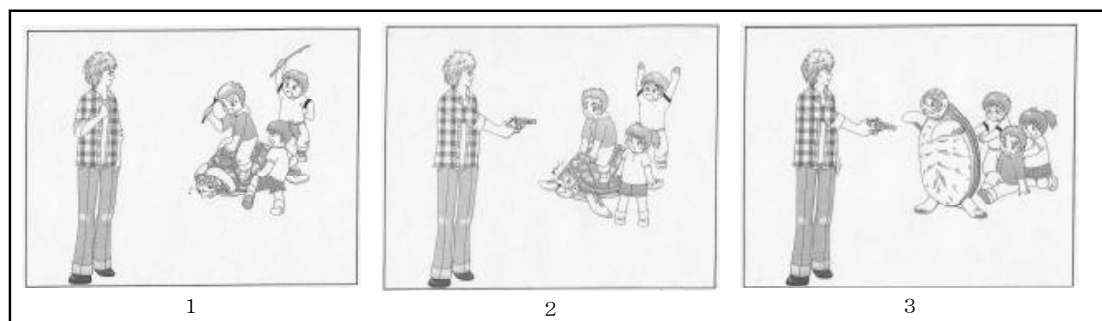


図49 亀と拳銃

(3) 第3回実践「カッパ」

本時も前回同様、看图作文の実践から教材を選出した(図50)。4コマ漫画で起承転結のはっきりしており、物語の展開が比較的分かりやすい教材である。前回のような意外性のあるものではないため、児童の反応は特別に大きくはなかったが、想像して書く習慣が身につけているためか、すぐに書き始める児童が多く見られた。

児童が書いた作文を読むと、内容が豊かになってきたことを感じる。全体の評価としてはあまり変わっていないが、想像したことをたくさんの文章で表現できるようになってきた。カッパがカメラを取った理由も当初予想した「写真を撮られたくないから」というものが多かったが、さらに理由をつけ、「写真に撮られてしまうとカッパ伝説がなくなるから」という説明をカッパに言わせたり、「川の中のたくさんのカッパをカメラで撮ってき

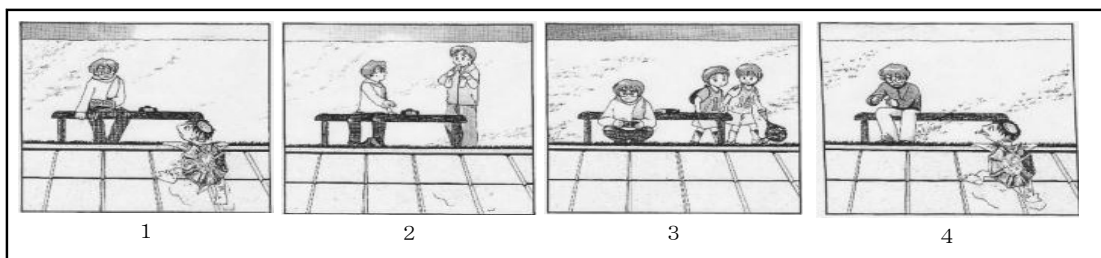


図50 カッパ

たよ」という親切なカッパが登場したりして、読む方も楽しくなってきた。

しかし、児童からは「書きにくかった。」という声も聞こえた。展開が一意的で、自由に想像できる部分が少なく感じた児童が多かったようである。このことから、児童が想像して書くことに楽しさを見出していることが感じられる。

(4) 第4回実践「届け物」

本研究の最後の実践ということで、物語の展開がこれまでで最も分かりにくく、想像の幅が広いものを選んだ(図51)。コマ数は2つと少なく、はっきりした「落ち」も描かれていない。人物の表情も乏しく、感情を推察することが難しい絵である。ただし、2つの絵には細かな違いがたくさん描かれており、想像を膨らませる素材は随所に散りばめられている。どれだけ多くの違いを生かし、ストーリーに組み込んでいくかが評価のポイントとなった。

児童は、始めは困惑していたようだったが、気が付いたことを確認していくと、次第にイメージが膨らんでいったようで、これまで同様、黙々と作文に取り組む姿が見られた。作文の内容はさらに豊かになり、筋道の通った物語が多くなった。文章量も全体的に多くなり、2枚以上書く児童が多くなった。児童からは、「違う部分がどうして変わったのかを考えるのが楽しかった」「友達と読み比べてみたい」という声が聞かれた。

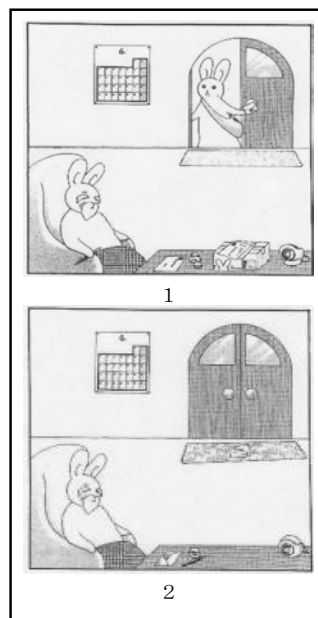


図51 届け物

4 抽出例

(1) 犬山北小6年A児

A児は学力が低く、読み書きや基本的な計算も困難な児童である。活動にはがんばって取り組むが、集中力が持続しない。文章を書かせると、なかなか筆が進まず、最後まで書ききれないことが多い。漢字をほとんど使わず、記号の使い方や正しい文の書き方が身に

付いていない。話し方もたどたどしく、幼稚な表現が目立つ。

しかし、本実践には終始前向きで、楽しんで取り組む様子が見られた。ストーリーには
敢えて何も指導を入れず、好きなように書かせた結果、進んで考え、文を書く姿が多く見
られるようになった。途中で集中力が切れることもあったが、少しの声かけですぐに再開
することができた。その中での第1回と第3回の作文を比較したい。

第1回

こら、そこのきみ、ぶつかって、いたかったのに あやまらないのか。
べつにいいじゃん。ぼくは いたくなかったから。
よくな〜い、てゆうかこのしっぽ なんて かおになっているんだ。
ど・どうでもいいだろ。
てゆうか あんただって 同じじゃん〜。
あ、メガネが、こ、こら や、やめろ く、くるしいし、うごけないだろう。
つづく。

第3回

「なぞのかっぱと、山田くん」
ある日山田くんが 本をよんでいました。
その時、土の中から なぞのかっぱがでてきてこういいました。
「やあー メガネ男。」と、いいました。
すると山田の友だちのげん太くんがきて、「どうしたの山田」と、ききました。
山田がかっぱの話をする、げん太が、なににってんだよ〜山田 かっぱが土の中
から出るわけないだろ、といいました。
山田は心の中でいいました。
「おかしいな〜？見まちがいだったのかな〜？」と、思いました。
次の日、
山田は、もういちど同じところにきて・・・「こんど見たらカメラでとってやる。
そしてかの女をつくるんだ〜」と、いってカメラをもって、かまえました。
そこへ男の子二人がとおり いいました。
「きょうのサッカーもおもしろかったなー。」とサッカーの話をして
男の子が「山田なにしているんだろう。」といいました。
けど、山田はなんにもいいません。
男の子がいったとき山田のカメラがなくなって
「あれ？カメラがない。」といいました。
そこでカメが出てきていいました。

「カメラありがとう」といいました。

山田はみんなに かつぱのことがしんじられなくなったのでした。

そして、カメラももどってこなかったのです。

おわり

まず、書く量が大幅に伸びたことが変化として挙げられる。行数は3倍近くにまでなった。ところどころ分からない表現や誤った表現が見られるが、自分なりに物語を完結させるところまでは書けるようになった。また、登場する人物の表情をよく読み取って書いたり、時間の経過を意識して物語を作ったりすることができおり、内容の豊かさにも変化が見られた。事前と事後のアンケートでは、ともに「作文はめんどくさいから嫌い」と回答していたが、書くことに対する消極的な態度が改められ、意欲的に取り組めるように変容したと言える。

（２）城東小 6 年 B 児

B 児は基本的な読み書きや計算はある程度できる児童である。しかし、気分のムラが激しく、気が乗らない時には集中力が持続しない。また、作文が苦手で面倒くさいという理由から、筆が進まないことが今まででも多々あった。

本実践では、初回や第2回は「書き方が分からない」と言い、なかなか書き出そうとしなかったが、ヒントとなる事柄を与えると、何とか書きあげることができた。後半の第3回、第4回になると、書き方のコツをつかんだのか、ほとんど質問することなく、作文を書くことができた。その中での、第1回と第3回を比較したい。

第1回

ある日、町で二人のタヌキがぶつかって、わるい方がキレて「何ぶつかってんだよ」って言った。そしたら、もう一人の方が「すみません でもあなたが ぶつかってきたんでしょ」って言った。そしたら、わるい方が「ふざけんじゃねーよ」って言って しっぽをつかんだ。そしたら、「はなせよ！」って言ったら 悪い方が「ふざけんな」って言ってなぐったら もう一人が「あなたがふざけているんでしょ」ってなぐった。そしたら、悪い方がかけていたサングラスがとんでいった。

第3回

ある日、メガネをかけた男の人が、ベンチにすわっていたら、土手の方からカップが歩いてきて、メガネの男の人はびっくりして見ていたら、カップはまた川の方にもどって行ってしまいました。

そこにランニングをしていた男の人に、「今そこにカップがいたんです。」と言

ました。すると、ランニングしていた男の人は「ハ〜？」と言ってまたランニングしに行ってしまいました。

メガネの男の人は信じてもらえないなら写真で写せばいいと思って、持ってきていたカメラでとろうとして ずっとまっていたけど、カップは来なかったから次の日にまた来ることにしました。

メガネをかけた男の人は カメラを持ってまっていたら 手がすべって川にカメラが落ちてしまいました。そうしたら、川の方から何かをくわえているカメが来て 近くに来たカメの口を見たら、カメラをくわえていたので、メガネの男の人は びっくりして動くことができなくなってしまいました。カメを見ていたら、カメはカメラをおいて また 川の方へかえっていき、カメラもこわれて結局カメをとることができないでおわって

変化としてまず挙げられるのは、書く量が圧倒的に増えたことである。第3回では1枚半ほどの文章を書き上げた。また、第1回では話し言葉で文章が書かれており、文章が稚拙であることは否めない。一文が大変長く読みづらさも感じる。しかし、第3回では敬体の文章で、起承転結をしっかり意識して作文できていることが伺える。依然として長い文もあるが、一文がかなりすっきりまとまっていることも成長として挙げられる。アンケートでは事前も事後も作文は好きではない方にチェックしていたが、作業の取りかかりのスムーズさを鑑みると、以前より意欲的に作文に取り組めるようになったと言えるであろう。

(3) 東小5年C児

C児は学力が低く、読み書き計算などの基本的な学習の力が身に付いていない。授業に対する意欲は見られるが、集中することができない状況である。

文章を書かせると、基本的な文章の決まり事が守れず、「ぼくは」を「ぼくわ」と書き、また漢字をほとんど使わずに書いている。ただ今回の取り組みでは、初めから意欲があり、授業を楽しみにしている様子で、自分から進んで文を書く様子を見せた。

第3回

ある日 一人の男の人が川の写真をとっていました。すると、とつぜん川の音がざーざーとはげしくなってきました。男の人は耳をすまして聞いていました。ピョコととつぜんカップがとびだしてきました。男の人は「よしチャンスだ」と言ってカップにカメラを向けると、カップは川へにげだしてしまいました。

ランニングをしている人が川を通っていきました。すると男の人は、「カップです。今見たんです。」と言っています。ランニングの人は、「カップなんているわけないだろう。」と言ってかえっていきました。男の人は言いました「ぜったいカメラでとってやる。」

サッカー少年が川を通っていくと、「ハハハなにやっているんだあの人は」と言ってかえっていきました。するとカメラを川におとしてしまいました。

カップがくると男の人は、思いついて「そうだカメラでカップをとっちゃいけないんだ。」と言いました。カップはうれしそうなかおで川へかえっていきました。

第4回

ある日のこと一人のウサギが「あらそのつくえにある物とどけなきゃ」といい そういったウサギがとどけに行きました。としをとったウサギがねています。目がさめるとおじいさんウサギが「あっとちゅうでねてしまった」といい手紙を書き始めました。「ふうー」とつかれてつくえを見ると、「うあー」つくえにあった物がなくなっています。おじいさんウサギはあわててさがすと、「ん！」げんかんの所に一まいの手紙があります。おじいさんは、あわててとりに行くと、なにか書いてあります。「わたしは、つくえのうえにあった物をとどけてまいります」と書いてあった。急いでつくえにある電話で話をしました。「おまえ！！机にあったものをどおした。」としゃべるとウサギは「ごめんなさい」といいました。急いで帰ってくるととどけにいきました。おじいさんは「あぶなかったー」といいほっとしました。

C児は事後のアンケートでは文章を書くことが好きと答えている。理由としては「文章を書いていると好きなことが自由に書けるので、楽しい」というものである。

文章の書き方や表現はどれも幼さが残る。語彙の使い方なども5年生としては乏しい。しかし、国語やその他の授業のノートではなかなか筆が進まないのに、今回の作文では内容を自由に書くことができることから、毎回原稿用紙に1~2枚を書くことができていた。また「自分の書いた文章を読んでもらいたいか」という問いについては「読んでもらいたい」と回答している。

C児にとっては、今回の取り組みは意欲的に活動することができたようである。また、次回の取り組みを楽しみにしているようであった。

(4) 羽黒小6年D児

D児は学力はあるものの、自信のなさから表現することを苦手としており、発表や何かを書く場面ではいつも固まってしまう児童である。初めて経験することや、今回のような自由に表現してよいものは特に苦手であり、第1回はほとんど書けなかった。

第1回

暑い日、ふりょうに会ってしまいましたが、冷静に対応して、なんとか危機をのりこえました。今日は大変な目にあつたなあと帰り道でそう思っていました。

第2回では、第1回の経験から活動内容が分かり、物語の始まりから終わりまでの流れを少し具体的に書けるようになった。

第2回

「かめと青年」

ある日、かめをいじめている少年少女の三人組がいました。そこへ通りがかった青年が「やめろ。」と言って銃を出し使おうとしています。そのとき、かめが立ち上がり「うたないでください。」と言ったので、青年はたじろいでしまい、うつのをやめました。その後、青年は調子がくるい、帰りました。それから少年と少女の三人は、二度としなくなりました。

第2回の評価を返す際に、台詞が入ったところを朱書きでほめて返した。そうすると、この後の第3回、第4回も登場人物の台詞を入れて話を書くことができていた。また、いつもは書き始めるまでに時間がかかり、活動時間の半分は作文用紙が真っ白なままだったが、第4回には書き始めるまでの時間が5分ほどになった。

第3回

ある日、青年が本を読んでいると、川からカップが出てきました。川の近くを通った男の人と会って、「今、いっしゅんだけどカップが出てきたんだ！」と青年が言いました。男の人はどこかに行ってしまう、通りかかったサッカー少年の一人が「この人、なにをやっているんだらう。」と言い、帰って行きました。その時に青年は、カメラを持ってカップを待ちかまえていました。すると、そこへ、カップが出てきました。その青年はカメラを持っていなかったで、とれませんでした。なぜ、カメラを持っていないかという、川に落としてしまい、取りに行ったのですが見つからず、あきらめて上がって、かえの服にかえたのでした。カップと青年は帰って行きました。

第4回

「まちがい」

六月のある日、うさぎのゆうびんやが「すいませーん。」と言って入ってきました。うさぎのゆうびんやが「このまえ、そちらの箱をまちがえて持ってきてしまったので、わたしてもらえないでしょうか。」と言って持ち去ってしまいました。かわりに、手紙を置いていきました。おじいさんうさぎは、その後、やりかけの手紙を書いてげんかんに置きました。その後、ねむってしまいました。

D児は絵の内容に忠実に文章を組み立てることはできている。全4回の書く様子を見てみると、第3回のカップの話が一番書きやすそうで、D児の中では一番長く書くことができた。起承転結が4コマで表されており、話の流れも4つの漫画の中で一番想像しやすいからだろう。今回の実践を通して、少しずつ書くことへの抵抗が少なくなっているのので、今後も継続して書く手がかりを与えてから書く活動を実践を重ねていくと、表現力がついていくと考えられる。

5 結果と考察

実践前と実践後に、児童の作文に対する意識調査を行った。ここでは、意識調査と看图作文を実践したときの児童の様子や実践結果を合わせて考察する。

①作文が好きか嫌いかにについて

「あなたは、作文を書くことが好きですか」という質問を行ったところ、事前では「好き」と答えた児童が38%、「嫌い」と答えた児童が62%で、予想通り作文に苦手意識を感じている児童が多いという実態が明らかになった。しかし、4回実践を行

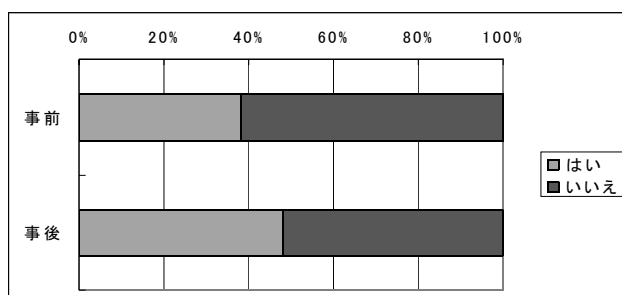


図52 「あなたは作文を書くことが好きですか」

った後、もう一度同じ内容でアンケートを行ったら、「好き」が48%、「嫌い」が52%で、約10%「好き」の割合が増加した（図52）。

作文を書くことが「好き」、「嫌い」の理由を自由記述で取った結果は以下の通りである。

「好き」と答えた理由

○前までは大変だから好きではなかったけど、書いてみると楽しい。おもしろい。

↓

なぜ「楽しい」「おもしろい」と感じるのか。

↓

- ・いろいろなアイデアが浮かぶから。
- ・素直に物事を表せるから。
- ・自分が思ったことを表現したり、その分に合う言葉を考えられるのが楽しいから。
- ・すらすら書けるようになったから。
- ・たくさん書けるようになったから。
- ・伝えたいことが前より書けるようになったから。
- ・自分の世界に入って想像を膨らませていくことができるから。

- 物語を作ると自分の夢と近づきそうだから。
- 話を書いたり考えたりするのが好きだから。
- 後から振り返ると懐かしく感じたりもするから。

「嫌い」と答えた理由

- 書き出しが分からない。思いつかない。
- 書きたいことはあっても、どう書けばよいのか分からない。
- 考えるのが大変だから。
- 読書感想文は好きではない。
- 面倒くさい。

「好き」と答えた児童は、実践を積み重ねることで表現力がついてきて達成感を感じたり、自由に表現してもよいことに魅力を感じたりしていることが分かった。特に事前のアンケートで「嫌い」と答えて、事後のアンケートで「好き」と答えた児童は十数名と多くはないが、その多くは、「自由に思った通り書けるから」という内容で答えている。

一方、「嫌い」と答えた児童は、まだ表現の仕方が分からないこと、書く行為自体が嫌いであることが分かった。

また、「好き」「嫌い」と評価の高さは関係がなかった。「嫌い」と答えていても、毎回表現豊かに書き、高い評価を受けている児童もいる。

今回の事後アンケートは、看图作文について書くのが好きかどうかを聞いたので、今回「好き」と答えた児童も他の作文になるとどのような意識になるのかは分からない。しかし、10%とはいえ、書くことへの苦手意識を軽減させることができたことは、他の種類の文を書く際にも反映されることが期待できると思う。

②書ける量について

回数を重ねるうちに、書ける量が増えた。このことは、意識調査の「原こう用紙で作文を書くとき、どれぐらいの量で『多い』と感じますか。」という質問の結果からも読み取ることができる(図53)。実践前は2枚(800字)が41%で一番多かったのに対して、実践後は2枚以上が45%になり、2枚の35%を上回った。グラフからは、実践前に「5行」や「半分」を選んでいていた児童が実践後は「1枚」を選ぶようになり、実践前「2枚」を選んでいていた児童が「それ以上」を選ぶようになったように見える。書く力がついてきて、作文を書くことへの抵抗感が軽減されたと言えるだろう。

③文章について

子どもが作文が苦手と感じているだろうと思われる要因を予想して実践前と実践後にアンケートを採った(表3)。

一番数値の変化が大きかったのは「一文が長くなってしまう」の10%増加だった。この項目と「途中で何を書いているのか分からなくなる」の2%増加は一見悪くなった結果に

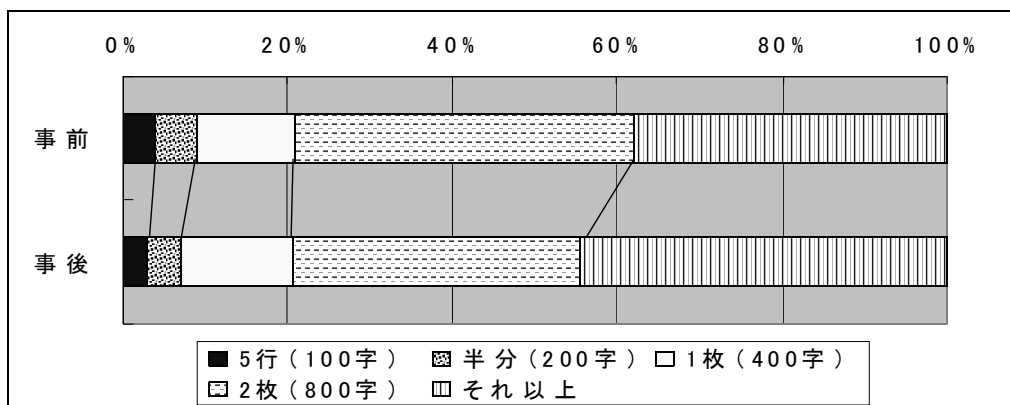


図53 「原こう用紙で作文を書くとき、どれぐらいの量で『多い』と感じますか」

表3 作文を書くとき当てはまる問題点

	書く内容が なかなか決 まらない	書き出しを どう書いて いか分か らない	一文が長く (3行程度) になってし まう	同じような 表現を何度 も繰り返 してしまう	伝えたいこ とがあるの に言葉が見 つからない	途中で何を 書いている のか分から なくなる	一度書いた 文章は読み 直さない
実前	52%	42%	34%	72%	52%	31%	30%
実後	49%	39%	44%	72%	50%	33%	28%

見えるが、実際の取り組みの様子を鑑みると、児童が書くことに熱中してしまった結果とも受け取れる。

「同じような表現を何度も繰り返してしまう」という項目は全く同じ数値だったが、後の項目は2~3%減っている。

評価については、数字的にはわずかだが、図54から分かるように実践の回を追う毎にD評価が減り、第4回にはわずかになっている。また、A評価B評価とも増加し、4回目には80%が観点のポイントに触れた描写ができるようになった。表3は自己評価なので、苦手意識が改善できていない結果の数値と考えられる。

したがって、4回の実践を通して意識的には大きな変化は見られなかったが、実際に書く量や内容の豊富さについては高まりが見られたと言える。

6 今後の課題

今回の看图作文の指導では、考察①にみられたように、作文を「好き」と答えた児童が増加している。今回の作文で児童が「楽しい」「面白い」と感じた部分として、絵から「ア

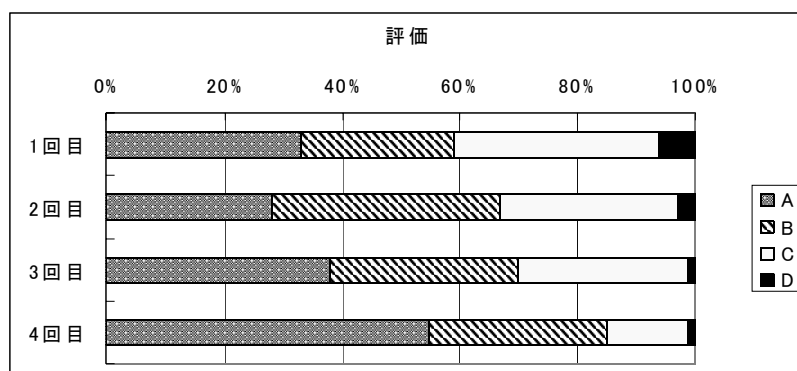


図54 4回の作文に対する評価の変化

アイデアが浮かぶ」ことや、それを「自由に表現できる」ということの2点を挙げた児童が多かった。また、授業後、児童に直接話を聞くと、友達の子の発表を聞くことが楽しいと答えた児童も多く、看图作文の授業後は、毎時間、休み時間にお互いの感想などを伝え合う場面が見られた。

このことから、作文を通しての自由な表現活動や、作った作品を伝え合う活動の部分では、児童が楽しいと感じて取り組むことはできたといえる。しかし、作文を「書く」活動そのものを好きになったかといえれば疑問が残る。

事前アンケートから、作文を「嫌い」と答えた児童のほとんどが、その理由として「大変」「難しい」「面倒くさい」のいずれかを挙げている。これは、事後アンケートの記述部分でも同様であり、依然として半数の児童が作文嫌いのままである。今後もさらに改善に向けて取り組んでいく必要がある。

もう一つの課題として、事後アンケートの結果を見ると、「同じような表現を何度も使ってしまう」という技術的な部分に課題を感じていると答えた児童が約7割にのぼっており、ほとんど改善は見られなかった。さらに、約半数の児童が「伝えたいことがあるのにぴったり来る言葉が見つからない」と答えている。

原因として、今回の看图作文では表現力を身につけさせることが主な目的であるため、作文の文法や改行、段落分けなどの指導は行わなかった事が挙げられる。これは、

- ・1時間で1つの物語を作り上げ、発表するという指導計画上、時間的に余裕がない。
- ・書き直しの作業が入ると、その分児童の「想像して書く」時間が失われる。
- ・書き直しの作業自体が児童にとっては苦痛である。

といった理由からであり、看图作文で行うには向かないと判断したためである。

看图作文などでいくら意欲的に取り組めるようになって、それを十分に表現できるだけの技術や語彙力がなければ、自分の書きたいことと書けることの乖離が進んでしまい、思ったことが書けないというストレスを増大させてしまう恐れがある。逆に言えば、ある程度の技術が身に付き、自分の思ったことを書けるようになれば、書きたいことが書けないという理由から作文嫌いになっている児童を減少させることが可能となるのではない

か。

このような観点から、書く意欲を引き出す働きかけと平行して、基礎的な文法指導の時間や言葉を知り、語彙を増やすための指導を行っていく必要があるといえる。

また、今回の看図作文では物語文を作るという課題だったが、文章を書く課題は物語文以外にも説明文や評論文、発表原稿などがある。今回の実践をこれからの指導にどう生かしていくかについても今後の課題としたい。

おわりに

今回の実践を通して、子どもたちが意欲的に表現活動を進めるには、「表現したい！」と思わせるような題材や資料の提示が大切だと強く感じた。「書きたい」と思わせる資料であれば、子どもたちは大人の想像を超えるような内容の文章をすらすらと書き上げていく。また、今回は4回の実践を定期的に行ったことで、作文に対する苦手意識や否定的感情が回を重ねるたびに薄れていったことを感じた。抵抗無く作文を書くためには、やはり、日頃からこつこつと「書く」練習を積ませる必要があると思った。そうすることで、既習の漢字を文章の中で使えたり、かぎかっこの使い方など作文の約束を覚えたりすることができるのだと思う。これからも、子どもたちが「書きたい！」と強く思えるような題材や資料を集め、表現活動に取り組み、自分の思っていることや感じたことを自分の言葉で表現できる児童の育成に励んでいきたい。

参考文献

鹿内信善 2003 やる気をひきだす看図作文の授業—創造的[読み書き]の理論と実践
春風社

一つの題材に全員が関わりあえる授業を目指して

加藤 誠 (犬山市立東部中学校)
大野 佑樹 (犬山市立犬山中学校)
山下 次郎 (犬山市立城東中学校)
太田 育宏 (犬山市立犬山中学校)
古市 博之 (犬山市立犬山中学校)
加藤 由佳 (犬山市立犬山中学校)

はじめに

犬山市全体で学びを意識した学習を実践しているので、どの学校の生徒も語り合う姿を見ることができる。最近では、生徒が司会をしながら授業を進める実践も見ることができる。数学の授業では、解法を考え説明する姿を学び合いの姿として、モデル化されてきている。英語のペア交流を用いた学習も、一つのモデルとなってきた。生徒の主体性を引き出すような場面を多く取り入れた授業が提案されてきている(写真11、12)。

どの学習活動も、個で考えた後、グループを活用した学習展開となっている。犬山の学びの特徴であるが、そこから全体へ関わり合う姿へ移行していくところが弱い。考えを出し合う場面までは生徒が引っ張っている感じがするが、そこから最後のまとめの部分で教師が出てきてしまい、まとめてしまうことが多いようにも思う。数学だと、考えを発表するところまではいいが、「そこから導き出せる一つの共通性を見つけ出そう」というような展開の授業を見ることは少ない。英語にしても、ペアなどで話した後は、教師がまとめてしまうことが多い。

協同による学びが目的となってしまうと、次への一歩が打ち出せていないのではないかと杉江教授の指導をよく聞く。グループから全体への学習の展開を研究する必要性を感じている。

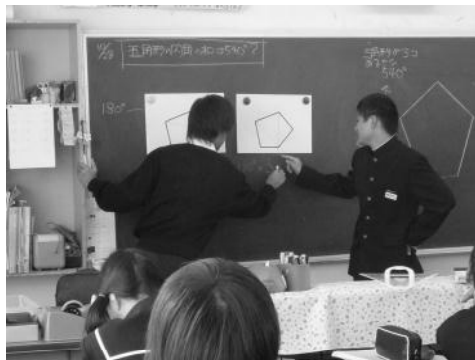


写真11 数学科の解法を説明している場面



写真12 英語科でコミュニケーションを取る場面

1 主題設定の理由

現在、中学校で見られる授業では、グループから全体への学習展開が弱いと本研究グループでは考えている。そこで、主題を「一つの題材に全員が関わりあえる授業を目指して」とした。グループ学習までは、主体的な姿を見ることができるが、その先のまとめの部分は教師の出場と考えている教師が多いのではないだろうか。あるいは、どのように生徒にまとめさせるといかというイメージを持っていないからではないだろうかと感じている。そこで、グループから全体へ学習を広げる過程をイメージできるような展開を提案しようと考えた。

全員が関わっていくためには、個々の生徒が考えを持つことや、グループでの学習が深まっていくような配慮が必要である。個人や、グループの中で思考が止まってしまうような場面を乗り越えないと、全体での学習へと進んでいかない。そこまでのフォローの方法や、グループの中で出した結論からさらにもう一歩進んで、全員が集中して取り組めるような「仕かけ」が必要になってくる。

特にグループ学習をした後、全体学習へと展開したとき、答えが見えてしまっているようでは主題へ迫ることができない。例えば個々のグループの答えに差ができていて、どちらの答えが本当なのかを議論するような場面があってもいいだろう。グループの考えた優先順位を、さらに全体で決め直すときに、もう一度同じ討論を全体で行うプロセスがあってもいいだろう。大切なのは全体で学習をしている一体感を感じられることであり、そのような授業を目指したい。

2 研究の構想

(1) 研究の目的

生徒の主体的な学びを引き出すために、全体に関わり合える仕かけを考える。

(2) 研究の仮説

①個の考えや、グループの考えを引き出す力を鍛えることで、全体に関わる意見を持つことができるだろう。

②全体で学び合うときに、意見のずれを指摘し議論する場を設定することで、全体に関わる学習になるだろう

(3) 研究の方法

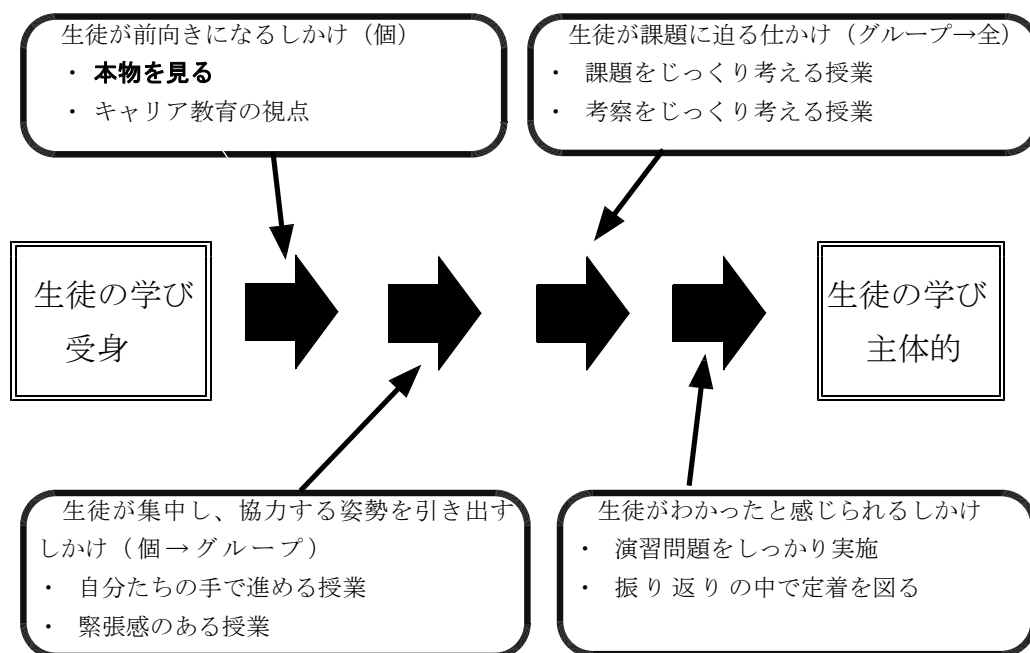
①個の意見づくりとグループの学習づくり

②全員で学び合うための仕かけ作り

全員で学び合うためには、それに応じた意見や考えを持つための段階を踏まなければならない。そのためには学習グループを育てなければ、意見を反映させることができない。個の意見をしっかりとつくるための手法は、様々あってよい。また、グループでの学び合いも、これまで研究されてきたことを活用していくべきである。その基盤をしっかりとっておいて、全体への学習展開を考えたい。

全体へと学習展開を広げていくためには、それだけの仕かけが必要になってくる。その仕かけを考えていくのが本研究の最大のねらいである。

(4) 構想図



3 研究の実際

(1) 実践事例 1 国語

1) 研究の仮説

個の考えや、グループの考えを引き出す力を鍛えることで、全体に関わる意見を持つことができるだろう。

2) 研究の方法

①個々の「話す力」や「聞く力」を高める。

②全員が関わり合える学習の仕掛け作りをする。

3) 研究の実際

①個々の「話す力」と「聞く力」を高める

ア 毎日の授業等で全員が意識して取り組むために

- ・ 具体的目標の掲示
- ・ アンケートの実施
- ・ 学年での自主的な取り組み

例) 学年代表者会で決めた「聞く力」強化運動の取り組みなど

イ 国語科としての取り組み

- ・ 「話す・聞く」の単元を大切に扱う。

ウ 指導案例

単 元	指 導 内 容	授業形態
「聞く生活」を 考えよう 準備物 ・学習の予定表 ・プリント ・CDデッキ ・CD ・ホワイトボード ・ホワイトボードマーカー ・ホワイトボード消し	今日の課題 (3/4時間) メモや図などを工夫して情報を聞き取って、分かりやすくまとめる力を付ける。 ・学習予定表で前時の内容を確認をする。 「立場の違いによって聞き取る情報が変わる。」 ・本時の具体的な課題を知らせる。	個の活動 (2分)
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> 道案内をメモや図などを工夫して聞き取る練習をする </div>	個の活動
	・どのようにメモするか考えさせる。 (例) ・図や地図を描きながら聞き取るなど。 ・プリントを配付する。 ・CDを聞かせる。(2分28秒) ・もう一度聞かせる。(1分10秒～) ・メモをもとに原稿を書かせる。 ・聞き取り問題で、各自確認させる。	聞く活動 書く活動 (8分)
	・隣同士で交換し、教科書p.34の内田さんの話を参考に足りない点を赤で補足し合わせる。 ・ホワイトボードなどを配付する。 ・グループになり、ホワイトボードに案内図を描かせる。 ・グループで各自がメモした情報を出し合い、より完璧な地図を完成させる。	相互評価 グループでの活動 ・話し合い

<ul style="list-style-type: none"> ・完成した地図の発表 ・工夫した点 ・地図をもとに道案内 ・相互評価をさせる。 	活動 話す活動 聞く活動 (39分)
<ul style="list-style-type: none"> ・次時の学習課題を伝える。 	
(1分)	
・座席の形態によって、個の活動とグループの活動をはっきりさせる。	

エ 授業後の反省と今後の課題

授業後、実際に聞くテストを実施した。メモを取る習慣が今までなかった生徒も、メモを取る姿が見られた。また、メモの取り方も、大切な言葉が分かるように工夫したり、記号を使ったりするなどの変化が見られた。やはり、聞き方ひとつを取っても、指導するかどうかで違ってくると感じた。

職場体験のレポートを作成する際にも、図を描くということが生きていたと、この授業を参観した担任の教師から話を伺った。今後は、話し方の指導もしっかりしていきたい。

- ・話し合い活動を意識的に授業に組み込む。
- ・発表やスピーチを生徒にさせる場合、聞くに堪える発表に仕上げる。
- ・聞いていなければ、後でまとめるのに困るという仕かけに心がける。
- ・お互いが聞きたくなるような内容にする。

②全員が関わり合える学習の仕かけ

ア 学習の課題やテーマを話し合いで決める。

- ・生徒一人一人が、心から取り組みたいと思う内容にする。

イ 指導事例

単元 提案のしかたを工夫しよう

単元構想 5時間完了

め見 つ け る ・ 集	①学習の見通しをもつ ②プレゼンテーションの意味を知る。 ③テーマを決める。	【 1 時間 】
	④テーマを分析する。 ⑤言葉を集める。	【 1 時間 】

整理する・ 深める	⑥提案する言葉を決める。 ⑦プレゼンテーションの仕方を工夫する。	【1時間】
・まとめる ・伝える	⑧プレゼンテーションをする。 ⑨発表について評価し合う。	【1時間】 本時
返振り	⑩次へつなぐ。	【1時間】

ウ 本時への思い

今まで「話す・聞く」ことを大切にする授業を進めてきたが、総合的な学習などでの発表の様子をみると、話し手を意識して、分かりやすく発表するまでには至っていない。そこで今回の授業をとおして、そのための工夫について考えさせたいと思う。

テーマに関しては、前の時間に「方言と共通語」を学習して、「ことば」に興味を示したので、この機会に「ことば」に関するものに絞り、さらに関心を高めたいと考えた。

エ 本時の指導

目標

- ①聞き手を意識した分かりやすいプレゼンテーションができるようになる。
- ②他グループの発表をメモを取りながら聞き、適切な質問ができるようになる。

基礎・基本

学ぶ意欲	・聞き手を意識して、一生懸命説明しようとしている。
	・メモを取りながら聞き、多くのことを学ぼうとしている。
技能・表現	・伝えたい内容を根拠を明確にして、分かりやすく説明できる。
	・他のグループの発表を、しっかりメモを取りながら聞ける。

学習過程

段階	生徒の活動	形態	教師の支援・評価(○)
つかむ 3分	1 本時の見通しをもつ。	一斉	
	聞き手を意識して、分かりやすく説明したり、他のグループの発表を、		

	----- メモを取りながら聞き、後で質問をしたりしよう。 -----		
とり くむ 32分	<p>2 プレゼンテーションの準備をする。</p> <p>3 プレゼンテーションをする。</p> <p>(1) 1 班の発表を聞く。</p> <p>【聞き取りメモの観点】</p> <p>①伝えたい内容がはっきりしているか。</p> <p>②根拠が明確で、説得力のある提案になっているか。</p> <p>③話す速度や声量、間の取り方は適切か。</p> <p>④資料の見やすさ、提示の仕方は適切か。</p> <p>(2) 1班に質問をする。</p> <p>(3) 6班まで順に発表し、それぞれに、質問する。</p>	<p>グループ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・発表後に質疑応答の時間があることを確認する。 ・発表がスムーズに行われるように、最終確認の時間をとる。 ・聞き取りメモ用紙を配付する。 ・発表の仕方や順番を確認する。 <p>○聞き手を意識して、一生懸命に伝えようとしているか。 (観察)</p> <p>○大きな声で、分かりやすく説明しているか。 (観察)</p> <p>○根拠が明確で、説得力があるか。 (観察)</p> <p>○資料の提示の仕方に工夫はあるか。 (観察)</p> <p>○発表者の方を見ながら、大切なポイントはしっかりメモを取っているか。 (観察)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表者の表情を見ながら聞き、アイコンタクトなどで反応するマナーを確認する。 <p>○前向きな質問ができたか。 (観察)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・よい質問が出ない場合は、教師が例を示し、意欲づけをする。
ふか める 10分	<p>4 発表の評価をする。</p> <p>5 説得力のあったグループについて話し合う。</p>	<p>個</p> <p>グループ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ほかのグループの発表の良さを聞き取りメモをもとに考える。 ・発表を振り返り、工夫した点や反省点を話し合う。
まと める 5分	<p>6 他のグループの良い点を発表し合う。</p>	<p>一斉</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・次に生かせるように助言する。

観点別評価規準と評価方法

評価の観点	評価規準	評価方法
関心・意欲・態度	意欲的に発表したり聞いたりしようとしたか。	観察
技能・表現	伝えたい内容を、分かりやすく説明できたか。	観察

<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">良 か つ た 点</div>	<p style="text-align: center;">【発表の流れ】</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 全員そろって礼・・・拍手 ② 「これから〇〇の発表をします。」 ③ 「何か質問はありませんか。」 ④ 「これで終わります。」 ⑤ 全員そろって礼・・・拍手 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">今 日 の 課 題</div>
--	---	--

提案のしかたを工夫しよう
 聞き手を意識して、分かりやすく説明したり、他のグループの発表をメモを取りながら聞き、後で質問をしたりしよう。

オ 授業の実際

「未来に残したい、私たちの言葉」ということで、それぞれの学級で、どんなテーマにするかを考えた。考えるためのヒントとしては、「未来」とはどれくらい先のことにするかとか、「私たち」という点に注目させて、どんな言葉にしたらいいかなどを話し合わせた。その後、各自がそのテーマに合った言葉を集め、グループで検討し、学級に提案する言葉を決めた。



写真13 グラフなどを工夫して提案

そして、各班ごとに自分たちの提案する言葉を学級の言葉にするために、提案を工夫して発表した。どの班もアンケートを実施して、結果をグラフにしたり絵や写真、あるいは曲を付けたりと、聞き手を説得するために様々な工夫をすることができた（写真13）。自分たちで決めたテーマだったので、どの生徒も課題に対して前向きに取り組めた。

テーマ	みんなが決めた名言
6年後に残したい名言	昨日から学び、今日を生き、明日へ維持しよう。
自分たちが死んだあとに残したい今のカッコイイ名言	泣きたいのに、泣けぬなら、笑えばいい。
10年後に残したい名言	お前が「死にたい」そう言って無駄に過ごした今日は、昨日死んだ人が生きたかった明日なんだ。

フォーエバー（永遠）に、	成功は1%のひらめきと、99%の努力のたまものである。
残したい心に刻まれた名言	

カ 成果と課題

アンケート結果を見ても、生徒自身がこの1年間で個々の「話す力」や「聞く力」は、着実に付いてきていると感じていることが分かった。しかし、普段の授業の様子からは、意見が深まるような質問ができないことを感じる。今後もいかにしたら全員が関わり合えるようになるか研究を続けていきたいと思う。

（2）実践事例2 国語 古文

1）1時間の授業の流れ

①繰り返しの音読、本文の視写

- ・起立し、姿勢に気を付けて音読する。
- ・歴史的仮名遣いを間違えないよう注意して視写する。

②本文のあらすじや表現上の注意事項の説明を聞く

③「今日の課題」について一人で考える。

- ・机を離しておき、一人で集中して考える。

④「今日の課題」（注）についてグループで考える。

- ・誰もが責任を持つように、輪番で「今日の主役」として司会兼発表役を決め、班で意見をまとめなくてもいいように指示する。
- ・「今日の主役」が困らないように、それ以外の生徒は自分の意見を積極的に出す。

⑤「今日の課題」について人数限定の討論をする（写真14）。

- ・「今日の主役」を全員立たせ、意見を発表した生徒人から座るようにさせる。ただし、8人のうち、

最初の2人は自分の意見を発表する。

次の3人はアの2人の発表のうち、どちらかを選んで発言する。

最後の3人はイの3人のうち、誰かの発表を選んで、さらに意見をつなぐ。

- ・発言者は全員の方を見て、全員に伝えるように意識する。また、聞く側は発言者の方を見るか、メモを取るか、どちらかの態度をとる。
- ・発言が終わったら、「以上です」「どうですか」など、終了の合図をし、聞く側は、拍手以外の反応、即ちうなずき、「なるほど」などの共感の言葉、「う～ん」などの非受容の言葉で反応をする。



写真14 限定討論の様子

⑥「今日の課題」について自由討論をする（写真15）。

- ・限定された発言者ではなく、誰でも発言してよいこととする。ただし、意見はしっかりつないでいくルールは守る。
- ・議論に進展が見られなくなったら、「ヒント」を出し、それを聞いての自分の意見を書き、自由討論を再開する。



写真15 自由討論の様子

⑦最終的に、「今日の課題」についての最終的な自分の意見を書く。ただし、どのように自分の意見が変わったかを書く。

（注）「今日の課題」は十分に読み取らないと思考できないもの、かつ十分に目標を達成できるもので、さらに意見が分かれるものを教師が考える。

2) 考察と感想

①の音読の方法は、歴史的仮名遣いを現代的仮名遣いで読むということに慣れさせるためであり、さらに原文に対応させて訳文を読むことで、あらすじをつかむことに効果があった。繰り返すことでさらなる効果が期待できる。

また、グループ活動の方法も工夫した。まず四人グループのうちの一人に責任を持たせることで、その当番の生徒はもちろん、輪番制なので他の生徒も協力せざるを得ない。つまり、すべての生徒を授業に参加させることを目的としている。さらに、無理に班の意見をまとめないことで、発表者の意思で情報を選択できる。このことから、人に頼り切らないグループ学習ができる。

次に「今日の課題」について、あまり選択肢が多いといけないので、2つの選択肢を用意した。つまり、二者択一ならば生徒は必ずどちらかの意見を持つので、討論に参加しやすくなる。これらの活動を通じて、自分の考えの理由を言えなかった生徒や発言をすることがなかった生徒も、自分の意見を持つことができた。普段、自分の考えを書く場合、どのようなことを書けばいいか分からなかった生徒も、選択肢を絞ることが大きな助けになったと思う。また、討論に参加するためには人の話を聞く姿勢が必要であり、その姿勢の徹底した指導も役立った。

今回の「ヒント」は、意見交換を活発にすると同時に、「今日の課題」について誰の視点で考えることが妥当か、その観点を与えるためであった。「今日の課題」はどういった思考をすればよいか悩むところである。そこで、「ヒント」によって思考の原点を一つに絞る。そのようにすると、誰もが意見を持ちやすくなり、活発に意見が交換できる。また、「今日の課題」について自分の考えを持つ際には、教科書の記述を最優先で根拠にするということは、今までの指導で分かっている。しかし、古典の世界を味わうという観点では、それだけでは不十分である。「竹取物語」を例にとると、もしこの山の名前をつけた特定

の人物がいるとしたら誰か。それは、かぐや姫の存在を知り、かぐや姫から不死の薬と手紙を唯一贈られた時の権力者である帝である可能性が高い。つまり、そうした物語の背景を知り、意見を考えるうえで視点を与えることに意義がある「ヒント」である。そして「ヒント」から、生徒たちは権力者である帝しか知らない事件から山の名前がいただろうということを知った。それによって、現代人と違う感性で思考しているつもりでも、結局は現代人と同じ感性で思考している、つまり、昔も今も人間の心情の本質に変化はなく、生まれる時代が違うだけなのだとすることに気付いたようである。

声を出して古典を読むことは、日本語の伝統的な響きに慣れることにつながるとよく言われている。しかし、その物語が生まれた背景を知り、その物語と現代の生活との特殊性や普遍性に気付くことも重要である。そうすることで、古典のみならず今日までつながってきた、またはすでにあった伝統文化に親しみをもち、そして郷土愛や愛国心を養うことに大きな役割を果たすのではないかと思う。

ところで、「ふじ」という漢字には答えがない。「富士」でもあり「不死」でもあり、また「不二」かもしれないし「不尽」かもしれない。どの答えが確からしいか、それを裏付ける根拠は何で、その根拠の信頼性はどうか。こういったことを考えることで、批判的に物事を捉える力がつく。主目的ではないが、このようなことも付随した授業だった。

ある一定の成果があった実践ではあったが、同時に課題も数多く残った。その課題の一つは、全体での討論のときに、生徒によって参加度が様々であることである。今回、教材の特質も考え、グループ交流の形を工夫し、さらに「ヒント」で支援を試みた。しかし、結果は討論の参加度という点では不十分だった。

今後の方針として、一つの発問ではなく一回の授業で段階的に難易度を上げていく。そして、討論に臨み、自分の意見をしっかり持ったうえで人の意見を聞き、自分の意見を再構築して人に言葉で伝える。この循環を全ての生徒が経験・会得できる授業をめざしたい。

(3) 実践事例3 社会

1) 研究の仮説

個の考えや、グループの考えを引き出す力を鍛えることで、全体へかかわれる意見をもつことができるだろう。

2) 研究の方法

① 知の構造図を作成して学ぶべき内容を明確にするとともに、それらを習得するための課題を工夫する。

② かかわり合いが生まれるようなグループ活動や話し合いの場を設定する。

3) 研究の実際

ア 単元 日清・日露戦争と近代産業

イ 目標

- ①日本が列強と呼ばれるようになった理由を、19世紀後半の国際関係と関連付けながら意欲的に追究することができる。
- ②日清・日露戦争における欧米諸国の利害関係や国内の様子、戦争の影響について、多面的・多角的に考察することができる。
- ③日清戦争から韓国併合までの日本の動きを資料から読み取り、まとめることができる。
- ④日本の国際的地位が向上したことを、条約改正、日清・日露戦争、産業の発展とを関連付けながら理解することができる。

ウ 学習計画（8時間完了）

時	テーマ	内 容
1 2	なぜ、これまで実現しなかった条約改正に成功したのだろうか？	○本単元を通して追究する課題を知る。 ○条約改正までの外国と日本の動きについて調べる。 ○条約改正が成功した理由について考える
3 4	日清戦争・日露戦争はどのように起こり、どんな結果になったか調べてみよう。	○日清戦争が勃発したきっかけ、戦争の過程と結果について調べる。 ○日露戦争が勃発したきっかけ、戦争の過程と結果について調べる。
5	なぜ、戦えば不利と思われる日本が、ロシアと戦ったのだろうか？	○日本がロシアと戦った理由について考える。
6	産業の発展について調べてみよう。	○日本の近代産業がどのように発展したか調べる。 ○近代産業の発展が人々の生活にどう影響したか調べる。
7	なぜ、日本の産業は発展したのだろうか？	○この時期に、日本の産業が発展した理由について考える。
8	なぜ、日本は列強と呼ばれるようになったのだろうか？	○日本が列強と呼ばれるようになった理由を、これまでの学習をもとに話し合い、まとめる。 ○単元の学習を振り返り、単元のまとめをする。

エ 評価規準

時	評 価 規 準	評価方法
1	○条約の改正が、帝国主義におけるイギリスの利権と一	・ワークシート

2	致して実現したことをとらえることができる。	・振り返りカード
3	○資料、年表等を用いて、日清・日露戦争のきっかけ、	・ワークシート
4	過程、結果についてまとめることができる。	・振り返りカード
5	○日本が帝国主義の世界に組み込まれ、ロシアとの戦いに突き進んでいったことをとらえることができる。	・ワークシート ・振り返りカード
6	○日本の近代産業の発展について、資料を用いて調べ、まとめることができる。	・発言 ・ワークシート
7	○日本の産業は日清戦争前後に発展してきたが、低賃金で長時間労働の女性が支えていたことに気付いている。	・振り返りカード
8	○これまでの学習を振り返り、単元を貫く課題に対して考えをまとめることができる。	・ワークシート ・発言

オ 授業の実際

第1、2時 なぜ、これまで実現しなかった条約改正に成功したのだろうか？

第1時ではまず、生徒に前単元の学習を想起させ、日本が明治時代に入り、欧米を手本として国づくりを進めてきたこと、不平等条約の改正を試みてきたが実現できなかったことを確認した。その後、本単元で学習する時代の年表を資料として配付し、日本が列強と呼ばれるようになったこと、不平等条約の改正に成功していることを知らせた。そして、単元の課題「なぜ日本は列強と呼ばれるようになったか」を提示した。課題に対する生徒たちの予想は、「戦争に勝ったから」という単純な予想が多数であった。本単元を通して、様々な角度から歴史をとらえ、認識を深めさせたいと考えた。そこで、条約改正に目が向いた生徒たちに、第1、2時の課題として「なぜこれまで実現できなかったのに条約改正が実現できたのか？」を提示し、学習を進めた。

課題に迫るために用意した資料は、条約改正に関する略年表、列強の植民地支配を示す地図、ロシアの進出を表す風刺画、ノルマントン号事件の風刺画、鹿鳴館の絵である。生徒たちは、教科書や資料集をはじめ、こちらから提示した資料プリントを用いて、条約改正に関する動きを国内の視点と国外の視点からとらえ、条約改正が成功した理由に迫っていった。第2時で行った意見交流で多く出された意見は、次のようなものであった。

- ①鹿鳴館で近代化をアピールしたから。
- ②戦争に勝って、国力が向上したから。
- ③ノルマントン号事件により、国民が不平等条約改正を求める世論が高まったから。

これらの意見はどれも日本の近代化への努力に基づくものであり、それに伴って条約改正が達成されたと考えるものである。そのような中で、ある生徒は、鹿鳴館による近代化のアピールによる条約改正は失敗という記述を見つけ、①の意見に反論をした。また、別の生徒は戦争に勝って、国力が向上したからというなら、日清戦争後に条約の完全改正に

成功していたはずだと主張した。また、世論の高まりが理由になるなら、明治初期から条約改正の声はあったはずだと述べる生徒もいた。

そのような中で、生徒Aは、ロシアのアジア進出について述べ、ロシアの動きに警戒していたイギリスが日本との対立をさけるために条約を改正したと述べた。以下に示したものは、第2時で生徒Aがまとめた意見の一部である。

僕は、条約改正が実現した理由は3つあると思います。(中略)・・・3つ目は、イギリスとロシアの関係です。当時、イギリスとロシアは植民地を多く所持していて、ライバル関係であったと推測できます。ロシアはアジアへ勢力を広げようとしていました。アジアにはいろいろな国がありますが、日本は大日本帝国憲法をもったアジアトップクラスの国です。アジアに植民地をもっているイギリスは、ロシアにとられると困るので、日本との関係を良くし、植民地を守るために条約改正を認めたとと思います。(以下略)

生徒Aの意見は、帝国主義におけるイギリスの利権について述べたものであり、前述の①～③の意見とは質の異なる意見である。第2時の話し合いを通して、生徒Aによって出された意見によって、生徒たちは条約が改正された理由をより深くとらえることができた。

第3、4時 日清戦争・日露戦争はどのように起こり、どんな結果になったか調べてみよう

第3時からは、生徒たちが単元の課題に対する予想として挙げていた戦争に関して学習を進めた。第3時では日清戦争の、第4時では日露戦争の過程と結果、影響について、日清戦争の宣戦布告、下関条約、三国干渉、ポーツマス条約等の資料を活用して調べ、ワークシートにまとめた。ワークシートを用いたことで学習を方向付けることができたため、生徒たちは比較的短時間でまとめることができた(写真16)。



写真16 ワークシートをまとめる生徒

第3、4時の学習を通して、生徒は日清戦争と日露戦争がどのように起こり、どんな結果になったかをとらえることができた。そこで、「なぜ、戦えば不利と思われる日本が、ロシアと戦ったのだろうか?」という課題を提示し、次時へとつなげた。

第5時 なぜ、戦えば不利と思われる日本が、ロシアと戦ったのだろうか?

第5時では、前時で提示した課題について考えをまとめ、話し合った。様々な視点から理由を考えさせることをねらって、個人で意見をまとめる前に、小グループでの話し合いの場を設けた(写真17)。この小グループでの話し合いを通して、生徒はグループの他のメンバーから学び合うことができ、より多面的に理由をまとめることができた。

また、個では考えをまとめることができない生徒も、仲間の意見を聞くことで手がかりをつかむことができていた。意見交流では、生徒から次のような意見が出された。

- ・日清戦争で中国に勝ったことや日英同盟を結んだことで自信がついたから。
- ・日清戦争による賠償金によって、軍備を強化したから。
- ・三国干渉で遼東半島を返すことになり、ロシアに対する対抗心が高まったから。



写真17 小グループでの話し合い

これらの意見は、日本がロシアと戦った理由としては間違った考えではない。しかし、戦えば不利だと思われる日本がロシアと戦った理由としては十分な考えではない。そこで、日本とロシアの軍勢力が比較できる資料を提示し、これでも本当に日本は自信があったと考えられるか再度考えさせた。

そのような中で、生徒Bは帝国主義についてふれ、ロシアから植民地にされないためには戦わざるをえなかったという意見をまとめた。以下に示すものは、第5時で生徒Bがまとめたものである。生徒Bの意見は、日本が帝国主義の世界に組み込まれ、ロシアとの戦いに突き進んでいったことをとらえた意見である。本時の学習を通して、生徒たちは日本がロシアと戦いを始めた理由をより多面的にとらえることができた。

私は、日本がロシアと戦った理由は3つあると思います。(中略)

3つ目は、ロシアは後に日本に攻めてくると思ったからです。ロシアの進出を示す風刺画からは、ロシアが植民地を求めて世界への進出を進めていることが分かります。ロシアは近くから植民地を増やしているので、日本にもいずれ進出してくると思います。日本の植民地化を防ぐためには、軍備拡張をした今、ロシアと戦うしかなかったのだと思います。(略)

第6時 産業の発展について調べてみよう

第6時では、日本の近代産業がどのように発展したか、近代産業の発展が人々にどう影響したかについて調べさせた。まず、おもな産業の生産力の推移を示すグラフを示し、グラフからわかることをまとめさせた。

生徒は生糸や石炭は生産力が上がり続けていること、

日清戦争や日露戦争前後で急激に生産力が上がっていること、全体的には生産力が上昇していることなどをあげ、この時期に産業が発展してきたことをとらえることができた。次に、大阪紡績会社や八幡製鉄所の写真から、女子労働者の増加が産業の発展に大きく関係することをとらえさせ、製糸工場働く女工の一日の生活を示す図を提示した。生徒から



写真18 話し合いの様子

は、「自由な時間がないから嫌だ」「自分なら3日で体を壊す」などの意見が出された（写真18）。本時の終末では、「ああ野麦峠」の一部を読みあげ、命を失った政井みねさんが工場に合掌をした理由を考えさせた。生徒からは、「同じ工場で働いた仲間に申し訳なくて」という意見や、「これまで働かせてもらったことに感謝」という意見が出された。

本時の学習を踏まえ、次時の学習では、「なぜ、日本の産業は急速に発展したのだろうか？」を課題に学習を進めることを生徒に伝えた。

第7時 なぜ、日本の産業は急速に発展したのだろうか？

第7時では、なぜ、日本の産業は急速に発展したのだろうかという課題で学習を進めた。生徒からは、日清戦争の賠償金で八幡製鉄所を建設したこと、日露戦争後のポーツマス条約により満州での石炭の採掘権を得たこと、イギリスやドイツからの技術や機械を得たこと、女性労働者が増加し低賃金で長時間働いていたこと等が理由としてあげられた。

第6、7時の学習を通して、生徒たちは、日本の産業が日清戦争前後に発展したこと、低賃金で長時間労働する女性が産業を支えていたことをとらえることができた。

第8時 なぜ、日本は列強と呼ばれるようになったのだろうか？

第8時では、これまでの学習を振り返りながら単元の課題「なぜ日本は列強と呼ばれるようになったか」について話し合い、学習のまとめとした。

これまでの学習を関連付けて課題に迫るために、まず、列強の条件について小グループで話し合った。生徒からは軍事力、経済力、産業の発展の他、外国からの信頼、知名度など、様々な意見が出された。次に、それらの条件と関連する歴史的事項を図に示させた（図56）。これによって、これまで結び付いていなかった事実と事実の関係が目に見える形で示された。

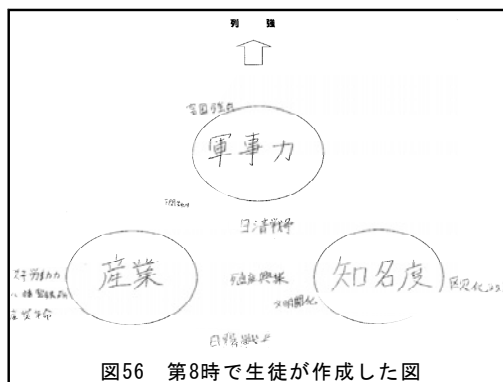


図56 第8時で生徒が作成した図

そして、作成した図を基に課題に対する考えをまとめさせた。以下に示すものは、生徒Cと生徒Dのまとめである。

生徒Cも生徒Dも、これまでの学習を踏まえながら話し合いに取り組み、事実と事実を関連付けて課題に対する考えをまとめることができた。

僕は、日本が列強と呼ばれる条件として強い軍事力と産業の発展と知名度をあげました。

日本は、富国強兵による徴兵令によって軍事力が強化されてきました。強化された軍事力によって日清・日露戦争で勝利をおさめ、さらに軍事力を強化して、強い国になりました。産業の発展では、日本で産業革命が起こって大工場ができ、新しい機械や女子労働力で大量に物を生産できるようになりました。日清戦争後には、八幡製鉄所をつくって造船業などが発展し産業が発展しました。殖産興業や文明開化、欧化政策によって日本の近代化が進みました。欧化政策の鹿鳴館では、近代化を見せつけました。日清・日露戦争の勝利でも、他国から認められるほどの知名度を上げたと思います。

以上のことから、日本は強い軍事力と産業の発展と知名度を手に入れ、列強と呼ばれるようになったと考えます。

私は列強と呼ばれる条件として、経済力、軍事力、実績をあげました。

経済力を手に入れた理由の1つは、地租改正です。国家の財政が安定しました。また、日清戦争では多額の賠償金を得ました。日露戦争前に結んだ日英同盟では、イギリスから資金援助がされるようになりました。それらのことが経済の発展にもつながり、産業革命により経済力はさらに高まったと思います。2つめの軍事力を手に入れた理由は、徴兵令によって近代的な軍隊をつくったことです。その軍隊によって日清戦争に勝利し、多額の賠償金を軍備拡張にあてたことが軍事力を手に入れた理由の1つだと思います。これらのことと議会や憲法を整えたこと、条約が改正されたことが実績となり、日本の国際的地位が高まりました。

以上のことから、日本は3つの条件を手に入れたので、列強と呼ばれるようになったと思います。

4) 成果と課題

成果

①「なぜ～？」という課題のもとで生徒に分析・話し合いをさせたことで、生徒は事実と事実の間にある因果関係に注目することができた。「なぜ～」という課題を用いたことによって、生徒は事実と事実の間にある因果関係に注目して、調査活動を行うことができた。そして、その後の話し合いで、互いの情報や考えを交換することで、個ではつかむことができなかつた関係をつかむことにつながった。

②単元の終末で、列強の3要素と関連事項を生徒に図示させたことで、既習事項を整理し関連付けることができ、関係認識の深まりにつながった。

本実践の終末に列強の3要素をあげさせ、それらに関連する事項を図示させた。この活動によって、生徒は既習事項を整理することができ、列強の3要素をもとにして事実と事実を関連付けることができた。これは関係認識の深まりにつながったといえる。

課題

①関係認識を深めるためには、事実と事実を結び付けるための学習方法のさらなる工夫が必要であった。

生徒にとって、事実と事実の関係をつかむことは容易ではない。事実をつかませた上

で、話し合いをさせただけでは、関係認識は十分に深めることはできない。第8時で行ったような事実と事実を結び付けるための学習活動を、それぞれの話し合いの前に取り入れていく必要があった。

②事実と事実を関係付けることができているとしても、それを文章や言葉で表現することができていない。

生徒の授業での様子を見てみると、事実と事実を関係付けようとしているものの、それを文字としてうまくまとめることができていなかったり、言葉としてうまく伝えられなかったりする。考えのまとめ方や伝え方なども同時に育てていく必要性を感じた。

(4) 実践事例4 理科

1) 研究の仮説

考えをしっかりと持つための学習を積んだ後、全体での学習をすれば、かかわることのできる学びになるだろう。

2) 研究の方法

犬山には木曾川があり、森も豊富にある。今井地区は「里山」と呼ばれるのにふさわしい地区である。犬山市里山学センターや東大愛知演習林もあり、近隣にはビオトープ（中島池）も整備されている。これだけ条件がそろっているのだから、近くにある自然を活かし「再発見」をテーマに単元を計画することにした。



写真19 導入の授業の様子

3) 研究の実際

ア 単元 犬山の自然

犬山の自然を知る (1限~2限)
犬山の自然を見る (3限)
犬山の自然を支えているもの (4限~6限)
犬山の自然にとっての脅威 (7限~8限)
犬山の自然をどのように守ってゆくべきか (9限)

犬山の自然を知る 1限 犬山の自然の特徴
教材は、犬山の衛星写真（東海三県・愛知県北部・犬山市・今井地区）を4枚使用して、犬山には、まだなお緑が豊かであることを認識し



写真20 校内に作った「犬山里山博物館」

た。さらに土壌モノリスという標本を国立科学博物館から借用して土について知識を得た（写真19）。犬山の土は「未熟土」に分類されるとのことで、森ができていく上では、恵まれていない土地であることを知った。

犬山の自然を知る 2限 犬山の動物

この時間のために、犬山市里山学センターと岐阜県博物館から、鳥類のはく製、哺乳類のはく製、昆虫類など多数の標本を借用して陳列し「犬山里山博物館」を校内に作り上げた（写真20）。この授業によって実物大の大きさで、犬山にいる動物のイメージを持つことができた。実際に出かけるときに見ることができなくても、イメージを持つことができるようにするために先に観察をした。

犬山の自然を見る 3限 里山ツアー

今井地区をバスで回り自然の解説をしながら、最初の訪問施設「犬山市里山学センター」に立ち寄った。その後、隣にある「東大愛知演習林」で解説を受けながら森林の様子を観察した（写真21）。次に、バスで移動してビオトープである中島池で、野鳥観察をして終了にした。犬山の自然を、実際の目で見るのがねらいであり、これだけの現地観察であったが生徒の考えはずいぶん変わったようである。バスの中ではロク々に、「こんなに犬山に自然があったんだ。」「考えたこともなかった」と言うつぶやきが聞こえた。

犬山の自然を支えているもの 4限～6限

この3時間は、教室で実験をとおして学んだ（写真22）。調べ学習を交えながら、生態系ピラミッドや食物連鎖、消費者、分解者などの学習をした。

犬山の自然にとっての脅威 7限～8限

この2時間は、環境破壊に関する実験と調べ学習の授業を行った。二酸化炭素による地球温暖化やオゾン層破壊などは調べ学習で行うことにして、身近な川や池の水を採取してのバックテストと、松の気孔を観察することで車による環境汚染の話題に触れた（図57）。環境に関する問題は身近な問題であることを意識させるねらいがあった。

犬山の自然をどのように守ってゆくべきか 9限

これまでの学習をもとに、犬山の自然をどのように守ってゆくかを1時間使って議論した（写真23）。私たちが望む犬山像を話し合った後、どのように自然と共生してゆくか優



写真21 東大愛知演習林での観察

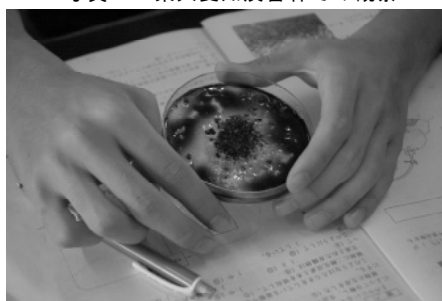


写真22 教室での実験をとおして学ぶ



図57 バックテストの結果を板書する

先順位をつけることで、環境がいかに大切かを意識化した。

(2) 主体性を引き出す工夫 日々の学習の中で つくるルールづくり

①教科委員が進める理科授業

生徒の発言で授業が始まり、生徒の司会で授業が進むと、それだけで意欲が高まり、お互いの話を聞

こうとする。聴きあう姿ができていない時には教師が指導するが、学習が成立している場合、じっと見守る。一つの授業を作り上げようとする気持ちが育ってくると発言も増えてくる。自ら前向きになり、授業により循環が生まれる。司会をする力はまだまだ不十分で、苦手意識を持っている生徒の多数が、誰でも司会ができることを目標にしているため、クラスのリーダーを司会者にはしていない。時には、司会者の力量不足で学習が止まることもあるが、指導を続ければ少しずつできるようになる。時間が足りなければ、教師が助ければよい。



写真23 教室での議論の様子

②指名方法

相互指名は「話を聴く」トレーニングにはいい効果をもっている。話がそれほど上手ではない生徒が話すのだから、自然と聴き手の意識が大切になってくる。教師が発言の間を取り持たないことで、生徒の聴く態度を引き出し、それが話上手になるトレーニングにもなっている。テンポよく発言できない場合は、指導を重ねる。発言のテンポがよくなれば、授業全体のリズムもよくなる。リズムがよくなれば、前向きな学習ができ、思考も活性化する。

③班長のリーダー化

理科が得意な生徒を8名選び、班長に据えた。班長の役割を下記のように明確にし、必ず責任を果たすように徹底させた。

- ・グループ内の遅れている生徒のフォロー。
- ・話し合いで司会
- ・活動に際しての指示
- ・他班で困っていることがあれば助けに行く。*班長のみ許可

この4つを活動の目標に据えると、班長は少しずつ動き始めるようになってきた。「教えるのではなくてフォローだよ」といった、細かい指示や指導はいらなかった。きっと小学校で学んできたことであろう。動き始めると、さっと動くことが多い。小学校の指導が生きていたと感じた場面であった。

④「全員できましたカード」の利用

班員が全員ができたら、できましたカードを見えるところにはる。するとできていない班があればそこへ助けに行く。全部の班が、カードをはれたら理科係は次へ進める。遅れそうな班へ教師は支援を集中的にする場合もあるが、それも含めて、生徒に助けを出さなければならない班を意識させていると、自然と全部の班の結果を出す時間が安定してくる。カードを上手に利用する

ようにさせたことで、時間を切らなくてもよくなった。

⑤ワークシートの工夫

生徒自身がつくる授業といっても、授業の流れと実験方法など、初めから議論をしていると時間がいくらあっても足りない。何もしなくてほっておいたら、授業はめっちゃめっちゃになってしまうだろう。つまり「ある程度の段取りを用意しておく」という視点でワークシートは作成している。このワークシートを見るだけで、生徒が授業内容をある程度イメージできるように作成してある。係の「振り返りを始めてください」という言葉から学習がスタートする。学習は前時から続き、次時につながるものである。だから、前時からの振り返りは大切である。振り返りの中から、本時の課題を見つけ、学習を展開し、本時の学び取ってほしい点を最後にまとめる。そのような流れをサポートできるワークシートを目指し作成している。

⑥生徒が板書することで時間を短縮する。

理科の性質上、結果を発表する時、数字を羅列するだけの場合がある。発表をする方も、聞く方もつまらない。しかも分かりにくい。そんな時は、自分たちで板書して、数字を比べるようにさせたほうが考察をしやすい。板書も生徒の手でどんどん書かせるようにさせたい。

⑦全員が関われる工夫

思考を深めるためのジグソー発表 実験結果を考察する。分かったことをいくつか並べると、さらに新しい知識が生まれる。そのような過程をとおして学習をさせたいとき、生徒の考察を集めてじっくりと「思考」させる。この場合、分かる生徒は、どんどん発表したいが、分からない生徒は考えたくもないものである。このような時は、ジグソー学習を取り入れると学習への参加度が上がる。自分も発表をしないといけないので、分かる生徒から一生懸命理由を聞く。分かる生徒は、説明を繰り返すことで理解が深まる。制限時間は1分とし、「教科書を越えた内容まで踏み込んで話ができるといいよ」とも伝えてあるので、資料を一生懸命調べることも始める。実験が簡単な場合や、まとめの時にこの手法を使うと、生徒は喜んで考えを深めた。

最終的に意見を持つ場の設定 討論ができるようになるまで学習を積み上げ、最後に得た知識を使って討論を行う。導き出した結論はそれぞれであるが、しっかり根拠を持っているので意見は熱い。しかも、発言している生徒も発言しない生徒も、うなずいたり、反応したりしながら必ず参加している。分からない顔をしていない。逆に、いわゆる成績下位の生徒がかなり発言して、非常に参加度の高い討論になることもあった。しっかりと意見づくりをすれば、生徒はしっかり学ぶ。

教師の出番（でば）はどこであるかを考えて動く 生徒が主体的に動くとき、教師はすることがなくなるというわけではない。よくみると、生徒が一生懸命やればやるほど時間の差が生まれる。班によって深まりに違いが出てくる。ついて行けない生徒も生まれる。そういった生徒の温度差を「管理」するのが教師の仕事となってくる。逆に、より視点を絞って観察をしないと、分からない生徒をどんどん生み出してしまうことがある。

また、生徒自身ではできない実験や理論を見極めて、教師が1時間中話しまくっている授業があってもいいと思う。イオンやDNAなどの発展教材を説明するときは熱く語る。生徒は熱心に

聞いている。夢を語るのが教師の仕事であろう。

時間が足りないときも教師の出番である。間に合いそうにない場合は「ここからは教師が進めるよ」と言って、ざっくり話を始める。最後に、「この場面で迷ったね」とか「この時にたるんだね」とか、反省を言ったり、言わせたりする。授業がどのように進むのかをコーディネートするのが教師の役目である。できるだけ「生徒の力で進む授業」を創造したい。

(5) 実践事例5 理科

1) 研究の仮説

仮説：個の考えや、グループの考えを引き出す力を鍛えることで、全体に関われる意見を持つことができるだろう

2) 研究の方法

- ①個の意見を確立する。
- ②生徒による相互評価を行う。

3) 研究の実際

ア 単元の流れ

物質のすがた (24時間完了)

物質の性質・・・8時間

物質の状態変化・・・6時間

水溶液・・・4時間

気体の性質・・・4時間

まとめ・・・2時間

イ 個の意見の確立

理科の授業では、普段から小黒板を用いた班ごとの発表を行っている。本研究では、発表の前の小黒板にまとめる活動に着目した。この活動は能力の高い一部の生徒に流されがちであったため、学習プリントに自分の意見を書く時間を取ってから、まとめの時間を取ることで、全員が話し合いに参加できるようにした。

ウ 生徒による相互評価

本校では、単元の流れと各時の学習課題を示した「学習カード」を単元の最初に配布している(図58)。学習カードの一番右の「活躍」という欄では、班内でカードを交換して、お互いにどんな活躍をしたか記録をし合うようになっている。

この欄に記入すべき活躍の例は次の5つを指定している。

- ①司会役となり、話し合いを進める。

- ②話し合い時に口火を切る。
- ③困っている人や悩んでいる人を助ける。
- ④みんなが気付いていないことを発表したりまとめたりする。
- ⑤準備や片付けを率先して行う。

2 物質の状態変化（6時間）		A：できた B：だいたいできた C：あまりできなかった D：できなかった				番号
月 / 日	学習課題	理解	聞・読	話・書	充実	活躍
1	液体のろうと固体のろうでは、体積や質量が違うのだろうか。					
2	物質の状態変化について説明できるようになろう。					

図58 学習カードの一部

エ 生徒の感想

本単元後に生徒が書いた感想の一部を以下に示す。

生徒A：実験でみんなが気付いていないことを教えてあげた。そのおかげでみんなと意見を交わした時、私が気付かなかったことを教えてもらうこともできた。

生徒B：ガスバーナーの手順が分からない仲間に教えてあげることができた。実験で感じたことを細かくメモすることができた。

生徒C：自分が調べたことを班の人たちに伝えることができ、協力できたと思う。

生徒D：水とエタノールを分ける実験では、みんなで「なんでこうなるんだろう」と話し合いをすることができた。

生徒E：どんどん状態変化していくのがすごく面白かった。実験では意見を発表し合ったり、積極的に準備や片付けをしたりすることができた。皆も頑張ってくれていたので、協力することができたので良かったと思う。実験の時、パルミチン酸という物質が気になったのでちょっと調べてみようと思った。

生徒F：僕はこの単元で、友達と話し合ったら難しいことも分かるということを実感した。これを機会に話し合いを積極的にしたい。

4) 成果と課題

ア 個の意見の確立

普段の授業から、小黒板を用いて班の意見をまとめる活動を行ってきた。今までは、全員が話し合いに参加することは難しく、一部の生徒だけで話し合いが進められる様子が見られていた。しかし、個の意見を確立する時間をとるようになってからは、話し合いのときに班の中で全員が意見を順番に言い合う姿などが見られるようになった。また、よく分

からない意見が出ると「それどういうこと？」と質問し合う姿など、お互いに積極的にかかわり合い、より深く理解しようとする姿も見られた。上記の生徒の感想からも、本研究を通して、生徒たちが自分の意見を話し合いで発表することの楽しさや大切さを学べたことが窺える。これらのことより、個の意見を確立することで、生徒たちは共にかかわり合い、学習活動にも積極的に取り組むことができたと考えられる。

イ 生徒の相互評価

班の仲間と学習カードを交換した途端、「お前どんな活躍しとったっけ？」などの声があちこちから聞こえるようになる。学習カードを仲間から返してもらおうと、多くの生徒がすぐにその欄を見ている。点数ではなく、何を頑張ったかを記入するので、全員が肯定的評価を受けることになる。このことが、評価する側にも評価される側にも、気分を良くする効果があり、結果的に多くの生徒に対して「次の授業も頑張ろう」という気持ちを抱かせるのではないかと考える。中には、実験中に細かいメモを取り、「活躍④」を狙い続けた生徒や、小単元全てを「活躍③」と評価してもらえるように頑張った生徒などが見られた。これらのことより、生徒が相互評価を行うことで、生徒は学習活動に積極的に取り組むようになると考えられる。

ウ 今後の課題

個人で考えをまとめる時間に机間指導をしているものの、まだ全ての授業で、全員が個人の意見を持てるようになったとは言えない。そこで、もう一度実験できる準備を特設し、確かめ実験ができるようにしたり、いい閃きをした生徒の意見を紹介したりするなど、個人が意見を持つことができるための手立てが必要である。提示方法としては、生徒がヒントを欲しがるときの瞬間、つまり個人で意見をまとめている時間に提示することで、この手立ての効果は上がると考える。

また、活躍の例を、その時の生徒や授業に応じて変化させていく必要がある。活躍の例①～⑤は厳選されたものであるが、全ての生徒、全ての単元に通用するものではない。例えば、実験・観察が無い授業では、「活躍⑤」は無意味である。そこで、教師が授業ごと、あるいは単元ごとに、活躍の例を臨機応変に変えていくことで、より効果的な生徒の相互評価になると考えられる。

理科の授業では、自分が持っている知識を用いて、目の前にある事物を筋道立てて説明する力の育成が重要である。本研究においても、話し合いの中で違う表現が出てくると、多くの班が小黒板にまとめるにはどっちの表現がいいか悩む姿がみられた。人に説明するというのをさらに意識して、小黒板をまとめられるようになると、説明する力の育成にもつながると考えられる。

(6) 実践事例6 理科

1) 研究の仮説

個の考えや、グループの考えを引き出す力を鍛えることで、全体に関われる意見を持つことができるだろう。

2) 研究の方法

①本物を大切にす

理科の授業において、実験は大きなウェイトを占めている。理科が得意な生徒も不得意な生徒も、実験を共に行うことによって疑問を感じたり、法則を見つけたりすることができる。また、理論だけでは納得しづらいことも、実験を行うことで自分の五感をつかって体験することができる。T2として、限られた授業時間の中で生徒たちが実験、考察、思考までスムーズに行うことができるように実験道具の準備、実験補助などを行う。

②生徒たちが関わる場面をつくる

実験を行い、考察を考える時間になると生徒たちはとたんに黙り込んでしまう。とくに、理科を苦手とする生徒にとって、考察するのは難しいようである。そこで、生徒たちが班活動している間は、教員二人で机間指導をし、生徒たちに答えを教えるのではなく、ヒントを与える。また、生徒たちが全員で関りあえるように、苦手意識を持っている生徒に対しての支援を行う。

③ワークシート・振り返りカードの活用

犬山中学校では理科の授業において「理科ちゃんノート」というワークシートを利用している。現在使用しているものは、一つの単元が冊子となったワークシートである。このワークシートを授業後に回収し確認することで、生徒の授業に対する姿勢、また、授業中にどこまで理解できていたかなどを知ることができる。また、授業ごとに「振り返りカード」を生徒たちに書かせることによって、生徒たちが授業に対しての感想、理解できなかったことなどを知ることができる。「振り返りカード」には、教師が生徒たちの意見にきちんと耳を傾け、コメントを書き、時には抽出した生徒のコメントを読むことで、「振り返りカード」に対して生徒がきちんとコメントするように働きかける。

④苦手意識を持っている生徒を助ける

理科という教科が得意な生徒もいれば苦手な生徒も居る。これは当たり前のことである。4、5人で一つの班を作り、個の考えから班へ、班の考えから全体へ、という形をとっている。しかし、苦手意識を持っている生徒は、個の考えの時点でつまづいてしまうことが多い。そのため、他の班員の考えをただ取り入れるだけ、または、置いてきぼりになってしまうこともある。そこで、班活動の際にはその様子をよく観察して、置いてきぼりになっている生徒に対しての支援を行う。支援といっても答えを教えるようなことはせず、生徒が実験などで導き出した結果や、今までに学んできた知識などを確認しながら考えをまと

め、生徒が持っている疑問を聞き出して、他の班員と話し合わせる手助けをする。

また、振り返りカードなどを利用して、あらかじめ疑問を持っている生徒やついていけない生徒に対して、授業の補足説明をしたり、自学ノートなどを利用して自分でまとめる習慣を付けさせたりしている。

3) 成果と課題

ア 生徒の変容(振り返りカードから)

①生徒の疑問(SOS)

- ・言葉では言えたけど、よく分からない。
- ・ややこしい。しっかり自学で復習したい。
- ・コイルの磁力線の向きが難しかったので、しっかり復習したい。

②実験を通して

- ・クルックス管の実験であんなにはっきり電子の通り道が見えて、感動しました。
- ・面白い実験だった。見えない世界だから、ちゃんと考えたい。
- ・磁石は世界を持っていてかっこいい。
- ・少し間違えたけど、実験結果からまとめることができました。
- ・しっかり実験できた。考察も少しずつ書けるようになった。
- ・振り返りのときでも発言できるようになった。今日の考察は難しかった。
- ・実験をもとに考える作業が楽しかった。
- ・しっかり考えて実験に取り組めた。

イ 考察

中学2年生の物理は電気と磁石の単元である。この単元は理科に対して苦手意識を持ちやすい単元であり、生徒が理解しづらい理論がたくさん出てくる単元である。また、電気は自分たちの生活と密接なつながりがあるが、まったく電気に対しての知識を持っていなくても不自由を感じることなく使うことができる。今回の授業では、ほぼ毎時間実験を行った。静電気を使って遊んだり、自ら回路を組んだり、直列回路・並列回路では電流・電圧・抵抗がどのような関係を持っているか、また、電圧と電流は比例の関係にあるというオームの法則まで、実験を通して生徒たちに実感させた。この結果、理論だけでは分かりづらいものでも、実験をとおしてなんとなく実感を伴うことができた。

しかし、電気の単元が進むほどに生徒たちの反応は薄くなっていった。実験はとても楽しいものだが、その結果から考えをまとめることができないためである。実験ができれば理論もおのずと分かるものではないので、教員の手助けが必要になってくる。また、ワークシートが冊子であるために、生徒たちが自宅へ帰ってから復習しづらい点などが今後の課題である。

4 成果と課題

5つの実践により、次の成果と課題を得ることができた。

成果

- ・各実践において、小グループでの活動を有効に活用したことによって、生徒の間で学び合う姿が見られた。
- ・課題を工夫することで、生徒同士が関わる姿を見ることができた。

課題

- ・グループ活動は学び合いのために大切な手段であるが、グループ活動を行うだけでは、全体での関わり合いには直結しない。グループから全体へつなげる仕掛けのさらなる工夫が必要である。
- ・自分の考えを表現する力をさらに高めることで、より質の高い学び合いになる。

5 おわりに

生徒の中で、学び合いや高め合いが生まれる授業、全員が関わりあえる授業など、より質の高い授業を目指して研究を進めてきた。しかし、このような授業は1時間の授業、1単元の授業で作り出せるわけではない。授業研究会における研究をきっかけにして、毎日の授業を見直しながら、生徒に力を付ける努力を継続していかなければならない。そのためには、学校全体での取り組みは重要である。教科によって担当が異なる中学校では、なおさらのことである。今回、授業研究会において、市内の先生同士で実践を交流しながら授業改善に取り組んだ研究では、他校の創造的な取り組みを知ることができたことは有意義であり、活用できる内容を自分の学校に持ち帰り広めることで、さらなる授業改善につながるとよい。

学級・学年のモチベーションを高める クラス目標を明確にし、生徒主体の取り組みを通して

水野 雄介（犬山市立犬山中学校）

佐藤 悠香（犬山市立犬山中学校）

金尾亜生子（犬山市立城東中学校）

江口 康之（犬山市立城東中学校）

高木 潔（犬山市立犬山南部中学校）

1 主題設定の理由

現在行っている授業は、教師が授業のために教材研究を行い、授業の組み立てを考えて進められている。つまり、生徒は受身だということである。授業の中でいくら教師が様々な仕掛けを施して、生徒が主体となる授業を組み立てていても、生徒が受身であることには変わりはない。教科担当の教師が生徒のために「分かりやすい」「楽しい」授業をしようとするのは当たり前だが、それに加えて、授業を受ける生徒が自分達も努力して良い授業にしていこうという取り組みができると、学級の学習に対するモチベーションが上がるのではないかと考えた。更には学年全体のモチベーションも上がっていくのではないかと考えた。そこで、学習に対するモチベーションを上げるためにクラス目標を明確にし、更に学級役員の生徒や教科委員の生徒が中心となって行う授業作りを始めることにした。以上のことから、本論表題のように研究主題を設定した。

また、授業に対して興味や関心が持てず、結果的に集中力を低下させ、十分な学習成果を得ることができない生徒がいる。こうした生徒を含めて、学級全体のモチベーションを高め、学級全体が一体感を持って授業に参加し、学習を進めることができないか。こうした思いから実践を開始した。

2 研究の仮説

クラス目標を明確にし、学級役員や教科委員の生徒を中心とした生徒主体の授業作りを行えば、学級・学年の学びに対するモチベーションが高まり、もっとみんなで学び合おうという学級・学年の雰囲気ができるであろうと仮定した。また、一斉授業形式で教師が一方的に進める形式の授業から離れて、生徒自身が授業の司会をしながら、話し合いを中心にした授業形態に移行すれば、授業に対する生徒の参加度が向上し、学習内容に対する理解が深まると仮定した。

3 研究の手だて

- ①学級活動の時間を使って「学び学級会」を開き、「クラスの学びのゴール」を作り、学び作りについて、生徒が主体となる取り組みを行う
- ②授業の流れをはじめに示す
- ③かかわりを多く持たせるための工夫をする（ペア・グループ活動、クラス発表）
- ④マニュアル化された授業の流れを、日々の授業の中に取り入れる

4 実践例

(1) 実践1 学級役員を中心とした生徒主体の学び作り（第1学年全教科で実施）

1) 実践内容の概要

①クラスの学びのゴール作り

3月までにどのような学びの集団になりたいかを具体的に考え、最終的な姿を文章にする。

②目標達成のために必要な手だて（短期目標）の設定

③掲示物の作成

- ・クラスのゴール、手だてが目で見えてすぐに分かるもの。
- ・現在取り組んでいる短期目標の掲示（掲示場所：クラスの入り口、廊下の掲示板）

④実践・公開授業

- ・ゴールへ近づくための手だて（短期目標）の達成に向けて、日々の授業で実践する。
- ・日々の実践の評価をしてもらうために、定期的にクラスの授業を公開する。

⑤評価

公開授業に参観した先生から評価をもらう。

（評価カード・アドバイスカードの使用）

⑥ふりかえり

- ・公開授業後、学びの姿をふりかえる（自己評価）
- ・自己評価と先生方からの評価カード・アドバイスカードをもとに、手だてをふりかえる

以上の実践を行うにあたって以下の2つのアンケートを実施した。

ア 数学・英語の授業に関するアンケート

アンケート項目

①少人数で行う授業は好きですか？

好き・どちらかといえば好き・どちらかといえばきらい・きらい

②少人数で行う授業は分かりやすいですか？

わかりやすい・どちらかといえばわかりやすい・どちらかといえばわかりづらい・わかりづらい

③積極的に授業に取り組むことができますか？

できる・どちらかといえばできる・どちらかといえばできない・できない

④仲間とともに授業を作り上げていこうとしていますか？

している・どちらかといえばしている・どちらかといえばしていない・していない

⑤みんなで学習するためにこのクラスに必要なことは何だと思えますか？

アンケート結果より

少人数での授業は「好き」や、「どちらかといえば好き」と答えた生徒が非常に多かった（図 59）。項目 4、項目 5 に関しては、「もっと仲間とかかわりあって授業をしていきたい」「みんながもっと発言しないとだめ」など前向きにみんなで学習していこうという意見が多かった（図 60）。

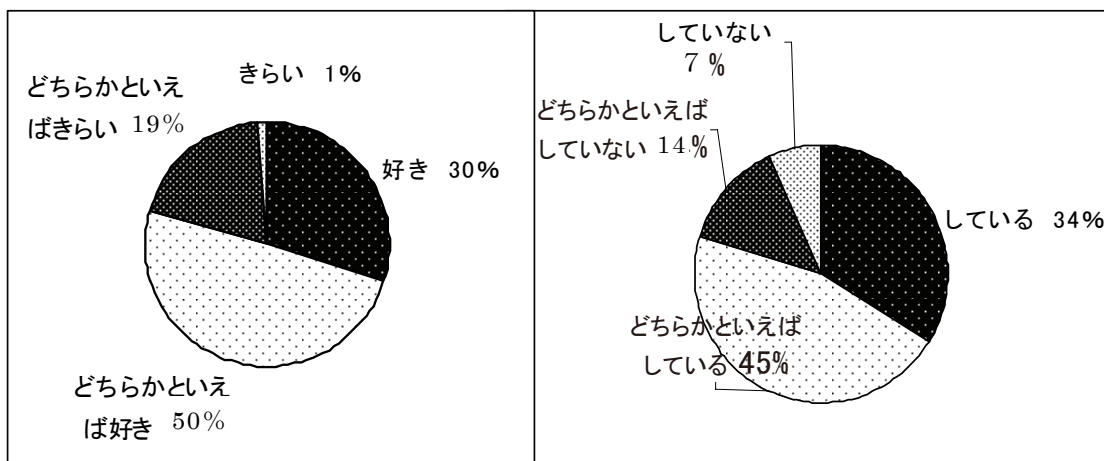


図 59 少人数で行う授業は好きか 図 60 仲間と共に授業を作り上げようとしているか

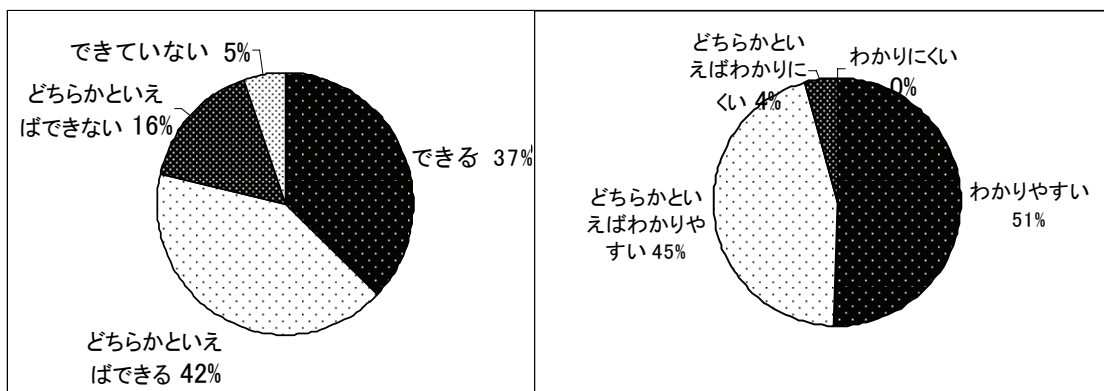


図 62 積極的に授業に取り組むことができる 図 63 少人数で行う授業は分かりやすいか

生徒の実際の意見（アンケート項目の4）

よく、友達が分からない所があたりすると、たいてい自分もあか
いながら、たりするそんな時に、理解のときという友達に教えて
もらって一石二鳥！、この感じがします。三石四鳥？

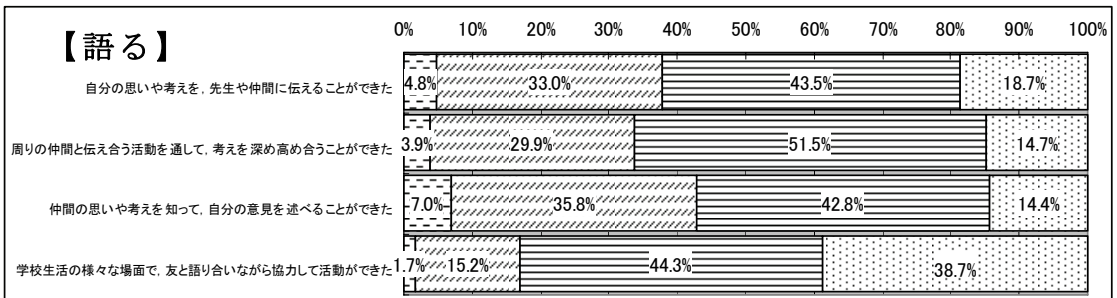
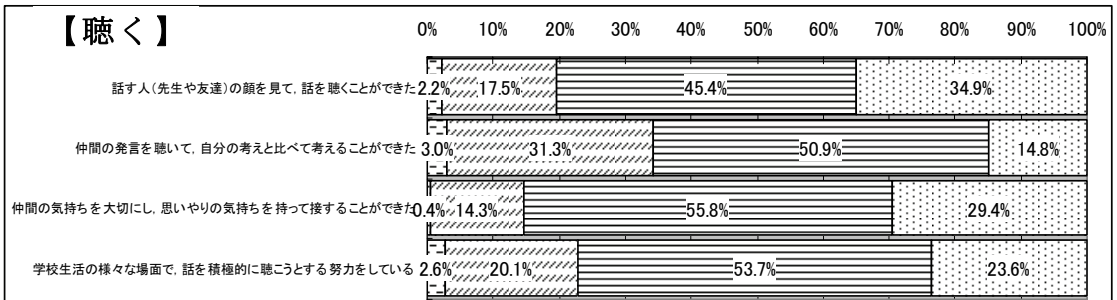
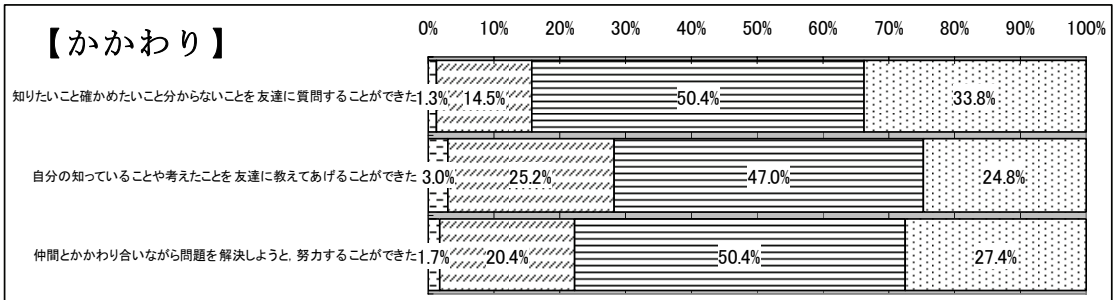
数学では、自分が思ったことを言い合える事によって疑問が解消していく時
に感じました。英語では、一人一人が理解のとき分からない所
は、友達に聞いて学習時に感じました。

生徒の意見の実際（アンケート項目の5）

授業に参加する人と参加していない人と分れている状況があるから、全員が
参加できるように全員で意識しないと行けないと思う。例えば、誰か
が発言した時に発言した人が「ほんとうですか？」という感じで
聞いてみたりするのも良いと思います。

Ⅰ 「前期の学びをふりかえろう」アンケート

アンケート結果（1年生） 評価 不十分→あまりできなかった→できた→よくできた



4月に学級の学習目標を掲げ、「授業は自分たちで創るもの」という気持ちで毎日の学習に取り組んできた。「学び合い」の授業の前期のふりかえりをしたとき、下のような意見も出てきた。1年生の脱履に掲示し、さらに後期の進歩につながるようにした。

- ・自分の意見を聞いてもらうため積極的に発表する。みんなで意見を出し合い学習を深める。
- ・自分が分かったら、分からない人に教えたり、仲間と学び合ったりする。
- ・思いやりの気持ちをもって、人の気持ちを考えて授業に真剣に取り組む。
- ・仲間の発言を聴いて、自分の考えと比べたり、仲間のよいところを探したりしたい。
- ・先生や友達の様子を見て話を聞く。
- ・みんなとかかわって、分からないところを残さない。
- ・分からなかったらみんなで考える。
- ・学習目標を常に意識して、取り組みたい。
- ・授業の中でも学習目標を声に出して使っていく。
- ・授業では、相槌や質問を大事にする。
- ・恥ずかしがらず、1日1回は「語る」。
- ・クラス全体で、注意や呼びかけができるようにしたい。

A、Bのアンケート結果からも分かるように、現在どのクラスもまだまだ充実した学びが行われているとは言えない現状である。そのため、学年の職員で話し合いをし、以下の取り組みをすることで「生徒達自身が主体となって授業を作っていこう」という雰囲気が出てくるのではないかと考え、取り組みを始めた。取り組みの内容は、「学びのクラスのゴール」を作るというものである。そのゴールへと近づけるように短期目標を考え、定期的に生徒達が自らの学びの様子を見てもらうために公開授業を開き、現時点での学びの様子を評価してもらい次の目標へと繋いでいく、という取り組みを各クラスとも生徒主体で行っている。

2) 実践内容の実際

①クラスのゴール作り、目標達成のために必要な手だて（短期目標）の設定

事前に各クラスの生活班の班長に今後の取り組み内容について事前指導を行なった。その後、各クラスの班長が中心となって「ゴール作り」を行うための「学び学級会」を開いた。

生活班長指導 11月24日(火)昼放課

参加者：生活班長（学級代表、学級書記、代議員）各クラス6名 合計42名。

内容：学活での話し合いのための事前指導。

学び学級会パートⅠ、パートⅡ 11月24日(火)6限学活、12月3日(木)4限学級活動

司会：学級代表

内容

- ・学級代表による問題提起（3分）（写真 24）
- ・クラスの学びの現状についてふりかえり
個人でのふりかえり（2分）ワークシート使用
生活班での意見交流（3分）ワークシート使用
全体で発表（3分）←1班から順に発表
- ・クラスのゴール作り（写真 25）
（ふりかえりから学級での学びの最終目標を設定する。3月までにどのような学びの集団になりたいかを具体的に考え、最終的には文章にする）
- ・個人で考える（3分）ワークシート使用
- ・生活班での意見の練り上げ（5分）ワークシート使用
- ・全体で発表（6分）←全班発表
- ・各班の発表から、学級のゴールを文章で作る（10分）



写真 24 学級代表による問題提起



写真 25 クラスのゴール作り

短期目標・実践期間・公開授業日の設定 短期目

標は具体的な姿が見えるようなもので、いつまでにできるようにするのかを決める。そして、その姿を評価してもらうために公開授業日を決める。

（例）短期目標：発言者に対して必ず全員で反応する

実践期間：12月3日（木）～12月18日（金） 公開授業日：12月18日（金）3限 数学

決定した各クラスのゴール

	クラスの学びのゴール
1組	授業とのめりはりをつけて、絆を深め合い、だれでも挙手・発言ができるように一人一人が自信を持って仲間とともに互いを高めあうSMILEクラス
2組	分からないところを教え合い みんなが手をあげられる 楽しいクラス
3組	みんな思いやりをもち、積極的に堂々と意見を言って楽しめる授業!!
4組	聞く態度をしっかりと、発言しやすい環境を作る
5組	みんなが積極的に発言しかかわりあうことで生まれる授業 それが5組のSMILE そして夢をつかめ!
6組	みんなが授業の輪に入ればもっと授業が楽しくなり みんなが発言すればもっと授業が分かりやすくなる それが6組感動メイカー

7組	みんなが授業に参加して、みんなが発言していけば、おのずとみんなが反応する。 それこそ7組絆の力 ウルトラマンCOSMOS
----	---

第1回短期目標

	第1回短期目標	公開授業
1組	1日1回必ず自信を持って挙手・発言をする 実践期間 12月3日(木)～12月16日(水)	12月16日(水) 社会
2組	話す人の方を見て、リアクションをする 実践期間 12月3日(木)～12月14日(月)	12月14日(月) 1 限国語
3組	A 相手を思いやり(相手の目を見て話を聴く) K かかわりを持ち(先生・友達・先輩とかかわる) B ベストを尽くし(授業に一生懸命取り組む)、 微妙な空気にならない(意見をたやさずリアクションをとる) 実践期間 12月3日(木)～12月21日(月)	12月21日(月) 4 限社会
4組	発言する人が発言する前に「話します、言います」とみんな に呼びかける。みんなが返事をしたら話す。 実践期間 11月24日(火)～12月11日(金)	12月11日(金) 4 限理科
5組	発表者の方を向き、発表が終わったら全員が反応しよう！ 実践期間 12月3日(木)～12月18日(金)	12月18日(金) 4 限数学
6組	どんな発言に対しても気持ちを込めて優しく反応 →みんなの自信がつく 実践期間 12月3日(木)～12月15日(火)	12月15日(火) 6 限学級活動
7組	自然な挙手と自然な反応をする 実践期間 12月3日(木)～12月16日(水)	12月16日(水) 1 限数学

② 掲示物等の作成

- ・クラスのゴール (教室前面に掲示：写真 26)
- ・ゴールへのあゆみ (教室内・廊下に掲示：写真 27)
- ・短期目標の掲示 (教室入りに掲口示 写真 28)
- ・公開授業を知らせるビラ (先生方に配布：写真 29)

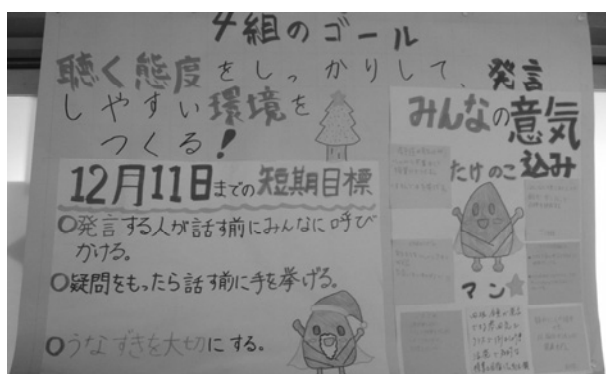


写真 26 クラスのゴール

・公開授業のアドバイスカード（先生方に書いてもらうためのもの：写真30）

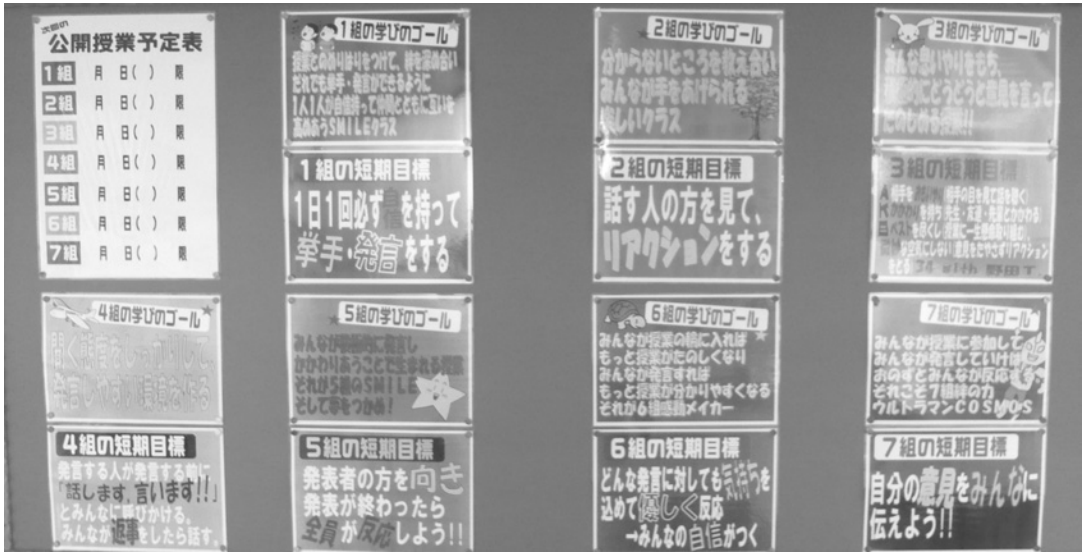


写真 27 ゴールへのあゆみ



写真 28 短期目標

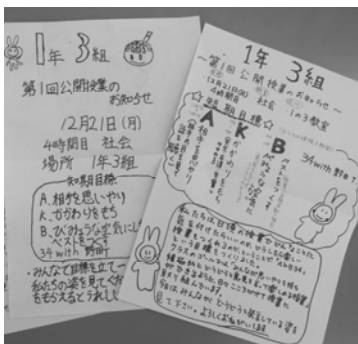


写真 29 公開授業を知らせ

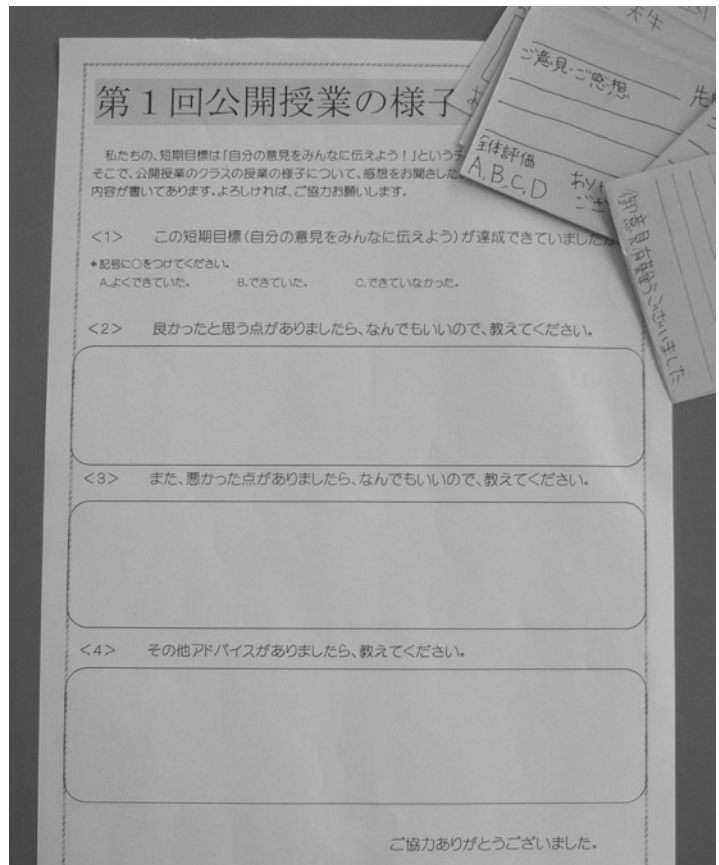


写真 30 公開授業のアドバイスカード

③実践・公開授業

短期目標の達成に向けて、日々の授業で実践する。

日々の実践の評価をしてもらうために、定期的にクラスの授業を公開する。

○1年6組の第1回公開授業の様子（写真31）

12月15日(火)6限 学級活動

短期目標「どんな発言に対しても気持ちを込めて反応→みんなの自信がつく」



写真31 1年6組の第1回公開授業の様子

○1年4組の第1回公開授業の様子（写真32）

12月11日(金)4限 理科

短期目標「発言する人が発言する前に「話します、言います」とみんなに呼びかける。

みんなが返事をしたら話す」



写真32 1年4組の第1回公開授業の様子

○1年7組の第2回公開授業の様子（写真33）

1月27日(水)5限 英語（少人数）

短期目標「自分の意見と友達の見解を比べてリアクションする」



写真33 1年7組の第1回公開授業の様子

④ 評価

公開授業を参観された先生から評価をいただく。(評価カード・アドバイスカードの使用

図 59、60)

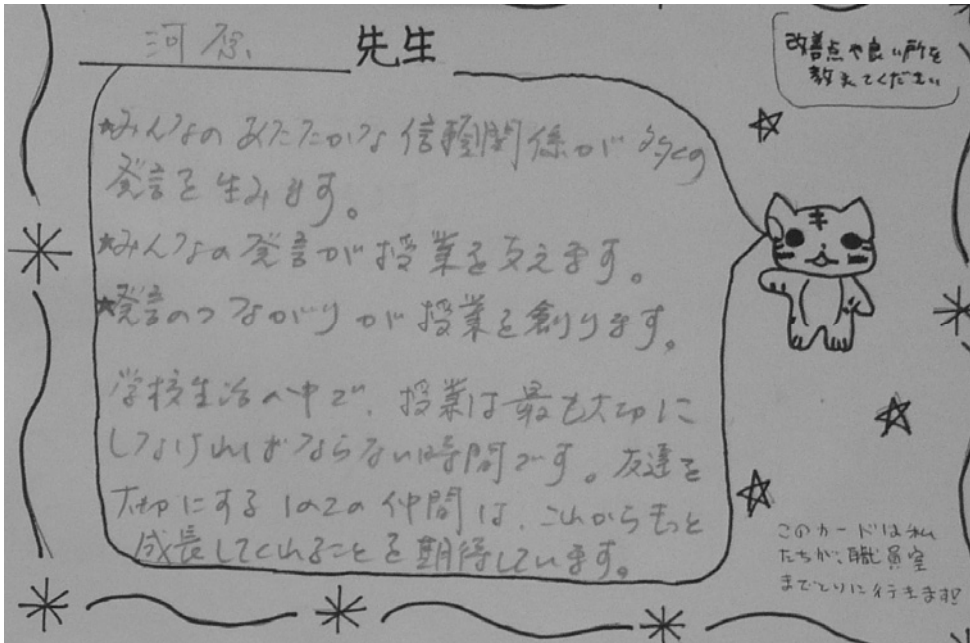


図 59 1年2組の第2回公開授業後のアドバイスカード

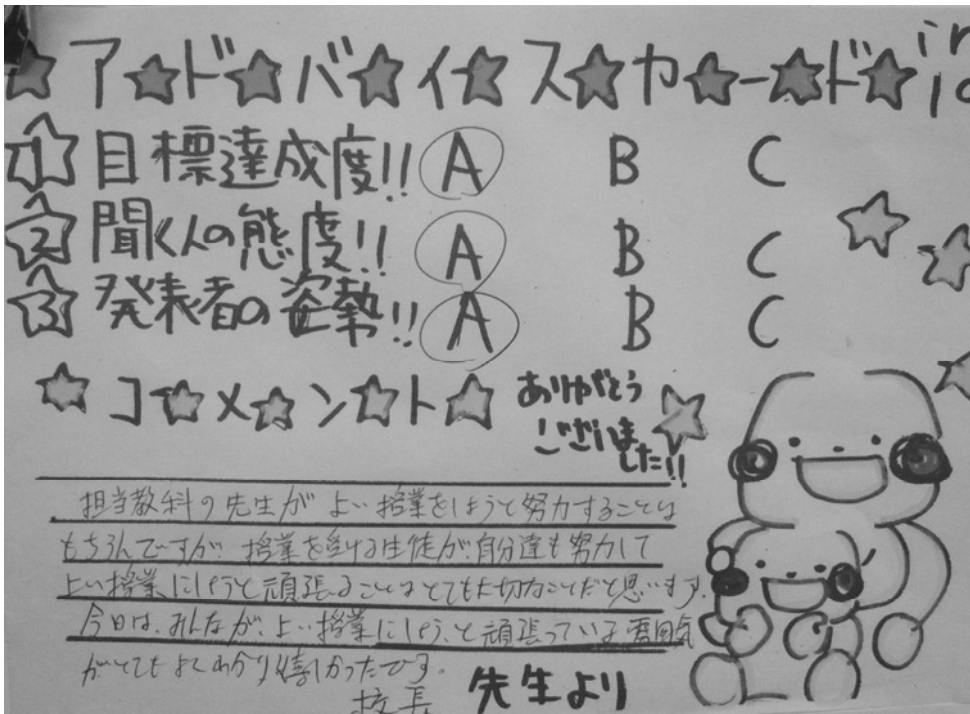


図 60 1年6組の第2回公開授業後のアドバイスカード

他の先生からのアドバイス

- ・ 仲間の意見や先生の説明をしっかりと聴こうとする姿勢・態度がよく伝わってきました。とても穏やかに静かに、そして真剣に取り組んでいる姿から6組のはじめが伝わってきました。班になって活動するときに、それぞれがもっと自分の考えや思いを伝え合えるようになっていけるといいなあと思いました。
- ・ 授業が楽しくなってきたようです。後は心を傾けて聴く姿勢ができるといいですね。
- ・ 真剣に、そして楽しんで取り組んでいる姿がよく伝わってきました。

⑤振り返り

- ・ 毎日の自分たちの学びの様子を生徒自作の「振り返りカード」で振り返りをする。
- ・ 公開授業後、学びの姿を振り返る（自己評価：図 61）。

日々の短期目標の振り返り

生徒が作成した振り返りカードを使用している。朱書きも班長が自宅で行っている。

各クラスの公開授業のふりかえり(写真 11)

各クラスの公開授業後にふりかえりをし、ゴールへ近づけるように次の短期目標を考える。学級活動の時間が取れない場合には、S Tの時間を使って行う。それらを掲示物にし、教室や廊下にも掲示をして、他のクラスの状況も見られるようにして、更なる意識付けを行った。

短期目標達成度をふりかえる→新たな短期目標の設定→実践・公開授業

○公開授業後のふりかえりで話し合いをし、決まった次の短期目標

第2回短期目標 実践期間 1月12日(火)～1月29日(金)

	短期目標	公開授業
1組	はじめをつける ・ 放課・授業のはじめをつける ・ 聞く・話すのはじめをつける ・ 朝練・読書・S Tのはじめをつける	1月26日(火) 2限 理科
2組	意見をみんなに伝えるために1時間に1回は発言する	1月25日(月) 1限 国語
3組	授業が楽しくなるリアクションをしよう!	1月26日(火) 3限 数学
4組	・ 前と同じく、発言者は発言する前に周りを確認する ・ 全員が必ず挙手をして自分の自信度を伝える ・ 聞く人は発言者の方に体を向ける ・ 話し合いの声のボリュームを上げる	1月27日(水) 6限 音楽
5組	みんなが意見を持ち、意見のキャッチボールをしよう。	1月26日(火) 2限 国語

6組	けいいとまごころ じしんをもって発言し めを見てかかわる	1月25日(月) 3限 数学
7組	自分の意見を人の意見と比べてリアクションする!	1月27日(水) 5限 英語

第3回短期目標 実践期間 2月1日(月)～2月19日(金)

	短期目標	公開授業
1組	人の意見を聞いて反応を示す!	2月16日(火) 4限 数学
2組	授業と放課のけじめをつけて教えてもらうことに感謝をもって授業をうけよう!	2月19日(金) 5限 音楽
3組	発言→オーバーリアクション	2月16日(火) 2限 数学
4組	・発言する前に「話していいですか」と言う。 ・リアクションを大切にする ・意見リレーをする	2月15日(月) 4限 国語
5組	グループで役割を果たして話し合い、協力してチームワークを高めよう!	2月15日(月) 2限 社会
6組	授業の輪に入って意見のキャッチボールをしよう!!	2月12日(金) 3限 社会
7組	発言 ¹ + 反応 ³² = 参加 ³³	2月16日(火) 3限 数学

(2) 実践2 かかわりを多く持たせるための工夫 (3年生で実施)

ア 実践内容

かかわりを持つことで、クラス全体の意識が高まり、学習のモチベーションが高まると考えられる。そのために、「ペア→グループ→クラス全体」とかかわりを小さな集団から始めることで抵抗なく進められるように工夫した。

イ 実践内容の実際

①実践1(ペア) 3年 Speaking Plus 道案内

教科書でのモデル対話の学習後、名古屋の市営地下鉄の路線図を利用して、ペアで練習した。出発地と到着地を指定し、その後すぐ会話ができるかを課題とした。チャレンジ的な課題であったが、ペアで真剣に取り組み、お互いに協力し合って活動することができた。

A: Could you tell me how to get to Sakae?

B: Sure. Take the next blue train to Fushimi, and change trains there.

A: How many stops is Fushimi from here?

B: Six stops.

A: Which line should I take from Fushimi?

B: Take the Higashiyama Line. It's the first stop to Fujigaoka.

下線部を指定し、路線図を見ながら練習をした。

②実践 2 (ペア) 3年 Speaking Plus 電話の会話

教科書のモデル対話の学習後、電話の相手を身近な人に置き換えてペアで練習した。名前を変えるだけでも身近な会話になり、ペアによっては、モデル対話から応用した会話を作ることもできた。

A: Hello?

B: Hello. This is Mike. May I speak to Judy, please?

A: I'm sorry, she's out. Do you want her to call you back?

B: No, but can I leave a message?

A: Sure.

B: Could you tell her to come to Naomi's at two?

A: OK. Naomi's at two.

B: Yes. Thank you, Mrs. Brown.

A: You're welcome.

下線部を変えながらペアで練習をした。

③実践 3 (グループ) 3年 Let's Read "A Mother's Lullaby"

4つのグループを作り、各グループ1ページを担当して、物語の日本語訳をした(図63)。その際、課題として、ただ訳すのではなく、「小学生にもわかるように絵本のように訳しなさい」とした。課題を設定することで、直訳的なものではなく、やさしい語り口調の訳をグループで話し合いながら作ることができた。

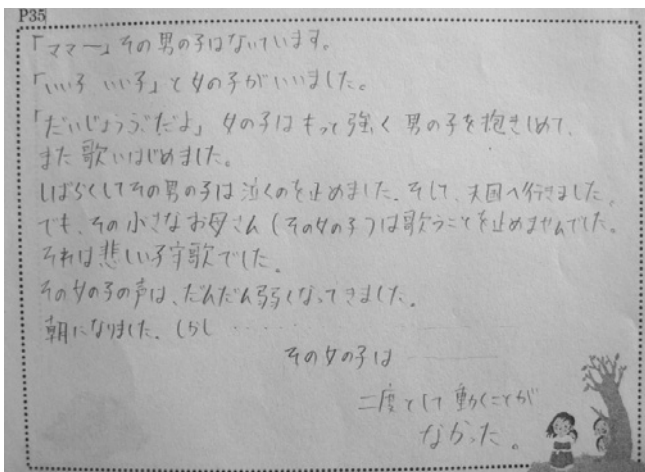
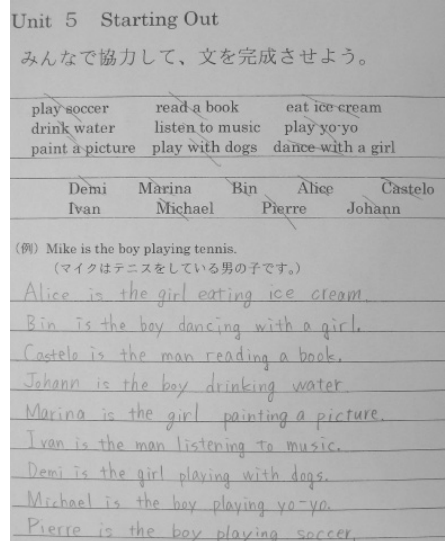


図 63 グループで作成した物語の日本語訳



④実践4（グループ） 3年 Unit 5 後置修飾

グループを作り、絵の中の9人がそれぞれ何をしている人なのかを、1人の生徒が絵を見に行き、見たものを他のグループのメンバーに伝え、文章を完成させる活動をした。自分がきちんと見てこないと伝えられないこと、仲間の言ったことをきちんと聞かないと誰のことを言っているのかが分からなこともあり、グループの仲間同士が真剣に伝え合うことができた。



図 64 課題として提示した絵

(4) 実践4 教科係を使った授業展開

ア 実践内容

一斉授業形式で教師が一方的に進める形式の授業から離れて、生徒自身が授業の司会をしながら、話し合いを中心にした授業形態にする。

イ 実践内容の実際

教科係

- チャイムと同時に教科係が前に出てきて「チェックテスト」を実施する。
- 口頭 or 黒板を使って出題。
- 答え合わせをする。（生徒に答えさせるのもいい）
- どれくらいできたかを確認する。（挙手させ、必ず何割くらいの人が手を挙げたかを確認する）
「全部できた人？」 「4点の人？」
- 結果がよかった場合。



写真 34 生徒同士の学び合い

「全体的には良くできているので、今日の授業のめあてと流れを先生お願いします」
あまりできていない場合。

「学習ノートを出して、前の授業の復習をしてください」

（みんなが学習ノートを出して学んでいることを確認する→1分間時間を与える）

「やめてください。今日のめあてと学習の流れについて先生お願いします」

- 教科係は席に戻る。

教師

- 今日のめあてを板書し、「自己診断カルテ」に書かせる。
 - ・本時の授業の流れをマーカー等を使い学習ノートで知らせる。
- タイムスケジュールを黒板に書く。

※全体交流をする項目がある場合はそれを指示し、最初の発表者名を伝え、何名の発表者かという数字を書く。

教科係

○「みんなで語り合いながら学習ができるように席を移動してください」

教師

○生徒の学びの様子を見つめながらアドバイスをしていく（写真 34）。

- ・ボーッとしている生徒はいないか？
- ・真剣に取り組んでいる生徒は誰か？
- ・一人で調べ学習をしている生徒はいないか？
- ・まわりと顔を寄せ合って学習しているか？
- ・口を動かしたり、目を動かしたり、首を動かしたりしているか？
- ・どんなことを語り合っているか？
- ・学習ノートにどんなことを書いているのか？
- ・進行状況はどうか？
- ・全体がとまどっている場合は、黒板を使ってヒントを示す。その場合は必ず全員が黒板を注目しているかどうかを確認する。

「全体交流」の指示がある場合

【教科係】

○「全体交流の時間になりました。ペンを置いて姿勢を正してください。」

○「それでは課題1について〇〇君お願いします。」

（これ以後は男女相互指名とする→指名された生徒は返事をしっかりしてから意見を発表する→人数分の発表が終わったら）

「これ以外に発表したい人はいませんか？」

- ・手が挙がったら、その生徒を指名し、発表者は発表後「他にありませんか」と聞く。）
- ・手が挙がらない場合は教科委員が発表してもいいし、他の生徒を指名してもいい。

○「それでは先生お願いします。」

【教師】

○必要ならば補足説明を加える。

○次の課題の発表に移るよう指示する。

【教科係】

○「それでは課題2について〇〇さんお願いします。」

（これ以後は男女相互指名とする→人数分の発表が終わったら）

「これ以外に発表したい人はいませんか？」

- ・手が挙がったら、その生徒を指名し、発表者は発表後「他にありませんか」と聞く。）
- ・手が挙がらない場合は教科委員が発表してもいいし、他の生徒を指名してもいい。

○「それでは先生お願いします。」

【教師】

○必要ならば補足説明を加える。

○みんなの意見を聞いて自分の意見の修正が必要な生徒には考え直す時間を与える。

「全体交流」の指示がない場合

【教科係】

- 「調べ学習の時間が終わりました。ペンを置いて姿勢を正してください。」
- 「それでは先生お願いします。」

【教師】

- 調べ学習に関する新たなる課題を提示する。その際、考える時間と最初の発表者の指名と発表人数を指示しておく。

【教科係】

- 「話し合いをやめて、ペンを置いて姿勢を正してください。」
- 「それでは課題について〇〇君お願いします。」
(これ以後は男女相互指名とする→人数分の発表が終わったら)
「これ以外に発表したい人はいませんか？」
 - ・手が挙がったら、その子を指名し、発表者は発表後「他にありませんか」と聞く。）
 - ・手が挙がらない場合は教科委員が発表してもいいし、他の生徒を指名してもいい。
- 「それでは先生お願いします。」

【教師】

- 必要ならば補足説明を加える。
- みんなの意見を聞き、自分の意見の修正が必要な生徒には考え直す時間を与える。

教師

- 本時の学習の確認と自己の学習の振り返りをさせる。

5 考察

(1) 学級役員を中心とした生徒主体の学び作り

取り組みを始める前と今では、どのクラスも授業に対する意識が非常に高くなっていると感じる。各クラスとも学級代表を中心として、毎朝クラスに呼びかけをしてその日の意識を高めることはもちろんのこと、授業と授業の間の放課にも呼びかける姿も見られるようになってきている。

この取り組みを通して、学級・学年の学びに対するモチベーションが高まったかどうかを以下の3点に分けて考察してみた。

- ①授業への参加度（挙手・発言・意見交流）
- ②授業への参加度（聞く態度・反応・リアクション）
- ③授業外でのクラスの様子

①授業への参加度（挙手・発言・意見交流）



写真 35 気軽に聞き合える関係

この取り組みを行う前の状況は、どのクラスも挙手をしたり全体の前で意見を発表したりする生徒は限られていた。教科によって多少の差はあるが、全員が挙手をしたり発言しようとしたりする雰囲気はあまり感じられなかった。しかし、現在はかなり変わってきている。簡単な問題や質問に対しては、クラスの大半の生徒が挙手をしたり発言したりすることができるようになってきている。また、分からない生徒でも近くの生徒に気軽に聞き合える関係ができてきているため、相談して分かった時点で発言するということがよくある（写真 35）。



写真 36 発言に拍手で応える

このようなことを通して、生徒は改めてみんなと意見を交流しながら（つないで）授業を作っていくことの楽しさを感じているように思える。この雰囲気を大切にして、教師側も、もっとたくさんの意見を交流させられる場面設定をしたり、もっと意見が言いやすい雰囲気を作ったりすることに励んでいかなければならないと感じている。

②授業への参加度（聞く態度・反応・リアクション）

①の挙手・発言・意見交流をさらに活発にさせ、意見が言いやすい雰囲気を作るもっとも大切な要素が、発言者に対する聞く態度・反応・リアクションだと思う。しかし、これはまだまだ課題があるように感じる。生徒も同じように感じている。

以前に比べるとかなり多くの生徒が、反応することを意識するようになってきてはいる（写真 36）。発言したときに皆が反応してくれるとうれしさや安堵感を感じることも身をもって体感している。しかし、まだまだ反応がパターン化しているように感じる。発言に対して賛成の場合は「いいです」「いいと思います」「拍手」などである。時おり、「今の意見に対して付け足しがあります」など前の人の意見と比べた反応もできるようにはなっているが、もっと生徒同士の意見で授業が進んでいくことを目標にしているので、まだまだ課題があると感じている。

③授業外でのクラスの様子

短期目標の意識付けのために、各クラスで考えてそれぞれ取り組みをしている。取り組んでいる内容は以下のようなものである。

○朝の会でクラスのゴール・短期目標を全員で声に出して唱える。

○朝の会で、昨日の短期目標に対する反省をし、その日の授業に生かす。

○授業と授業の間に、学級 4 役を中心としてみんなに呼びかけをする。

○帰りの会でクラス独自のふりかえりカードを使ってその日のふりかえりをする。

→回収して、班長（6 人）で分担して家に持ち帰り、朱書きを入れて次の日全員に配付する。

○帰りの会で、今日の短期目標に対する反省をする。(良かった点・悪かった点)

このような取り組みを通して、クラスとして何をがんばっていこうとしているのが明確になっているので、生徒も努力しやすいように感じる。また、公開授業のチラシ作りや、クラスの掲示物の作成も放課の時間を使って自主的に取り組んでいる(写真 37)。当初ははじめてのことばかりで戸惑いを感じている生徒ばかりであったが、今ではクラスのリーダーを中心として自主的に活動できるようになっている。担任はアドバイザー的な役割で、生徒たちが困ったときに手助けをしたり、アドバイスをしたりする程度である。つまり、かなり生徒たちだけで進めることができるようになってきた。



写真 37 公開授業のチラシ作り

(2) かかわりを多く持たせるための工夫

ペア・グループ活動について ペア活動を多く取り入れ仲間とかかわる時間を多くもった。相手がいることで、伝えようとする気持ちや、相手に迷惑をかけないように自ら進んで取り組もうとする気持ちを持たせることができた。また、分からない箇所を気軽に聞ける雰囲気を作ることで、学習に対する姿勢が前向きになった。グループ活動では、コミュニケーション活動や、物語の読み取りを行った。お互いに協力し合いながらやらないとできない課題を与えたが、ペア活動から続くグループ活動だったので、スムーズに仲間同士助け合いながら活動に取り組むことができた。

クラスでの発表について ペアやグループの活動の結果を全体場で共有するために、それぞれのペアやグループの取り組みを発表させた。発表することを事前に伝えることで、ペアやグループの活動も目的意識を持って取り組むことができた。自分



写真 38 友達と相談しながら学習を進める

も同じ活動をしているので、仲間の発表にも関心を持つことができ、自分との比較をすることができた。また、相互評価することで認め合うことができ、学級で一体感のある時間を共有することができた。受け入れられる経験をすることで、次の発表にも意欲的になり、活動への工夫が見られるようになった。

(3) 教科係を使った授業展開

社会科が好きな生徒も苦手な生徒も、一緒になって資料集や教科書を見ながら調べたり、相談したりしながら理解を深めることには一定の成果があったと思われる。授業中に学習内容以外のことを考えたり、寝てしまったりする生徒は減少した。また、何よりも学級の人間関係をより良好にしていく要素になり得ると感じた。特に異性間の隔たりが減り、フランクに隣同士の生徒が話し合いを進めることができるようになった(写真38)。

また、より多くの気づきを授業の中で掘り起こす仕掛けを、さらに準備していくことが必要だと感じた。また、授業の中で提示する課題のさらなる質的向上も重要である。社会科を得意教科とする生徒に対して、さらに興味関心を高め、学習内容に深まりを持たせられる課題を設定することや、話し合いの内容をその場で理解し、さらに質問をしたり、あるいは反論したりして、話し合い自体をより質の高いものへしていくことも必要であると感じた。

まだまだ、考え、実行していかなければならないことは多い。今後も研究を継続していきたい。

6 おわりに

このように、「クラス目標を明確にし、学級役員や教科委員の生徒を中心とした生徒主体の授業作りを行えば、学級・学年の学びに対するモチベーションがあがり、もっとみんなが学び合おうという学級・学年の雰囲気ができる」と仮定した研究の主題は、非常に成果があったと考える。しかし、取り組んでみて見えてきた課題も多くある。今後はもっと生徒主体の授業作りを進めていけるように、研究をさらに続けていきたい。



平成21年度 第2号

授業 研究会だより



平成21年9月16日
犬山市授業研究会
犬山市小中学校長会

平成21年度 第1回 公開授業研究会 犬山の教育はレベルが高い！！



ビデオ公開授業の様子1

7月29日（水）、犬山福祉会館で本年度第1回公開授業研究会を開催しました。総勢86名という多くの方々の参加を得ることができました（小学校関係51名、中学校関係13名、市外20名）。今回は市外から20名の参加がありました。遠く久留米市や鳥取市からも、この研究会のためにはるばると来犬されました。また、大学の先生やその先生のゼミ生も東京から駆けつけるなど、犬山の「学び合いの教育」が全国的に注目されていることを改めて実感しました。当日は下記のような日程で行いました。この公開授業研究会も、今回で通算6回目になります。これまでにビデオ公開授業として、小学校の部で「国語」「道徳」

- 1 開会（13:00～）
 - あいさつ
中京大学教授 杉江 修治 先生
- 2 ビデオ授業公開（13:10～）
 - 小学校6年国語科の授業
犬山市立城東小学校教諭
松本 哲廣 先生
 - 中学校1年音楽科の授業
犬山市立犬山中学校教諭
河原 佳子 先生
- 3 研究協議Ⅰ（15:00～）
 - 前班による研究協議
- 4 研究協議Ⅱ（15:50～）
 - 後班による研究協議
- 5 指導・助言（16:40～）
中京大学教授 杉江 修治 先生
- 6 閉会（17:30）

「体育」、中学校の部で「理科」「英語」「社会」「数学」の優れた実践を紹介してきました。紹介した分だけ犬山の学び合いの授業が広まりレベルアップにつながったと確信しています。

また、毎回、参加者から好評なのが研究協議のⅠとⅡです。小グループで日頃の実践を交流することで、それぞれの先生が明日からの授業に意欲をかき立てているようです。そして、ビデオ授業の講評を中心に「犬山の授業づくり」の指針を示していただいているのは、中京大学の杉江先生です。先生は、本年度から市の指導主幹ではありませんが、先生の熱意に甘え、それこそ手弁当で指導に来ていただいております。

【ビデオ公開授業】

小学校6年国語科の授業

犬山市立城東小学校教諭 松本 哲廣 先生
城東小学校では、さまざまな教科で「学び合い」を意識した交流の場を設け、グループで話し合ったり、仲間の多様な考え方に触れたりしながら、学習を進め

ています。そのため、松本先生のクラスの児童もグループ交流することに抵抗はなく、活発に意見を出し合うことができている状況でした。しかし、自分の意見を話すことはできるものの、意見の根拠など自分の考えを自分の言葉で説明したり、グループで話し合ったことを他の仲間に説明したりするなど、言葉で伝え合うことがうまくできない児童が少なからずいるととらえていました。

その現状を改善するために、国語の物語教材「ヒロシマのうた」の指導を通して、自分の考えを練り上げたり、仲間の意見を受けて考えを深めたりすることができるように、伝え合う活動を柱とした実践に取り組みました。

(1) 実践の仮説

- ①単元全体の見通しや、1時間の活動の流れを理解して、学習を進めれば、子どもは自主的に学習に取り組み、効果的、効率的な学習を実現できるであろう。
- ②個の考えをしっかりと持たせたうえで、それぞれが交流する場を工夫して設定すれば、子どもの伝え合う力は伸びるであろう。
- ③交流したことを基に、個の考えを再構築することができれば、読み取る力は高まり、発表意欲も高まるであろう。

(2) 実践の方法

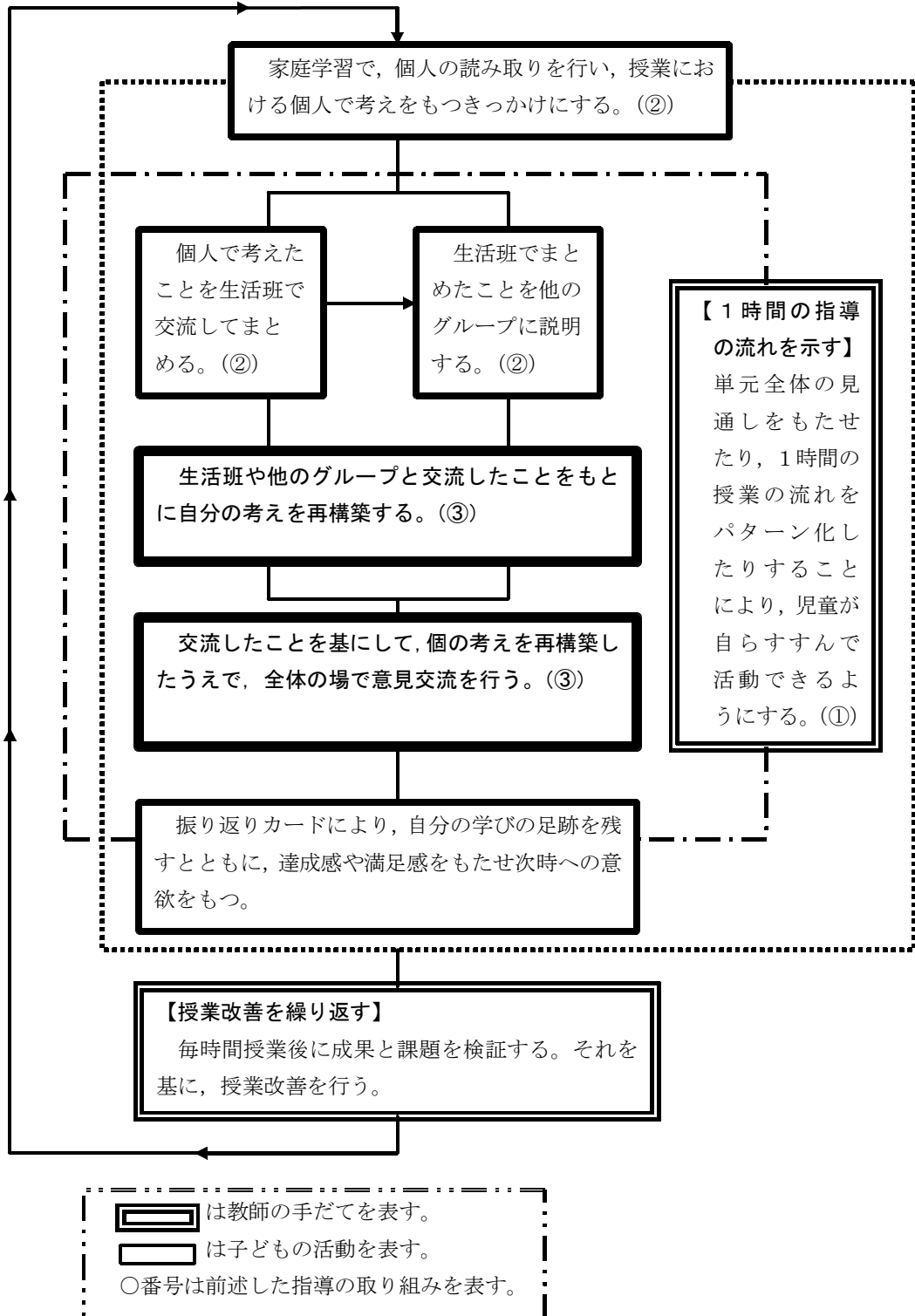
今回の実践では、強く心に残った叙述について個人で考えをまとめたり、仲間と話し合ったりする活動を中心に授業を展開しました。この強く心に残った叙述を「おすすめ」と呼び、児童には「おすすめ」とは何であるのかという定義を示しました。おすすめとは、該当場面で最も大切だと考える部分や、登場人物の心情が最もよく現れている表現のことを指します。すなわち、その場面の中心となる、核心部分です。個人での活動や仲間との話し合いの中で、こうした核心部分に迫る読み取りができれば、児童の学習活動に対する意欲が高まり、満足感も自己有用感も味わえるのではないかと考えました。

1時間の指導の流れをパターン化して取り組みました。

- ①家庭学習で個人の読み取りを行いレディネスをつくる。
- ②個人で考えたことを生活班で交流する。
- ③生活班でまとめたことを他のグループと交流する。
- ④2つのグループで交流した内容をもとに自分の考えを深める。
- ⑤学級全体でそれぞれの考えを交流する。
- ⑥振り返りカードに自分の考えをまとめる。

1時間の授業の中で上記の6つの段階で個人の考えを練り上げていくことで読解力が高まっていくことを期待しました。これを図で表すと次のようになります。

読解力を高めるための指導の流れ



(3) 成果と課題

○単元の当初は、やや戸惑いがみられたものの、パターン化した授業の形式に慣れるにつれて、児童が自ら進んで取り組む姿が見られるようになった。

○個人でしっかりと考えをもつことができていた。また、グループでおすすめを考える時や他のグループの友達に伝え合う場面でも、自分の考えたことを仲間に伝えようと・相手の考えをしっかりと聴こうとする姿が見られた。

○仲間との交流を経て、学級全体で意見交流をする場面では、多くの児童が自主的に挙手をし、考えたこと、話し合ったことを伝えたいという意欲的な姿を見ることができた。また、そうした交流の中で発言を繋げていくことにより、場面の重要な部分について話し合いが深まり、学級全体で読み取りを深めることができた。

○自分の考えを伝え合う時に、相手の顔をしっかりと見て伝え合いができるまでには至っていない。

中学校1年音楽科の授業 犬山市立犬山中学校教諭 河原 佳子 先生

(1) 犬山中学校の音楽科の目標

豊かな感性を育み、音楽のよさ・美しさを感得できる音楽科の学び

- 共に創り上げよう！ 音楽の楽しさ、すばらしさ -

(2) 音楽科で育てたい子ども像

「共に創り上げる喜び」を求めて活動し、その喜びを感じ取ることができる生徒

(3) 授業づくりで大切にしていること

- ・ふりかえりカードの活用
- ・前時のふりかえりから、学習課題を自ら見つける。
- ・友達のよいところやがんばる姿を認め合う。
- ・子どもの活動・発言をつなげる。
- ・学習目標の定着化・意識化
- ・自分の思いや考えを伝える力を伸ばす。
- ・なぜ？どうして？ともう一歩思考を深められるような支援。



ビデオ公開授業の様子2

(4) ひとりひとりに「感動ある学び」を与えるポイント

【感動の場面】

○練習における問題点を伝え合い、自分の歌唱活動に生かしていく過程。

○練習によって、自らの進歩や合唱の響きを確認できた瞬間。

【ポイントとなる手だて】

○ふりかえりカードの前時の反省から、互いの考えを伝え合えるようにする。

○練習課題をパートで相談し、その課題に向かって取り組めるようにする。

(5) 本時の授業の流れ

①ふりかえりカードからの導入

- ・音楽構成要素を用いてのふりかえり→自然に認め合い、拍手をする姿
- ・歌詞の内容を捉えて、表現の工夫を考えた内容の紹介
- ・練習時間の使い方→実動時間を長く
- ・友達の活躍を認め合う→自分も次はがんばろうとする意欲

②自分たちの今の歌唱状況から、課題を探す

③学習目標の提示「アカペラで歌おう」

- ・練習方法の指示

④学習課題をパートで決定する

- ・音程を確実にしよう
- ・強弱を付けて歌おう
- ・リズムや音の長さを正しく歌おう
- ・「ルルル・・・」「ラララ・・・」の部分の音程を正しく歌おう

⑤パートの練習開始

- ・指揮をしながら歌う練習→拍子のとり方の間違いを直しながら、互いに拍子を意識する
- ・男子同士2パートで協同練習を進める→2パートのリーダーの相談
- ・速度変化を指揮+手拍子で示しながら練習
- ・女子同士2パートで協同練習を始める→互いの音につられないように距離をとる工夫
- ・男女2パートで協同練習を進める→互いのパートの掛け合いに気づく
- ・教師はアルトの音程の難所を支援
- ・歌った後のパートでの相談の時
- ・CDの音を聴くことで確かめる
- ・アカペラでの練習開始

⑥アカペラで合わせてみる

- ・固まって歌いたい
- ・心配などことの打合せ
- ・手拍子で拍子を明確にする支援をする

⑦ふりかえりをする

- ・パートでできなかったことの相談→次の時間の課題みつけへ
- ・分かりにくかったおとの確認
- ・パート毎に反省の交流

⑧ふりかえりカードの記入（生徒のカードより）

- ・生まれて初めて指揮をしたけれど意外と楽しかった。

- ・音程がほとんど分かったが、他のパートを聞きながら歌うことはできない。
- ・「Uhー」のときの音程が、合わせると不安になる。
- ・強弱を工夫して自分たちらしく歌えるようになりたい。
- ・マイソングを見ないと、まだ微妙なところで間違える。
- ・〇〇さんがパートをよくリードしてくれた。
- ・〇〇さんが、大きな口をしっかりと開けて声を出してがんばっていた。

【研究協議ⅠとⅡ】

ビデオ授業をみる前に、あらかじめ参加した皆さんに研究協議の観点を下記のように提示しておきました。加えて、研究協議Ⅰで話し合った内容を研究協議Ⅱのところで報告することも伝えておきました。

(1) 研究協議Ⅰ

- ・子どもたちの意欲を高める仕掛けはどの ようになされていたか。
- ・協同の場面がどのように設定されたいた か。(協同：集団が共に育つことを目標とした集団場面)
- ・教師はどのような役割を果たしていたか。

(2) 研究協議Ⅱ

- ・研究協議Ⅰで話し合い・共通理解した内容を報告し合う。
- ・各グループから報告された内容をもとに、さらに話し合いを深める。

研究協議のグループはあらかじめ編成しておき、研究協議Ⅰのグループで座るように座席も指定しました。ビデオ授業による提案が終わったら机の向きを変えるだけで、すぐに研究協議に入れるようにするためです。そのために各グループの司会もあらかじめ指名しておきました。グループづくりで配慮したことは、同じ学校同士でグループをつくらない、できるだけ異校種になるようにすることでした。研究協議では、ビデオ授業で自分が学んだことを踏まえつつ、日頃の自分の実践を紹介し合いながら活発に意見の交流が進められたことが、事後の感想からも伺うことができます。



少人数による研究協議の場面 1

研究協議Ⅱのグループも、あらかじめ指定しておきました。司会も同様です。研究協議Ⅰで話し合ったことを研究協議Ⅱとは違った参加者に伝えることをあらかじめ伝えておきましたので、こちらの話し合いもスムーズに進みました。今回は、話し合う時間を 50 分に増やしましたが、それでも話し足りない感じがしました。研究協議のⅠもⅡも内容の濃い話し合いができたようです。

【杉江先生の指導・助言の概略】

○この二つの実践は、とてもいい実践であったというのが印象です。犬山の教育改革のスタンスは、主体的・民主的な子どもを育てることだと思います。すなわち社会に出て力になる子どもを育てることが教育の役目だと思います。その意味で今日の授業は、それに沿うものであったと思います。



杉江先生による指導・助言

○話し合いに意義があるのではなく、協力することに意義があります。学んだことを相手にしっかりと伝える、相手がうなづいてくれる、分からないことを教えてくれる、このような関係の中でやる気がおきます。今日の授業では、これがしっかりとありました。

○教師の出場を減らす工夫が必要です。準備をしっかりと行い子どもは其中でしっかりと活動する。いうなれば大きな手のひらの上で子どもたちを学ばせることが大切です。これまでは、小さな手のひらの上で学ばせていました。ステップ1が終わると次の小さな手のひらであるステップ2といった具合です。このようなことをしているから、手のひらからポロポロと子どもがこぼれ落ちていくのです。教師が大きなフィールドを用意して、その中で子どもが活動すると、個に応じた学習もできていくのです。今日の授業は大きな手のひらが用意されたいました。

○松本先生の授業は、単なる交流・意見の言い合いではありませんでした。言って聴いて、それを自分の中で咀嚼して、さらに良いものに練り上げることを意識した授業でした。良い挑戦だったと思います。

○今日の課題は、個人の課題とクラスの課題が示されていました。クラスとして何かを成し遂げようと明確にすると、子どもたちは、それに向かって協働できます。課題が曖昧な指導案を見ますが、本時の課題は一人一人の課題とクラスの課題が明確になっていましたので、協働がおき子どもたちのモチベーションが高まりました。

○音読の時間は個人差があるものです。それをグループの話し合いのステップを入れて吸収していました。工夫の一つです。グループでの話し合いのステップについて、どのような指示が出されていたのか放映されませんでした。指示の出し方一つで子どもの動きが変わります。「グループで話し合いなさい」ではだめです。どのような指示を出すと、あのような子どもたちの動きになるのか情報があると良かったと思います。

○今日の授業では、子どもたちが仲間に向かって話していました。仲間の言うことをしっかりと聴いていました。子どもたちの話す力を育てるとよく言われますが、一番の基本は、話す値打ちのある場面をつくることです。そのような場面で話す聴くという経験をさせることが大切です。自分に

関心のあることだったらしっかりと聴きます。聴かせたいことがあれば、しっかりと話します。要するに話す場面・聴く場面をどうつくるかで話す聴く力が育つのです。

○音楽は学校全体の雰囲気を表す教科です。荒れ気味の学校で、音楽室からの歌声が段々と大きくなり、そのうちに生徒が腹の底から大きな声を出せるようになってくると十分に落ちついた状態といえるでしょう。子どもたちの参加度をみると犬山中学校は安心です。河原先生の力量と学校全体の力量が表れています。

○犬山中学校の教科を越えた連携・教科を越えた学びは貴重です。犬山の教育改革も 9 年目です。子どもたちは本当によく学び合うようになりました。しかし、安心してたずなを緩めると子どもたちは方向を見失います。しっかりと決めたことを貫いていくと小学校の学び合いが中学校で生きることとなります。小中連携で一番大切なことは、学びの原理が一致していることです。

○河原先生の授業は、生徒たちがよく動く仕掛けがつくられている良い授業でした。アカペラで歌うという学習課題で生徒たちが動いている。ただ、導入でアカペラで歌う難しさと意義について、もう少し時間をかけても良かったと思います。今日は何をするのかを示すことはとても重要なことです。今日の学びを子どもたちが分かりながら学習することがポイントになります。

○課題の中にチャレンジが含まれていることが重要です。そのような意味でアカペラでやるという課題に意味がありました。だから、生徒のパート練習は単なる繰り返しではありませんでした。

○最後の場面は、とても良い光景でした。8人グループは大きいサイズだとは思いますが、生徒が凝集して話し合う姿は今日の授業を象徴していました。最後に自分たちの活動を振り返り、みんなの前で発表するのは有意義なことです。仲間の前で自分たちの課題を宣言するということは、とても心に深く残ります。書いたことでも心に残りますが、大事な仲間の前で次にやることを宣言することは、構えを大きくすることにつながります。これは集団心理学の実験でも明らかにされています。仲間の前で宣言したことは、次にきちんと行動に移そうとします。

○犬山の状況が多少変わってきています。授業研究会も市教育委員会の主催から校長会の主催になりました。しかし、最終的に子どもを変えていくのは一つ一つの授業です。犬山の状況の変化の中でもたずなを緩めないことが大切です。一つの町でこれだけのものを創ってきたのは前例がありません。ぜひ、現場の力で継続してほしいと思います。犬山には研究的実践があります。ぜひ、挑戦を続けてほしいと思います。

【参加者の声—感想からの抜粋】

★犬山の教育に対する熱意と先生方のレベルの高さを感じました。意見交流の際は、自分に自信がなく、なかなか話すことができず、力の無さを感じました。しっかり勉強して、また、このような機会があれば、より実りのある意見交流にしていきたいと思いました。常に考え、良くしていこうという気持ちが大切であると改めて実感できました。とても良い経験ができました。



少人数による研究協議の場面 2

★鳥取からやってきたかいがありました。今日学んだことを持ち帰って、鳥取にも広めたいと思います。本当にありがとうございました。

★児童・生徒の協同（教え合い・学び合い）学習の実践を拝見し感動しました。教師の役割として、
①学級・個人それぞれの学習目標の設定 ②班学習・個別学習・一斉学習等の学習形態に応じた時間配分 ③単元を十分に見通した授業計画の作成の大切さを再認識しました。「振り返りカード」を有効に利用することの大切さは十分理解できます。しかし、教師の負担増をどのように克服するかも現実の問題として考えなければならないでしょう。大変有意義な研修会でした。ありがとうございました。

★学び合いの場面の時に、教師の動き、生徒の動きを一つ一つ確認することができ、自分の授業に生かせるようにしたいと思います。また、振り返りカードの意味と良さを再確認することができ、授業で生かしていけるようにがんばりたいと思う。自分ができていないことが、ビデオ授業を見ることで気付くことができた。それを少しでもできるように夏休み後の授業をがんばっていききたい。

★授業は子どもたちがつくりあげるものだと感じました。教師は授業を設計し、子どもたちが主体的に参加できる仕掛けに力を入れる役割を果たさなければならないと改めて感じます。今日のグループ交流では、「発表者の先生の良いところの一つでも持ち帰って実践しよう」という言葉が心に残りました。ここで学んだことを一つでも次からの授業に生かしていきたいと思います。

★導き方一つで子どもたちは自分自身で動くことができると感じました。何かをするとき、きちんと目的を明確にし授業を行っていかなければならないと感じました。

★初めに授業者の思いや実践のねらいを発表されたので、その観点に沿ってビデオ授業を参観することができました。ビデオの撮影も固定ではなく、板書や掲示も映したりと見たいものが見られるようになっていて分かりやすかったです。発表者と同じ学校の先生と同じグループになると、具体的な質問もでき更に今後の実践に生きると思います。子どもたちが自主的に活動するための仕掛けをたくさん見つけることができ、とても勉強になりました。

★多くの校種の先生や学生のお話を聞くことで新しい文化を取り入れることができました。なんと言っても、また、次からがんばろうという意欲が湧いてくるのが研修会のいいところだと思います。

★4月から教員になり四苦八苦しながら夏休みを迎えましたが、今日、ビデオ授業を見せていただき、他の先生方と協議する中で、本当にたくさんのお話を学ばせていただきました。夏休み以後、指導に生かしていきたいと思います。

★ビデオ授業参観の時間をもう少し短くして協議をじっくりできるといいと思います。(いつも途中で話が終わってしまうので) 2つの良い実践を見せていただき非常に参考になりました。

★学び合いをしていくためには、教材に対する理解をきちんと行い準備することが前提です。新任となった時にできるか不安があります。本日は、犬山市の実践を見せていただきありがとうございます。

★本当にいろいろな意見を持った先生方がいると感じました。圧倒されてなかなか意見を言うことができませんでしたが、次回、このような機会があったら、もっと積極的に話し合いに参加したいと思います。

★同年代の先生が発表されていて、しかも、今の私にはとてもできないような授業だったので刺激的でした。今後も若手の先生の授業を参観したいと思います。

★映像を見る際、子どもの活動の姿と活動時の教師の支援のあり方が早送りしてしまったのは残念です。一番知りたかった部分ですので、映像の撮り方を含めて見せていただき良かったです。顔の表情もしっかりと見たいと思いました。

★中学校の先生から「違う小学校から集まった生徒でも、授業が始まってくるとまとまる」「協同学習がしやすい」という意見を聞かせていただき嬉しかったです。これからも子どもたちが学び合う授業ができるようがんばりたいと思います。



平成21年度 第3号

授業 研究会だより



平成22年2月5日
犬山市授業研究会
犬山市小中学校長会

平成21年度 第2回

公開授業研究会

教師もともに高め合う！！

12月25日（金）に犬山市福祉会館で本年度第2回公開授業研究会を開催しました。年末の慌ただしい時期でしたが全部で73名の先生方に参加いただきました（幼稚園教員2名、小学校教員42名、中学校教員25名、高校教員1名、大学生2名、大学教員1名）。今回特筆できることは、滋賀県の中学校の先生方が8名も参加されたことです。

当日は下記のような日程で行いました。この公開授業研究会も、今回で通算7回目になります。こ

- 1 開会（13:00～）
 - あいさつ
中京大学教授 杉江 修治 先生
- 2 ビデオ授業公開（13:10～）
 - 小学校外国語活動の授業
犬山市立城東小学校教諭
齋藤 友希 先生
 - 中学校国語（古典）の授業
犬山市立城東中学校教諭
倉地 美穂 先生
- 3 研究協議Ⅰ（14:30～）
 - 第1回小グループによる研究協議
- 4 研究協議Ⅱ（15:30～）
 - 第2回小グループによる研究協議
- 5 指導・助言（16:30～）
 - 中京大学教授 杉江 修治 先生
- 6 閉会（17:00）

れまでにビデオ公開授業として、小学校の部で「国語」「道徳」「体育」、中学校の部で「理科」「英語」「社会」「数学」「音楽」の優れた実践を紹介してきました。

毎回、参加者から好評をいただくのが研究協議のⅠとⅡです。今回はビデオ授業公開の時間を減らして、その分だけ研究協議の時間を長くしました。小グループで日頃の実践を忌憚なく交流することで見えてくるものがあります。参加した先生方は、授業のヒントをたくさん得たことでしょう。そして、まとめとして、9年前から犬山の授業改善について各学校を訪問して指導いただいている中京大学教授の杉江先生から指導・助言をいただきました。中身の濃い研修会にすることができました。

【ビデオ公開授業】

小学校5年 外国語活動の授業

犬山市立城東小学校教諭 齋藤 友希 先生

「開会します。」



犬山市では、小学校10校に2人のNET（Native English Teacher）が配置されています。

すでに1年生から4年生までに年間7～10時間の英語活動の授業をNETと担任がTTを組んで実施しています。本校でも同様に実施していて、本学級の児童に4年生までに受けた英語活動の授業に関してアンケートを行ったところ、英語そのものや英語を使うことを「好き」「楽しい」と感じている児童が多くいました。特に、ほぼ全員の児童が、友達と共に活動することを楽しんでいて、英語を話すことを好まない児童でも、友達と一緒にあれば楽しいと感じていました。そこで、友達との交流場面を多く取り入れた授業を展開し、児童が楽しみながら外国語や外国の文化に触れることができるような授業の内容や流れを工夫し実践しました。



ビデオ授業から学ぶ

児童に身に付けてほしい力や態度（児童の姿をとらえて）

- 外国の文化や日本との違いを理解しようとする態度。
- 自分の意思を言葉や態度ではっきり伝えようとする態度。
- 学習した表現を使って積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度。

【本時の目標】

- 自分のほしいものを要求することができる。（コミュニケーション能力・表現）
- 友達にほしいものを尋ねルーツァフェを作ることができる。（コミュニケーション能力・表現）

【手だて】

- 日本語と英語を交互に発音する活動を取り入れ発音の違いに気づくことができるようにする。
（例：バナナと banana 等）
- チャンツで練習し何度も繰り返し発音しながら楽しく身に付けられるようにする。
- 友達との交流活動を積極的に取り入れる。

【ビデオ授業の流れ】

- ①本時の学習課題と1時間の流れをつかむ。（一斉活動）
- ②果物の名前を練習する。（一斉活動 → ペア活動）
- ③欲しい物を尋ねたり答えたりする言い方をチャンツで言う。（一斉活動）
- ④友達に欲しい果物を尋ねルーツァフェを作る。（一斉活動 → ペア活動）
- ⑤自分のルーツァフェを紹介する。（一斉活動 → グループ活動）
- ⑥本時の学習を振り返る。（一斉活動）

【反省】

- CDの発音スピードについていけない児童がいたので、担任の発音に続いて練習させた方が良かった。

った。

○グループで自分のパフェについて発表するとき、簡単な質問のやりとりを取り入れると良かった。

○振り返りを発表のみにしたが、時間的な余裕もあったので、感想をワークシートに書いてから発表させると良かった。

【指導講評：愛知教育大学教授 高橋美由紀先生】

○アイコンタクトを取るように促したり、客と店員の役割をはっきりと分けたりするなどコミュニケーションを大切にした授業だった。

○CDでは出てくる単語や表現の順番が決められているので、担任がランダムに発音し、それに反応させたり後に続けて発音させたりすることが大切である。

○なるべく多くの外国の言語や文化に触れさせたい。例えば“apple”をインプットしたいときは、新聞紙にくるんだリングを見せ“What’ this ?”と問いかける。そして、新聞紙を少しずつ破きながら、子どもたちに“red”“ball”など知っている言葉を言わせていくと、たくさんの言葉に触れることができ良い。

○授業の流れとしては、全体→グループ→ペア→個のように、はじめは大きな集団で練習し自信を付けさせてから小さな集団へと変えていくと良い。

○発話にこだわる必要はない。カルタゲームやサイモン・セズ・ゲームなどのように英語を聞いて体で反応することが大切である。

○ある表現を子どもに教えたい時、その表現を使う状況を丁寧に設定した上で発話することが非常に大切である。

中学校1年 国語科（古典）の授業 犬山市立城東中学校教諭 倉地 美穂 先生

本校では「仲間と共に学び合い、いきいきと活動する生徒の育成」を現職教育のテーマとし授業研究に取り組んでいます。国語科においても授業の中で生徒同士が学び合い高め合うにはどうしたらよいか試行錯誤を重ねてきました。しかし、作品によっては学び合う場面が設定しづらかったり予想以上に時間を費やしてしまったりするなど問題点も多くあります。特に、教師主導の授業展開になりがちなのが古典です。そこで、1年生の古典の学習において学び合いの場面を設定して実践してみました。



授業者の思いを聞く

【本時の目標】

○歴史的仮名遣いに注意して音読し、古文の言葉の響きや調子に読み慣れる。

○冒頭文を原文で読み、班で協力し合っかぐや姫の誕生場面をとらえ、古典を楽しむ。

【指導の工夫】

- 導入で「いろは歌」の暗唱を全員で行い意欲付けを行う。
- ペアになって互いに評価し合いながら古文のリズムや文体に親しませる。
- 友達と話し合いながら既知の昔話の知識を手がかりにイメージを広げ、古人の生活や考え方に迫っていくような学習場面を作る。
- 全ての生徒が短冊作りに取り組んで、班の発表に参加できるよう学習教材を工夫する。

【ビデオ授業の流れ】

- ①「いろは歌」を暗唱する。(一斉活動)
- ②「竹取物語」について知っていることを発表する。(一斉活動)
- ③「竹取物語」の冒頭文の音読練習をする。(一斉活動 →個別活動 →ペア活動)
- ④冒頭部分の古文を分かりやすく現代語訳し発表用の短冊にまとめる。(グループ活動)
- ⑤各班で作った現代語訳と困った点を発表する。(一斉活動)
- ⑥班内で現代語訳を作る時に困った表現や疑問点・問題点について考える。(グループ活動 →一斉活動)
- ⑦冒頭文を原文で朗読する。
- ⑧本時の振り返りをする。

【成果と課題】

「古典というとなかなか難しい気がしたけど、けっこう楽しかった。訳す時に教科書が見たくてたまらなかった。初めは意味が分からなかったけど何度も読むうちに分かってきて、次にどうなるのか興味がわいてきた」と授業後に生徒が感想を書いていました。言葉を手がかりにして場面を読み取る時の瞳の輝きや、話し合いで見せる生き生きとした表情から、古典に対する生徒の興味関心の高まりを実感することができました。内容が盛りだくさんなこともありましたが班学習は時間がかかります。要領よく進めるためにも学び合いの場面を多く設定し、話し合いや発表の仕方を身に付けさせることが必要だと感じました。今後も、生徒が共に学び高め合えるような授業作りをしていきたいと思えます。

【研究協議ⅠとⅡ】

ビデオ授業をみる前に、あらかじめ参加した皆さんに研究協議の観点を下記のように提示しておきました。加えて、研究協議Ⅰで話し合った内容を研究協議Ⅱのところで報告することも伝えておきました。

①研究協議Ⅰ

- ・子どもたちの意欲を高める仕掛けはどのようになされていたか。
- ・協同の場面がどのように設定されたいたか。

(協同：集団が共に育つことを目標とした集団場面)

- ・授業の中で教師はどのような役割を果たしていたか。
- ・日頃の授業改善を交流するとともに、悩みを共有しよう。

②研究協議Ⅱ

- ・研究協議Ⅰで話し合い・共通理解した内容を報告し合う。
- ・各グループから報告された内容をもとに、さらに話し合いを深める。

研究協議のグループはあらかじめ編成しておき、研究協議Ⅰのグループで座わるように座席も指定しました。ビデオ授業による提案が終わったら机の向きを変えるだけで、すぐに研究協議に入れるようにするためです。そのために各グループの司会もあらかじめ指名しておきました。グループづくりで配慮したことは、同じ学校同士でグループをつくらない、できるだけ異校種になるようにすることでした。研究協議では、ビデオ授業で自分が学んだことを踏まえつつ、日頃の自分の実践を紹介し合いながら活発に意見の交流が進められたことが、事後の感想からも伺うことができます。

研究協議Ⅱのグループも、あらかじめ指定しておきました。司会も同様です。研究協議Ⅰで話し合ったことを研究協議Ⅰとは違った参加者に伝えることをあらかじめ伝えておきましたので、こちらの話し合いもスムーズに進みました。研究協議のⅠもⅡも内容の濃い話し合いができたようです。

【杉江先生の指導・助言の概略】

○2000年に授業づくりで犬山におじゃまるようになって、半年ぐらいたったある日、ある先生が「杉江先生も現場に慣れてみえましたね。」と言われましたが、わたしは、20代半ばから実践研究のために教育現場とかかわってきていましたので「先生方が私に慣れてきたのです。」と切り返しました。なぜ、このようなことをいうのかというと、私は小・中・高の実践者ではありません。大学では実践者ですが、小・中・高で実際に授業をするのは先生方です。私に、ここで授業をやれという人がいますが、それは私の仕事ではありません。授業づくりにおいて学びの原理や学びの心理学と整合させていくことが重要です。大学での学びは小中学校の現場では役に立たないという面もないではないが、かといって現場が絶対正しいというわけではない。現場が間違っていることもたくさんあります。だから、原理に立ち返って一つ一つ点検していくことがとても大切です。

○何のためにそのようなことをしているかというと、新しい時代を担う子どもたちを社会に旅立たせるために小学校・中学校・高校の教師は仕事をしているわけです。主体的で自律的な、仲間の幸



杉江先生の指導・助言を聞く

せを願う民主的な人間を育てることなのです。今までの学校文化の中で本当にそれが実現できていたのかをみていく必要があります。たとえば内発的動機付けが現場でいきているのか、子ども自身が本当に勉強したいという気持ちで勉強する、それは同時に生き方にもかかわってきます。実際の教室では、先生が机間指導で「よくやっているね」「がんばっているね」と声を一生懸命かけて回っています。なぜあのようなことをするのでしょうか。外発的動機付けでやらせようとしています。教師としては、いかにも手応えがあるように思うかもしれません。しかし、教師が何を言わなくても、子どもが「先生、勉強しましょう」といわせる工夫をしましょう。私は犬山へ来て9年間それを言い続けてきました。形は変えても子どもの内発的動機付けに基づいた授業をしましょう。

○子どもは誰でも成長意欲をもっています。大学3年生の時に障害児教育（当時はそのように呼んでいました）で、先生がこんな話をしてくれました。滋賀県の施設にいる知的発達の遅れた子どもで身の始末もあまりできない、お散歩に行く時は、先生に靴を履かせてもらわなければならない子、それが、ある時自分で靴を履こうとする行動を示し始めたのです。知的発達の遅れた子どもも少しでも自分の世界を広げようとするのです。この話を出発点にすると、子どもは誰も自分を大きく成長させたい、より世界を広げたい、より物事を知りたい等例外なくそう思っています。子どもの成長意欲を信じることは絶対に必要だと思います。

○その一方で、子どもに意欲がないという話をいっぱい聞きます。私はそのような話に耳を傾けません。それは、あなたが間違っているでしょと思います。子どもが自分の成長意欲を発揮できないような環境をつくっておいて子どもに意欲がないというのです。この間も指導の困難な高校の先生から手紙をもらいました。その学校で大変指導力のある外部の先生が授業をしたら、生徒は目を輝かせて授業に参加したというのです。私たちはこれまで生徒のことを思って授業をしてきたつもりだが、生徒にパンを与えるのではなく石を与えていたのかと思いついたそうです。そのような意味で子どもに対する絶対的な信頼感が必要だと思っています。

○ブルームという教育心理学者が示した学力観はとても重要だと思います。ブルームは完全習得学習を提唱した人です。子どもたちは、学校で教える程度の内容ならば、90%以上の子が100点を取れる、それは本当のことです。ブルームは信念を話しているのではなくデータをもって話しています。しかし、90%以上の子に100点を取らせるためには、もっと学習チャンスを与えなければいけません。学校では時間が限られていますからブルームの理論どおりにはいきません。しかし、授業を工夫すれば、学力はもっともっと伸びるはずです。学校文化がしっかりしていない学校に行くと、子どもたちは先生の話の全く聞いていません。先生が話している間中ワイワイ話しています。そして、時々、先生の話の「聞いてあげて」います。すなわち50分の授業のうち子どもが頭を働かせているのは数分です。それほどのクラスではなくとも一斉授業で、話をよく聞いているようにみえても、40人の子どもが50分間頭を働かせているのでしょうか。一斉授業の弱点は、単に受け身の授業というのではなく、授業の密度が非常に薄くなるということです。完全習得学習の理論というのは、学習成果は費やした学習の

チャンス（学習時間）にかかっているというものです。5分しか頭を働かせていなかった子どもが、50分フルに頭を働かせたら伸びるはずです。だから、50分の間誰一人遊ばないような授業を工夫するのがです。その意味では、今日の授業は、子どもがしっかりと頭を働かせていたといえるでしょう。

○私が授業を観る時の一番のポイントは、子どもの学習参加度です。子どもの学習参加度を高めるために、きちんとした学習ができる仕掛けをしていくと、ブルームがというような完全習得学習に近い学習が可能になります。先生が値打ちのある課題を示せば、子どもは個人で一生懸命取り組みます。そしてグループでそれについて一生懸命話し合います、50分間ずっと頭を働かし続けます。

○協同と競争について、世の中では未だに誤った考え、迷信がはびこっています。学力を上げるには競争、人間関係を育てるには協同、犬山の先生には、すでに十分言っております。学力を育てるにも協同、協同は人間関係を育てるだけのものではない。競争によって意欲付けられるのは勝つ見込みのある一部の子どもだけなのです。多くの子どもは、勝つ見込みがないから参加しないことによって、ますます勉強ができなくなっていくのです。協同が効果的であることは、科学的にも立証されていることなのです。

○教科書に書いてあるような簡単なことを先生が発問し、子どもに答えさせるような授業をなぜするのでしょうか。そのようなセレモニーの連続のような授業はやめるべきです。子どもは先生が発問したレベルのことを勉強すればいいのだと思います。ぜひ、このような授業を排除してほしいと思います。子どもはとても優しいから先生の言うことを聞いてくれます。子どもには、もっと挑戦的な課題を常に用意することが大切だと思います。子どもの学びの意欲を支援する教師であってほしいと思います。

○学びの根本は、何といても意欲付け、動機付けです。子どもがどれだけ自分でやる気になるかです。そういう場面でたくさん勉強することで、自立的で主体的な子どもに育つのです。子どもがなかなか反応しない、答えようとしらない、自主的に動こうとしらないというのは、先生が簡単に答えを言ったり教え込んだりしているからです。そういうことをしているから、受け身で椅子に座っているのが勉強だと学習させてしまうのです。興味深い課題・値打ちのある課題を子どもにぶつければ、子どもはいくらでも自分たちで動き始めます。考える値打ちのある課題を提示して意見を求めれば、子どもは必ず手を挙げます。そのような意味で、しっかりと意欲のもてる授業づくりをしていただきたいと思います。興味・関心のもてる課題づくり・協同による意欲付けとそれから成長の手応えを感じることができる仕掛けをぜひ意識した授業づくりに取り組んでほしい。子どもの学びの背後にある原理に適合しているか、常に点検してほしい。

○小学校英語は、新しい試みで大変だと思います。とりわけ小学校英語で子どもに何を達成させたかが曖昧な中で模索するわけですから、余計に悩みが多いと思います。しかし、子どもの育ちに対

する教師の願いといったところから、この時間をとらえていけば、この時間もそう無駄にはならないと思います。私の個人的な見解として、外国語は人間理解の窓口ととらえています。言語が違うからといって違いばかりを強調するのは間違いだと思います。言葉は違っても文化が違っても、人間としては同じです。それを、いかに子どもたちに体験させていくのかということが、小学校ではとても重要だと私は思います。人間に対する信頼は、外国人に対しても全く同じことなのです。もう一つ気になったのは、小中連携の問題です。これは相当真剣に考えてもいい問題です。中学校の英語の指導との整合性については大変重要だと思うので、これは大きな課題だと思います。子どもの授業に対する参加度はとても高く、興味深い授業でした。本時の子どもに与えた課題ですが、後で自分や仲間が達成できたかどうかを評価できるような課題にしたいと思います。（“フルーツパフェを作ろう”だけでなく、“仲間に喜んでもらえる素敵なフルーツパフェをつくろう”とすると観点がはっきりする）

○高学年になると男女が共に活動しないという先生もみえますが、課題解決行動では、簡単に協同できますから、そのような悩みはもたなくてもいいと思います。ただ、同性を選びがちなのは事実ですから交流せざるをえないような仕掛けをすることは必要でしょう。

○教科教育専門の先生の指導として、大きなグループから小さなグループにしていくような学習の進め方を示されたようですが、私はそうかなと思いました。なぜなら、教科教育の立場からは、いかに教えるかという研究をしている人がほとんどです。だから、集団のダイナミクスに関する洞察は、あまりされていないように思います。指導方法や授業の流れについては教材に応じて、教師が判断して取り組んでいくことが大切でしょう。どんな人数であっても、きちんとお互いが高め合っているような学級文化を創っていくことでしょう。ぜひ、柔軟に考えてほしいと思います。

○中学校の古典の授業は学習参加度がけっこう高かったですね。城東中学校は、人間関係に力を入れてきた学校ということで、仲間の発表もきちんと聞けます。生徒が古典を学ぶ値打ちを心底どこまで分かって授業に臨んでいるのか、すなわち、単元をとおして自分は何を勉強するのかといった見通しをどれぐらいもっていたのかなという気がします。古典を学ぶ価値をしっかりと理解させたいと思います。古典の中には、現代人がおもしろいと思う話がいっぱいあります。人が時代を超えて同じようなことに共感し、同じようなことをおもしろいと思うのです。言葉が少々違っても、それを乗り越えそこに首をつっこんでいく値打ちがあるということをつからせることが、古典の入り口だと思います。これは、外国文学の場合でも同じことです。

○課題を的確に生徒に伝えるということは大事なことです。「かぐや姫の誕生の場面をとらえよう」とありますが、「とらえよう」というのは生徒によく分かりません。どうしたら「とらえた」ことになるのでしょうか。やはり、「子どもでも分かるように訳しましょう」の方が生徒には分かりやすいと思います。教師の言葉で課題を示すのではなく、子どもが理解できる言葉で課題を示す必要があります。そして、本当に課題を達成できたかを生徒が自分で評価できる課題を示してほしいと思います。

○グループで何をやったら良いか、個人で何をやったら良いかをもっと的確に示すことが大切です。的確な指示を与えておけば生徒は自発的に動くことができます。今日は、生徒主体の活動がたくさん見られたが、授業全体の流れの印象は、まだまだ、教師主導の印象を受けます。生徒がもっと授業を任され、自分たちの感覚で授業を進めていけるような取り組みをお願いしたいと思います。

○教師が発問しても生徒が手を挙げないことが多かったが、それは生徒が答えられない発問だったように思います。話し合うことができる生徒を育てるには時間がかかることはよく分かりますが、それを、生徒の育ちのせいにするのではなく、生徒が動けるような工夫をしていくことで、教師が期待するような活動が見られるようになると思います。

【参加者の声—感想からの抜粋】

★滋賀県から来たかいがありました。犬山市の教育に対する熱意や先生方のレベルの高さを感じました。今回の研究会を生かして、子どもたちのために全力を尽くして授業をしていきたいと思います。(中学校教員)

★私は日々子どもたちが自ら学んでいる、学ぼうとする授業をどう仕掛ければいいのかと悩んでいるところです。子どもたちが頭を働かし力を付けられるような授業を工夫していかなければならないし、協同の授業のあり方を工夫しなければならないとグループ協議での先生方や杉江先生のお話から教えていただきました。

興味・関心のもてる課題作り、協同学習による動機付け、学級の仲間全員が気にかけてくれる学級作り重要性・必要性についても教えていただきました。今日参加させていただいて勉強になりました。ありがとうございました。また、授業を提供してくださった先生にもお礼を申し上げます。ありがとうございました。(中学校教員)

★本日は協同学習について学びたいと思い参加させていただきました。犬山市の先生の意識の高さに驚かされるばかりでした。勤務校に帰り活かしていきたいと思います。今日はありがとうございました。(中学校教員)

★今回は中学校古典ということで、とても興味深く観ることができました。古典の授業は「音読中心に」と言われていますが、今回扱った「竹取物語」は、子どもたちにもなじみがある教材なので、あのような内容でも面白いなあと思いました。また、研究協議でもたくさんの先生方の意見が聞け充実した会になりました。(中学校教員)

★どのような授業実践をしたかよりも教師のどのような指示や課題提示によって子ども・生徒は、ど

のように話し合ったか・動いたかをビデオで見たい。活動の場面をとばさず話し合っている中身を見たい。(小学校教員)

★ビデオ授業実践を見せていただくことで、授業の雰囲気が伝わりとても勉強になりました。研究協議の観点③「教師はどのような役割を果たしていたか。」という点では、ビデオの中で早送りされているところに恐らく映っていたのではないかと感じました。時間の都合上、全てを映すことは無理だと思われるので、実践された先生方からどのような役目に徹しようと考えて授業に臨まれたのかお話しただけるとよく分かったと思いました。(小学校教員)

★学び合いの文化が本当に犬山には育っていることを実感しました。ありがとうございました。(高校教員)

【 21年度 犬山市授業研究会 同人 】

指導者 杉江 修治（中京大学教授）
 担当者 水谷 茂（城東小学校長）
 庶務 井戸 真澄（城東小学校教務主任）

所属学校名	会 員 氏 名
犬山北小学校	浅輪 郁代 奥村 有希代 山田 敦貴 加藤 順子
犬山南小学校	坪内 茂雅 森田 千絵美 平山 睦 大藪 正恭 土屋 美妃 藤本 真由美
城 東小学校	西岡 眞樹 杉本 暁美 水野 綾 松本 哲廣 西 沙織 井塚 裕士 後藤 眞之介
栗 栖小学校	石居 明浩
羽 黒小学校	丹羽 寛子 袴田 知世 亀山 治夫
楽 田小学校	千田 初子
東 小学校	山下 七海 坂元 隆
犬山西小学校	大澤 綾子 小川 英明
犬 山中学校	古市 博之 大野 佑樹 水野 雄介 加藤 由佳 太田 育宏 佐藤 悠香
城 東中学校	山下 次郎 江口 康之 金尾 亜生子
南 部中学校	高木 潔
東 部中学校	加藤 誠

監修者

杉江 修治 中京大学教授・博士（教育心理学）

水谷 茂 犬山市立城東小学校校長

教師力を高める教師の協同

犬山市授業研究会 2009 年度の成果（協同教育実践資料 11）

2010 年 7 月 20 日 第 1 刷発行

著 者 犬山市授業研究会

監修者 杉江修治・水谷茂

発 行 一粒書房(有限会社一粒社 出版部)

〒475-0837 愛知県半田市有楽町 7-148-1

TEL. 0569-21-2130

編集・印刷・製本（有）一粒社出版部(代表 都築延男)

〒475-0837 半田市有楽町 7-148-1

TEL. 0569-21-2130

ISBN978-4-86431-002-4 C1337